魔法少女リリカルなのはStrikerS～The nostalgic melody～

前奏曲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｈｅ　ｎｏｓｔａｌｇｉｃ　ｍｅｌｏｄｙ～

【Ｎコード】
Ｎ０９２２Ｗ

【作者名】
前奏曲

【あらすじ】
新暦７７年。ＪＳ事件が終結し、平和を謳歌するミッドチルダを更なる災厄が襲う。犯罪者集団、『堕ちた聖典（カラプト・バイブル）』。狙うのは過去を改竄する力を持つロストロギア、『追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）』。それは、７年前に一度消滅したはずのもの。その鍵は、１人の男が握っていた――――――。
理不尽な過去。貴方はどう向き合いますか？

＊この作品は私、前奏曲の作品『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｈｅ　ｍｅｌｏｄｉｏｕｓ　ｂｌａｚｅ～』の続編になります。そちらを読まなくてもお楽しみ頂ける作品にしていきますが、興味を持っていただけたら是非お読みください。＊１０万ＰＶ達成しました。これからもよろしくお願い致します。

追憶０（前書き）

お久しぶりです。前奏曲です。キーワードにもある通り、今回のヒロインはフェイトとなります。前作のアンケートの結果ですので、あしからず。

そんな事より、私の無謀第２弾。頑張りますんでどうかよろしくお願いします。

今回の話は時系列が異なります。あらすじにある７年前のお話です。それでは、どうぞ！

追憶０

～７年前・新暦７０年　とある管理世界～

森と降り積もる雪に囲まれた小さな集落。時刻は夜で、家族団欒の笑い声が聞こえてもおかしくないその集落は――――――炎に包まれていた。辺りには血の臭いが満ち、ある者は手足を切り裂かれ、またある者は食いちぎられたようなバラバラの死体が幾つも転がっている。

風が強まり、吹雪の気配が近づくにも関わらず、炎はその勢いを増していた。その中でたった１つ、他の家々から少し離れた小さな家の前で動くものの影が見えた。

「――――――！　――――――！　目を・・・目を開けてくれ！」

その影は少年の姿だった。見ると胸から腹にかけて大きな傷があり、額からも血を流しながらも自らが抱えた少女に必死に呼びかけている。だが、その少女から流れる血の量はすでに致死量を超えており、目を覚ます気配もない。

「――――ア！シルヴィア！なんでだよ・・・！なんで、こんな・・・！」

少女は応えない。それが何を意味しているのか、少年はすでに理解していた。何故、何のために・・・そんなどうしようもない疑問ばかりが少年の頭を巡る。

「奪われた・・・全部・・・！アイツ等に・・・ちくしょぉ・・・」

すでに周りは吹雪に覆われ、集落の所々に転がる死体を雪が覆い隠し始めていた。だが、少年にとってそれはどうでもいい事だった。目の前の少女が死んでいる。ただそれだけが少年の心を占めていた。

「――――――！シルヴィア！無事か・・・！？ッ！？」

「殺された・・・目の前で・・・」

「なんだと・・・？」

他の生き残りか、別の少年の愕然としたような声が響く。吹雪の所為でその姿は見えないが、雰囲気で少年を案じているのが分かる。

「守れなかった・・・。俺・・・何もできなかった・・・！」

「誰にやられた・・・？シルヴィアは・・・誰に殺されたんだよ！」

『誰に』　その単語を聞き、シルヴィアを抱えて俯いていた少年は顔を上げる。少年の脳裏には1人の男と、周りに佇む異形のモノ達の姿があった。

「知らない・・・。俺は、こんな、何も、どうして・・・！」

弱弱しく少年は呟く。その言葉に別の少年が膝をつく。

「はは・・・あぁ・・・は・・・あああああああああ！！」

狂ったように少年は叫ぶ。その目に輝きは無く、ただ無気力な絶望だけがあった。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

少年の咆哮は吹雪の中で狼の遠吠えのように響いた――――――

追憶０（後書き）

いかがでしたか？分かりにくいという評価は謹んでお受けいたします。ですが、これも物語を進めるうえで必要なプロセスですので。

次回は主人公が登場です。『追憶１～出会い～』よろしくお願いします！それでは！

追憶1～出会い～（前書き）

この話で主人公が登場します。前の話も合わせて色々推測できるようにしたつもりです。

それでは、どうぞ！

追憶1～出会い～

～新暦77年　管理世界・トレントガーデン～

「ッ・・・！」

鬱そうと茂る森の中、ガバリと青年は体を起こした。額には大量の汗が浮かんでおり、息も荒い。

「また、あの時の夢か・・・」

青年はどこか無気力な表情のまま呟いた。

「・・・・・誰だ？」

青年は後ろを見ずに問いかける。すると、木の影から金髪の女性が1人、姿を現した――――――

「誰だ？」

急にかけられたその声に金髪の女性――――フェイト・Ｔ・ハラオウンは思わず息を飲んだ。彼女は現在、上層部からの命令で捜索任務に就いていた。その途中、休憩しようと降り立ったすぐ後に声を掛けられたのだ。

「だ、誰かいるんですか？」

思わず後ずさり、自身のデバイス、バルディッシュを構えてしまったが、彼女を責められる者はいないだろう。

「・・・質問したのは、こっちなんだがな」

「・・・・・・え？」

そういって姿を現した青年の姿は――――――――思わずフェイトが顔を引きつらせてしまうほど酷いものだった。腰まで伸びた銀色の髪は所々薄汚れ、顎には無精ひげが生えており、服もボロボロ。蒼い瞳はフェイトを見つめているようで、何処も見ていないような無気力なものだった。

「あ、あの・・・」

「伏せろ」

せめて何か言おうとしたフェイトの努力を青年は短く一蹴する。

「え？」

思わず呆けたフェイトを青年は押し倒す。急に覆いかぶさられたことで驚き、赤面しかけるが、その身体から漂う臭いに顔を顰め、退かそうとして――――――ようやくフェイトも異変に気付いた。

「・・・面倒だな・・・」

「あ、あれはいったい・・・？」

そこにいたのは獣とも人とも区別がつかない、正しく？異形〃と言うべきモノだった。それを前にして青年は腕輪を掲げた。

「アスフォデルス、起きろ。武器だけでいい」

＜＜Ｓｅｔ　ｕｐ＞＞

青年はデバイス――アスフォデルスを起動する。その手に現れたそれは日本刀の刃が2本並んだ刀、双刃（そうば）と呼ばれる刀だった。青年はそれを逆手に構える。そこまで確認して、フェイトはハッとする。

「む、無茶です！バリアジャケットも展開しないで・・・！」

「黙ってろ」

バッサリと忠告を切り捨てた青年にフェイトは顔を顰める。だが、それでもバルディッシュを構えるのはさすがと言うべきであろう。

「黙りません。貴方を置いていくことはできませんし、あんな生物がいるなど報告されてませんから」

「・・・好きにしろ」

小さくそう言い捨てると、青年は異形に向かって走り出す。その姿は先程までの無気力な物とは違い、獲物を狙う獣のような鋭さが

あった。

「――――――――――!!」

「ハァァァァ!!」

異形の腕が奇声と共に振り下ろされるが、青年の姿はすでにそこにはない。異形の頭上、そこから一気に降下し、アスフォデルスを突き刺し、ズタズタに切り裂く。

「――――――――!!」

「チッ・・・おい、何をしてる!」

「・・・っ!?」

異形の頭にしがみつき、振り下ろされないようにしながらも切り裂き続けている青年がフェイトに苛立ち交じりの声を上げる。

「プラズマランサー・・・ファイア!!」

雷を伴う魔力弾が異形を襲う。奇声を上げて苦しむ異形を更に青年が切り刻む。蝋色の血飛沫が霧のように青年を覆うが、意に介す様子もなく首を切り裂くとフェイトの傍に戻る。

「おい・・・」

「は、はい！」

ぶっきらぼうに掛けられた声にビクッとフェイトが反応するが、青年はその様子を見もしないで更に言葉を紡ぐ。

「足止めしろ。次の一撃で仕留める」

「・・・・・・はい」

青年が低く身を沈める。カードリッジが排出され、その手に持つ双刃――アスフォデルスを漆黒の雷が包む。

「魔力変換・・・！？」

「・・・・・・今だ！」

「――――――――!!」

驚くフェイトに青年が合図を出す。それ気付いたのか、異形が血を流しながら奇声を上げ、迫ってくる。

「ハーケンセイバー!!」

バルディッシュから放たれる円状の斬撃は異形の脚を斬り飛ばし、バランスを崩させる。

「――――――雷爪・・・一閃!」

黒い雷が堕ちる。雷を纏う斬撃は異形の身体を焦がし、周りの木々も燃やしていく。

「――――――ァ」

断末魔の叫びか、どの音とも取れない声を発し異形は塵となって消滅した。周りの木々が燃えたせいで青年とフェイトの近くには何もなくなっていた。ふらり、と青年が動く。そのままフェイトに目を向ける事もなく、覚束ない足取りで去ろうとする。

「待ってください！」

フェイトが慌てて声を掛けると、青年は立ち止まる。フェイトは青年を引きとめた事を自分でも不思議に思いながら言葉を紡いだ。

「あの・・・貴方の名前・・・名前を教えてください！」

（どうして私、こんな事訊いてるんだろう？訊かなきゃいけないことは他にあるのに・・・）

そう。執務官と言う役職を考えれば、訊くべき事は青年の名前ではなく、先程の異形の情報なのだ。しかしフェイトは彼の名前を優先した。それはつまり――――――

（執務官としてじゃなくて、私として尋ねてる・・・ってことかな・・・？）

フェイトは自身でも混乱する頭を必死に働かせながら自己分析し、青年の様子を伺う。当の青年はゆっくりと振り返るとぶっきらぼうに、そして無気力に呟いた。

「・・・・・カノン」

「えっ！？」

「カノン・アークナイト・・・・・・・」

思わず聞き返してしまったフェイトにボソッと呟き、青年――――カノンは歩き出そうとして――――――――糸が切れたように倒れてしまった。

「え！？ええ！？だ、大丈夫ですか！？」

「・・・・Ｚｚｚ・・・・」

「ね、寝てる・・・？しかめっ面で・・・」

駆け寄ったフェイトがカノンの顔を覗き込むと、しかめっ面で寝息を立てていた。

「ど、どうしよう・・・放っておく訳にもいかないし・・・さっきの事も訊きたいし・・・」

（やっぱり、連れて行く・・・しか、ないよね？）

結論に達するとフェイトは頷き、カノンを担ごうとしてその軽さに驚いた。

（嘘・・・軽すぎる・・・カノン・・・だっけ、もしかして何も食べてない？）

＜＜Ｓｉｒ、急ぎましょう＞＞

バルディッシュの言葉に頷き、フェイトは帰りを急いだ――――――その途中、やはりカノンから漂う臭いに顔を顰めてしまったのは余談である。

追憶1～出会い～（後書き）

いかがでしたか？やはりオリジナルは難しいです。

主人公の設定については後々出しますのでお待ちください。

次回、追憶2～虚無の心と小さな決心～　お楽しみに！それでは！

追憶2～虚無の心と小さな決心～（前書き）

今回はカノンについて少しだけ載せています。ついでに?彼〃が登場です。

それでは、どうぞ！

追憶2～虚無の心と小さな決心～

管理局施設、そのオフィスの一室で八神はやては腕を組み、目を閉じていた。

「はやて、お待たせ」

「ああ、フェイトちゃん。彼、どうやった？」

「今は病院で寝てる・・・睡眠不足と空腹で倒れただけだって」

「そっか」

フェイトの報告にはやてが頷く。そこに、ノックの音が響いた。

「どうぞ」

「「失礼します」」

一組の男女の声が響く。ドアから姿を現したのは、栗色の髪をサイドポニーで束ねた女性と烏羽色の髪と紫紺の瞳を持つ青年だった。

「はやて、お待たせ。フェイトも久しぶり」

「はやてちゃん、フェイトちゃん、久しぶりだね」

笑顔で声を掛けてくる2人にはやてとフェイトも笑顔で返す。

「久しぶりや。刹那君もなのはちゃんも噂は聞いてるで？」

「うん。頑張ってるみたいだね」

フェイト達の言葉に2人は照れたように笑う。刹那、呼ばれた青年の名は散空刹那。ＪＳ事件当時、民間協力者として活動していた人物であり、現在は教導官として働いている。そしてなのはと呼ばれた女性は高町なのは。言わずと知れた管理局のエースオブエースである。

「色々お盛んなようで～」

「はやてちゃん！？」

何かを含んだようなはやての笑みになのはの顔が紅くなる。刹那となのはは恋人関係で、その仲睦まじい様子は既に有名であり、本人たちも公言しているために噂話の恰好の的となっているのである。

「えっと、それはともかく、刹那の教導、かなり厳しいって聞いたんだけど・・・？」

「ああ～なんか、施設を壊すことなく殺さない程度の威力でフルボッコとか・・・」

物騒な言い様に刹那が顔を顰める。

「そんなことは・・・したことあるけど」

「あるんかい！！」

「いや、変にプライドが高い奴で、なんか周りに悪影響が出ててたし、指示にも従わない奴だったからつい・・・ブチッと」

「刹那君、やりすぎ・・・」

軽い感じに話す刹那になのは達は溜息を吐く。当の刹那は穏やか

に笑うのみで悪びれる様子もない。

「それよりはやて、話があるんでしょ？」

「急に呼ばれたけど・・・どうかしたの？」

真剣な表情に変え、なのはと刹那ははやてを見る。

「ん～、それはちょい待ってな？順番に説明してくから」

そう言うと、はやてはモニターを展開し、数枚の写真を映す。

「あ・・・」

「これ・・・」

フェイトが驚きの声を上げ、なのはも真面目な顔になる。

「皆、聞いたことがあるかもしれへんけど・・・今、次元世界の多くで確認されてるアンノウン、【フラグメント】。ミッドではまだ確認されてないけど・・・」

「でも、被害は確実に出てきてる。分かっているのは、何かを探すように動き回る事ぐらいかな」

はやてとフェイトの言葉になのはと刹那が顔を見合わせる。

「どこから来るのか、何を求めているのか・・・さっぱりなんだよね」

「それぞれの意志を持ってる訳でも無さそうだっていうのは、聞いたことがあるけど・・・」

「うん。それで、ここからが本題なんやけど――――――」

はやての言葉にそれぞれが姿勢を正す。

「フラグメントの対策のために、機動六課を再編します」

「「「・・・・・・は？」」」

さらりと告げられた言葉に刹那、なのは、フェイトの動きが止ま

る。

「「「えええええええええええ！？」」」

「で、元フォワードの皆にはもう話をしてるし、人員も増やす。ＪＳ事件の時の反省を含めて、リミッターも無しや」

「いや、確かに対策は必要だし、色々破格の条件だけど、元々六課はロストロギアの担当だったでしょ？なんでそんな事に・・・」

刹那の疑問にはやては大きく頷く。

「実は、これはまだ知られてない話なんやけど、フラグメントは一度7年前にとある世界で現れたっきり、忽然と消えてるんよ」

「どういう事？」

フェイトが鋭く切り込むと、はやても厳しい顔つきで話す。

「つまり、その世界に何かがあったのか、それとも何らかの理由で消えたのか。もしかするとロストロギアが関わってるかもっていう訳や」

「なるほど・・・」

刹那が納得したように頷く。なのはとフェイトも同様に頷いた。

「じゃあ・・・」

「うん。・・・散空刹那二等空尉、これより機動六課に配属となります」

「高町なのは一等空尉です。よろしくお願いします！」

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です。よろしくお願いします」

それぞれの挨拶にはやては満足そうに笑みを浮かべる。

「よろしくな、皆」

「「「はい！」」」

・・・

る直前、カノンが飛び起きた。そのまま看護師を押しのけ、その場で吐いてしまった。胃液が床に零れる音が響く。背中をさすられてもその勢いは止まらず、ただ吐き続ける。

「ぁ・・・あぁ・・・」

ようやく収まり、カノンは立ち上がる。顔色は青いを通り越して白くなっており、目は充血している。

「大丈夫ですか?眠っていた方が・・・」

「・・・・・」

看護師の声にも応えず、カノンはフラフラと歩き出す。慌てて看護師が止めようとするが、歩みを止めることは無い。だが、ドアに手を伸ばそうとしたその時、ドアの方が勝手に開く。

「え?・・・あ、目、覚めたの?大丈夫?酷い顔してるよ?」

「・・・・・」

そこに立っていたのはフェイトだった。後ろにはなのはやはやて、

刹那の姿もある。フェイトが心配そうにカノンの顔を覗き込むが、カノンは目を合わせようとはしない。その時、地響きのような音が病室に響く。

「・・・・・・」

「今の・・・もしかして」

「・・・言うな」

「お腹の・・・音？」

ポカン、としてカノンを見つめるフェイト達にカノンは気まずげに眼をそらした。

「それにしても、髪長いよね。少し切らないと駄目かも」

「・・・・・気にしたことがない」

食事をとりながらフェイトがそう言うが、カノンはぶっきらぼうに返すだけであった。その様子をなのは達はぼんやりと見つめる。

「フェイト、完全に世話焼きモードだね」

「だね・・・」

刹那となのはが苦笑する。

「彼、結構ボロボロだったみたいやで？食事も摂らず、何日も寝てない。ついでに身体は傷だらけって話や」

「う～ん・・・何か目的でもあるのかな？」

「それは分からへんけど・・・でも、フェイトちゃんと一緒にフラグメントに対処したってフェイトちゃんは言ってたし、何か知ってる事があるかもしれへんな～」

はやてがカノンに視線を移すが、当のカノンはどこか無気力に食べ続けるだけで気づく様子がない。

「私は、えっと・・・カノン君？の目が気になるかな・・・」

「どういう事？」

「何となく・・・だけど。どこかを見てるようで、何処も見てない感じがするから・・・」

「まぁ・・・彼からは無気力って言うか・・・そんな感じはするね」

「何かあったのかな？」

「関わるにしても、様子は見とかないと」

そんな話をする2人をはやては呆れを込めた眼で見る。

「はぁ・・・2人のお人よしも大概やな」

「む。そんな事言って、引き込むつもりのくせに」

刹那がジト目ではやてを見ると、はやては視線を泳がせる。

「そ、そんな事する訳ないやんか！」

「本当のところは？」

「情報を持ってるなら当てにしたい」

真面目な顔で言いきったはやてに刹那となのはは真剣な顔になる。

「はやてちゃん・・・」

「正直な、あんまり良いことではないことも分かってる。けど私達には圧倒的に情報が足りない。少しでも手がかりがあるんなら逃したくないんよ」

はやてとて、部外者を引き込むことには抵抗がある。それでも、背に腹は代えられないのだ。なのは達には話さなかったが、状況はあまりいいものではない。だからこそ、情報を持っていそうな人物を見逃すわけにはいかないのだ。

「まぁ・・・言いたいことは分から――――――」

「あ、ちょっと待ってカノン！！」

刹那が何か言いかけるが、途中でフェイトの声で遮られる。見る

と、カノンがどこかに行こうとしているのをフェイトが止めている所だった。

「か、勝手に出歩いちゃ駄目！まだ検査とか終わってないんだよ！？」

「・・・・・・・」

フェイトの慌てた様子にも関心を示すことなくカノンは歩き続ける。一刻も早く離れたいのか、そのスピードは速い。

「「「・・・・・・・」」」

刹那となのは、そしてはやてはポカンとして見送った。

「待ってってば！カノン！」

「・・・・・・」

追いすがるフェイトの声にカノンは立ち止まる。追いついたフェイトが息を整える中、ゆっくりと振り返り無表情で言う。

「・・・・・・どうしてついてくる？」

「どうしてって・・・」

カノンの長い髪がその目を覆う。表情に乏しい彼の感情は完全に分からなくなった。

「欲しいのは何だ？　金か？　オレの身柄か？」

「違う、話を聞いて・・・」

「生憎、オレは金なんて持ってないし、身柄を拘束されるつもりもない。・・・・・・それとも、アンタと出会った時の話？」

「ッ！？」

フェイトが息を飲むがカノンは気にも留めない。カノンが冷徹にフェイトを見つめる。だが、フェイトはその眼に違和感を覚えた。

「・・・・・・・？」

「・・・・・・・」

カノンはフェイトに詰問している。それは事実だ。だが、圧倒的に足りない物があった。それは――――

「・・・何もないなら、行くぞ」

「・・・待って」

違和感がフェイトの中で大きくなる。止めてしまった事に申し訳なさを抱きながら観察する。カノンはフェイトを見て溜息を吐くが、動き出す気配はない。違和感が確信に変わる。

（・・・やっぱり、おかしい）

感情が見えないのだ。感情を隠すのが巧い人間など大勢いる。だが、カノンのそれは全く違うのだ。先程の詰問にしてもそうだ。言葉を使うものである以上、ある程度の感情は宿る。この場合は怒りなどが適当か。けれどカノンからはそんな感情は読み取れなかった。

（まるで、感情が・・・ない？）

食事の時も、フェイトは笑いかけて話しかけていた。だが、カノンが反応することは無かった。笑い返さなかったのではなく、本当に反応をしなかったのだ。

「えっと、訊きたいのは・・・うん、最初に会った時の事で・・・あってる」

「・・・・・・」

とにかく、フェイトは話を進める事にした。ずっとカノンを引き留めておくのも忍びないし、何より、カノンの感情の件が1番気にかかっていた。

「えっと・・・あの時の・・・フラグメントって、知ってるの？」

「・・・・・知らない。何かと襲ってくるから戦ってただけだ」

「襲ってくる?はやての話だと、何かを探す、みたいな事を言ってたけど・・・」

「・・・・・・どうでもいい」

「どうでもいいって・・・!」

カノンの呟きにフェイトは思わずカッとなってしまう。

「オレは、あいつ等が何を探そうが興味はない。襲ってくるなら殺されたっていい」

「なんで・・・そんな事・・・」

カノンの言葉には感情がこもらない。あるのはただ諦めに似た絶望だけ。何故かはわからないが、フェイトには唐突に分かってしまった。フェイトから怒りの気配が霧散し、震える声でカノンに問う。

「・・・・・・話す必要なんて、無いだろ」

「・・・・・・・」

拒絶の言葉。相変わらずの無気力な物であったが、それはフェイトにそれ以上の言葉を紡ぐ権利を奪った。カノンはそのまま歩き出そうとする。

「・・・カノンには暫くここにいてもらう事になるかも。カノンは今のところ、フラグメントと何度も交戦してる唯一の人だから」

「・・・・・・好きにすればいい」

逡巡の末、結局、フェイトはそんな言葉しか出すことができなかった。俯くフェイトをカノンは最早振り返らず病室に立ち去った。その後ろ姿を見送り、見えなくなった後でフェイトは床にへたり込んでしまった。拒絶された瞬間に感じた、圧倒的な虚無。髪に隠されていてもはっきり分かる、全てを諦めた暗い瞳。それが自分の心を凍らせていくようで、フェイトは身震いする。

「フェイトちゃん!?どうしたの!?」

「あ・・・なのは・・・」

後ろから声を掛けられ、ようやくフェイトは肩を抱いていた手をどけ、立ち上がる。なのはの後ろから刹那とはやてが駆けてくる。

「何かあった？」

「彼に何かされたんか？」

刹那とはやての問いにフェイトは首を横に振る。震えは既に止まっていた。

「大丈夫だよ・・・ありがとう」

「でも・・・」

「大丈夫」

なおも心配そうにフェイトを見るなのはに、彼女は笑いかける。

「少し休む？」

「ううん、大丈夫」

「ふぅ・・・今日はここまでやな。３人とも、集まるのは明後日や。忘れんといてな？」

「うん」

「了解」

「分かった」

三者三様の答えにはやては頷くと、準備のために出ていった。

「俺達も準備をしないと」

「そうだね・・・ヴィヴィオ、どうしよっか。学校もあるし・・・」

刹那となのはも準備の方に頭を回す。今年初等科の２年生になった娘の事も含めて考え込む。

「フェイトはどうする？」

「あ・・・私はカノンを見てるよ。まだ訊いてない事もあるし・・・その、やっぱり心配だから」

「そっか。無理しちゃ駄目だよ？」

最後にそう言い残したなのはにフェイトは無言で頷く。それを見届けると、刹那となのはも出ていった。１人残ったフェイトの耳に行きかう看護師や患者たちの声が響く。それをＢＧＭにフェイトは更に考え込む。

（カノンは・・・殺されてもいいって言った・・・）

殺されてもいい。戦場で果てるなら本望、と言う類ではないのだろう。本当に死にたい。いや、殺されることで死を迎えたい。そんな暗い衝動がカノンの中にあるのだ。出会って日が浅いフェイトにも、それだけは分かった。

（じゃあ・・・なんで・・・）

ここで矛盾が出る。フラグメントと遭遇した時、カノンはフェイトと共に戦った。異形の身体を布切れのようにズタズタに切り裂き、

蝋色の血飛沫を浴びる彼からは死を受け入れるどころか、逆に生への執着が感じられる。それだけではない。彼はフラグメントと何度も交戦している。本人は勝手に襲ってくる、と言った。けれど、それは本当だろうか？自分から飛び込んで、死を得るために戦って、それでも死ねなくて生き延びてしまったのではないのか？そんな思いがフェイトの中で次々と生まれる。

（知らなきゃ・・・もっと、ちゃんと。カノンはきっと、放っておいたら消えてしまうから）

嫌だ。その一言が、フェイトの心に最初に浮かんだ言葉だった。悲しみでも怒りでもなく、ただ、嫌だった。自身の事でありながら、まるで駄々っ子のようだ、とフェイトは呆れる。それでも、あの暗い瞳を、あの虚しい顔を認めたくなかった。

（変えるんだ・・・彼を。ちゃんと笑えるように。カノンが生きる喜びを見つけられるように）

フェイトは決心する。会って日も浅いけれど、まだまだ他人同士だけれど、それでも、助けたい。その為に、まずは――――――

「名前・・・そういえば、教えてない」

そう。なんだかんだでフェイトは自分の名前をカノンに教えてい

ない。主にカノンの所為であるが。

（そこから・・・だよね。うん、頑張ろう）

カノンがいるであろう病室に向かうフェイトの足取りはいつしか軽くなり、早歩きになっていた。

追憶2～虚無の心と小さな決心～（後書き）

いかがでしたか？カノンの無気力について、大体予測できてしまうかもしれませんが・・・まだ秘密、という事で。

次回は少しだけほのぼのとした回です。追憶3～静かな一日～お楽しみに！

それでは！

追憶3～静かな一日～（前書き）

今回の話はほのぼのとしてます。だだ、最後はちょっとシリアス・・・？

それでは、どうぞ！

追憶3～静かな一日～

ミッドチルダ、首都クラナガンにあるカフェで2人の女性が向かいあっていた。

「それにしても、あんたと2人ってのは久しぶりよね」

「ティアは執務官で忙しいし、私も私で結構急に任務入ったりしてるしね～」

オレンジ色の髪の少女と青い髪の少女。ティアナ・ランスターとスバル・ナカジマ――JS事件で功績を残した機動六課の元フォワードであった4人のうちの2人である。

「まあ、明日には出向だけどね」

「ティア、今日くらいゆっくりしようよ～」

澄ました顔で紅茶を飲むティアナにスバルは苦笑する。そんなスバルの前には数々のケーキの皿が積み重なっており、今もモンブランを口に運んでいた。相変わらずの友人にティアナは溜息を吐くと、ジト目で見る。

「あんたは緩みすぎ。・・・今回の件、割とマジよ」

「フラグメント・・・だっけ」

「そ。私は任務で見たことあるからね」

「そうなの！？」

さらりと告げられた一言にスバルが驚いて身を乗り出すがティアナはそれを抑える。

「といっても、奴らが動いた後だったけどね・・・。酷いものだった。何を探し回ったのか知らないけど、その場にいた全員食い殺されてた・・・」

「そんな・・・」

厳しい顔で話すティアナ。スバルはそれを労しげに見つめる。

「・・・まぁ、ここで話してもしょうがないわね。その為にまた六課に集まるんだし」

「そうだね！頑張らなきゃ！」

とたんに元気を取り戻す友人をまるで犬のようだ・・・などと思いながら、ティアナもつられて笑顔になる。

「なのはさん達、元気かな？」

「元気じゃない？ギンガさんとかに聞いてないの？」

「ん～・・・ああ、聞いたかも。なのはさんも刹那さんもビシバシやってるとか・・・」

スバルが思い出しながら言うと、ティアナも刹那やなのはの噂話を思い出す。

「なのはさんのは・・・まあ、私達も受けてたからよく知ってるとして、刹那さんは・・・なんか、なのはさん以上だとか何とか・・・」

「あ～・・・ギン姉が言うにはね、訓練中は一切の容赦をしないんだって。とことんまで叩き潰されるって言ってた」

「・・・ギンガさん、刹那さんの教導受けたの？」

「うん。皆へトへトだったって。でも、訓練じゃない時はちゃんと気遣ってくれるから慕われてたって」

スバルがにこにこと話すのに対し、ティアナも微笑むが、『んっ！？』と何かに気付いた顔をする。

「ちょっと待って。六課には刹那さんも来るのよね？」

「八神部隊長はそう言ってたよね。それが？」

ティアナから血の気が引いていく。トラウマを刺激されたように震えるティアナをスバルは不思議そうに見つめた。

「ティア？どうしたの？」

「あんたね・・・悠長な事言ってらんないわよ。今度の六課はなのはさんだけじゃなくて、刹那さんも教導参加で訓練するって事でしょ？」

そこまで聞いてようやくスバルも事に気付く。

「ま、まさか・・・」

「そのまさかね。文字通り地獄になるわよ・・・」

「だ、大丈夫だよ！・・・・・・多分」

「そ、そうよね！一瞬私達がボロボロになってるビジョンが浮かんだけど、気のせいよね！」

「「あは、あはははは・・・」」

２人は冷や汗をかきながら笑いあう。だが、どう見ても引き攣っているようにしか見えなかった。

「コホン・・・とにかく、今度もきっちりやるわよ！」

「うん！・・・で、ティア・・・荷造り、手伝ってくれる？」

「お断り。自分でやんなさい」

おずおずとスバルが手を合わせるが、ティアナはバッサリと切り捨てた。

＊　＊　＊　＊　＊

「・・・よしっ荷造り終わり！」

「もう終わったの？」

スーツケースを閉じた刹那になのはが話しかける。

「うん。もともと私物は多くないし、持っていく物もそんなにないから」

「そっか。私も終わらせないとな～」

「手伝う？」

手伝いを申し出た刹那になのはは何故か顔を赤くして首を振る。

「う、ううん、大丈夫。もうほとんど終わってるし、あとは・・・その、下着とかだけだから」

「う。そ、そっか・・・・」

刹那も顔を赤くする。刹那がなのはと付き合いだして2年。それなりに恋人らしいこともしたし、肌を合わせた事も一度ならずある。だが、やはり恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

「なのはママ！パパ！」

「ヴィヴィオ！」

と、そこに愛娘が自分達に向かってくるのをみて、2人とも笑顔に戻る。

「えへへ～」

緩んだ笑顔で抱き着くヴィヴィオに、刹那となのはも満面の笑みを浮かべる。

「あ、そうだ・・・ヴィヴィオ？」

「なに？」

首を傾げるヴィヴィオに刹那は穏やかな笑顔で要件を告げる。

「明日から、俺たちは六課に行くことになったんだけど・・・」

「わたしも行く！」

刹那が言う途中で返事をするヴィヴィオ。物分りのいい娘に刹那は苦笑する。もともと六課に付いて来させるつもりだったとはいえ、こうまではっきり返事をしてくるとは思っていなかったのだ。

「ヴィヴィオ？学校と離れちゃうから、いつもより早起きになっちゃうけど・・・」

「だいじょうぶ！！」

なのはの言葉にもヴィヴィオは元気に返事をする。いい子に育ってくれている、となのはは思わず抱き着きそうになるが、ぐっと抑え、頭を撫でるにとどまる。

「えへへ～　あ、パパ！」

「ん、何？」

突然思い出したように声を上げたヴィヴィオに刹那は首を傾げる。

「皆がね、ヴァイオリン弾いてほしいって！」

「あ～・・・もしかして、皆もう待ってるの？」

「うん！」

ヴィヴィオの言った皆とは近所の子供達やその親、老人達の事である。刹那は趣味としてヴァイオリンをよく弾くが、それが近所の方々に人気となっているのである。仕事が休みの日にはこうしてヴィヴィオを通して言われるか、直接言いに来る人もいる。かつての本業からどんどん離れているなぁ・・・などと刹那は苦笑するが、

それをなのはに見抜かれてしまう。

「ちょっと複雑？」

「まあ・・・ね。こうして来てくれてるのは確かにうれしいんだけど。今でもスケートはやってるんだけどなぁ・・・」

刹那は更に苦笑を深くする。魔導師になったことを後悔したことは無いし、ヴァイオリンは趣味なのだから楽しい。けれど、フィギュアスケートが自分の原点だという事は変わらない。だからこその自分の戦闘スタイルに反映されているのだから。

＜＜教導が終わった後などに毎日やるくせに、何をしみったれた事を言ってるんですか＞＞

「ツィガーヌ、それはそれ、これはこれだよ」

相変わらず辛辣な自身の愛機に刹那は澄ました顔で答える。

＜＜どんな場所、どんな状況でも踊り続ける。貴方と私の誓いでしょう＞＞

「・・・そうだったね。ありがと、ツィガーヌ」

＜＜・・・礼には及びませんよ。腑抜けた貴方に喝を入れただけです＞＞

人間であるならそっぽを向かれているのだろうな、と刹那は再び苦笑する。そんな刹那をヴィヴィオが急かした。

「パパ、早く！」

「うん、今いくよ」

そう言って立ち上がった刹那はなのはをみて微笑む。

「荷造り終わったら来るでしょ？」

「もちろん」

なのはも柔らかく微笑んで返す。それに刹那は穏やかに微笑むとヴィヴィオと共に外に出ていった。それを見送ると、なのはも立ち上がって部屋に戻る。

「早く終わらせないとね」

＜＜彼の演奏は私も好きです＞＞

「そう？」

自身の愛機（レイジングハート）の言葉になのはは嬉しそうに笑う。やはり自分の彼氏が褒められるのは嬉しい。

「家族・・・だよね」

＜＜はい＞＞

思わずつぶやいた言葉にレイジングハートは肯定してくれた。なのははヴィヴィオの母のになろうとしてきた。刹那も父親としての労を惜しむことなくなのはをサポートしてくれている。その結果が今の状態だと、家族になれたとなのはは思っている。

「もっともっと・・・楽しく過ごせたら、いいな・・・」

＜＜そうですね＞＞

幸せな未来を想像してなのはは微笑む。また六課が集まる事になったけれど、きっと乗り越えてみせる。そう心の中で誓いを立て、なのははスーツケースを閉じた。

「・・・頑張らないとね」

＜＜はい＞＞

小さく呟いたなのはは、一度伸びをする。すると、庭の方からヴァイオリンの旋律と子供の歓声が聞こえてきた。なのはは微笑むと早足で愛する人と娘のの下へ向かった。

＊　＊　＊　＊　＊

「ふぅ・・・」

「お疲れ様です、はやてちゃん」

書類仕事を終え、一息ついたはやてにリィンが声を掛ける。

「また皆さんと仕事ですね！」

「そやね・・・」

楽しそうに話すリィンにはやては苦笑する。はやての心中は複雑だった。今回はＪＳ事件当時とは違い、リミッターなどの制約は殆どない。陸と海の確執は緩和されてきているとはいえ、まだまだあるのが現状。そんな中でのフラグメント出現である。それに、はやてにはまだなのは達に話していない事があった。

「7年前に一度消えた犯罪者集団、『堕ちた聖典（カラプト・バイブル）』・・・ここにきて再び行動を開始した、か・・・クロノ君もえらい事持ってくるな

ぁ・・・」

「各管理世界でも被害が出てるです・・・」

「7年前と言えば、フラグメントが消えたのも同じ頃や。何か関係あるのかもしれへん・・・」

「確証がないので何とも言えないです・・・」

「そうやなぁ・・・」

はやてとリィンは揃って溜息を吐く。頭の痛い話だが、どうにかしなければならない。

「折を見て話すか、最初から話すか・・・」

「リィンは早いうちに話したほうがいいと思うです。皆協力してくれるはずですから」

リィンの言葉にはやては更に深く考え込む。犯罪組織が動いているとなれば局員としてはきちんと話すべきである。フェイトやティアナは執務官であるし、他のメンバーも正義感から黙っていないだ

ろう。しかし、六課の意義はあくまでもフラグメント対策とそれにまつわるロストロギアの捜索。犯罪者と戦うことが本業ではないのだ。

「もちろん、見つけたら見逃すことはないし、対応もするんやけど・・・」

「はっきりできないのが辛いです・・・」

「クロノ君に要相談、やな」

この件はおしまい、とばかりに冷めたコーヒーを一気飲みしたはやては少しだけ表情を明るくする。

「まぁでも、手がかりを持ってそうな人はいるし、その辺はフェイトちゃんにお任せや。うちらはしっかり皆をまとめるのが仕事や。ＪＳ事件の時の反省も活かして、な！」

「はいです！！」

「そのために、あともう少し、書類仕事や・・・」

「あう～・・・」

明るくなったのも束の間、緩んだ声がオフィスに響いた。

＊　＊　＊　＊　＊

「もう！髪切らなきゃって言ったでしょ！？ひげも伸びてるし・・・」

「・・・・・」

病室にフェイトの声が響く。その相手、カノンはそっぽを向いたまま無気力な瞳を外に向けているが、表情はムスッとしており、この状況をよく思っていないことが窺えた。

「カノン！聞いてる！？」

「・・・・聞いてる。髪は切らない」

「ひげは剃るでしょ？」

カノンが溜息を吐く。何故、というのが正直なところだ。カノンはフェイトを拒絶したつもりだった。けれど当のフェイトはそんな事お構いなしに自分に構ってくる。

「・・・・・分かった。分かったから・・・」

「うん。それでいいんだよ」

諦めて首を振ったカノンにフェイトは嬉しそうに笑いかける。何がそこまで彼女を笑顔にさせるのか、カノンには全く分からなかった。だが、どうやら身だしなみを整えなければ逃れられない事は理

解できた。

「はぁ・・・」

「ほら、早く！」

「・・・・・・」

溜息を吐きつつ洗面所に向かうカノン。鏡に向かいあうと、ムスッとした顔に虚ろな瞳の顔、つまりカノン自身の顔と対面する。無精ひげがかなりみっともない。渋々剃り始めると、腰まである長い髪が時々邪魔をする。

「・・・・・・チッ」

舌打ちするカノンは先程シャワーを浴びた時の事を思い出す。髪の毛が絡みついて気持ち悪かった。

「・・・・・アスフォデルス」

＜＜ｓｅｔ　ｕｐ＞＞

双刃を髪にあて、切る。バサリ、と音を立てて大量の髪の毛が床に落ちた。整えるために首を振ると、寝ていた髪が所々跳ね上がった。ひげも剃り終わり、顔を洗うとカノンは洗面所を出た。

「あ、終わったんだ・・・ね・・・？」

「・・・・・・」

部屋に戻ってきたカノンを見て、フェイトは一瞬言葉を失う。あまりに印象が違いすぎるのだ。無気力な表情や瞳は相変わらずだが、顔の造形はそれほど悪くはない。いや、むしろいい方に入るだろう。刹那を美人、と評するならカノンはかっこいい、と言ったところか。

「・・・・・・なんだ？」

「はっ！」

見惚れていた。その事実にフェイトは急に恥ずかしくなる。首を振って火照った頬を冷まし、カノンに笑いかける。

「結局、髪切ったんだね。似合ってるよ」

「知るか」

にべもない。プイッとそっぽを向くカノンにフェイトは苦笑する。拗ねた子供のような表情。その割に無気力な瞳は変わらないのだから、そのギャップがすこし可笑しい。

「明日は機動六課に皆集まるから。カノンも行くんだよ?」

「どうして」

「昨日も言ったでしょ?カノンはフラグメントと何度も戦ってるからって」

「ふん。利用価値がある。そういう事か?」

あけすけな言い様だが、間違ってはいない。そのことに何も思わない訳ではないが、協力は欲しい。

「そういう事だよ。さ、早く寝よう?」

「・・・・・お前、帰らなくていいのか」

「お前じゃなくて、フェイトだよ」

名前を呼ばれなかったことにフェイトは僅かに拗ねた表情をして訂正する。じっとカノンを見つめるが、カノンはただ窓の外を眺めるだけ。それでもじっと見続けるフェイトに根負けしたのか、ようやく振り返った。

「・・・フェイト、帰れ」

「なんでそうなるのかな・・・」

ブスッと告げられた一言にフェイトは嘆息する。名前を呼ばれた喜びなどまったくなかった。

「兎に角、私もここにいるから」

「チッ・・・」

胸の前で拳を握るフェイトにカノンは舌打ちをし、ベットに横になると、目を閉じた。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

スー、スーと寝息が聞こえる。フェイトはカノンの寝顔を見る。

「眠ってる時は、無気力な顔、しないんだね・・・」

「・・・・・・」

フェイトの胸に何故か悔しさが広がる。カノンを変える、そう決意してからあまり時間は経っていなく、成果が出ないのは当たり前だが、もどかしさだけはどうしようもなく出てきてしまう。

「弱気な事、言ってられないよね」

フェイトは首を振り、目を閉じる。まだまだ始まったばかり。カノンの事をまだ何も知らないのだから、もっと知っていけばいい。決意を新たにし、フェイトは眠りについた。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

深夜。明りの消えた中、カノンはのそり、と起き上った。ふと横を見ると、フェイトが俯いたまま寝息を立てている。

「・・・・・・・」

「・・・・・・スー」

カノンはフェイトを起こさないように抱えると、ベットに横たえる。そして自分は窓を開けると、一気に飛び降りた。

「・・・うっ・・・」

ガクン、とカノンは膝をつく。苦しげに息を漏らし口を開けると、空気と共に胃液が吐き出された。

「くそ・・・っ」

ただ目を閉じていただけだというのに、？あの日？の光景が鮮明に蘇る。忌々しい。こうして吐いてしまう事ではない。生きている自分が、忌々しい。カノンの胸中はそれだけだった。

（7年・・・）

あの日。全てを失ってから、？彼女？を目の前で亡くしてから、7年。望んだ死は、あまりにも遠い。

（ただ死ぬだけじゃダメなんだ。ただ、死ぬだけじゃ・・・・・・）

殺されなければ。あの日、彼女がそうして死んだように。自分も同じように、心臓を貫かれ、殺されなければ――――――

（お前の所には、絶対に行けない）

カノンは星を見上げる。まるで泣いているようにも見えるが、泣いてはいない。

（オレには――――――泣く権利も、笑う権利もない。なのに・・・）

感情を持つ権利など、あの日に消えた。だというのに彼女は、フェイトは笑いかけてくる。それが善意である事が分かるからこそ、カノンはフェイトを拒絶しなければならない。彼女とカノンでは、立っている場所が、進んでいく道が違うのだから。なのに。拒絶すればするほど、彼女は自分の内面に迫ろうとする。不意に、恐ろしくなった。いつか、彼女はたどり着く。カノンには確信めいたものがあった。

（どうすればいい・・・？）

簡単だ。今すぐここを離れればいい。だが、そのことが分かっていても、カノンの足は動かなかった。

「くそ・・・くそっ・・・！」

どれだけ毒づいても、足は動かない。まるでカノンの意志を裏切るように、拒絶するようにその足を地面に縫い付けたままであった。暫く抜け出そうとして抜け出せず、カノンは諦めて膝をつく。

（ここは、暖かすぎる・・・だから、ここにはいられないのに・・・）

フェイトだけではない。食事の際に隣のテーブルにいた男と女２人。彼らもフェイトと同じような人物であることは容易に想像でき

た。

（・・・・・仕方ない）

と、カノンが諦めたと同時に縫い付けられていた足が自由になる。
その事に気づき、カノンは悟った。もう、逃げられない――――
と。

（オレは、何時になったら――――――）

「お前の所に行けるのかな・・・教えてくれ、シルヴィア・・・」

カノンの悲痛な呟きは星空に消えていった。

追憶3～静かな一日～（後書き）

～ドラムロール～

前奏曲：え～・・・今回は特別ゲストをお呼びしております。

刹那：ふんふふ～ん♪

カノン：・・・はぁ・・・

前：爺先生の作品、『リリカルなのは～中2病な（元）中2の異世界転生記～より、主人公の高町大地君とその相棒、影乃終夜君です！

大地：よろしくな！

終夜：大地、落ち着け。・・・影乃終夜です。よろしく。

刹：前々から約束してたんだよね～♪さて、早速・・・！

大：はい！模擬戦ですね！

前：・・・あ～・・・向こうでやってて？此処壊れるとまずいのよ。

刹：だいじょーぶ。Ｌｅｔ’ｓ　Ｇｏ！！

～刹那と大地は模擬戦のため謎空間に離脱しました～

カ：・・・・・・・

終：まったく、大地の奴・・・カノンさん、お騒がせしてすいません。

カ：・・・別にいい。子供ならあれくらいで十分だ。

終：カノンさんは今まで何をしていたのですか？

カ：色々だ。雑草を食べたり、肉を食ったり、寝たり、歩いたり・・・

前：面倒な設定なんだよね～ｗ

カ：・・・消えろ

前：ヒドッ！

終：あはは・・・色々ですか・・・

カ：・・・お前も、そうだろう・・・

終：っ！？　・・・・・・そう、ですね・・・

前：はいストップ！重い話禁止！まったく・・・ほんとに君は空気読まないね。

カ：・・・お前の所為だろう。

前：聞こえな～い。さて、向こうもそろそろ終わりかな？

刹：いや～楽しかった！

大：ぜぇ、ぜぇ・・・

終：大地、どうだった？

大：黒魔術使ったのに・・・避けられた・・・当たる直前で・・・

刹：割と危ない賭けになったな～。将来が楽しみだよ。

大：うぅ・・・

刹：さて、次は終夜君とかな？

終：全力にて・・・！

前：ほんと、バトルマニアだよねぇ・・・

カ：・・・オレ、帰っていいか？

前：アレはもう放っておこう・・・そろそろ、お開きかな？さて、それじゃあ今回は特別ゲストをお招きしてのあとがきでした！爺先生の『リリカルなのは～中２病の（元）中２の異世界転生記～』、とても面白い作品です！

大：よろしくな！

前：それでは！

爺先生、こんなもので良かったでしょうか？ご意見あれば伺います。今度こそ本当にそれでは！

追憶4～Ｇａｔｈｅｒｉｎｇ　Ａｇａｉｎ～（前書き）

今回の話では新キャラが登場します。それに伴い、ちょっとアンケートを載せようとおもいます。後書きに載せますので、どうぞご覧ください。

最後がやっぱりシリアスです。

それでは、どうぞ！

追憶4～Ｇａｔｈｅｒｉｎｇ　Ａｇａｉｎ～

翌朝、フェイトが起きると、何故かベットに横になっていた。

「ん・・・あれ・・・？」

自分は確かに椅子に座って寝ていたはず。なのに今はベットにいて――――――

「ッ！カノン！？」

はっとして辺りを見回すが、カノンの姿は見えない。慌てて立ち上がり、病室から飛び出す。ナースコールなんて悠長なことを言って言っていられなかった。

「カノン！どこ！？」

病院中を探し回り中庭に入ると、病院服ではなく黒いシャツに黒いズボンに身を包んだ銀色の髪の青年――――――カノンがチラリと見えた。

「カノ・・・」

「・・・・・・」

声を掛けようとしてフェイトは息を飲む。カノンはアスフォデルスを地面に突き刺し、自身は片膝をついて右拳を胸元に置いて目を閉じ、まるで祈るような格好で何かを呟いていた。いつもの無気力な様子とは違った神秘的な雰囲気を纏ったカノンにフェイトは見惚れる。

「・・・・・・天の国に眠るあなたに、アスフォデルの花束を。祈りを此処に。その清き体に安息がもたらされんことを・・・」

小さく、静かに紡がれるその言葉には気怠さなど微塵もない。ただ厳かに死者に祈るカノンの姿がそこにはあった。祈りが終わる。カノンは立ち上がると双刃を引き抜き、土を払う。アスフォデルスを待機状態の腕輪に戻すと、振り向いた。

「いつまで見ているつもりだ?」

「あ・・・」

我に返ったフェイトをカノンが見つめる。その表情や瞳は再び無気力なものに戻っていたが、確かにフェイトを見据えていた。

「ごめんなさい。ずっと見てて・・・」

「別に見られて困るようなことでもない。気にするな」

カノンは歩き出しながらピシャリと言い放つ。

「行くんだろう？早くしろ」

「あ、うん」

思わぬ一言にフェイトは驚いたままカクン、と首を縦に振る。自分から言い出すとは思っていなかったのだ。

「なんか、意外・・・自分から言い出すなんて」

「・・・どうせ逃げられないなら、利用するだけだ」

「え？」

ぼそり、と呟かれた言葉はフェイトには届かなかった。聞き返すが、カノンは応えない。結局、そのまま無言で車に乗り込んだ2人だった。

＊　＊　＊　＊　＊

～機動六課・隊舎ロビー～

「皆さんとまた一緒に戦えること、嬉しく思います。もともといたメンバーも、新しく来たメンバーも、しっかり力を合わせていきましょう」

はやての挨拶が拍手と共に終わる。それぞれ解散し、ロビーには前線メンバーのみが残った。

「それじゃ、メンバーを確認するね。スバルとティアナは、前と同じスターズに、エリオとキャロはライトニング」

「「「「はい！！」」」」

なのはが確認し、フォワード陣が元気よく返事をする。

「それから、新しく分隊を追加したよ。隊長は刹那君。副隊長は・・・」

「それは俺から紹介するよ」

なのはを遮り、刹那が前に出る。

「それじゃ、ギンガ、入ってきて」

「はい！」

「「「「「え・・・？」」」」」

扉から紫色の髪の少女が現れる。

「ギン・・・姉・・・？」

「ふふっ・・・ビックリした？」

呆然と名を呼ぶスバルにギンガは悪戯っぽく微笑む。最初から知っていた隊長陣は微笑むだけだが、他のメンバーは呆然としたままであった。

「ゲンヤさんにお願いしたら一発でＯＫしてくれてね。ギンガも乗り気だったからお願いしたんだ」

「これから、よろしくお願いします！」

ギンガが頭を下げるとようやく実感がわいたのか、フォワード陣の顔に笑顔が広がる。

「ギン姉と一緒・・・やったぁ！！」

「スバル、はしゃがない！・・・ギンガさん、よろしくお願いします！」

「「よろしくお願いします！」」

それぞれの挨拶にギンガは笑って頷いていく。

「それじゃ、残りのメンバーも紹介しようかな、２人とも、入ってきて」

「「はい！」」

扉が開き、一組の男女の姿が現れる。どこか不遜に笑う１７，８歳程度の少年と柔らかく微笑む少女だ。

「アレン・イグナティオスだ。よろしくな」

「リゼット・ユースティアです。よろしくね？」

「2人とも、俺が教導を受け持った部隊の子でね。かなり優秀だから、六課に誘ったんだ」

刹那の説明に皆が笑顔で頷く。

「教官教官！六課って、美人が多いですよね！」

「またそんな事を言って・・・もう！」

先ほどの不遜な笑みは何処へやら、アレンが女性メンバーを見てはしゃぐ。隣にいるリゼットが呆れた声で諫め、刹那は苦笑する。

「はいはい、冗談はここまで。どうせ口説くつもりなんか微塵も持ち合わせてないんだから」

「ちょっ・・・それ酷いっすよ！オレはいつでも女性との甘いひと時の為に・・・」

「すぐにバレる嘘はつかない方がいいよ？だってアレンったら、さっきから皆のデバイスしか見てないじゃない」

リゼットの言葉にアレンが『うっ』と詰まる。どうやら図星らし

い。２人の力関係が垣間見えた一幕だった。

「ああ、そうだよ！強い奴が六課には集まってるから来ただけだよ！でも彼女は欲しいんだよ！切実な訳！お前に分かるか！？この辛さが！」

「はいはい。どうでもいいから、向こうで泣いてて」

「誰が泣くか・・・」

しょんぼりと項垂れるアレンにその場の皆が苦笑する。最初の不遜なイメージは消え去ってしまっていた。と、そこではやてが手を叩き、緩んだ空気を引き締める。

「皆、確認は済んだな？じゃあ、もう１人紹介するで」

「え？六課のメンバーはこれで全員では・・・？」

はやての言葉にティアナが問う。なのはやフェイト、刹那以外のメンバーも同じように首を傾げている。

「実はね、民間協力者がいるの。えっと・・・」

「・・・・・・」

フェイトが周りを見回すと、物陰からふらり、とカノンが歩いてくる。

「こちら、カノン。カノン・アークナイト。皆、仲良くしてね？」

「・・・カノンだ」

カノンはその無気力な瞳で皆を見回す。

「「「「「・・・・・・・・」」」」」

「・・・・・・どうも」

「「「「「はぁ～・・・」」」」」

無気力な挨拶。盛大な肩透かしを食らった皆の口から溜息が零れる。

「えっと・・・カノンはライトニングに入ってもらうから。エリオ、キャロ、よろしくね？」

「は、はい！」

「が、頑張ります・・・！」

正直、カノンの相手をするにはエリオやキャロでは荷が重い。それでもライトニングに入れたのはフェイト自身の我が儘だ。知りたいから。変えたいから。それに、少し期待しているのだ。今朝、祈りを捧げていたあの姿。その時に浮かべていた表情は、カノンに感情がある事の証明だとフェイトは思っている。だからこそ――――――

「・・・・・・はぁ」

「カノン、溜息つかないで？一緒に頑張ろう？」

笑顔でこう言うのだ。今は変えられなくても、少しずつ変えていけたら。そう願って、フェイトは微笑みかける。

「・・・・・・フェイト」

「なに？」

と、カノンからフェイトに声が掛けられた。振り向くと、カノンはじっと他のメンバーを見つめていた。

「どうしたの？」

「ここは・・・暖かすぎる」

「いいことだよ」

「オレは・・・此処にいるような奴じゃ――――――」

「それ以上言っちゃダメ」

フェイトはカノンの口に人差し指を立て、言葉を遮る。目を白黒させるカノンにフェイトは微笑む。

「カノンに何があったのか、今は分からないけど・・・でもね？私、カノンを知りたい。支えたいから。だから・・・ね？」

「ッ！」

フェイトが上目づかいでカノンを覗き込むと、カノンが目に見えて狼狽えた。

（どうして・・・）

動揺している。自分でもそれが分かるが、カノンはそれを止められない。

（どうしてお前は――――――アイツと、シルヴィアと同じ表情をする!?）

カノンの中でフェイトとシルヴィアの姿が重なる。そんなことは無いと否定するも、重なったイメージは消えてくれない。耐えきれず、カノンはフェイトから目を逸らそうとするが、逸らすことができない。危険――危険、危険危険きけん、キケン――――――――カノンの脳裏で警鐘が鳴る。気づくと、手には双刃となったアスフォデルスが握られていた。フェイトの目が驚きで見開かれる。何も考えられず、カノンは剣を振り下ろし――――――――その刃は、横から出された剣に止められていた。

「シグナム・・・！」

「はぁ、はぁ・・・」

フェイトが呆然と声を上げる。カノンは息を荒く乱したまま、焦点の合わない目でアスフォデルスを見つめている。突然響いた金属音に、その場にいた全員の動きが停止していた。

「カノン・・・と言ったな」

「・・・・・・」

シグナムの静かな声が響く。その声には怒りが宿っていた。

「貴様・・・今、何をしようとした・・・？」

「あ・・・・・・」

その声にカノンは我に返る。自分が何をしていたのか、まったく分からなかった。

「オレ・・・は・・・・？」

「・・・・・・・」

呆然とするカノンをシグナムは黙ったまま睨み付ける。

「また・・・なのか？オレの・・・所為で・・・・」

「カノン！落ち着いて！私は大丈夫だから・・・・！」

ぼそぼそと口の中で呟くカノンにフェイトは声を掛ける。周りの面々はどうしていいか分からないといった風に固まっていた。

「・・・主はやて」

「なんや？」

シグナムがはやてに声をかけ、はやては鋭くそれに応じる。その声は厳しい。

「この男と模擬戦をさせてください。この男がなんなのか・・・そ

れを確かめます」

「シグナム・・・カノンは・・・・！」

「・・・ええよ」

「はやて！？」

フェイトがはやてとシグナムを見るが、はやて達の表情は変わらない。

「どんな事情があれ、フェイトちゃんを襲ったのは確かや。それが何を意味するか、分かるやろ？」

「でも・・・！」

「だから、模擬戦や。それで確かめる。ええな？」

「・・・・・わかった」

はやての厳しい言葉にフェイトは力なく頷く。何がカノンにこの

ような行動をとらせたのか。自分の何がいけなかったのか。そんな考えがグルグルと頭を掻き乱す。

「そういうことだ。貴様に拒否権はない。いいな?」

「・・・・・・」

告げられた言葉に、カノンは返事をできなかった。脳裏で鳴る警鐘はさらに大きくなり、こみ上げてきた吐き気をカノンは飲み込んだ。混乱した頭で何も考えられないまま、カノンは力なく頷いた。

こうして、波乱に満ちた結成式が終わりを告げた。

追憶4～Ｇａｔｈｅｒｉｎｇ　Ａｇａｉｎ～（後書き）

いかがでしたか？アスフォデルとはユリ科の花で、『天国に咲き、決して枯れる事のない花』だと言われています。花言葉は『私は君のもの』です。

さて、アンケート・・・というより募集要項ですが・・・今回の新キャラ追加に伴い、主人公カノンと前作主人公刹那、そして追加されたアレンとリゼットのＣＶを募集します！ご協力よろしくお願いします！

次回、追憶５～獣の瞳～　お楽しみに！それでは！

追憶5～獣の瞳～（前書き）

模擬戦です！が、大荒れ警報が出ていますのでご注意ください。

途中、理解しにくい部分があると思います。そちらは後書きに解説を載せますので、そちらを読んでください。

それでは、どうぞ！

追憶5～獣の瞳～

仮想のビルが乱立する訓練場に2つの影が佇む。バリアジャケットを展開し、レヴァンティンをだらりと垂らしたままシグナムはカノンを見据える。当のカノンは虚ろな瞳を宙に向けたまま動かない。

「どうした？早くしろ」

「・・・・・・アスフォデルス、セットアップ」

＜＜Ｓｅｔ　ｕｐ＞＞

カノンの身体をバリアジャケットが包む。だが、その異様な姿にシグナムだけでなく周りの面々も驚きを隠せないでいた。

「なに・・・・あれ・・・」

「カノン・・・」

ティアナが呆然と呟き、フェイトが心配そうにカノンを見つめる。黒いシャツに黒いズボン。裾がボロボロになっている黒いロングコート。そこまではまだいいのだ。だが、カノンの両手、両足首に着

けられた枷、そこから伸びる黒い鎖がその腕を、脚を、身体を蛇が絡みつくように締め上げている。それだけでなく、目や口も拘束具によって縛られていた。

「教官、アイツなんなんですか？」

「さすがに、私も不気味に思います・・・」

アレンとリゼットがどこか痛みをこらえるように刹那に問う。自身を縛りつける魔導師など聞いたことがないし、そんなことをする人間もいなかったのだからある意味当然の反応だった。

「俺も詳しい事は何も知らないんだ。ただ、彼は――――――」

「何か、大きな後悔を抱えてるみたいだね。私達が、想像もできないくらいの・・・」

一度言葉を切った刹那になのはが続く。その言葉にアレンもリゼットも顔を暗くして俯いてしまう。同じようにエリオやキャロ、ティアナやスバルも俯いてしまった。

「カノン・・・」

その中で、フェイトはじっとカノンを見つめていた。カノンが内に秘めた物。それが姿を現す。そんな予感がしていた。

＊　＊　＊　＊　＊

「なんだ・・・その姿は・・・」

「・・・・・・・」

カノンの異様な姿にシグナムもまた驚きを隠せずにいた。呆然と問うが、カノンは無言でアスフォデルスを構える。構えとしては変

則的な逆手持ち。それをみてもシグナムは未だ動けないでいた。まるで、罪人――そう考えた時、カノンの姿が消える。ハッと我に返った瞬間、シグナムの腹に蹴りが突き刺さった。

「がはっ・・・」

「・・・・・・」

カノンは吹き飛んだシグナムの顔を掴むとそのまま地面に叩きつける。カノンの手から黒い電撃が奔り、シグナムを焦がす。傷ついていくシグナムに関心を示さず、カノンは電撃を放ったままシグナムを引きずり走る。３０ｍほど走ると再び地面に叩きつけ、バウンドしたシグナムに向かって双刃を一閃した。

「・・・・・・」

ビルに突っ込んだシグナムを見ることなくカノンは俯き、アスフォデルスを見つめる。

（オレは・・・）

「！」

その時、瓦礫と化したビルから連結刃の刃が伸び、カノンを薙ぎ払う。完全に油断していたカノンはなす術もなく吹き飛び、地面を転がる。瓦礫の中から出てきたシグナムの姿は酷いものだった。電撃によって焼け焦げた跡が所々あり、双刃の一閃によって破れたバリアジャケットからは肌がのぞいている。

「貴様・・・これだけの実力を持っていながら、何を考えている?」

「・・・・・・」

痛みに顔を引きつらせながらもシグナムは問いかけるが、カノンは答えない。いや、拘束具によって縛られたその口からは何も発せられないのだ。

「その姿・・・自らを罪人として扱っているのか?何故テスタロッサを襲った?お前は何を隠している?」

《お前には・・・関係ない。いや、お前だけじゃない。この場にいる全員がそうだ。どいつもこいつも・・・オレに関わるな!》

念話。カノンの激しい拒絶が直接シグナムの脳に響く。その言葉にシグナムは顔を顰めた。

「・・・テスタロッサはお前を気にかけていた。それすらも否定するのか？」

《・・・・・あいつはオレを惑わせる・・・だから・・・オレは・・・》

「だから拒絶するのか？貴様――――――」

先程の拒絶とは打って変わった力ない答えにシグナムはさらに問い詰めようとするが、その瞬間にカノンの一閃が迫る。

「ぐっ・・・・」

《黙れ・・・・・・！》

怒涛の連撃。獣のように猛々しい猛攻をシグナムは歯噛みしながら受けていく。カノンは埒が明かないと判断したのか、宙返りで後方に跳び、双刃を掲げる。雷が集束し、×の形をとる。

《オレは・・・アイツを・・・アイツだけを・・・！》

「ぐぅ・・・！」

飛ぶ斬撃。×状の黒い斬撃が高速でシグナムに迫る。

「レヴァンティン！」

＜＜ja！＞＞

レヴァンティンからカードリッジが排出され、刀身を炎が包む。

「紫電・・・一閃！！」

炎を纏う一撃が黒い斬撃とぶつかり、爆発を起こす。

《あぁぁぁぁぁ！！》

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

剣戟が何度もぶつかり合う。カノンの剣には型も何もなく、ただ本能に従って振るわれる獣のようなものだった。だが、ただの獣ではない。どれだけ荒々しい剣であっても、その一撃は確実に、冷徹

にシグナムの急所を狙ってくる。理性持つ獣。それがカノンの剣だった。

「くっ・・・いい加減に・・・・」

《がああああああ！！》

シグナムがカノンを弾き飛ばし、即座に連結刃で追撃、その一撃はカノンの目と口の拘束具を破壊した。再びレヴァンティンを振るい、カノンに迫る。

「しろぉぉぉぉぉぉ！！」

「っ！？」

飛竜一閃。その一撃がカノンに迫り――――――――カノンの姿が掻き消えた。

「！？」

「！？」

シグナムが辺りを見回すと、１０ｍほど離れた場所にカノンがいた。だが、その様子がおかしい。何が起こったのか分からないといったように困惑した表情をしている。

「貴様・・・何をした？」

「・・・・・・」

シグナムの顔を見るカノンの目が見開かれる。それはまるで、あり得ない物を見ているような表情だった。カノンの顔が強張り、怒りに染まっていく。

「お前・・・どうして此処にいる・・・？」

「なに・・・？」

明確な怒りを見せるカノンをシグナムは訝しげに見る。突然の変化に戸惑ってもいた。

「アンタが・・・アンタだけは・・・！」

「っ！？」

カノンが突っ込む。殺意がこもった一撃を受け止めるため、シグナムはレヴァンティンを構えた。

＊　＊　＊　＊　＊

「えっと・・・いま、何が起きたの？」

「確かにシグナム副隊長の攻撃は当たるはずだったのに・・・」

訓練場の外のメンバーも困惑を隠せないでいた。スバルが訳が分からない、といった風に呟き、リゼットは呆然と呟く。

「は？何言ってんだ？シグナム副隊長はカノンの攻撃を避けただけで、攻撃しなかったろ？」

「「「「「「・・・・・・え？」」」」」」

だが、アレンが発した言葉に空気が凍る。ぎょっとした顔で自分を見る皆の視線にアレンはたじろぐも、さらに言う。

「だからさ、あの拘束具だってカノンが自分で壊したんじゃねーか。シグナム副隊長は避けんので精一杯だったろ？」

「確かに、そうですよね。シグナム副隊長を追い詰めてて、すごいなって思ってましたし」

「わたしもそうですけど・・・」

アレンだけでなく、エリオとキャロまでがそう言いだす。明らかに狂い始めた状況に皆は戸惑う。

「どうなってるの・・・？さっきまでは普通に・・・あれ？えっと・・・？」

「なのはまで！？」

「これ・・・もしかして・・・何か、書き換えたみたいな・・・え・・・っと・・・？」

「刹那も！？」

次々に皆の認識が変わっていく。確かにシグナムは攻撃をした。だが、何故か攻撃をしなかった事にすり替わっているのだ。あまりに不気味な状況にフェイトは混乱する。すでにフェイト以外の面々の認識は完全にすり替わっており、この状況を不思議に思う者はフェイトのみになっていた。

「どうなってるの・・・」

恐怖にフェイトは頭を抱える。何もわからないまま、全てが変わる。そして――――――――フェイトの認識が、改竄された。

「すごい・・・カノン、シグナムを追い詰めてる・・・！」

「ですよね！無気力な奴なのがもったいねぇな～！！」

発する言葉は虚しく響いた。

＊　＊　＊　＊　＊

「あああああっ！！」

「ぐあっ・・・」

カノンの猛攻を受けながらシグナムは思考を巡らせていた。

（なんだ？なにがこいつをこうさせている？）

既にシグナムやカノンの認識は改竄されている。自身の攻撃は当たるどころかあっさり躱され、逆に攻撃を受け続けている。そして、カノンがいきなり感情を露わにして自身を責めていることだ。

（違う・・・こいつは私を見ていない。なら・・・お前は誰を見ている！？お前の憎悪は誰に向いているのだ！？）

「アンタが殺した・・・」

「！？」

憎悪に満ちたカノンの呟き。シグナムはその瞳を覗き込み、驚愕する。カノンの瞳、その瞳孔は蛇のそれよりも縦に細く伸び、理性を全て捨てた獣のような瞳だった。

「アンタが・・・アンタの所為で・・・オレも・・・皆も・・・あの子まで！！」

「ぐうううう・・・」

カノンの一言ごとに重さを増す一撃。蹴り。拳。斬撃。シグナムは下がりながら弾き、受け流すがそれもだんだんと追い詰められていく。と、その攻撃の荒っぽさからかカノンに隙ができる。

「はあっ！！」

「！？」

アスフォデルスを鞘で受け止め、シグナムは再び紫電一閃を放つ。その一撃はカノンを吹き飛ばし、その衝撃でカノンはアスフォデルスを手放す。シグナムは更に一閃するが、カノンは思いもよらぬ行動でそれを防いだ。

「あああああ！！」

「なっ・・・！」

カノンはレヴァンティンを蹴りあげると同時に宙に浮かぶアスフォデルスに飛びつき、口に咥えるとそのまま一閃した。不安定な姿勢からの攻撃とは思えない重さを持った一撃にシグナムは吹き飛ぶ。

「アンタは・・・アンタだけは・・・殺す！！」

「くっ・・・」

もはや、カノンは完全に別の人間と戦っている。カノンがアスフォデルスを振り上げる。殺される。それが分かっていても、シグナムは膝をついたままどうすることもできなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

「様子がおかしい・・・！」

「え？」

訓練場の外で最初に異変に気付いたのは刹那だった。再開された模擬戦。だが、これまでの空気とは違い、殺伐としたものに変わっているのだ。カノンが何を呟いているのか、刹那達が今いる場所では遠すぎて聞こえない。だが、確実に悪いことが起きる。そう予感する刹那の頭の中でアラートがなる。遠くに見えるカノンの攻撃は激しさを増していて、殺気すら漂ってくる。

「今すぐ止めないと・・・！」

「私も行く！」

走り出す刹那に、フェイトが続いた。その後からなのはも続く。スバルやアレン達はどうしていいのか分からない、といった風に顔を見合わせるが、すぐに刹那達を追い始めた。

「カノン・・・！」

「フェイト、カノンを止められる？」

「分からない・・・でも、やってみる！」

「気を付けて、フェイトちゃん！」

心配そうに声を掛けるなのはにフェイトは頷き、スピードを上げた。

（カノン・・・だめ・・・）

明らかに今のカノンはおかしい。カノンは無気力ではあるが、戦闘に関してはそうではない。急所を狙う冷徹な戦闘スタイル。だが、今のカノンはただ乱暴に剣を振るっている。

（もう止まって・・・それ以上続けたら、もう戻れない・・・！）

カノンに迫りながら、フェイトは唇をかむ。何故そう思うのかは分からない。けれど、カノンがいなくなる――――――そんな予感がフェイトの中で大きくなっていた。

「アンタは・・・アンタだけは・・・殺す！！」

「カノン、だめぇぇぇぇ！！」

アスフォデルスを振り上げるカノンに向けて、フェイトは悲痛な声で叫んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

カノンには周りを気にする余裕はなく、ただシグナムに向かっていくことしか考えていなかった。いや、カノンの目に映るのはシグナムではない。7年前のあの日、自分の居場所を、暖かな日々を、大切な人を奪った?あの男?。憎むべき、敵。何度攻撃を弾かれ、何度攻撃されようとも、目の前にいる敵を殺す。カノンにとって、ただそれだけが目的だった。

「アンタは・・・アンタだけは・・・殺す！！」

何もできなかった。守りたかったのに。弱かったから、奪われた。やるせなさと後悔、そして憎悪を乗せてカノンは叫び、駆ける。奴は既に膝をつき、動けない。あとはもう、ただ殺せばいい。奴が何をしようと気にするものか。刺し違えても構わない。奴だけは殺す。そうすれば、オレは、『僕』は・・・・・カノンの目の前が真っ赤に染まる。とどめを刺すべくアスフォデルスを振り下ろそうとした時、その『声』は鮮烈にカノンを貫いた。

「カノン、だめぇぇぇぇぇ！！」

「っ！？」

カノンの動きが止まる。そこに炎を纏うチャクラムがカノンを弾き、吹き飛んだカノンを桜色のバインドが縛る。カノンはもがき、逃れようとするがその肩を正面からフェイトが掴んだ。

「カノン、もうやめて！」

「が・・・あああああ！！」

フェイトがカノンの肩を揺さぶり、声を掛けるがカノンは咆哮したまま暴れる。

「アンタが憎い・・・！アンタも・・・オレも・・・！全部・・・！」

「カノン！違うよ！シグナムは貴方の敵じゃない！だからやめて！」

「あああああああっ！！」

黒い電撃が奔り、フェイトを弾き飛ばす。

「フェイトちゃん！」

「大丈夫・・・！」

なのはと刹那が近寄ろうとするが、黒い雷に阻まれる。尚も近づこうとする2人を制し、フェイトは暴れ続けるカノンを見据える。

「がぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「・・・・・・！」

バインドが砕ける。前に踏み出したカノンをフェイトは素早く抱きしめた。カノンの目が見開かれ、動きが止まる。フェイトはゆっくりとカノンを跪かせた後その肩に顎を乗せ、双刃を握る手を自らの手で包み込む。

「カノン・・・大丈夫だよ？」

「ああ・・・あああ・・・！」

カノンは逃れようとするが、フェイトは放さない。カノンの心は傷つき続けている。何があったのかは分からない。けれど、その何かに後悔し続けて自分を傷つけ続けているこの優しい青年を、フェイトは放したくなかった。

「カノンに何があったのか・・・それは分からないよ。何を後悔してるのかも知らない。でもね？それでも分かる事はあるんだよ？それはね・・・カノンが優しいって事」

「ああ・・・う・・・」

カノンの動きがゆっくりと止まっていく。フェイトは微笑むと、カノンの耳元で囁くように言葉を紡ぐ。

「辛くて、後悔して・・・ずっと自分を責めてたんだね。それは、カノンが優しいからできるんだよ?カノンは、誰かを殺して満足するような人じゃない。私、これでもカノンの事、信頼してるんだよ?」

「・・・・・・」

カノンの細く狭まった瞳孔が広がり、元の目に戻る。抵抗し続けていた腕から力が抜け、アスフォデルスが地面に落ちる。

「ね、カノン・・・本当は、辛いなら、泣いたっていいんだよ?カノンにはその権利があるの。でも、カノンは泣けないんだよね。自分を責めてるから」

「・・・・・・」

「私の言葉なんて、何の意味もないかもしれないけど・・・これだけは言わせて?私は・・・カノンを支えたい。カノンの後悔、私も一緒に背負うから。だから・・・ね?もう、自分を傷つけるの、やめよう?」

「・・・オレは・・・」

力なく、カノンは首を振る。だが、その姿はまるで迷い子のように儚いものだった。

「今朝、カノンはずっと誰かに祈ってたよね?きっとその人、カノンが自分を傷つけてるのを知ったら心配する。私だったら、そんなことをして欲しくない。ね、カノン・・・」

「・・・・・・」

「独りで背負わなくていいんだよ。そんなの、誰も喜ばない。だから・・・ね?」

「オレは・・・僕は・・・」

カノンの一人称が変わったことにフェイトは驚くが、すぐに微笑みに変わる。それは、カノンは心を開き始めた証拠だと思うから。

「一緒にいよう?皆いい人達だよ。私だけじゃない、なのはも、はやても、刹那も、皆、貴方を受け入れるから」

「・・・・・・」

俯いて黙り込むカノンの肩に刹那が手を置く。なのはもそれに重ね、スバルが、ティアナが、エリオとキャロが、アレンが、リゼットが、その場の全員がカノンに手を差し伸べる。

「・・・シルヴィア・・・オレは・・・此処に・・・いていい、のか・・・？」

「カノン・・・」

カノンの呟きはフェイト以外の誰にも聞こえる事はなかった。カノンの手がフェイトの服を強く掴む。それが、フェイトの言葉への答えとなった。フェイトは抱擁を解き、カノンの目を見つめる。

「これから、よろしくね？カノン」

「・・・・・・」

笑いかけるフェイトにカノンは応えない。ふらり、と体が揺れたと思うと糸が切れたように倒れてしまった。

「力が抜けたのかな？」

「多分。眠っちゃってるから」

刹那が微笑みながら言い、フェイトは頷いた。寝息を立てながら深く眠る刹那に皆の暖かい視線が降り注ぐ。カノンの表情がほんの少し、分からない程度に笑みが浮かぶ。夢の中で、かつての幸せの続きを見ているように――――――

追憶5～獣の瞳～（後書き）

いかがでしたか？とりあえず、解説に入ります。

まず、途中まではまぁ、普通の模擬戦でした。問題は次。その場にいた全員の認識が改竄されています。シグナムの攻撃がカノンに迫った瞬間、何らかの力が働き、シグナムが攻撃をした、という一連の出来事を歪め、シグナムが攻撃をした、という過去からカノンがシグナムを攻め、シグナムが攻撃を出来なかった、という過去に基づいた現実に改竄したのです。

次に、カノンについてですが、カノン自身もこの現象については理解していませんし、そもそも認識すらできません。ある一連の出来事がなかったことにされ、新しく書き換えられているのですから、ある意味当たり前とも言えますが。ですが、ここでカノンにはシグナムが別の『誰か』に見えています。これは戦いの高揚感からの幻覚ではなく、先程と同じように、何らかの力によって過去に印象強く残った物を見せられている状態です。カノンにとってそれはトラウマでした。故に、あのような感じになったという訳です。

ご理解いただけたでしょうか？理解できなかった方は感想にでもご不満をぶつけてください。もう一度解説をしますので。ですが、口汚い表現はおやめください。現状そういった人はいないですが、一応です。ネット上でのマナーを守ってくださいね♪

次回はキャラ解説です。それでは！

追憶・欠片～キャラクター設定～（前書き）

キャラクターの設定です。ネタバレがありますのでご注意を。

順次更新していきます。

それでは、どうぞ！

追憶・欠片～キャラクター設定～

名前：カノン・アークナイト

年齢：２１歳

身長：１７５ｃｍ

体重：６０ｋｇ

ＣＶ：坪井智浩

デバイス：名称アスフォデルス。非人格型のアームドデバイス。日本刀を２つ重ねた双刃と呼ばれる刀になる。待機状態は腕輪。

備考：今作の主人公。銀髪蒼眼の青年。７年前、全てを失った事で無気力になり、自分が何もできなかった事を今も責め続けている。顔・・・というより容姿はそれほど悪くはないが、無気力な顔やどこを見つめているかも分からない瞳の所為で色々残念な感じになっている。

　バリアジャケットは黒いシャツに黒いズボン、黒いコート。だが、両手両足首に枷を付けており、そこから伸びる鎖はまるで蛇が絡みつくようにその身体を締め上げている。口や目にも拘束具をつけている。今は拘束具は外している（フェイトの命令）。

　フェイトとシルヴィアという少女を重ねてみることがあり、その事に苦悩することになる。

名前：散空刹那

年齢：２２歳

身長：１７８ｃｍ

体重：５８ｋｇ

ＣＶ：高梁碧

デバイス：名称ツィガーヌ。女性人格型で、落ち着いたイメージを抱かせる。他人に対しての呼称は『～様』が基本だが、刹那だけはそのまま呼ぶ。刹那に振り回されながらも彼を叱咤激励する良き相棒。チャクラムを武器とする『ワルツ（円舞曲）フォーム』とガンアローを武器とする『カプリス（奇想曲）フォーム』がある。

備考：前作『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｔｈｅ ｍｅｌｏｄｉｏｕｓ ｂｌａｚｅ～』の主人公。中性的な容姿をしていて、一目見ただけでは女性にしか見えず、声を聞かなければ男性と分からない程。有体に言えば美人である。炎熱と氷結の変換資質を持つ。ＪＳ事件に民間協力者として活躍、現在は教導官として働いている。

かつての本業はフィギュアスケートの選手であり、『ｍｅｌｏｄｉｏｕｓ ｂｌａｚｅ（美しき旋律の炎）』と二つ名が付けられるほどの実力者であった。

常に穏やかな笑みを浮かべ、周りをほっとさせる人間であるが、一度怒ると一切の容赦をしない。その状態を『隠れ残虐モード』だの『ヴァイオレンスモード』だの言われ、恐れられている。

名前：アレン・イグナティオス

年齢：１８歳

身長：１７３ｃｍ

体重：６２ｋｇ

ＣＶ：鈴村健一

デバイス：名称ウト・ナビシュティム。取っ手にガードのついた鉄鞭。非人格型アームドデバイス。

備考：刹那のスカウトで六課に出向した少年。お調子者ではあるが、あまり嫌われることのないタイプ。彼女が欲しいらしいが、それよりも先に強くなる事を目的とするため、彼女いない歴＝年齢となっている。意外にも趣味は針金アート。その完成度は高いが、妙な名前を付けるのが玉にキズである。

戦闘スタイルは周りに同種のものを使う人間がいなかったこともあり、完全に独学。高い実力を身に着けるが、それによりプライドが高くなり、唯我独尊な振る舞いをしていた為に前にいた隊の空気を悪くしてしまう。丁度教導に来ていた刹那が事態を重く見て注意するが反抗。自己中心的な言動を繰り返したために『隠れ残虐モード』となった刹那に叩きのめされた過去を持つ。以後は改心しており、隊との関係も修復されている。それにより、元々の明るい人格が表に出るようになった。刹那を「教官」と呼ぶ。

名前：リゼット・ユースティア

年齢：１８歳

身長：１５６ｃｍ

体重：？？？

ＣＶ：豊口めぐみ

デバイス：名称スコラスティカ。魔導書型。補助系や砲撃系、防御、広域殲滅までやり尽くす高性能。発動までのタイムラグもほとんどないらしい。また、武器を召喚することも可能で大鎌を召喚できる。因みに鎌の名は『ベネディクトゥス』である。

備考：シャトルーズグリーンの髪にエメラルドグリーンの瞳を持つ少女。アレンと同じ隊出身。隊で孤立していたアレンを唯一諌め、見捨てなかった。後方での活動に大きな力を発揮し、また近接戦闘も優秀。ある程度の事なら単騎で出来るオールラウンダーである。

　明るく、優しく包み込むようなお姉さんタイプ。が、偶にアレンやエリオをからかって楽しむことがある。紅茶が好きで、様々な種類の紅茶を集めている。特攻しがちなアレンを抑えるストッパー役で、戦闘で指揮を執る刹那をサポートする。脱いだら凄いとは前の部隊の女性メンバーからの評価。そんな彼女の過去にはある秘密が・・・

追憶・欠片～キャラクター設定～（後書き）

いかがでしたか？リゼットのスリーサイズが知りたい方、ぜひ感想で。

キャラはこれから何人か増える予定です。そちらはまた別に紹介しますので、此方はこのメンバーだけの紹介を。

それでは！

追憶6～祈りの理由～（前書き）

シリアスの方が筆は進むのに、暗い展開はテンションは下がっていく・・・あれ？

ＣＶアンケートの結果を後書きにて発表です。投票してくださった皆さん、ありがとうございました！

追憶6～祈りの理由～

模擬戦後、結局カノンは翌朝まで目を覚ます事がなかった。最初は安らかだった眠りもいつしか何度もうなされるようになっていたが、傍についていたフェイトが手を握ると少しだけ落ち着く。そういった事が朝まで続いていた。

「う・・・あ・・・あぁ・・・！」

「カノン？」

脂汗を浮かべ呻くカノンの手をフェイトは再び握る。カノンの目がハッと開き、急に飛び起きるとフェイトを押しのけて洗面所に走っていく。呆然とするフェイトだが、洗面所から何かを吐くような音が聞こえるとハッとしてカノンの下へ走る。

「カノン！大丈夫！？」

「ごほっ・・・う・・がぁ・・・」

ごぼり、とカノンの口から胃液が零れ落ちる。フェイトが背中をさするとやがて落ち着いたのか荒く息を吐きながら崩れ落ちる。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「大丈夫?」

「・・・だい、じょうぶだ・・・」

真っ白になった顔でカノンはそう言うが、フェイトからすればまだまだ心配である。

「本当に大丈夫?まだ寝てた方が・・・」

「いや、いい・・・寝たら、また・・・」

そこまで言ってまた吐き気がこみ上げてきたのか、カノンは再び洗面台に顔を突っ込む。

「朝食・・・どうする?食べる?」

「食べる・・・先に行け、後から行く」

「え、でも・・・」

「いいから」

短く言うカノンにフェイトは不安そうな顔をするが、それを見たカノンはフッと笑う。

「日課が・・・やることがあるだけだ。心配しなくても、すぐに行く」

「あ・・・」

医務室を出ていくカノンをフェイトはポカンとして見送った。笑顔。カノンが、笑顔。瞳には未だ無気力な影があるが、それでも確かに笑顔だった。

「・・・・・なんか、ずるい」

フェイトがポツリと呟く。顔が紅くなっているのが自分でも分かる。儚げだが、美しい笑み。あんな表情を浮かべられるとは思っていなかったのだ。

「・・・・・良い事、かな？」

少なくとも、悪い事ではないだろう。無気力で、何の反応も見せないあの姿よりはずっといい。そう結論付けると、フェイトは上機嫌で部屋を出た。もう少し、あの笑顔を見ていたかった・・・というのは、フェイトだけの秘密である。

＊　＊　＊　＊　＊

「天の国に眠るあなたに、アスフォデルの花束を」

祈りを捧げるカノンの心はざわついていた。

「祈りを此処に」

その正体は、罪悪感。あの吹雪の日以来、無気力に過ごしていた。いや、ただ無気力だった訳ではない。目的はあった。仇討ち。全てを奪った?あの男?を探し、殺す。その後に、自分も死ぬつもりだった。何処にも留まらず、誰にも知られず・・・そうする事が贖罪だと思っていた。だからこそ――――――7年前までとは違う武器、『刀』に手を出したのだから。けれど、何時しかそれすら忘れていた。当時の事を夢で見ても何の気も起きず、ただ惰性で彷徨い、諦めていた。今回の模擬戦でようやく思い出す始末だ。

「その清き体に安息がもたらされんことを・・・」

目の前にあの男が現われた時、憎悪だけが自分を突き動かした。目的を思い出し、戦い、我に返った後も本当は六課を離れて再び探し出すつもりだった。なのに、フェイトは1人で背負わなくていいと言う。一緒に背負うと言う。その言葉は嬉しい。確かに嬉しいのだ。だが、その一方で囁く自分がいる。『あの子を、シルヴィアを守れなかったくせに、自分だけのうのうと幸福を享受するのか?』と。そして、それに対する答えは既に出ている。

(そんな事、できる訳がない)

そう。できるはずがない。馬鹿げた感傷と笑う者もいるだろうが、カノンにとってこれだけは譲れない。何故なら彼女は、シルヴィアは――――――将来を誓い合った恋人だったのだから。

「シルヴィア、オレは――――――」

「シルヴィアとは誰だ？」

「っ！？」

突然の声に振り向くと、そこにはシグナムが立っていた。警戒した表情で睨み付けるカノンにシグナムはふっと笑う。

「・・・・・・いや、無粋だったな。身体はもういいのか？」

「・・・・・・ああ」

目を逸らして答えるカノンをシグナムはじっと見つめると小さく頭を下げた。

「・・・昨日はすまなかった。お前があんなことになったのも、元は私が――――――」

「謝るな。過去に起こったことは、変えられない。どんなものだって、そうだ・・・」

「っ・・・」

俯くシグナムにカノンは苦笑する。

「お前を責めている訳じゃない。ただ、魔が差した・・・それだけの事だ。取り乱したのも、暴走したのも、全部な」

「しかし・・・」

「もういいと言った」

ピシャリと言い放つカノン。だが、その口調は柔らかく、無気力な表情や瞳は変わらないがどこか優しげだ。

「・・・そうか」

「・・・・・・」

カノンは無言のままアスフォデルスを待機状態に戻すと踵を返し、歩きはじめる。その背中にシグナムは声を掛ける。

「先程の言葉は・・・経験か？」

「・・・・・・」

立ち止まり、黙り込むカノンにシグナムは更に問う。

「先程の祈りとシルヴィアという名に関係があるのか？」

「・・・・・・」

ゆっくりと振り向いたカノンにシグナムは息を飲む。その眼は暗く空虚だが、全身から殺気が溢れている。

「・・・・・話すようなことは無い」

「っ・・・」

カノンが去る。シグナムは震えを抑えるように自身の腕を掴んだ。あの瞳。込められた憎悪は深く、重い。だがそれに空虚さが加わるのは、既にどうしようもない事を知っているから。どれだけ憎んでも、どれだけ願っても、失われたものは戻ってはこない。諦めるしかないのだ。

「・・・・・・」

シグナムはしばらくの間、その場を動くことができなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

カノンが食堂に入ると、フェイトが食事を準備して待っていた。
が、カノンの顔を見て心配げに顔を曇らせる。

「あ、カノン遅かったね・・・何かあった？」

「いや、何も」

短く答えるカノンにやはり何かあったと確信を抱いたフェイトは真剣な顔でカノンに向き合う。

「カノン、独りで背負わないでって、私昨日言ったよね？話してくれないかな？」

「・・・・・別に、話すようなことじゃ・・・」

「どうしても、話せない事なの？」

涙目で自分を見上げるフェイトにカノンはたじろぐ。

「・・・・・・」

「うぅ・・・」

だんだんと涙をためるフェイトにカノンはついに白旗を上げた。

「・・・・・・わかった。分かったからその眼はよせ・・・」

「ほんと!?」

ぱっと表情を明るくするフェイトにカノンは嘆息する。本当にやりづらい。こんな所まで、シルヴィアに似ているとは、なんの因果か。

「・・・祈っていた」

「え?・・・・・・あ、もしかして、昨日の?」

「ああ。日課だ」

ポツリと呟くように言うカノンにフェイトは何も言えなくなる。何かを懐かしむような温かさと、その全てを諦めた空虚さが混ざった瞳。今にも消えていきそうな儚げな姿。と、そこでフェイトは

カノンの腕に目を止めた。

「あれ？」

「どうした？」

「それ・・・」

カノンの腕、左手首にはおおよそ似つかわしくない鈴のついたミサンガが巻かれていた。これまでの様子を見るに、カノンがファッションに気を配るとは到底思えない。

「・・・？ああ・・・」

「そんなのしてたっけ？」

「しばらく旅続きだったからな。汚すのが嫌だった」

「贈り物？」

「・・・・・そんなところだ」

鈴がチリン、と涼やかな音を立るのを聞きながら言いづらそうに答えるカノン。その様子にあまり踏み込んではいけないと考えたフェイトは次の話題を出そうとして――――――子供特有の甲高い声に遮られた。

「パパ！なのはママ！」

「あ、ヴィヴィオ」

見ると、ヴィヴィオがなのはと刹那の元に走っている所だった。

「おはよ、ヴィヴィオ」

「おはよう。よく眠れた？」

「む～・・・置いてくなんてひどいよ！！」

ニコニコと挨拶するなのはと刹那にヴィヴィオがむくれる。目を覚ましたら2人がいなかった事に怒っているらしい。

「ごめんごめん。朝練やってたからさ」

「ヴィヴィオが気持ちよく寝てたから、起こしちゃまずいかなって、ね？」

苦笑いで手を合わせる2人にヴィヴィオは更に頬を膨らませる。

「朝練・・・ってズルい！！わたしも見たかったのに～！！」

「マジすか教官！くっそ～、俺のバカ！！」

「もう少し早く起きれば良かったわ・・・せっかく生で見れるチャンスだったのに・・」

そこにアレンとリゼットが話に加わる。

「アレンとリゼットは見たことあるでしょ？」

「「それでも見たいんですよ！！」」

呆れながら言う刹那にアレンとリゼットは言い返す。その勢いに

思わず刹那はのけ反る。

「うお。2人とも、必死すぎ。此処にいる間はいつでも見れるでしょうが」

「「あっ・・・」」

盲点だったらしい。ぼけっと声を上げるとそそくさと自分の食事に戻っていった。

「む～・・・」

「何の話？」

と、そこにフェイトがやってくる。カノンの首根っこを掴んで引きずってきているのはご愛嬌である。当のカノンは逃れようとしてもがいているがフェイトが放さないと悟って大人しくぐったりしている。

「あ、フェイトママ！！なのはママがパパのスケートひとりで見てたんだよ！私も見たかったのに・・・」

「刹那のスケート、皆に好かれてるもんね。なのは、ちゃんとヴィヴィオを連れてかないとだめだよ？」

「にゃはは、ごめんなさい～」

なのはが苦笑を濃くする。なんだかんだで罪悪感はあったのだろう。と、そこでぼそりと呟く声が聞こえる。

「・・・なのはママ？フェイトママ？・・・・・・パパ？」

カノンであった。なのはとフェイトをジッと見つめ、次にヴィヴィオを見つめ、最後に刹那をジトッと見る。何かを責めるような視線に刹那は一瞬不思議そうな顔をすると、思い当ったのか苦笑する。

「違う違う。俺となのはがヴィヴィオの親で、フェイトが後見人なんだ。だから2人ともママなんだよ」

「・・・・・・そうか。悪かった」

カノンが小さく頭を下げると刹那は気にしていない、と笑う。そこに、ヴィヴィオがカノンの前に立つ。

「？」

「えっと・・・高町ヴィヴィオです！よろしくお願いします！」

満面の笑みで挨拶するヴィヴィオにカノンは目を瞬かせると、ヴィヴィオに目線を合わせる。

「カノンだ。カノン・アークナイト」

「カノンさん？」

首を傾げるヴィヴィオにカノンはコクコクと頷く。まるで子供のようだった。

「よろしく・・・」

「はい！」

たどたどしく挨拶するカノンにヴィヴィオは頷く。

「さて、そろそろ時間だ。食べ終わって少し休んだら、訓練入るよ

！」

「うわ、ついに来た・・・」

手を叩いて皆を見回す刹那にティアナが小声で呟き、スバルと共に冷や汗をかく。

「「？？？」」

分かっていないのか首を傾げるエリオとキャロにティアナとリゼットが苦笑して話す。

「私やアレンは一度刹那さんの教導を受けたから知ってるんだけど、刹那さんの教導、容赦ないわよ？」

「それになのはさんも加わるんだから・・・想像、できる？」

とたんにエリオとキャロは顔を真っ青にする。何やらとんでもないことを想像してしまったらしく、口を押えながらブルブルと震えている。

「聞こえてるんだけどな、２人とも・・・」

「「す、すいません!!」」

苦笑しながらのなのはの言葉にティアナとリゼットは飛び上がって頭を下げる。なのはとて自分が厳しい訓練を課していた事は理解しているが、ここまで恐れられると心外なのだろう。

「大丈夫だよ。壊れない程度にしておくから」

「教官、笑えないっす・・・」

「壊れないって何が・・・やっぱりいいです!」

アレンがげんなりと呟き、スバルは刹那の笑顔を見て顔を引きつらせていた。

「そこまでなのか?」

「う~ん・・・まぁ、かなり厳しいんじゃないかな?あ、カノンも受けるんだよ?」

「・・・・・・」

フェイトの言葉にカノンはぐったりと項垂れる。最早言い返す気力もないらしく、どうにでもなれ、といった気配がにじみ出ていた。

「じゃ、俺は先に言ってるよ。ヴィヴィオ、また後でね」

「うん！」

刹那が訓練場に歩き出し、他のメンバーは一時の休憩のために動き出す。

「カノン、一旦戻ろう？」

「オレは・・・少し歩いてくる」

フェイトが誘うのをカノンは断る。それに気を悪くした様子もなく、フェイトは笑った。

「そう？じゃ、また後でね」

「ああ」

そう言うとフェイトは食堂を出ていった。静かになった食堂でカノンは独り考えに耽る。

（これから・・・ここで・・・）

許されるのだろうか。シルヴィアを失って7年、旅をして自分に破滅をもたらす為に?あの男?を探して、探して・・・・結局、見つける事も叶わず、自ら死ぬこともできずに諦めた。いつの間にか、何を、何の為に探しているのかを忘れ、ただ無気力に彷徨うだけになっていた、この無様な自分に。

（結局オレは・・・変わってない）

そう。あの頃、ただ目の前の幸せだけを見つめていた弱い自分と、何も。ただ穏やかな日々に流されていた自分と、何も変わってはいなかった。

「・・・・・・くっ」

歯ぎしりをするカノンの耳にチリン、チリンと鈴の音が届く。それはカノンの後ろから聞こえていた。ハッとして振り向くが、そこ

には誰もいなかった。だが、カノンは知っている。この気配は――
――――

「シルヴィア？」

チリン、と鈴の音が答えるように一際大きく響いた。が、シルヴィアがいる筈がない。彼女は既に死んでいるのだから。

「妄想、か・・・」

カノンはあり得ないと否定するように首を振った。

＊　＊　＊　＊　＊

フェイトは訓練着に着替えると訓練場へと歩いきながらカノンについて考えていた。今朝のカノンの様子から、推測することは多い。

「お祈り・・・贈り物のミサンガ・・・」

邪推するならば、恋人から・・・だろう。しかし――――――

「アスフォデルス・・・アスフォデルの花束・・・か」

アスフォデル。ユリ科の植物で天国に咲き、決して枯れる事がないといわれる花。その花言葉は、

「私は君のもの・・・」

言い伝えと、花言葉。そこから考えられるのは、最悪の想像。つまり、カノンの恋人は既に亡くなっているということだ。

「じゃあ、カノンは・・・」

カノンが無気力なのは、その恋人の死が原因なのだろうか？大切な人だったからこそ、失った事に耐えられなかった？いくらでも想像できる。だが、フェイトにはそう思えなかった。カノンが祈りの時に浮かべていた表情や模擬戦の後の表情から見るに、カノンはある特定の事に対して良くも悪くも積極的だ。一方は祈り。もう一方は強烈な憎悪。どちらにしても、他人に対して何かをしようとする意思の表れだ。

「・・・・・・流石に、すぐには出来ないかな」

もどかしい。支えたい、助けたいと思うのに、何もできない事が。

「・・・・・・」

顔を曇らせるフェイトに、突然チリン、と鈴の音が響く。ハッと辺りを見回すと、　誰もいなかったはずの前方に銀紫の髪に青い瞳、巫女服のような服を着た１４、５歳程の少女が佇んでいた。

「え・・・貴女、誰・・・？」

フェイトの問いに、少女は柔らかく微笑んだ。

追憶６～祈りの理由～（後書き）

いかがでしたか?衝撃の事実。カノンは昔彼女持ちでした!ちっ・・・リア充が・・・!

という訳でアンケートの結果です!

カノン・アークナイト：坪井智浩

散空刹那：高梁碧

アレン・イグナティオス：鈴村健一

リゼット・ユースティア：豊口めぐみ

となりました!

カノン：・・・ちょっと待て。オレだけ投票されたのと違うんだが。

前奏曲：もとは鷹取玲さんだったんだよね。ＰＣ版の「ＦＯＲＴＵＮＥ　ＡＲＴＥＲＩＡＬ」の生徒会副会長、東儀征一朗役の。でもさ、アニメでやってたのが坪井智浩さんで、原作ともほぼ声の感じが一緒で違和感なかったんだよ。

カ：この人を投票してくれたセリカ先生に失礼だろう。

前：それ言われると辛い・・・。勝手な判断だしね。どうなんだろうってのは自分でも思ったけど、こっちの方がいい気がしたから。

カ：はぁ・・・

前：実際、本当に申し訳ないです。平謝りするしかないなぁ・・・

カ：・・・本当に申し訳ない。どうか首をはねる程度で許してはもらえないだろうか・・・

前：・・・私、これからセリカ先生の所に謝りに行くんだ・・・

と、いう訳で、セリカ先生本当にすいませんでした。え～、次回、『追憶7～ファースト・コンタクト　前篇～』です。それでは！

追憶7～ファースト・コンタクト　前篇～（前書き）

感想がユーザーからのみになっていた・・・（汗）制限なしに修正しておきました。マジすいません。

今回は色んな意味でファースト・コンタクト。どういう意味かは本編でお楽しみください。

カノン、やっぱりフェイトには勝てないのか・・・？

それでは、どうぞ！

追憶7～ファースト・コンタクト　前篇～

「貴女・・・誰？」

目の前に佇む少女にフェイトは恐る恐る尋ねる。少女から敵意は感じないが、それでも六課にいないはずの少女がいるのだ。誰でも警戒はするだろう。

「・・・・・・」

少女は答えない。ただ柔らかい微笑みを浮かべながらフェイトを見るだけだ。チリン、と鈴が鳴る。ただ無言のままフェイトと少女は見つめあう。

「・・・・・・」

「――――――」

と少女が口を開き、言葉を紡ぐ。だが、その声は鈴の音にかき消され、フェイトに届くことは無かった。一通り言い終えたのか、少女は祈るように手を組むと空気に溶けるように消えてしまった。少女が消える最後の一瞬、右腕に巻かれたミサンガに付いた鈴がチリン、と音を立てていた。

「あ・・・」

はっと我に返ると、既に皆は訓練場に着いてフェイトを待っていた。急いで向かい、合流する。

「ごめん、遅れちゃった」

「いいよ、今から始めるところだし」

謝るフェイトに刹那が笑う。

「じゃあ、準備運動から始めようか」

「「「「「はい！！」」」」」

なのはの号令でそれぞれが準備運動を始める。それが終わると、それぞれがデバイスを展開する。訓練なのでバリアジャケットは展開しないが、訓練着を持たないカノンだけはあの異様な姿に変わっている。

「「「「・・・・・・・」」」」

「カノン」

全員が黙り込む中、フェイトがカノンに声を掛ける。

「えっと・・・それ、どうにかならない？」

「・・・・・・？」

フェイトが差しているのは両手両足首にある枷と体の鎖、そして目や口を塞ぐ拘束具だ。正直、見ているだけでテンションが下がる。

「せめて目と口はどうにかして？コミュニケーションできないし、正直怖い・・・」

「う～ん・・・正直なとこ、隊の士気にも関わってきちゃうから、外してほしいな」

フェイトの言葉になのはも加わる。全員が同じ意見なのか、うんうんと頷く。だが、カノンは首を振り、

《ことわ――》

「外して」

言いかけてフェイトに遮られた。見るとフェイトは満面の笑みを浮かべているが、目は笑っていなかった。その視線を受けてもカノンは平然としていたが、フェイトが逆に涙目になっていくと慌てた様子をもせ、カノンは渋々といった様子で拘束具を外す。

「これでいいか？」

カノンが確認を取ると、フェイトがホッと息を吐く。どうやら本当はその異様な姿を怖がっていたのを我慢していたらしい。

「うぅ・・・我慢できた。怖かった・・・」

「おい」

あんまりな一言にさすがのカノンも突っ込む。険しい目で自分を見つめるカノンにフェイトは慌てると、慌ててコクコクと頷く。

「う、うん！それでいいよ！・・・できればその鎖も何とかしてほしいんだけど・・・」

「断る」

冷たく、きっぱりとカノンはフェイトの言葉を跳ねのけた。これぱかりは譲るつもりがないらしい。

「はぁ、しょうがないかな・・・」

「「「「う～ん・・・」」」」

諦めて溜息を吐くフェイトに皆も苦笑する。どうあってもカノンが譲らない事は理解できた。

「えっと・・・アレンさんとリゼットさんのデバイスって・・・」

「「ん？」」

話を変えたいのか、エリオがアレンとリゼットに目を向ける。

「おお、こいつか。俺のデバイスは鉄鞭っていう奴で、要するに鉄でできた鞭だ。名前はウト・ナビシュティム。非人格のアームドデバイスだ」

「鞭・・・ですか」

アレンが両手に持つのはガードのついた警棒のような物だった。鞭のイメージとは違うその姿にエリオは機微を傾げる。

「そ。普通の鞭と違ってしなりは無いけど、こいつは固いから殴られたら痛いし、当たり所が悪けりゃ死ぬぜ？」

「「ええっ！？」」

「ま、心配すんなよ。それはあくまで普通の武器としてであって、こっちには非殺傷もあるからさ」

アレンは笑いながら言うが、やはり心配なのかエリオとキャロの表情は優れぬままだった。そこに、リゼットが声を掛ける。

「大丈夫よ、２人とも。アレンはその辺はしっかりしてるから」

「「あ・・・はい！」」

「お前ら、なんで持ち主の俺を信用しねーでリゼットを信じるんだよ・・・」

信じてもらえなかったからか、アレンは疲れたような声を上げる。
皆が苦笑する中、リゼットが一冊の本を取り出す。

「次は私ね。この子はスコラスティカ。私はスコラって呼んでるわ」

「魔導書・・・八神部隊長の夜天の書みたいなもの？」

ティアナがスコラスティカを見つめながら訊く。

「ええ。ちょっと特殊で、ミッドとベルカの混合で調整してもらったの。色々できるわよ？」

「という事は、フルバック？」

「そうね。近接用の物もあるけど、１番の得意分野は遠距離戦ね」

リゼットが頷くと、キャロが嬉しそうに笑う。

「よろしくお願いします！」

「ええ、頑張りましょ？」

同じフルバック同士、意気投合したらしい。

「はい、それじゃ、始めるよー！！」

「「「「「はい！！」」」」」

直後、キノコ雲が訓練場から見えていた。

＊　＊　＊　＊　＊

「じゃあ、午前中はこれで終わり。午後は連携を確認するよ」

「最初にスターズ、次はライトニングで、最後が俺達だ」

「「「「「「は～い・・・」」」」」」

ニコニコと笑いながら告げる刹那となのはに皆がぐったりと気のない返事をする。だが、

「・・・訓練、倍にしよっか？」

「「「「「「はいぃぃぃぃ！！」」」」」」

刹那（鬼）の一声で全員が大声を上げた。

「じゃあ、クールダウンしてお昼だね」

「「「「「はい！！」」」」」

なのはの声に返事をし、各々がクールダウンに入る。

「にしても、ちゃんと動きにキレがあって、良かったよ」

「マジですか！」

柔軟をしながら刹那が言うと、アレンがすぐに反応する。

「マジマジ。ただ、動きが単調になって隙が出てきてるからその辺を鍛えようか」

「はい！」

ニヤリ、と不敵に笑ってアレンは頷く。一方、リゼットはキャロと話していた。

「竜召喚士か～・・・こんなに可愛いのに、戦ったら凄いのね」

「クキュ～！！」

リゼットはフリードの首をくすぐる。

「リゼットさんも凄いです。今日見ただけでもいろんな魔法が使えて・・・・」

「そう？まぁ、私はブーストだけじゃなくて、広域殲滅とか、単純な砲撃系とか、色々使えたりはするけど・・・」

刹那の隊において、ギンガとアレンがフロントアタッカー、刹那はガードウィングだ。センターガードの役割やフルバックの役割を同時に行えるリゼットは確かに優秀な人材といえるだろう。

「頑張らないとね」

「はい！」

キャロを見て微笑むリゼットにキャロはしっかりと頷いた。

「あう～・・・きつかった～」

「スバル、ぐったりしてないで早くしなさい？」

ぐったりとへばるスバルをギンガが諫める。

「でも、本当にきつい・・・フラグメントは、ここまでしないと倒せないのかしら・・・」

「それは分からないけれど。でも、やっておくに越したことは無いでしょ？」

「それもそうですね・・・」

ギンガの言葉にティアナは以前見たフラグメントの被害を思い出しながら頷く。引き裂かれ、食いちぎられた人々。嫌な光景を思い出し、ティアナは顔を顰める。と、そこにカノンが珍しく会話に入ってきた。

「アイツらは、それほど強くない・・・ただ、硬く、少しの傷程度なら再生するだけだ」

「そうなの？」

そこにフェイトも加わり、皆もカノンの言葉に耳を傾ける。カノンが語るのは重要な情報だ。聞き逃すなどという愚かな真似はできない。

「形状は一応人型だ。見るに堪えない姿をしてはいるがな。他の形状は今のところいない。人型だけだ」

「どうしてだろ？獣型とか、いてもおかしくはないのに・・・」

「知らん。・・・奴らを仕留めるのは簡単だ。首を切り飛ばすか、胸を抉るか。あるいは砲撃で消滅させればいい」

「簡単って・・・硬いんですよね？」

ぶっきらぼうに告げるカノンにギンガが質問する。確かに、相手が硬いのなら切り飛ばすなんてことはかなり難しい筈だ。

「全力でやればいい」

「全力でって・・・」

身も蓋もない。そのあまりに気の抜けた答えに全員が脱力する。
カノンは皆の様子を無視して続ける。

「奴らは基本、何かを探すように動く。だが、攻撃してくるときは必ず集団だ。1人にならなければ勝機はある」

「ん？カノンはひとりで戦ってたんだよね？その時はどうしてた？」

刹那の指摘にカノンは考え込む。自分の戦いを思い出しているのだろう。そんなカノンを刹那はじっと見つめる。カノンの戦い方にヒントを得れば、もし1人になっても対応できると刹那は考えたのだ。

「・・・さぁ、どうだったか・・・。強いてあげるのなら、確実に仕留められる一撃で倒すことだ。時間が経てば経つほど不利になる」

「・・・確かにそうか。やっぱりチームで戦う方が安全だね」

当たり前といえば当たり前だ。集団戦に時間をかければかけるだけ自身が不利になる。だが、それが最も有効なのだろう。刹那は納得すると立ち上がった。

「じゃあ、お先に失礼。皆、お疲れ様」

「「「「お疲れ様でした！」」」」

挨拶のあと、皆もそれぞれ昼食を取りに隊舎へと急いだ。

＊　＊　＊　＊　＊

「ねぇ、カノン」

食事をとりながらフェイトはカノンに話しかけた。隣のテーブルではエリオとスバル、そしてギンガが特盛の昼食を食べており、皆はそれを見ないようにしながら食べていた。

「なんだ？」

「カノンの知り合いの人に、えっと・・・巫女服って言うのかな、そういうのを着てた人っている？」

その質問に皆がカノンを見る。カノンは基本的に無気力な奴、というのが皆の共通認識だ。そんなカノンの知り合いとなれば気になるのは当然・・・・・・なのだろうか？だが、当のカノンの様子は少し違っていた。

「・・・・・何故、そんな事を聞く？」

「ううん、大したことじゃないんだけど・・・訓練の前にね、女の子とあって・・・その子が着てたの」

「え？女の子？」

なのはが不思議そうに聞く。部外者は基本的に入れないのだから、当然の反応だろう。

「うん。いつの間にか目の前にいて・・・で、鈴の音がしてたの。その子の右手首にカノンのミサンガに似たのを付けてたから・・・」

「・・・・・・！」

フェイトがそこまで言った時、カノンの様子がはっきりと変わる。

「・・・・・・どんな奴だった？」

「え？」

見るとカノンの顔は真っ青で、何かに対して信じない、信じたくないといった様子だった。

「どんな奴だったんだ・・・！」

「えっと、紫がかった銀髪で、青い瞳の・・・」

ふらり、とカノンがよろめく。

「カノン！？」

「ありえない・・・そんな事・・・」

弱弱しく呟くカノンをフェイトが支えようとしたその時、アラートが鳴り響く。

「っ！アラート！？」

『皆！ミッドの森林地区に反応！フラグメントや！』

モニターからはやてが告げる。

「フラグメント・・・！今まで一度も出なかったのに・・・」

「そんなことは言ってられない状況だね。皆、準備はいい！？」

「「「「「「はい！！」」」」」」

スバルが愕然と呟くが、なのはの声に皆が勢いよく返事をする。

連携訓練なしの実戦。スターズやライトニングは以前の経験があるとはいえ、アレンやリゼット、カノンについてはそうもいかない。ギンガもアレン達とは初めてなのだ。

「連携訓練無しになっちゃったけど、いけるね？」

「もちろん！」

「いつでも行けます！」

自信を覗かせるアレンとリゼットに刹那は満足げに頷くと、ギンガに顔を向ける。

「ギンガ、副隊長としては初めてだけど、皆の事、頼むね」

「はい！」

ギンガも力強く返事を返す。その眼には緊張も不安も見えることは無かった。皆がヘリポートに向かって走り出す。そんな中、カノンは未だ動揺していた。

「カノン？」

「そんな・・・バカなことが・・・」

フェイトが伝えた少女の姿は生前のシルヴィアそのものだ。だが、彼女は既に死んでいる。では誰なのか?それに、少女が付けていたというミサンガ。かつては自分が左手首、彼女が右手首に着けていたが、それともまた一致する。あまりの事に動揺するカノンの肩をフェイトが叩く。

「カノン!しっかりして!何があるのか分からないけど、考えてもしょうがないよ!」

「あ・・・ああ・・・」

フェイトの言葉にカノンは少しずつ落ち着きを取り戻す。なんにせよ、目の前の事態をどうにかしなければ事の真相を知ることもできないのだ。

「悪い。もう行ける」

「うん!」

カノンは頭を切り替えると走り出す。その後をフェイトが追った。
フェイトの前に現れた少女が誰なのか。仮にシルヴィアなのだとすれば、自分が体験した7年前の出来事は何だったのか。何のために現れたのか。絶対に確かめる――――――カノンの胸中はそれだけだった。

追憶7～ファースト・コンタクト　前篇～（後書き）

いかがでしたか？謎の少女についてはまだまだ明かせません。ですが、今後ちょくちょく登場して六課を恐怖Wと混乱に落としていきます。カノンは気が気じゃなくなりそう・・・？

次回、『追憶8～ファースト・コンタクト　中篇～』、お楽しみに！それでは！

追憶8～ファースト・コンタクト　中篇～（前書き）

１５０００ＰＶ達成しました。読んで下さる方々に最大の感謝を。

今回はバトル中心。うまく書けてるか？・・・聞かないでください。

それでは、どうぞ！

追憶8～ファースト・コンタクト　中篇～

「せ、狭い・・・！」

ミッドの郊外、森林地区に向かうヘリの中でアレンは呻いた。人数が増えたために、以前はまだ余裕のあったヘリの内部が狭く感じられるのである。

「良いじゃねぇか。女性陣と密着できる事なんざそう無いんだから、堪能しとけよ」

「おお！盲点！」

ヘリを運転するヴァイス・グランセニックが軽口を叩き、アレンが感嘆の声を上げるが、途端に女性陣から白い視線が突き刺さる。

「・・・・・・ヴァイス君？」

「・・・俺は何も言ってませんよーっと・・・」

なのはが笑顔でヴァイスを見るが、その眼は絶対零度の冷たさを持っていた。その視線にヴァイスはタジタジと嘯く。

「アレン、なのはに手を出したらもぎ取って壊すからね」

「は、はいぃぃぃぃ！！ってか、何をですか！？」

刹那が無表情でアレンに告げる。何をもぎ取るかは想像できなくもないが、アレンの中では大変な事になっているらしく、ブルブルと震えながら身を縮ませた。絶対零度の視線が２つ。この２人、いらない所まで似た者同士である。

市街地を抜け、森林が見えるとすぐに反応があった。遠目にも、その禍々しい異形の姿が数十体見えていた。

「皆、新しい六課の初任務、成功させようね！」

「「「「「「「「はい！」」」」」」」」

なのはの言葉にすぐに皆が反応する。

「話にもある通り、標的は何かを探してるみたいで此方を認識してない。飛び降りて奇襲が行けるかも」

「うん。スターズは右の集団、俺達は左、ライトニングは正面でいい？」

「うん！」

フェイトの案に刹那が乗り、なのはも同意する。

「じゃあ・・・ミッション、スタート！！」

なのはの号令と共にそれぞれの魔力の色をした光が地面に吸い込まれていった。

＊　＊　＊　＊　＊

「メロディーズ1、目標と接触！交戦に入ります！」

「同じくメロディーズ2、3も交戦に入ります！」

まず刹那が降り、ギンガとアレンがフラグメントと対峙する。障害と判断したか、フラグメントが此方を向く。

「――――――――――――――――――――！！」

「・・・・・・！」

咆哮。耳障りな音に刹那は顔を顰めると一気に距離を詰め、チャクラムで斬り上げる。蝋色の血飛沫が飛ぶが、すぐに傷口は塞がってしまう。

「なるほど、確かに面倒だね・・・」

「なら、全力で粉砕するまで！！」

呟く刹那にアレンが応え、突撃する。

「砕けろ！！」

「――――――――！！」

鉄鞭――――――――ウト・ナビシュティムが魔力のオーラを纏い、フラグメントの胴を吹き飛ばす。身体を両断されたフラグメントは声を上げる事もなく塵へと還った。

「うっしゃあ！！」

「アレン君、まだよ！」

フラグメントを撃破したことで雄叫びを上げるアレンに迫るフラグメントをギンガが砕く。

「うおっ！サンキュー！！」

「油断しないで、次！」

「了解！！」

ニヤリと笑いながらもアレンの目は鋭くフラグメントの集団を睨んでいた。ギンガもカードリッジを排出し、フラグメントに突撃する。

「「はあああああ！！」」

直後、蝋色の血飛沫と共に塵が吹き荒れた。

「我が命によりその理の禁を解く。降り注げ極光、その光刃を以て万鬼を滅せ！」

スカートが短いゴスロリのようなバリアジャケットを纏うリゼットが詠唱すると同時にスコラスティカに記された文字が輝く。虚空に魔法陣が幾つも描かれ、宙を覆う。

「シャイニング・ブラスト！！」

魔法陣から閃光が放たれる。閃光はフラグメントを貫き、消滅させていく。運良く逃れたフラグメントもいたが、炎を纏うチャクラ

ムとそれに続く４つの炎輪が切り裂き、燃やし尽くした。

＜＜あらかた片付きましたね＞＞

「ん。こっちはもうよさそうだ。皆、他のフォローにまわるよ！！」

「「「はい！」」」

ツィガーヌの声に頷いた刹那の号令に景気よく返事を返した３人は他の隊のフォローへと走り出した。

＊　＊　＊　＊　＊

一方、なのは達スターズもまたフラグメントを殲滅し続けていた。

「ディバイン・・・バスター！！」

「――――――――！！」

桜色の砲撃が異形のモノ達を蹂躙していく。フラグメントは数は多いがあまり速いとは言えず、戦闘能力もあまり高いとは言えない。故に、遠距離からのなのはやティアナにとってはやりやすい相手でもあった。

「リボルバー・・・シューーート！！」

「クロスファイヤー・・・シュート！！」

スバルが叩き、ティアナが討ち漏らした敵を撃ち抜いていく。スバルとティアナは長年コンビを組んでいたこともあって、隙のないコンビプレーを見せていた。

「ふ～ん・・・。確かに硬いけど、何とかなる程度か」

「結構楽だね」

塵に還っていくフラグメントを見つめながらティアナが呟き、スバルが素直な感想を述べる。

「2人共、まだ油断は禁物だよ」

「はい！」

なのはの注意にスバルは返事をするが、ティアナは深く頷いただけでフラグメントを見つめ続けていた。

「ティアナ、何か気になる？」

「あ、いえ・・・。ただ、噂や数少ない接触報告にある通り、何かを探しているのは間違いないんです。ただ、それが何かわからないですから・・・」

「うん。フラグメントも、私達に向かってくるのもいれば、そのまま探索を続けてるのもいるね」

「はい。この任務で何か分かればいいんですが・・・」

近づいてくるフラグメントを撃ち抜きながらティアナは自らの見解を述べる。執務官としても成長したティアナに感動を覚えるなのはだったが、それを心の中に留めておき、状況を見極める事に専念する。

「ティア！なのはさん！」

その時、スバルが叫び声を上げる。焦りとも驚きとも取れるその声に2人が振り向くと、フラグメントが移動していた。だが、今までのどこか緩慢な動きではなく、飢えた獣が獲物に迫るような、鬼気迫る様子で走り出していた。

「あっちは、確かライトニング・・・！」

「追うわよ！！」

「うん！」

いったい何が起きているのか。なのはの胸中に不安が広がる。が、それを抑えて今も戦い続けている親友と仲間の下になのは達は急い

だ。

＊

＊

＊

＊

＊

「はあああああ！！」

カノンがフラグメントを切り裂いていく。戦いなれたその様子にフェイト達は圧倒されてもいた。

「カノンさん、凄い・・・！」

「あんなにあっさり・・・」

「・・・・・」

エリオとキャロが感嘆の声を上げる。そんな中でフェイトはフラグメントを屠りながらもカノンを見つめ続けていた。

（やっぱり・・・）

ジャラリ、とカノンを縛る鎖が音を立てる。カノンは気にも留めずにフラグメントの首を飛ばし、頭を貫き、胸を抉り斬る。時には魔力変換の雷を用いてフラグメントの群れを屠っていく。だが、フェイト達も戦い続けているとはいえ、フラグメントの方が数が多いのだ。当然、傷も負う。腕に噛みつかれようが、足を切り裂かれようが、カノンは止まらなかった。そのことがフェイトを悲しくさせる。

（そんな・・・そんな自分を犠牲にするような戦い方・・・して欲しくないよ・・・）

「・・・ハーケンセイバー！」

だからせめて、カノンが少しでも傷つかないように、援護する。
飛ばされた金の刃はフラグメントを切り裂き、塵へ還していく。

「フリード！ブラストレイ！」

「天雷・・・龍哮！！」

エリオとキャロもカノンを援護するように戦っている。エリオの『天雷龍哮』は指向性を持った雷が竜の顎を形作り、敵を飲み込む技だ。

「――――――」

「・・・・・・？」

と、一匹のフラグメントが動いていないことにフェイトは気づいた。そのフラグメントはカノンをじっと見つめ、見定めるような様子でカノンの動きを目で追っている。カノンは戦いに精一杯でそれどころではなく、エリオとキャロも気づく様子はない。

「――――――！！」

「え・・・！？」

フラグメントが咆哮を上げる。その瞬間、周りいるフラグメントの群れが一斉にその動きを止め、カノンに目を向ける。いきなりの統制された動きにフェイト達は困惑を隠せなかった。咆哮を上げたフラグメントの目が見開かれ、口が三日月を形作る。それはまるで『見つけた』と言わんばかりの形相であった。

「・・・・・・！」

「カノン！」

ぞくり、とフェイトの背中に悪寒が奔る。フラグメントは確実にカノンを狙っている。何かが起こる――――――そんな予感にフェイトはバルディッシュを構え、状況を見据える。カノンも険しい顔でフラグメントを見据え、アスフォデルスを構える。

「――――――――――――――――！！」

アスフォデルスを黒い雷が覆ったその時、咆哮と共にフラグメントの群れが一斉にカノンに襲い掛かる。

「「カノンさん！」」

エリオとキャロが叫ぶ。カノンの姿はフラグメントの群れに覆われ、見えなくなっていた。

追憶8～ファースト・コンタクト　中篇～（後書き）

いかがでしたか？フラグメントに異変が！さてさてこの物語、本当に謎だらけになりそうでちょっと怖いです。

次回はまたも新キャラ（！？）が登場です。ああ、首を自分でしめているような気がするのはなんででしょう？

という訳で次回、『追憶9～ファースト・コンタクト　後篇～』です！それでは！

追憶9～ファースト・コンタクト　後篇～（前書き）

今回は新キャラ登場！カノンとも繋がりが・・・？

それでは、どうぞ！

追憶9～ファースト・コンタクト　後篇～

「カノン！大丈夫！？」

「・・・・・・」

カノンを腕に抱え、空中でフェイトはカノンの身を案じた。フラグメントの群れがカノンを押しつぶす前にフェイトが間一髪で助け出したのだ。当のカノンはじっとフラグメントの群れを見つめている。

「今の動き、完全に統制されてた・・・。さっきまではこうじゃなかったのに、どうなってるの・・・？」

「・・・・・まずい、な」

フェイトの困惑した様子にカノンが険しい表情で呟く。明らかにカノン1人を狙った動き。退避していたエリオとキャロも困惑した様子で空中のカノンとフラグメントを見比べている。そんな間にも別方向からフラグメントが合流してくる。方向から考えるとスターズの方だろうか。

「・・・・・・」

「カノン？」

そんな中、カノンは1人考え込む。狙われていたのは確か。では何故？何が狙われる要因なのだろうか。フラグメントは自分の何を『見つけた』のだろうか。纏まりきらない思考に苛立ちが増す。ただでさえ今はフェイトの前に現れた少女が気になっているのだ。

「チッ・・・」

確かめたいことが確かめられない。それはカノンの精神をひどく苛む。フェイトの腕を振りほどき、戦闘を再開させようとするが、がっちり捕まえられていてそうもいかない。その事にカノンがさらに苛立ったその時、突然桜色と琥珀色の砲撃が集団で固まっていたフラグメントの群れを消滅させていった。一瞬フラグメントの群れが揺れるが、すぐに立て直すように動きが止まり、不気味にカノンを見つめ続けている。

「なのは！刹那！」

「ごめん、フェイトちゃん。取り逃がしちゃった」

見ると、スターズとメロディーズの面々が揃っていた。駆けつけ

た援軍にフェイトが驚いていると、カノンはフェイトの腕を抜け出し、フラグメントに迫ろうとするが、その首を刹那が猫を掴むように抑える。

「ストップ。1人じゃ危ないって」

「放せ」

カノンは刹那を睨み付けるが、刹那は戦場に似つかわしくない穏やかな笑みを浮かべ、どこ吹く風といった様子で首を振る。

「あ、それ無理。君、独りで突っ走ろうとする癖、無い？相手の様子が変わってるのは分かってるんだ、慎重な対応が必要だと思うけど？」

「いいから放せ。オレは早く――――――」

カノンは刹那の手を振りほどこうとするが、細い体つきからは想像ができない強い力で抑えられ、振りほどくことができない。

「くっ・・・」

「君が何を焦っているかは分からないけど。むしろ目的があるんなら、ひとつひとつ冷静にやっていった方が全体の効率はいいと思わない？・・・色々な意味で、さ」

「なっ・・・」

カノンが思わず振り向くと刹那は真面目な顔でカノンを見つめていた。その紫紺の瞳には曇りがなく、カノンの全てを見透かしているようで、カノンは落ち着かなくなる。刹那も本当にカノンが抱えている物の全ては知らないだろう。だが、カノンには刹那がこの世の全てを知っているような、知らないことなど無いように思えた。それがカノンには落ち着かない。カノンとて、ここで焦っていても状況が動かない事は分かっている。だが、どうしても、フェイトの話にあった少女の事が気にかかるのだ。それでも、今この事態をなんとかしなければ少女について調べる事も出来ない。それが分かっているから、カノンは力を抜く。

「・・・・・」

「ん、よし。ようやく力抜いたね。じゃあ、なんでこんな状況になってるか、詳しい説明お願い」

カノンが力を抜いたことが分かったのか、刹那も力を抜く。刹那が説明を求めると、フェイトが答える。

「えっと・・・最初は、ただ戦ってただけなんだけど、１匹だけ様子が違ってて、いきなり吠えたと思ったら・・・」

「うん。私達もそう。いきなりこっちに向かって走り出して、それが今までと違う様子だったから・・・」

なのはもそれに付け加えるように説明すると、全員の顔が曇っていく。

「それってつまり・・・」

「考えたくないけど、フラグメントの中にもリーダー・・・というか、力を持ったのがいるって事ね」

ティアナが厳しい顔で呟くと、皆も頷く。

「予想外の動きが多いけど・・・知らないことが多すぎるのが悔しいわね」

「あ～・・・とにかく、ぶっ飛ばせばいいだろ!?何時までもあいつ等と睨みあってるのなんか願い下げだぜ!?」

深刻そうに呟くリゼットにアレンがイライラと叫ぶ。その言葉を聞いた皆は一斉にアレンを見つめる。

「なんだよ？」

「いえ・・・なんというか」

「アレン・・・貴方、『願い下げ』なんて言葉をちゃんとした用法で使えるのね？」

「使えるっつーの！！お前らの中で俺はどんだけバカなんだよ！」

キャロが呆然と呟き、リゼットが同調するように言う。やはりというか、アレンはキレた。

「「「「えっと・・・・・・その、ごめんなさい」」」」

「お前らもかよ！？」

「・・・皆、任務中。アレンの事で意外に思ったのは俺も同じだけど、今はこっちが先だ」

何気に刹那も酷かった。落ち込むアレンを無視すると刹那は手を叩いて注意を引きつけると話し始める。

「じゃあ、なのはとリゼットは周りの邪魔なのを片付けて。キャロはサポートお願い。俺とフェイト、ティアナで援護するから、アレンとエリオにスバルとギンガ、それからカノンが突っ込んで、殲滅する。なのはとフェイトも、それでいいね？」

「ん・・・それがいい、かな」

「カノンが突っ込んで大丈夫かな？」

なのはは少し考えて同意するが、フェイトはカノンを気にしている。カノンが狙われているのだから当然だろう。

「大丈夫じゃない？一気に来るんだったらこっちも一気に殲滅するから」

「・・・・・・この狸」

しれっととんでもないことをにこやかに告げる刹那にカノンは毒

づく。皆も苦笑するが、当の刹那は穏やかな笑顔のままだ。

「それははやてに言ってあげてよ。きっと泣いて喜ぶからさ」

「「「「「・・・・・・」」」」」

全く悪びれない刹那を皆が呆れの目で見つめる。と、同時にカノンも悟っていた。

「・・・・・あんた、苦手だ」

「お褒めの言葉をどうも。隊長なんだから、これぐらい強かじゃないとね。じゃ、皆準備はいい？」

「「「「「「はい！！」」」」」」

皆がそれぞれの配置に着く。フラグメントはカノン以外の物が見えていないかのようにカノンを凝視し続けていた。

「ディバイン・・・バスター！！」

「我が命によりその理の禁を解く。冒涜の闇、その暗き焔にて汝の敵を討ち滅ぼせ・・・・・プロフェニティ・ブレイズ！」

桜色の砲撃がフラグメントを飲み込む。それに重なるように漆黒の弾が降り注ぎ、着弾地点から黒い炎が吹き上がり、まるで罪人を焼く煉獄の炎のようにフラグメントを蹂躙していく。

「トライデント・・・スマッシャー！！」

「凍りつく夜想曲（フローズン・ノクターン）！！」

「クロスファイヤー―・・・シュート！！」

三条の砲撃、氷弾や魔力弾の雨が道を開くようにフラグメントを屠り、砕き、貫いていく。

「でやあああああ！！」

「「はあああああ！！」」

「っ・・・・・・」

突撃組の5人もそれぞれがサポートをしながら動き回る。攻撃の手を緩めることなく、次々に屠っていく。その様子はまるで嵐のようであった。

「っ！！」

「――――――――！！」

フラグメントの群れが次々に消滅していき、残るのはあの咆哮を上げたフラグメント一匹だった。カノンが斬りかかるが、フラグメントはそれを躱すと上段の蹴りをカノンに叩き込む。それはまるで一流の格闘家のような動きだった。カノンはアスフォデルスで弾くと後ろに跳び、双刃を構える。黒い電撃がアスフォデルスを覆い、×の形に集束する。

「――――――」

「――――――クロス・インパルス！！」

黒い電撃を纏う×字の衝撃波。地面を焦がしながらフラグメントに迫り、防御のために交差された腕に当たると爆発を起こす。爆煙で見えなくなったフラグメントにカノンは再び走り、一閃する。

「雷爪・・・一閃！！」

「――――――――！！」

煙で視界を塞がれていたフラグメントはなす術もなく切り裂かれ、何かを掴もうとするように腕を伸ばし――――――――消滅した。

「・・・・・・」

「終わった、ね」

黙って立ち尽くすカノンにフェイトが歩み寄り、声を掛ける。

「・・・・・・」

「結局、何も分からなかったね・・・」

俯いて呟くフェイトをカノンは見つめると、フェイトの頭に手を置き、ゆっくりと撫でる。

「え・・・？」

「・・・・・・分からない時は、分かるまで進めばいい。進んだその先には、必ず答えがあるから」

小さいが、柔らかい声で告げられた一言。思わずフェイトはカノンを見上げる。カノンが発するにはあまりにも前向きな言葉。少なくとも、フェイト達が知るカノンはそんなことは言いそうにない。

「・・・・・・えっと、ありがとう・・・？」

「・・・・・・ただの、受け売りだ」

礼を言うフェイトに返された声はまたぶっきらぼうなものに戻っていたが、その顔は何かを懐かしむような、痛みに耐えるような不思議な顔つきだった。と、そこになのはが声を掛ける。

「2人とも、もう戻ろう？報告もしないと」

「あ、うん。カノン、行こう？」

「・・・ああ」

振り返ると、既に皆はヘリに乗り込んでフェイト達を待っていた。
3人はすぐにヘリに乗り込む。こうして、逆に謎を残したまま初任務は終わりを告げた。

＊　＊　＊　＊　＊

ヘリが飛び去っていく。その様子を空中から見届ける影があった。
男が2人と女が1人、じっと去っていくヘリを見つめている。

「クッハハ！！イイねェ・・・。あれが機動六課・・・」

「随分と興奮してるわね。面白いものがあったの？」

哄笑を上げる男に女が尋ねる。だが、その女もまた面白がるような声であった。

「ハッ・・・いや？殺しがいのある生きのいい雌が揃ってて嬉しいだけだ。それに・・・」

「それに？」

「あの黒いのだ。あいつが1番イイ。アイツにはちょっとした縁があったことを思い出した」

すると、今まで黙っていたもう1人の男がピクリ、と指を動かす。

「オレが唯一殺し損ねた奴だ・・・。7年前だったか？貧弱な奴だったが、殺しがいはあった。隣にいた女は殺したが・・・」

「あら珍しい。そんなことがあったなんて」

「珍しくもねぇさ。アレがあるならな」

さらりと告げられた一言に女が驚く。

「まさか・・・」

「そうだ。持っていたのがどっちだったかは知らねェがな。おかげで逃がしちまったって訳さ」

「『追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）』・・・」

「そういう事だ。まぁ、あの貧弱がここまでになってんのなら・・・そそるだろう？」

ニヤリ、と口角を上げる男に女は溜息を吐く。

「はいはい。好きにしなさい」

「ああ。殺して殺して殺しつくしてやるァ・・・！ハハハハハハハハハハハ！！」

哄笑を上げると、男は空気に溶けるようにいなくなる。

「それにしても不思議ね。かろうじてとはいえ、まだ自我を保っているものがいたなんて」

「知るか」

「あら、冷たい。それにしても、いいの？貴方の故郷を滅ぼしたの、あの男よね？」

「ふん・・・。誰が殺したかなんて、もうどうでもいいな。シルヴィアを取り戻す為に、『追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）』を手に入れる・・・」

男は拳を握る。女はそれを面白がるように見つめると、からかう様に言葉を紡ぐ。

「そう？まぁ頑張りなさいな。もし貴方の思い通りにならなくても、それはそれよ？」

「ああ、わかってる。望みを叶えるためなら、何でもするさ・・・」

「ふ～ん・・・いい心がけね。期待してるわ」

そう言うと女は消えていった。残った男はヘリが去った方向を見つめ、呟く。

「全てが元に戻れば・・・そうすれば、お前も・・・また3人で過ごせるだろう?カノン・・・」

そう呟くと、男は去っていった。

追憶9～ファースト・コンタクト　後篇～（後書き）

いかがでしたか?何やら不穏な発言が・・・

これからどうなっていくのか・・・物語は大きく動きます。

次回もお楽しみに!それでは!

追憶１０～報告と考察とゴースト・パニック？～（前書き）

今回は少しだけ話が動きます。

皆さん、幽霊って信じます？

追憶１０～報告と考察とゴースト・パニック？～

六課に帰った後、隊長陣とティアナ、そしてカノンは部隊長室に集まっていた。

「皆、ご苦労様や。今回の任務では、分かったことはあまり無いって事になるんやけど・・・」

「うん。逆に謎が増えた結果になっちゃったね」

なのはがそう言うと皆がモニターを見る。そこには一斉にカノンに襲い掛かるフラグメントの映像が流れていた。

「皆が出払ってる間に、フラグメントについてユーノ君に頼んで調べてもらったんやけど・・・」

「何かあるの？」

言葉を濁すはやてにフェイトが問いかける。

「う～ん・・・。まぁ・・・なんというか・・・」

「はやて、隠さないで教えてくれないか？」

急かす刹那にはやては皆を見回すと、それぞれが頷く。カノンだけは頷かなかったが。

「ん、そやな。フラグメントなんやけど、やっぱりロストロギアが関わってるみたいや」

「ロストロギアとフラグメントに、どんな関係が・・・？」

首を傾げるティアナにはやては一度頷くと続ける。

「うん。まぁ正確な事は分かってないんやけど・・・過去にフラグメントが出現していた場所には、９０％ぐらいの確率である物があったんや」

「それは・・・？」

「『追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）』。どんな力を持ってるのか、どんな形かも分かってない、厄介なロストロギアや」

「え？歯車の形をしてるから『追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）』なんじゃないの？」

刹那の疑問にはやては溜息を吐く。

「そこなんよ。無限書庫にも名前が載ってるだけで、正確なデータは揃ってない。ただ、フラグメントとの関わりが少しだけ示されてる程度や」

「う～ん・・・推測できるとすれば、やっぱり時間・・・それも、過去・・・かな？」

「え？どうして？」

眉を顰めながらの刹那の推測になのはが尋ねる。

「追憶って、要するに思い出の事だから・・・かな。歯車ってことは、過去に時間移動できるとか？」

「不確定要素が多すぎるね。最後に出てきたのは・・・7年前？」

「そう、その場所は確か――――――」

「・・・・・オレの・・・故郷だ」

カノンの声に皆がカノンを見つめる。

「どういう事や?」

「言葉通り・・・オレの故郷は、フラグメントと、それを操る男に襲撃された」

「なっ・・・」

思わぬ一言に場の空気が凍る。カノンもまた、話しづらそうに続けた。

「皆死んだ。生き残ったのはオレと・・・あと1人だけだ」

「・・・そっか」

皆が沈み込む中、はやてだけがしっかりと頷いた。

「なぁ、カノン君」

「・・・・・・なんだ？」

「傷を抉るようで悪いけど、その時の事、教えてくれんか？」

はやての言葉にカノンは躊躇うと、ゆっくりと絞り出すように話し始めた。

「夜で・・・雪が降っていて吹雪を警戒していた。急に襲われて・・・何も分からないままに、皆殺されていった。オレは、フラグメントの影にいた男と戦って・・・負けた。重傷で・・・オレともう１人以外、皆、死んでた。爺さんも婆さんも子供も大人も関係なく・・・シルヴィアまで」

「シルヴィア？」

ポツリと呟かれた人の名前にフェイトが問うと、カノンはハッとすると急に震えだした。

「カノン！？」

「何でもない・・・目が覚めたら、奴はもういなかった。オレは・・・その男を追っていた」

「そうか・・・それが君の目的・・・？」

刹那が呟くとカノンは頷く。皆もある程度納得の表情を見せていたが、フェイトの顔は暗かった。

（やっぱり・・・そうなんだ）

フェイトは確信した。恐らく、シルヴィアというのがカノンが祈っていた相手なのだろう。その関係は十分に推し量れる。普段無気力なのは、失ったから。負けた、と言うからには守ろうとしたのだろう。それが出来なかったが故に、後悔し続けている。そうして今のカノンが出来たのだ。と、そこではやてがカノンに向けて言葉を放つ。

「こんなこと言うのも何やけど・・・機動六課に、力を貸してくれんか？」

はやてはじっとカノンを見る。他のメンバーも何も言わないが、考えていることは同じだ。少なくとも、フラグメントとの戦闘体験が多いカノンは貴重だ。

「分かった」

「・・・あっさりやな」

コクンと躊躇いなく頷いたカノンにはやては拍子抜けした様子を見せる。今まであれほど無気力な姿を見せていたのだから当然とも言えるが。

「こっちは、確かめたいことがあるだけだ」

「あの・・・女の子？」

気遣うようにカノンを見るフェイトにカノンは頷く。その事がある以上、カノンは六課を離れられない。カノンにとって、現在の目標はそれだけだ。男を追う――――――というのも確かにあるが、優先順位はそちらが遥かに上だ。

「私にはよく分からんのやけど・・・ホントにいたんか？」

「うん。しっかりこの目で見たから」

確信を持って答えるフェイトにはやては考え込む。

「う～ん・・・。フェイトちゃんがそう言うならそうなんやろうけど・・・。分かった。見たらカノン君に知らせればいいんやな？皆もそれでええな？」

「・・・・・・いいのか？」

はやての一言にカノンが目を見開く。それはそうだろう。はやてや皆は何も知らないのだ。そこまでする理由がない。

「いいも何も・・・君にとって大切なことだろう？」

「そうだよ。大事な事なら、協力は惜しまないよ？」

「そう・・・ですね。そういう事なら」

刹那となのはが頷く。ティアナも同様だ。

「私もだよ。私は一度見てるし、何か役に立つかも」

「・・・・・・・ありがとう」

カノンの礼に皆が笑顔で頷く。はやてが手を叩き、全員の注意を戻す。

「謎の少女Aについては、ここまでや。それから、カノン君が追ってた男やけど、心当たりが出てきてるんよ」

「・・・・・・・！」

「え！？」

カノンが一気に顔を険しくする。フェイトも驚きの声をあげた。

「それ、冗談じゃないでしょ？」

「当然や。この状況でいい加減な事は言えへんよ」

刹那の問いにはやてが頷く。その顔は険しく、その重要さを物語っていた。

「これも『追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）』と関係があるかもしれへん、よく聞いてな。・・・・・7年前、その消息を絶った犯罪者集団、『堕ちた聖典（カラブト・バイブル）』。そいつらがまた、活動を再開したって情報が入ってる」

「7年前・・・カノンの故郷の時とも一致してるね」

「うん。繋がりがあるって考えた方がいいね」

なのはとフェイトが頷きあう。

「関係がないと言い切るには共通点が多いね」

「そやろ?という訳で、そっちの捜査もやっていくから、よろしくな?」

「「「はい!!」」」

はやてにそれぞれが返事をする。

「じゃ、解散や。今日はゆっくりしててな?」

「ん、了解」

それぞれが部屋を出ていく。はやてはそれを見送ると溜息を吐いた。

「にしても、謎の女の子・・・か。どんな子やろ？」

そう呟くはやての後ろからチリン、と鈴の音がなる。

「ん？」

はやては振り向くがそこには何もいなかった。

「気のせいやな」

はやてはそう呟くと仕事に戻った。

＊　＊　＊　＊　＊

「ふぅ・・・」

与えられた部屋で、リゼットは休んでいた。そこに、ヴィヴィオを伴ったキャロが入ってくる。因みに、リゼットとキャロは同室である。

「リゼットさん！！」

「リゼットお姉ちゃん！！」

「あら、2人とも。今からお茶を飲もうと思ってたんだけど、いる？」

「いいんですか？」

「ええ。紅茶・・・ダージリンだけど」

「いただきます！」

元気よく答えるヴィヴィオに笑いながらリゼットは紅茶とクッキーを用意する。

「はい、お待たせ」

「いただきます！」

「いただきまーす！！」

クッキーを齧りながら紅茶を飲む。しばらくはまったりとした空気が流れていた。

「そういえば、スコラスティカには管制人格っていないんですか？」

「いるわよ?まぁ、恥ずかしがり屋さんだから滅多に出てこないけど・・・」

リゼットがスコラスティカを待機状態から本に展開する。

「スコラ、出てきてくれる?」

＜＜・・・うん＞＞

ホログラムのようにその姿が映し出される。大きな本を抱えた10歳くらいの少女がオドオドとキャロやヴィヴィオを窺っている。

「可愛い～!!」

＜＜・・・わたし、スコラスティカ＞＞

「キャロ・ル・ルシエです!」

「高町ヴィヴィオです!よろしくね!!」

元気よく挨拶するキャロとヴィヴィオにスコラスティカはコクンと頷く。

＜＜・・・・・よろしく＞＞

「ねぇスコラ、ベニトは？」

＜＜おにーちゃんは、まだねてる・・・＞＞

スコラスティカが困ったような顔で言うと、キャロとヴィヴィオは不思議そうな顔をする。

「お兄ちゃん？」

「ええ。スコラとベニト・・・ベネディクトゥスは双子なの」

不思議そうに尋ねるヴィヴィオにリゼットは複雑そうな顔でそう言う。

「双子・・・」

「管制人格は普通1人のはずですよね？」

ヴィヴィオがスコラスティカを見つめ、キャロがリゼットに尋ねるが、リゼットが口を開きかけた時、スコラスティカがキョロキョロと部屋を見回す。

「スコラ？どうしたの？」

＜＜なにか・・・ううん、だれかがいる＞＞

「「え！？」」

ヴィヴィオとキャロも周りを見回す。その時、チリン、と鈴の音が聞こえてきた。

「誰！？」

リゼットが鋭く声を上げると、再びチリンと鈴が鳴り、巫女服を着た少女が姿を現す。フェイトの前に現れたあの少女であった。

「貴女は・・・？」

「・・・・・・」

かろうじてリゼットは質問できた。だが、ヴィヴィオとキャロは未だ驚きを隠せないでいる。少女は祈るように手を組むと何か言葉を紡いでいたが、それが何かは聞こえなかった。なおも少女は言葉を紡ぎ続けるが、その身体が透け始める。完全に消えようとしたその時、僅かに声が届いた。

「・・・・・・を助けて！」

「「「えっ・・・・？」」」

チリン、と一際大きな音で鈴が鳴り、少女の姿は消えてしまった。残された3人は呆然と顔を見合わせるしかなかった。

「今のって・・・」

＜＜あのひと、かなしんでる＞＞

「え？」

顎に手を当て、状況を整理しようとするスコラスティカが悲しそうな顔で言う。

「どういう事？」

＜＜わかんない・・・。でも、かなしくて、なきたいのに、なけないの・・・＞＞

たどたどしく告げられる事にもリゼット達には正確には理解できない。ただ、スコラスティカが本当の事を言っているのだろうことは理解できた。

「とりあえず、報告しないと、ね」

「は、はい！」

慌ただしく、リゼット達は紅茶とクッキーを片付け始めた。

＊　＊　＊　＊　＊

「ん・・・よし」

アレンは机から顔を離し、伸びをする。その手には針金で作られた鳥が鎮座していた。所謂針金アートである。意外にも、アレンはこういった緻密な作業が趣味であった。机の上には同じような針金の家や花、どこぞの巨大ロボットが置かれている。

「ん～・・・いい出来、か？」

アレンは満足げに手の中の鳥を見る。翼を広げたその姿は今にも飛び立ちそうであった。

「よし・・・お前の名前はニケだ！」

最早意味が分からない。得意げに名前を付けると、花の隣に置く。因みに家はジェフ、花はロージィ、ロボットはニコラス＝アレクサンドロ＝タンドロン４世だったりする。

「うわ、もう飯の時間か・・・今日は何を食うかね？」

それぞれを満足げに眺め、時計を見たアレンは食堂へ行くために椅子から立ち上がる。ドアを開け、廊下に出たその目の前に、その少女はいた。

「・・・・・・はい？」

「・・・・・・を助けて」

呆けるアレンに少女はどこか焦ったように言葉を紡ぐ。鈴の音に遮られていた声がだんだんと聞こえるようになっていた。

「・・・・・・がまた・・・お願い・・・危険が・・・」

「え？おい、何を言って・・・？」

とぎれとぎれに紡がれる言葉を前にアレンは戸惑う。少女は更に何かを伝えようとする。

「・・・ノンに会わせて・・・の秘密・・・お願い・・・」

「あ・・・・」

少女の姿が消える。アレンは思わず手を伸ばしたが、掴むことはできない。鈴の音が大きくなる。

「・・・・・・!!」

再び何かを言おうとして、少女の姿は完全に消えてしまった。アレンは呆然としたまま立ち尽くしていた。

「今のって・・・」

アレンには何が何だかわからない。いきなり少女が目の前にいたと思ったら何かを言って急に消えたのだ。それだけで状況を理解するのは難しいだろう。

「・・・・・ユ、ユーレイ?」

そんな馬鹿な、と思いつつも否定できないアレンはその考えを振り払おうと首を振る。あまりに勢いよく振りすぎて首が痛くなったようだが、そんなことはどうでもいい。

「・・・嘘だろ〜!?」

顔を真っ青にしたアレンは、訳の分からぬままに食堂に向かって走り出した。

追憶１０～報告と考察とゴースト・パニック？～（後書き）

いかがでしたか？今回はいろいろ出しすぎてちょっとこれからに不安を抱きました。設定とか、もうできてるんですけどなんか色々めんどくさいです。

次回は幽霊の正体が明らかに！それでは！

追憶１１～謎の少女～（前書き）

ふと思いました。今までシリアスばっか・・・。この辺でほんわかするような話、入れたいなぁ・・・

今回は幽霊こと謎の巫女服少女のお話。

それでは、どうぞ！

追憶11～謎の少女～

「教官!!教官教官教官!!」

「・・・アレン?そんなに慌ててどうしたの?」

刹那を呼びながら走ってきたアレンに刹那が訝しげな目を向ける。
因みに刹那の食事は和食である。皆が同じような視線を向ける中、
アレンが捲し立てる。

「どうしたじゃないっすよ!!出たんですよ!!」

「何が?」

要領を得ないアレンの言葉に皆も不思議そうな顔をする。

「ユーレイが!!」

「「「「「「・・・・・・・」」」」」」

「・・・アレン、幽霊が出るには早すぎ。丑三つ時っていって・・・

」

「刹那君、それも違うと思うよ・・・」

妙な説明をしようとした刹那をなのはが止める。皆も呆れているが、それも当たり前だろう。ミッドでの魔法はいわば科学の延長線上にあり、オカルトやホラーとは全く違うのだ。その分、幽霊や精霊などというものは信じられていなかったりする。

「でも、見たんすよ！目の前に！女の子が！！」

「えっ！？」

その言葉に一番早く反応したのは、フェイトやカノンではなくリゼットだった。リゼットはヴィヴィオやキャロと顔を見合わせると、皆を見回しながら言う。

「えっと・・・それなら私も見ました。１４、５歳くらいの子で、巫女服を着た・・・で、鈴の音がしてたんです」

「それ、本当なの？」

ティアナが未だ疑わしそうにリゼットとアレンを見比べる。隣で食べていたスバルも同じような反応だ。

「ええ。その時はキャロとヴィヴィオも一緒だったし、間違いないわ」

「あれ？それって・・・」

ギンガがフェイトとカノンの方を見る。フェイトは驚きを隠さずにいるが、カノンは表情が硬く、どこか期待と恐れをない交ぜにしたような複雑な顔をしている。

「って、ヴィヴィオも見たの？」

「うん。えっと・・・助けてって言ってた」

「助けて？」

刹那となのはが顔を見合わせる。幽霊も信じられないが、言葉を発したというのなら尚更だ。

「うん。よく聞こえなかったけど、そこだけははっきり」

「そーそー！！俺ん時も同じような事言ってた！あ、でも・・・」

「まだ何かあるんですか？」

首を傾げるアレンにエリオが尋ねる。キャロが頷いていたからか一応信用しているようだが、まだ疑いを捨てきれていない様子である。

「えっとな、なんか不思議な事を言ってたんだよ」

「なんだ？」

と、それまで一言も話すことのなかったカノンが鋭く切り込む。その様子はどこか焦っていて、鬼気迫るものがあった。

「うお！落ち着けって！えっと、誰かに会わせてだとか、危険がどうとか秘密がどうとか、途切れ途切れでよくわかんねぇ事言ってた」

「・・・・・・っ！！」

「あ、カノン！！」

アレンの言葉を聞くと、カノンは食べかけの食事もそのままでとび出していく。フェイトもそれを追っていき、皆もそれに続く。

「カノン、待って！！」

「な、何事や？」

カノンを追うフェイト達を見て歩いてきたはやてが目を白黒させる。はやての後ろにはシグナムらヴォルケンリッターの姿もあり、皆それぞれ怪訝な表情を浮かべている。

「何があったんだよ？」

「実は・・・」

怪訝そうなヴィータにフェイトが事情を説明する。

「まったく、何を騒いでるかと思えば・・・」

「でも、鈴の音なら私も聴いたで？まぁ、その時は気のせいかと思ったんやけどな」

シグナムが呆れの声を上げるが、はやては考え込むように言う。とはいえ、目撃情報に比べれば些か劣る情報であった。そんな事をしている間に、カノンはどんどん先に進んでいく。

「あ、追わなきゃ！！」

「あ、頑張ってな・・・？」

「はやてちゃんはいかないの？」

ひらひらと手を振るはやてになのはが問いかけるが、その瞬間にはやてはげっそりとした顔を向ける。

「・・・・・書類仕事に追われてた私に更なる苦難を負えって言うんか？」

「「「「ご、ご苦労様です・・・」」」」

ジト目をむけるはやてに皆が苦笑し、頭を下げる。はやては重い

溜息を吐くと、ふらふらとした足取りをシグナムとシャマルに支えられ、食堂の方に消えていった。支えられているというより、引きずられているように見えたのは気のせいだと思いたい。とにかく、カノンの姿が完全に見えなくなってしまったため、フェイト達はカノンを探し回らなければならなくなった。

「カノン！」

「・・・・・・」

ようやく見つけたのは、外、それも訓練場だった。チリン、とカノンの手首に巻かれたミサンガに付く鈴が風に揺られ、音を立てる。

チリン・・・チリン・・・チリン・・・チリン・・・

鈴が鳴る。呼応するように、遠くで、近くで・・・まるで寄せては返す波のように響く鈴の音。だんだんと大きくなるその音は、ついにうるさいと感じるまでに大きくなり――――――弾けた。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「「「「・・・・・・」」」」

鈴の音が止んだ後には、淡い光を放ち、つま先で立つように浮かぶ少女の姿があった。皆が言葉もなく見つめる中、カノンが口を開く。

「・・・・・・シル、ヴィア・・・？」

「・・・・・・」

呆然と呟くカノンを少女――――――シルヴィアは見つめ、頷く。ふらふらと足を踏み出すカノンを、シルヴィアは受け入れるように腕を差し出した。

「・・・・・・カノン」

ようやく、シルヴィアの声が届いた。鈴の鳴るような、美しいソプラノの声。

「シルヴィア・・・オレは・・・」

「ごめんね、カノン・・・。此処にいられるのは、少しだけなの・・・だから、お話できるのも少しだけ・・・」

申し訳なさそうに謝るシルヴィアにカノンは首を振る。

「そんなのはいい・・・オレは・・・謝らなくちゃ・・・」

「カノン・・・」

たどたどしく言葉を紡ぐカノンをフェイトが痛ましげに見る。カノンの顔からは喜びよりも、痛みや悲しみの方が多く見て取れたからだ。

「・・・変わってないね、カノンは。安心した。あの頃と同じ、優しいまま」

「変わったよ。もう、あの頃のオレじゃない。優しいだけの、甘いままのオレは、もういない」

柔らかく微笑むシルヴィアにカノンは顔を歪めてその言葉を否定する。

「そんな事ない。ずっと見てたから。カノンがずっと私の事を想ってくれてたの、ずっと感じてた」

「・・・ごめん・・・守れなかった・・・アイツから・・・君を守れなかった・・・！」

変わらずに微笑むシルヴィアを前に、カノンの中で抑えつけていたものが決壊する。絞り出すような声を出すカノンにシルヴィアが近づき、その頬に触れる。

「謝るのは・・・私。約束、破っちゃった。ずっと一緒にいようって、約束してくれたのに。好きだって、愛してるって言ってくれたのに、最期まで一緒にいられなかった。それだけじゃない。今も、カノンを苦しめてる」

「そんな事はいいんだ・・・！シルヴィアは、ずっと、居てくれてたんじゃないか！！オレは・・・僕は何もできてない！中途半端なまま、ただ過ごしてただけ・・・」

「あはは、僕って言った。前はそう呼んでたね。・・・ね、カノン」

シルヴィアの柔らかな微笑みは変わらない。だが、その声にスッと真剣な響きが混じる。

「私は、生まれた時から特別だった。特別な生まれ、特別な役割・・・皆、私を敬ったけど・・・真っ直ぐに向かってきてくれたのは、カノン1人だけだった。カノンは皆から敬遠されていたけど・・・それでも自由で、笑顔が眩しかった。そんなカノンが好きなの」

「・・・・・・」

歌うように想いを語るシルヴィアの姿に、フェイトの胸に一瞬鋭い痛みが奔る。突然自身に起きた異常の理由が見つからず、フェイトは混乱するが、その事に構わず話は続く。

「私、カノンがどんな思いで生きてきたか知ってる。でも、それでだんだんカノンがすり減っていっちゃうのは嫌だよ。私の事、忘れてほしくはないけど、でも、自由に生きてほしい」

「できる訳ないだろう・・・！何もできなかったのに！何もしてやれなかったのに、僕だけがのうのうと幸福を享受するなんてこと！」

カノンの根底にあるのはその思い。無力感と罪悪感がカノンを今も縛りつけている。

「何も、なんてことは無いよ。だって、あんなに傷ついてまで、必死に私を守ってくれた。あんなに楽しい日々をくれた。それだけで

いい。カノン・・・お願い。もう、自分を赦してあげて？」

「シルヴィア・・・僕は・・・！」

尚も反論しようとするカノンの口を、シルヴィアは自身の唇で塞いだ。

「んっ！？」

「っ！？」

その光景にまたもフェイトの胸に痛みが奔る。なぜそうなのかは分かっていない。だが、フェイトの中の何かが悲鳴をあげていた。

「もういいの。カノン・・・もし、私を生き返らせる事が出来たとしても、カノンはそれを望まないでしょ？」

「それは・・・」

カノンが俯く。カノン自身、それを望んでいない事は確かだ。１人で旅をしていても、それだけは望まなかった。シルヴィアはそれを理解していて発言したのだろう。

「確かに・・・オレは、そんな事望まない。だって、シルヴィアが殺された時をこの目で見ている。もし生き返ったとしても、その事実がある限り、オレはその事実に耐えられない。そして、今度はシルヴィアを自分で殺してしまうだろう」

「そうだね。過去は変えられない・・・変えちゃいけないの。変えていいのは現在と、それに連なる未来だけ。だから・・・ね？」

「・・・・・でも・・・オレは・・・僕は・・・！」

カノンも頭では理解している。だが、感情が追いつかないのだ。シルヴィアへの想いや、これまで抱いてきた憎しみと虚無感の間で板挟みになっているのだ。煮え切らない表情のカノンをシルヴィアは真っ直ぐに見つめ、ゆっくりと口を開く。

「カノン。私は、いつもあなたの傍にいる」

「・・・え？」

「あなたの中に。カノンの心と身体に。私はあなたの中で生きているの。あの時からずっとそう。だから、これからも一緒だよ。だから、前を向いて。カノンが進めば、私も進むんだよ」

シルヴィアはカノンを抱きしめる。

「それは、新しい約束。カノンの中で私は生きるの。一緒に歩いて、色んなものを見るんだよ」

「あ・・・」

耳元で囁くように紡がれる声に、カノンの心が解けていく。

「ね？」

「・・・・・・」

カノンはゆっくりと目を閉じる。進めるだろうか。恐らく、今までの思いは捨てられないだろう。きっとシルヴィアはそんな事を言っているのではない。

「オレは・・・あの男を探す」

「カノン？」

「復讐とか、そんなことはもうどうでもいいんだ。今のままじゃ、多分進めない。だから、けじめだけはつけたいんだ。あの時からずっと持ってた憎しみとか、そのために生きてきた自分とか。それすら諦めた弱いオレに決着をつけたい。だから、それまでは――――」

それまでは、ずっと傍に。カノンはそんな言葉を飲み込む。きっとシルヴィアは理解してくれているだろうから。シルヴィアを愛しているし、その想いがこれから変わったとしてもその事実だけは大事にする。まだまだ自分を赦せることは無いし、これからも分からない。だが、それでも進めればいいとカノンは思う。

「・・・・・・・」

「・・・・・・うん。それでいいんだよ」

そんな思いが伝わったのだろう、シルヴィアは満足げに微笑む。

「もう、時間かな」

「・・・そうか」

「またね」

「ああ」

短い挨拶。たったそれだけで、シルヴィアの身体は透け始める。
チリン、と鈴が鳴り、その姿は星空に消えていった。

「・・・・・・・」

「「「「「・・・・・・・」」」」」

「・・・・・・カノン」

皆が黙り込む中、フェイトはカノンに声を掛ける。その心中は複雑だった。カノンの恋人、シルヴィア。死によって引き裂かれてなお、愛し見守ってきた女の子。鈍い痛みがフェイトを苛む。

（なんか、変）

フェイトとシルヴィアでは、触れ合ってきた時間が違う。フェイトに出来ない事がシルヴィアにできる。そこまで考えて、フェイト

はハッと我に返り、首を振る。これではまるで、嫉妬しているようだ。

「フェイトちゃん？」

「何でもない。戻ろう？」

なのはの声に笑顔を返すと、フェイトは皆に呼びかける。明日も訓練はある。今は、しっかり休まなければ。

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

それぞれが部屋に戻る。フェイトがカノンに目を向けると、カノンはどこか安心したような顔で部屋に戻ろうとしている所だった。それにまた痛みが奔るが、それを堪えて笑顔を作る。

「カノン、おやすみ」

「ああ。・・・おやすみ」

カノンが部屋に消える。フェイトは溜息を吐くと自身も部屋に戻る。とにかく今は眠りたかった。

「はぁ・・・」

「どうしたの？」

ベットに倒れこむように横になり、溜息を吐いたフェイトに声が掛けられる。驚いて慌てて立ち上がって振り向くと、そこには先程消えたはずのシルヴィアの姿があった。

「え？ええっ？」

「・・・ごめんなさい。貴女にだけ、伝えたいことがあったから」

申し訳なさそうな表情で告げられた言葉にフェイトも表情を改める。

「どういう事？私だけって・・・？」

「カノンに1番近いのはあなただから。お願い、カノンを助けて！」

「えっ・・・？」

フェイトには訳が分からない。シルヴィアはカノンと一緒にいると言った。カノンを変えるための嘘という可能性もあるが、そんな様子ではない。

「えっと・・・どういう事？」

「カノンには秘密があるの。カノン自身も認識できない秘密。私の所為で、カノンは・・・」

時間がないのだろう、シルヴィアはひどく慌てた様子でフェイトに迫る。

「私の役割は？時の巫女？。追憶の歯車を守る鍵。でも・・・！」

「待って！？時の巫女？って・・・追憶の歯車って言った！？」

シルヴィアから発せられた予想外の単語にフェイトは思わず大声を出してしまった。

「うん。私の役割は、追憶の歯車と呼ばれるものを守る事。けど、それは・・・」

「あれ？カノンの故郷は・・・」

「うん、何処から嗅ぎ付けたのか、それを狙った人達に襲撃を受けた。私はその時、追憶の歯車をある場所に隠したの」

シルヴィアの真剣な声と表情に、フェイトはどこか嫌な予感を隠せなかった。

「その場所は・・・？」

「その場所は・・・カノンの中。カノンの身体に、封印したの」

その言葉は、静まり返った部屋で大きく響いた。

追憶１１～謎の少女～（後書き）

いかがでしたか？この話からカノンは変わる・・・のか？変わるといいですね。

っていうかシルヴィアさん何爆弾発言しちゃってるんですか？自重・・・無理ですかそうですか。

次回もシリアス・・・あぁ、我が安息の日は何処？

追憶１２～シルヴィア～（前書き）

今回はカノンに隠された秘密に触れます。ついでに追憶の歯車を追う人達にも動きが・・・？

それでは、どうぞ！

追憶12～シルヴィア～

「どういう事・・・？」

フェイトが最初に感じたのは、怒りだった。カノンはシルヴィアをとても大事に想っていた。あの祈りや、先程シルヴィアと向き合っていた時からもそれは明らかだ。だが、シルヴィアはそんなカノンに何かを封印したというのだ。

「カノンの身体にって・・・どういう事！？」

「それを、今から説明します」

声を荒げるフェイトと対照に、シルヴィアは冷静そのものだった。先程の少女らしい一面は微塵も見えない。

「私達の世界・・・というより、私とカノンが住んでいた集落には、ある伝説がありました」

「伝説・・・？」

「はい。過去を改竄し、意のままに変える宝玉、追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）。それ

は幾つもの欠片に分かれ、ただ1つを除いてその全てが完全なものと遜色ない力を発揮するものだと」

「そんな・・・いくらなんでも危険すぎるじゃない・・・！」

過去を意のままに変えられるというのなら、悪用すればとんでもない事になるのは明白だ。それが欠片となっても強大な力を持つのなら、どれだけの数の欠片が今も悪用されているか分かったものではない。

「私達の集落には、その欠片――――――それも、追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の中心とも言える欠片が納められていました。私は、それを守る役割を持っていたのです」

「・・・・・・」

「私達の集落が襲撃された時、私は欠片が納められた小屋にいて・・・そこを襲われたんです。カノンが駆けつけてくれましたが、後衛型だったカノンや私は、抵抗しましたが・・・」

シルヴィアが俯く。無力に顔を歪め、肩を震わせるその姿は、とても小さく見えた。と、そこでフェイトは違和感に気付く。

「待って！カノンが後衛型！？」

「はい。今でこそ双刃を使っていますが、嘗ては違うデバイスを使っていました。あれを使い始めたのは、私が死んでからです」

フェイトには俄かには信じられない。シグナムを圧倒するほどの力を持つカノンが後衛型など、どうして想像できるだろう？

「話が逸れました。・・・・・その時に、カノンは私に当たる筈だった攻撃を受け、大怪我を負いました。そして、私も致命傷を受けました」

「まさか・・・」

「はい。残された最後の時間で、私は追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）に封印処理を施しました。でも、そのままでは奪われてしまいます。だから・・・」

「だから、カノンに隠した・・・」

フェイトからすれば複雑だ。どうしようもない状況で、最善の措置を取った。それはフェイトにも分かる。だが、どうしても納得できない所はあるのだ。

「けど、それは不完全だった。今、その封印は解けかけているんです。完全に解けちゃったら、今度はまたカノンが狙われちゃう！だから・・・！」

「・・・分かった。守るよ」

「えっ？」

けれど、フェイトにはシルヴィアを責める権利はない。フェイトはその場にいなかったのだから、責めるのは筋違いなのだ。だからせめて、今自分にできる事をしてあげたいと思う。似た者同士の、優しすぎる青年と少女の為に。

「私がカノンを守るよ。危険だってこともそうだけど、私がカノンを放っておけないから」

「・・・・・そっか」

シルヴィアが意味深に笑う。彼女は気づいているのだ。フェイトに芽生え始めている、フェイト自身も気づいていない想いに。一片の寂しさを感じつつも、これでいいとシルヴィアは笑う。

「この事は、カノンには話さないで。黙っていてほしいの」

「え？どうして？」

意外な一言にフェイトは驚く。なぜ黙っている必要があるのか。知らせておいた方が、カノンの為になるような気がするのだが。

「カノンは、追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の事を知らないから。言っても混乱させるだけ」

「・・・ん、分かった。カノンには言わないよ」

いまいち納得できないが、シルヴィアの言い分も尤もだと感じたフェイトはそのまま頷く。シルヴィアは安心したように笑うと、その姿が透け始める。

「フェイトさん・・・だよね。カノンの事、よろしくお願いします。あなたなら・・・カノンを任せられる」

「え？」

「邪魔してごめんなさい。それじゃあ、また、会いましょう？」

最後に年相応の笑みを浮かべ、シルヴィアが消える。フェイトは呆然とそれを見送った。任せる・・・とは、どういう意味だろう？

「・・・やめよ」

何故だか恥ずかしくなり、フェイトは思考を止めた。ベットに横になると、すぐに睡魔が襲ってくる。眠気に逆らわず瞼を閉じると、フェイトはあっという間に深い眠りへと落ちていった。

＊　＊　＊　＊　＊

―とある管理世界―

「あ、あぁ、がぁぁぁぁ！！」

「フフフ・・・人が堕ちる瞬間というのは、いつみても美しいものですね」

胸を抑え、絶望に染まった顔で苦しむ男性に1人の男が幽玄に微笑みながら歩み寄る。手を差し伸べる事もなく、愛玩動物を見るような目で男性を観察し、側に落ちていた翡翠色の水晶を拾い上げた。そこに、別の男が姿を現す。

「随分と悪趣味じゃねぇか、クラウン」

「ああ、これはこれは・・・ハラール。悪趣味とは失礼ですね。私はいつでも美しい物のために行動しているというのに」

それは、六課の戦闘を見ていた者の1人、7年前にカノンとシルヴィアを襲った男だった。ハラールは苦しみ続ける男性を一瞥することもなく踏みつける。

「それがこれか？何を望んだか知らねェが、バカな奴だ。過去を変えれば、何もかもうまくいく・・・そんな幻想に踊らされるとはなァ」

「おや、珍しい。貴方が人間に興味を持つなど、これまで一度としてなかったはずですが。・・・いえ、？彼？だけは別ですか？」

「龍は動物風情に興味を持たねぇよ。ただ食い殺し、蹂躙するだけだ。奴もオレの獲物、餌の一匹。ただ珍しく腹が膨れるような奴だってことさ」

そう言いながらハラールは更に脚に力を入れる。踏みつけられた男性からボキリと骨が折れる音がし、男性は動かなくなった。すると、その身体を蛹のようなものが覆う。

「始まりましたか」

「・・・フン、蛹化・・・フラグメントへの変態か」

蛹はあっという間に男性を覆い、その姿を異形へと変える。変化を見届けると、クラウンは興味を失くしたように立ち去ろうとする。彼にとって、美しいのは人が苦しむ姿であり、人や異形のモノは汚物と変わらない。

「では、私はこれで。追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車の欠片をあの方に届けるとしましょう」

「ハッ・・・」

ハラールが嘲るように笑うと、クラウンの手から欠片が消える。おや、という顔でクラウンが振り向くと、欠片はハラールの手の中にあった。

「困りましたね。私がそれを届けなければ、お叱りを受けてしまいます」

「お前がどうなろうが興味ねェよ。・・・にしても、そうか、そういう事だったか・・・」

「どうかしましたか？」

急に笑い始めたハラールにクラウンは声を掛ける。だがそれは心配ではなく、確認のような響きだった。

「小娘、やってくれる・・・せっかく殺したガキを生き返らせるた

めに、過去を書き換えやがったのか・・・これは傑作だ！ただの餌風情でも偶には知恵が働くってか！？ハハハハハハ！」」

「・・・？もしや、7年前の事ですか？貴方が仕留めそこなったとかいう・・・」

「ああ・・・いいじゃねぇか！それでこそ殺しがいがあるってモンだ！」

哄笑を上げるハラールは一度笑いを止めると、犬歯を剥き出しにし、その狂気を解き放つ。

「帰んぞ。もう此処に用はねェ」

「やれやれ・・・本当に貴方は気紛れだ。それも貴方の龍の因子なのでしょうかね？」

あっさりと背を向け、立ち去るハラールにクラウンは肩を竦めてぼやく。とはいえ、どうせハラールを抑えていられるのは1人を除いていないのだから、ぼやくだけ無駄なのだ。いや、その1人も正直怪しい所だろう。『堕ちた聖典（カラブト・バイブル）』の中でもハラールは異端だ。ハラールは誰にも忠誠など尽くさない。というより、人間のルールが意味を為さないのだ。勿論、それを言ったらクラウンや他のメンバーとて犯罪者なのだから同じ穴のムジナなのだが。

「ふむ・・・お叱りを受けたくはないですね。私も早く戻らねば・・・」

そう呟くと、クラウンもまた姿を消した。後に残されたのは、蹲るフラグメント一匹。それはゆっくりと立ち上がり、目覚めの咆哮を上げた。

＊　＊　＊　＊　＊

薄暗い空間の中で、シルヴィアは紅い水晶の中にいた。カノンの中――――――というより、カノンの中にある欠片に囚われている、といった表現が適切だろう。

「・・・・・ごめんなさい」

誰にともなく、彼女は謝っていた。それは、自らの身勝手に巻き込んだカノンか、それともフェイトに対してだったのか、それはシルヴィア自身にも分かっていなかった。

「・・・・・・」

フェイトにした説明のほとんどは本当の事だった。たった一部、しかし大きな嘘があった。シルヴィアは追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を封印出来ていない。そして、シルヴィアは致命傷を負ってなどいなかった。むしろ、そんな状況だったのはカノンの方なのだ。いや、本当はもっと悪い状況、最悪の一言だった。あの時、カノンはフラグメントと共にいた男――――――ハラールに腹を食いちぎられ、胸を吹き飛ばされていたのだから。

「・・・・・ごめんなさい」

だからあの時、シルヴィアは自身にとって最も許されない事をした。追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を使ったのだ。それにより、ほんの数分前の過去は

書き換えられた。追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の持つ力とは、簡単に言えば過去を意のままに書き換え、改竄する力。それが数秒前であろうが数十年、数百年前であろうが願えば書き換えられる、人の努力、人の紡いできた歴史を一瞬で否定してしまう力だ。

「・・・・・・」

結果だけ言えば、それはいい方向に転がったと言えた。結局、カノンは大怪我とはいえ生き永らえたし、ハラールを強制的に転移させる事も出来た。自身が死んだことについては、シルヴィアは後悔してはいなかった。カノンの側にいられないのは確かに未練と言えなくもないが、それでも追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を使った代償としては安いものだ。此処にいるシルヴィアは、いわば残留思念といった所だ。自身にある力でカノンに追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を隠し、思念でその力を発動しないように抑える。それが、シルヴィアの選択だった。

「・・・・・・」

だが、状況が変わった。7年という時間が経ち、抑えていた力は弱くなった。先日のシグナムとの模擬戦でそれは起こった。カノンの無意識の願いに、力が反応したのだ。それ以前にも兆候はあったとはいえ、隠していた欠片は最早存在を隠しきれず、フラグメントは再び動き出した。カノンの中にある欠片は言わば追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の核。フラグメントが今まで積極的に動かなかったのは、核の存在を見つけられなかったからだ。それまでは、他の欠片をただ行き当たりばったりで探していたに過ぎない。堕ちた聖典（カラブト・バイブル）も動き出した今、危険

度は今までの比ではない。

「なんて――――――」

なんて、無様。過去は変えられないと、変えてはいけないと偉そうに言っておきながら、自分はそれをした。しかも、それによって生み出された結果に責任を持つことすらできず、ただカノンに押し付け続けていた。その事が、シルヴィアの後悔だった。けれど、どれだけ後悔しようと、最早彼女には何もできないのだ。

「どうか、お願い――――――」

愛する人と支えてくれる仲間に福音を。シルヴィアには、もう残された力も時間もあと僅かだ。追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を抑えている紅い水晶の中で、彼女は祈る。

「無事で――――――」

何もできない無力感に苛まれ、彼女は涙を流す。シルヴィアを閉じ込める紅き水晶は、薄暗い闇の中に消えていった。

追憶12～シルヴィア～（後書き）

いかがでしたか？シルヴィアだけが知る真実・・・7年前の出来事、一番最初の話との違い、気づいていただけたでしょうか？ちなみにミスではありませんよ。設定上これも重要なんです。

次回はシリアスから離れ、ほのぼのした回にする予定・・・っていうかします。

ではまた次回に！それでは！

追憶１３～一時の休息～（前書き）

今回はシリアスから離れ、ほのぼのとした回です。・・・・・・
そう、なっているよな？

ずっとほのぼのが続くといいんですけど・・・シナリオ上そう言う訳にはいかなかったり・・・でもしばらくはほのぼのかもです。

それでは、どうぞ！

追憶13～一時の休息～

六課の初任務が終わり、幽霊騒動から2週間。あれからは特にこれといった問題や出動もなく、ある程度は平和といえた。だが、それはミッド全体の話であって、機動六課の面々にとっては必ずしもそうは言えないのであった。

「ぐぁ・・・」

「あうぅ～・・・」

オフィスにアレンとスバルの呻き声が広がる。デスクワークという、社会人の必須スキルがこの2人においては他のメンバーよりも劣っていたのであった。

「アンタらねぇ・・・もう少しシャキッとしなさい！」

「仕方ないわよ、ティアナ。この2人のことは放っておいて、私達だけでお茶にしましょう？」

ティアナが溜息を吐きながらだらけている2人を注意する。隣で作業するリゼットがフォローするが、あまり気遣っている風ではない。

「いいの？いつも貰ってばっかりだけど・・・」

「あら、いいのよ？どうしても気になるなら、あとで買い物に付き合ってくれない？」

「ええ、いいわよ」

なんだかんだ言ってリゼットとティアナは仲がいい。休憩時にはよく2人で紅茶を飲んでいるのが恒例となりつつある。

「あの、私も行っていいですか？」

「ええ、いいわよキャロ。ティアナも構わないでしょう？」

「もちろん。じゃ、今度の休みに行きましょ？」

キャロも輪に加わり、楽しげに話す3人をデスクワークの遅い2人組がジト目で眺める。

「あぅ・・・少しは手伝ってくれていいのに・・・」

「だよなぁ・・・エリオ！お前はこっち側だろう！？」

ぶつくさと愚痴を言いながら作業を進めるアレンが急にエリオに話を振る。エリオは目を白黒させるが、苦笑を浮かべると首を振る。

「いえ・・・すいません。もう少しで終わります」

「「この裏切り者！！」」

「ええっ！？」

ビシィッと音を立てるような勢いでエリオに指を向けるアレンとスバル。そんな2人の頭をギンガが小突いた。

「2人とも、いい加減にしなさい。大体、スバルは訓練校の時は主席だったでしょ？」

「なにぃぃっ！？裏切り者が此処にもっ！？」

「うう～、そうだけど～・・・」

アレン、撃沈。へなへなと崩れ落ちるアレンを余所に、スバルは頭を掻きながら苦笑する。

「やっぱり苦手なものは苦手だよ～・・・」

「しょうがないわね・・・。ほら、手伝ってあげるから、貸して？」

「わは♪ありがと、ギン姉！！」

ああ美しきかな姉妹愛。実際はただ甘やかしているだけなのだが、まったくそう見えていない。

「うぐっ・・・我遭難セリ。至急救護ヲ求ム・・・！」

「はい、ふざけてないでさっさと進める。ヴィヴィオも今学校で勉強中なんだからさ」

呻くアレンには刹那の無慈悲な一言が突き刺さる。さりげなく親馬鹿を発動しているが、気にしてはいけない。

「くっそー！さっさと終わらせてやるぁぁ！！待ってろジョン！！」

「にゃはは、頑張ってね？」

どうやら新しい針金アートに取り掛かっているらしいアレンは先程までとは比較にならないスピードで作業を進めていく。そんなアレンに苦笑しつつもなのははエールを送る。

「・・・・・・」

そんな中、フェイトだけは1人黙したままぼんやりとモニターを見続けていた。すでに作業は終わっているようだが、周りの様子にも気づいていない。

「フェイトちゃん？」

「・・・・・・」

その様子に気づいたなのはが声を掛けるが、フェイトは反応しない。

「フェイト？」

「・・・・・・！」

と、そこにカノンが入ってくる。カノンは民間協力者の扱いのため、デスクワーク自体は免除されている。その手にはお盆があり、コーヒーや紅茶といった飲み物が人数分置かれている。どうやら届けに来たらしい。因みにカノンが淹れた訳ではなく、食堂で準備されたものを運んでいるに過ぎない。

「どうかしたのか？」

「え、あ、ううん！何でもないよ！えっと、それ、貰ってもいいの？」

「・・・・・・？ああ」

若干挙動不審なフェイトに首を傾げつつ、カノンは紅茶を渡す。

「・・・・・・」

飲み物を渡す為に動き回るカノンをフェイトはぼんやりと眺める。あの幽霊騒動から、カノンは変わったと思う。目に見える変化はあ

まりないが、少なくとも人当たりは良くなった。積極的な行動はしていないが、今までの無気力な様子も見せなくなっていた。

「・・・・・・」

そのこと自体は嬉しいと素直に思う。だが、それが自分の手でないことが少し悔しいのだ。カノンは今でもシルヴィアを想い続けている。きっと、完全に吹っ切れた訳ではないはずだ。ただ、シルヴィアに言った言葉に嘘を吐きたくないのだろう。それだけが、カノンの支えになっている。その事もあるが、やはり一番の悩みはシルヴィアが自分に明かした秘密だ。あのまま、カノンどころかはやてやなのはにも話せていない。重要性を考えれば話すべきなのだが、カノンに知らせない、という約束が引っかかるのと、整理しきれていないのとで切り出すことができないでいた。

「・・・・・・」

「フェイト？」

配り終えたのだろう、カノンが声を掛けてくる。見上げると、カノンは無表情と沈んだ顔の中間のような奇妙な顔をしていた。

「・・・・・・カノン？」

「・・・・・今のフェイトの顔」

きょとんと尋ねるフェイトにカノンは無表情に戻ると、何でもない事のように言う。

「え・・・そんな顔してた？」

「ああ。・・・実に面白い顔だ。笑えるぞ」

「あうっ」

ニヤリ、とからかうような笑みを浮かべるカノンにフェイトは呻く。自分が悩んでいる原因が何を言うのだろう。反論しなければ気が済まなかった。

「カ、カノンこそ変な顔だったよ！私はそんな顔しないもん」

「ほう？自分がしてた顔が変顔だと自覚していたか。興味深いな・・・そこまで笑いに徹する理由はなんだ？」

「またからかう！！そんな真面目な顔で何言ってるのかな！？私は・

・・」

流石に我慢の限界が来たのか、フェイトはらしくもなく声を荒げる。カノンはそれにも驚いた様子を見せず、ただ笑って言い放った。

「何に悩んでるかは知らない。が、大抵の悩みは時間が解決するものだ。気にしたところでどうにもならないぞ？」

「・・・・・誰の所為だと思ってるの・・・」

思わず言ってしまった一言にその場が凍る。ハッと我に返るも、遅い。皆の視線はフェイトに向いていた。

「フェイト・・・ちゃん？」

「フェイトさん・・・もしかして」

なのはが呆然とするのに対し、面白がるような声を出したのはリゼットだった。

「あの、違うんだよ、私は、その・・・！」

「フェイト・・・頑張って」

明後日の方に向いた誤解をフェイトは解こうとするが、その慌てぶりが逆に拍車をかけ、刹那には暖かい笑顔でエールを送られてしまった。皆もニヤニヤと慌てるフェイトを眺め、まともに話を聞いていない。

「騒ぐのはいいが・・・もう昼時だぞ？」

「「「「あ・・・」」」」

カノンの呆れたような声に皆が我に返る。皆どこか物足りげな表情ながらも空腹には逆らえないのか、すぐに食堂に向かい始める。ほっと息を吐いたフェイトをカノンが促す。

「フェイトも、早く行くぞ」

「あ、う、うん」

先程の事もあり、思わずぎこちなくなってしまったフェイトだが、カノンは特に気にした様子もなく歩きはじめる。それにまたフェイトはムッとするが、カノン本人に言ってもどうしようもない。それ

に何よりフェイト自身が原因を把握していないのだ。

（なんで、こんなにモヤモヤするんだろう・・・）

前を歩くカノンの背中を眺めながら思考に耽る。フェイトに思い当る原因とすれば、先日のシルヴィア関連の出来事しかない。その時にもモヤモヤとしたものはあったが、原因はさっぱり分からないままだった。

（・・・・・嫉妬、なのかなぁ・・・）

羨ましい、とは思っている。フェイトの知らないカノンをシルヴィアは知っている。昔から一緒だったのだろうし、恋人という特別な関係でもあった。きっと、フェイトには一度も見せていない表情もあるだろう。それとは違い、自分達は壁を作られているようで、まだカノンの気の許せる仲間になっていないのかと思うとやはり悔しいし、無条件の信頼と愛情を寄せられていたシルヴィアに対して対抗意識も出る。

（うん・・・仲間だから・・・カノンにもそう思って欲しいのかも）

結局、フェイトはカノンを仲間と位置付けていた。勿論、恋人と仲間では決定的に違うものがあるのだが、それが分かるほどフェイトは自分の気持ちに整理をつけられていなかった。

「・・・い。おい、何処へ行く気だ？」

「え？あうっ！」

ぼんやり考えているうちに通り過ぎようとしていたらしい、食堂の扉を数歩ほど過ぎたあたりで首根っこを掴まれ、引き戻される。突然の事でフェイトはよろめくが、カノンが咄嗟に支えたので転ぶことは無かった。

「あ、ありがとう」

「ああ」

失態に顔を紅くするフェイトに小さく笑みを浮かべながら、カノンは食堂に入っていく。それに続く形でフェイトも入った。

「あ、フェイトちゃん、お昼ご飯とっておいたよ」

「ありがとう、なのは」

「カノンも、これ。A定食だけど、いい？」

「あ、ああ」

既になのはと刹那が席を取っており、準備もしてくれていた。このところ、この四人で食事をとるのが当たり前になっていた。その他にも食事のグループは大体決まってきていた。はやて達八神家グループや、リゼットやティアナ、キャロ、そしてエリオのグループ、そしてスバルとギンガ、アレンの大食いグループである。エリオも大食いだが、キャロに引っ張られる形で食事をしていた。なんだかんだで男なのである。

「カノン、刹那の事まだ苦手なの？」

「う・・・」

初任務以来、カノンは刹那と接する時はぎこちない。嫌っている訳ではないが、どうにも落ち着かないのだ。人を落ち着かせるであろう穏やかな笑顔も、全てを見通すような紫紺の瞳も、自分とは違う世界の人物に思えるのだ。

「済まない・・・」

「いいよ。相性の問題ってのもあるだろうし・・・」

また、これだ。カノンもこれまでとは違い、本人の前でぎこちなくなるのは本意ではない。だが、当の刹那は気にすることもなく笑顔で許してしまう。まるで揺らめく炎だとカノンは思う。最近、刹那につけられた二つ名について耳にする機会があった。『Ｍｅｌｏｄｉｏｕｓ　ｂｌａｚｅ』――――――美しき旋律の炎と呼ばれる彼の由来もついでに聞かされたが、その印象は更に深まるだけだった。

「相性といえば、俺はユーノさんと会った事ないんだよなぁ・・・」

「そうなの?ユーノ君、確かに忙しいけど、ヴィヴィオもよく会ってるし・・・」

困ったように笑う刹那になのはが不思議そうに問う。刹那となのはが付き合いだして2年だ。既に会っていてもおかしくは無い筈である。

「そうなんだけどね・・・俺が行くときはいつも用事で出かけてるし、資料を請求する時も他の人が出るから・・・」

「う～ん・・・なんでかな・・・?」

「・・・・・・」

不思議そうに首をかしげ、唸る2人を余所に、フェイトはどこか納得してしまう。そんなフェイトにカノンが怪訝そうに尋ねた。

「フェイト？どうした？」

「あ、えっとね・・・」

小声でフェイトは説明する。ユーノはなのはに好意を持っていた事。１０年間関係が発展しなかった事。そこに刹那が現れ、なのはと恋仲になったこと。言い方は悪いが、ユーノにとっては鳶に油揚げを攫われた形になってしまった事である。

「なるほど・・・」

「ユーノも避けてる訳じゃないんだよ？ただ、本当に相性が悪いみたいで・・・」

不憫といえば不憫なユーノに思いを馳せるカノンにフェイトはさらに付け加える。それでもカノンにとってはユーノに憐憫の情を向けるには十分であった。

「・・・・・・」

「ん？どうしたの？」

カノンは思わず刹那を半眼で見てしまう。まぁ、恋愛事情というものは常にままならないものであるが、それでも・・・である。

「いや・・・お前が悪い」

「は？」

意味が分からずにキョトンとする刹那に、カノンはもう一度溜息を吐くと、食事に戻る。

「「・・・・・・？」」

「うん、しょうがない・・・かな」

首を傾げる刹那となのはにフェイトも溜息を吐く。そこになのはが声を掛けた。

「そういえばフェイトちゃん・・・カノン君とどこかに出かけないの？」

「え？」

その一言で再びフェイトに視線が集まる。それに戸惑いながらもフェイトは問い返した。

「えっと・・・なんで？」

「え？だって、フェイトちゃん最近休みとってないでしょ？」

確かにフェイトはここ最近はカノンに付きっ切りで、休みもほとんど取っていなかった。だが、どうしてそこでカノンと出掛ける話になるのか、フェイトには分からない。

「カノンにも休みをあげられてないし・・・ちょうどいいから、２人で出かけてきたらって事だよ」

「う～ん・・・？」

刹那が補足する。確認するようにフェイトははやてを見た。

「ええよ。2人で楽しんできてな～」

「え、あ、うん」

どうやら確定らしい。ひらひらと手を振るはやては躊躇いもなく許可を出した。

「・・・・・・つまり？」

「えっと・・・じゃあ、一緒に出掛ける・・・でいいのかな？」

理解しきれない様子のカノンにフェイトが苦笑しつつ問う。苦笑しつつも、フェイトは期待してもいた。

「出掛ける・・・」

「・・・・・・ダメ、かな？」

「・・・・・いや、行く。行こう」

上目づかいで自分を見るフェイトにカノンは頷く。未だにぎこちないが、前に進もうとする姿勢は確かに成果を見せていた。

「本当!?」

「ああ・・・どこに行くかは任せていいか?ミッドを歩くのは初めてだから・・・」

「うん!」

食事が終わると、フェイトとカノンは着替えるためにそれぞれの部屋に戻る。その際フェイトは上機嫌だった。

「フェイトさん、嬉しそうだったね・・・」

「うん・・・」

エリオとキャロが珍しいものを見たように呟くと、他の面々は『やっぱりなぁ・・・』といった目でフェイトが出ていった扉を見る。こうして、フェイトとカノンのデート（?）が急遽決定したのであ

った。

追憶１３～一時の休息～（後書き）

いかがでしたか？急遽決まったデート（？）。どんな感じになるか、お楽しみに。因みに２回に分けるつもりです。つまり、デート描写が長い・・・ということで。でもあんまり砂糖は出ないかも？出るかどうかはまだ未知数ですね。

それでは！

追憶１４～カノン、その想い～（前書き）

デート話・・・でありますがちょっとシリアスも入るかもです。
とはいえこの話でカノンに変化が現れます。それでは、どうぞ！

追憶14～カノン、その想い～

デート（？）が急遽決まったカノンとフェイトは、私服に着替え、ミッドの首都クラナガンに来ていた。

「カノン・・・いつもの服なんだね」

「ん・・・？失礼だな。これは他の服より3倍くらい高い物だ。使われてる布も上質な物だぞ」

若干不満そうなフェイトにカノンは憮然として答える。いつもカノンは全身黒尽くめで、ベルトで身体を縛るようなデザインの服を着ている。今回も同じような物だったが、どうやら違うらしい。

「ほんとに？」

「触ってみれば分かる」

疑わしげに服を見つめるフェイトの手をカノンは強引に握ると腕を触らせる。

「あ・・・ホントだ」

「分かればいいんだ、分かれば」

驚くフェイトにカノンは満足そうに頷く。服装に無頓着に見えるカノンだが、譲れない一線というのはあるらしい。自慢げに口元を歪めるカノンにフェイトは思わず吹き出してしまう。

「なんだ?」

「ううん、何でもない」

子供っぽい。そう思った事を隠し、フェイトは笑顔を向ける。納得いかない表情のカノンだが、暫くジト目でフェイトを見ると、小さく笑う。

「まあいい。で、どこに行くんだ?」

「うん、服を買おうと思うんだ。カノンの服、何着かボロボロだったでしょ?」

「ああ・・・そうだな。同じ服があればいいが」

フェイトの提案にカノンは少し考えると、頷く。意外にも真剣なその様子にフェイトは不思議そうにカノンを見上げる。服ならばどれでも良いような気もするが、フェイトはカノンに似合うような服を見繕うつもりだった。だがカノンは真っ先に同じ服をイメージした。それがフェイトには違和感を持って見えたのだ。

「何かこだわりみたいなものでもあるの？」

「・・・・・・・・・・・・趣味だ」

「・・・そっか」

嘘だ、とフェイトは確信する。不自然に空いた間もそうだが、黒、というのが気にかかる。フェイトも黒い服はよく着るが、他の色も組み合わせて着るのが普通だ。だが、カノンは常に黒一色。違和感を覚えないはずがない。

「・・・・・・喪服、だったりする？」

「っ・・・。いや、趣味だ」

別に黒い服を着るのは特別な事ではない。だが、完全に黒一色と

なれば話は別だ。死者を悼む、とういう特別な意味が生じる。

「・・・隠さないでいいよ。気を悪くしたりしないから」

「・・・・・・」

尚も食い下がるフェイトに観念したのか、カノンは溜息を吐く。正直、カノンにとっては気の進む話ではない。だが、フェイトは既に確信している節がある。ならば、隠し続けてもばれるのは時間の問題だろう。

「・・・そうだ。あの鎖も、オレの罪を忘れないようにつけている」

「罪って・・・」

「守れなかった。その事実がオレの罪だ」

キッパリと、断ち切るようにカノンは言う。カノンにとって、その事実だけは受け止めなければならないものなのだ。受け入れて、進む。それがシルヴィアとの約束である以上、破る訳にはいかない。

「・・・・・・」

「すまない、今するような話じゃなかった」

黙り込むフェイトにカノンは謝る。フェイトは気にしていない、と首を振るが、その心中は複雑だ。シルヴィアとの想い出が大事だったからこそ、その死を悲しみ、悼むその姿勢は、人として正しいものだ。だが、カノンは前に進むと言った。囚われているという訳ではないのだろうが、拘りすぎてほしくない、という思いがある。

「ん、この店か？」

「え？あ、うん。じゃあ、入ろうか！」

沈んだ空気を払うように、カノンが1つの店に指を向けている。ハッと我に返ったフェイトは頷くとカノンの手を握ると引きずるように中に入る。慌てたような声が後ろから聞こえるが、フェイトは無視する。なんとなく、こうしたかったのだ。繋ぎとめていかなければ、また、何処かに行ってしまいそうだったから。自分を傷つける人に戻ってしまいそうだったから。せめて今だけは、暗い気分でいてほしくない。

「お、おい・・・フェイト？」

「黙ってついてくる！黒い服、欲しいんでしょ？」

「いや、欲しいのは欲しいが・・・何故手をつなぐ？」

いきなりのフェイトの行動にカノンは困惑する。それはそうだろう。何か考え込んでいたかと思えばいきなり手をつなぎ、引っ張るのだから。

「いいじゃない。これ、一応デートなんだから」

「は・・・？」

カノンにとっては予想外の一言だった。当のフェイトは微笑みながら困惑するカノンを振り返ると悪戯が成功したかのように笑う。

「・・・・・フェイト？」

「ん？なに？」

フェイトの微笑みは変わらない。心の底から楽しんでいるような、そんな雰囲気がある。

「・・・敵わないな」

一瞬だけ、カノンは再びフェイトをシルヴィアと重ねていた。此方の空気を敏感に感じ取り、次の瞬間には笑顔に変えてしまう。これまでにも何度か重ねてみてしまう事があった。仕草や纏う雰囲気は、それほどまでにそっくりなのだ。シルヴィアと話した後もそうだった。失礼だと分かっていても、重ねてしまう。その事にずっと苦悩していた。だが、フェイトの笑顔を見て、その感覚が薄れた。少なくとも、此処にいるのはシルヴィアではなくフェイトだ。まだ情けないが、それでも前に進むと約束した。ひとまずは、フェイトを目標にしてみるのもいいとカノンは思う。

「ん～、黒い服はあるけど、同じデザインのは無いかも」

「そうか・・・」

フェイトはいくつか物色しながら次々に服をカノンに見せていく。若干気落ちした様子のカノンを元気づけるようにフェイトはカノンの手を握る。ファッションという意味では服を着ないカノンだが、その理由はとても尊い。だからフェイトはその想いを尊重しようと考えたのだ。

「でもじゃあ、こんなのは？」

「ん・・・？あ・・・！」

フェイトが出した服は黒いシャツにスーツのようなジャケット、黒い革のズボンであった。若干地味目だが、着こなせばそれなりに様になるデザインであった。

「・・・悪くないな」

「でしょ？これならちょうどいいと思うな」

カノンはフェイトから服を受け取ると矯めつ眇めつ眺め、頷くとフェイトに向き合う。

「・・・・・ありがとう」

「うん、喜んでくれたならよかった」

フェイトの言葉にカノンは小さく笑う。それかカノンは同じ服を2着ほど持つと、カウンターに向かう。

「結局、同じ服買ったんだね」

「む。悪いか？」

拗ねたような表情でフェイトを見るカノンにフェイトは吹き出す。先程から、カノンはどこか子供のような表情をよく見せる。普段が普段だけに、随分と違う印象を受ける。だがそれは悪いものではなく、微笑ましいものだ。

「ううん、そんなことない。カノンらしいな、って思っただけ」

「なんだそれは・・・」

クスクスと笑うフェイトにカノンは溜息を吐く。フェイトといると、カノンはどうにも調子が狂う。だが、それは悪い意味ではなく、安らぐというか、気取らないでいられるというか、自然体になるのだ。

「そろそろお昼だね。どこかで食べようか？」

「ん・・・もうそんな時間か？なら・・・ん？あれはどうだ？」

カノンが指差したのはファミリーレストラン。昼時とあって流石

に少し混んでいるようだが、待つようなことはなさそうである。

「いいよ。じゃあ、入ろうか」

「ああ・・・へぇ」

中に入ると、カノンは感嘆の声を上げる。まるで今まで入ったことがないかのような反応にフェイトは首を傾げる。

「あれ?もしかして、入ったことないの?」

「ない。旅続きだったし、金なんて無かった。食い物はその辺の動物を焼いて食うか、雑草を食べていた」

「そ、そう・・・」

なんというサバイバル。それ程までに切羽詰っていたのか、わざと自分を過酷な状況に追い込んだのか。恐らくは両方だろう。

「ん〜・・・なにがいい?」

「ミートスパゲティ。あと、ハンバーグ」

「そう？じゃあ、私はシーフードドリアにしようかな」

フェイトは店員を呼ぶと注文する。来るのを待つ間、カノンはどこか落ち着かないのか、辺りを見回している。そこにフェイトが声を掛けた。

「カノン、シルヴィアと一緒に過ごしてた場所って、どういう所？」

「？なんだ突然」

大事な想い出だとしてもあまり思い出したくないのか、カノンの表情が曇る。確かにいきなりな質問だ。カノンからすれば傷を抉るような事になってしまうかもしれないが、それでもフェイトは知りたかった。シルヴィアに対抗する気持ちもないでもないが、単純にカノンの事が知りたかったのだ。

「ううん、ただ、知りたいなって」

「面白い話でもないし、むしろ胸糞の悪くなる話だが・・・」

「いいよ。カノンの事、もっと知りたいから」

屈託のない笑顔で言い切るフェイト。カノンはそれを複雑そうな目で見ると、溜息を吐く。

「まあ・・・当たり障りのない部分だけなら」

「うん。少しずつでいいから」

そこで注文した料理が運ばれてくる。カノンはスパゲッティに口をつけると、飲み込んで一息つく。

「そうだな・・・オレ達が住んでいたのは小さな集落で、他にも集落はあるが、それぞれ独自のコミュニティを作っていた。で、まぁ・・・なんだ、オレはその1つに拾われたんだ」

「拾われた?ずっといたんじゃないの?」

食事を摂りながらの会話には重い内容だ。だがカノンもフェイトも知ったことではないと言わんばかりに食べながら話し続ける。

「ああ。3歳位だったらしい。とにかく、そこの集落の首長の家に

引き取られてな、そこで過ごしていた。だが、あの集落は余所者に対して厳しい。オレは子供だったから無視や敬遠で済んだが、大人だったら入る事すら許されない。怪我を追っていても即刻追放だ」

「そんな・・・」

あまりに酷すぎる話だ。カノンは何でもない事のように話すが、それは集落というより人として間違っている。ショックを受けているフェイトを見てカノンは苦笑する。フェイトは優しい。彼女には酷な話ではあるし、本当はこんな事を話したくない。だが、話してしまった以上、止める事は出来ない。

「それでも救いはあった。首長の一人息子で、レオンという名だった・・・オレより一つ年上だったが、そいつだけはオレに対して普通に接していた。だから腐らずにいられたんだ。喧嘩もしたが、親友といっていいほどの仲だったと思う。シルヴィアとも仲が良かったし、よく3人で遊んでいた」

「そっか・・・」

小さく笑いながら話すカノンにフェイトは複雑な視線を向ける。もしかしたら、その少年も7年前の襲撃で死んでしまったのではないか・・・そんな懸念がフェイトの脳裏をかすめていた。

「ミッドの生活水準からみれば、オレ達のそれは野蛮もいいところだ。動物を狩り、木の実を拾う。海や川で魚を釣る。原始の生活そのままだからな」

「野蛮なんてことは無いよ。自然と一緒に生活してるって事だと思うな」

「ん・・・そんなものか？」

フェイトは心からそう思っていた。ミッドの生活は便利だ。だが、それも働いている人達の血と汗で出来ている。カノンたちの生活は、自分達で協力し合って成り立つものだったのだろう。自然と共存した生活、それはなんと素晴らしいものか。

「そこで育ち・・・１１の頃か。その時に初めてシルヴィアに会った。それまでも見かけていたが、話したことは無かった。いつもつまらなそうな顔をした奴で、あまりに辛気臭い顔をしていたから遊びに連れだしたんだ」

「・・・そうだったんだ」

意外な話だ。フェイトから見たシルヴィアは明るく、優しげな雰囲気の少女だ。そんな風に内に閉じこもるような少女には見えない。それにカノンも、そんな活発な性格とは思えなかった。

「後でバレて、こっぴどく怒られた。大事な役割を持っている巫女様を連れ出すとは何事か云々ってな。その時にシルヴィアが庇ってくれたんだ。それ以来だ、シルヴィアと一緒に行動するようになったのは。ついでにレオンも加えてな、そこが3人の始まりだ」

「巫女様って・・・時の巫女様？」

「・・・・・どうして知っている？」

失敗した、とフェイトは後悔した。フェイトはカノンにシルヴィアと話をしたことを話していない。カノンは目を細めてフェイトを見る。覆水盆に返らず、という事で、フェイトは観念し、シルヴィアと話をしたことを話した。勿論、追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）とカノンの関係については話さない。それがシルヴィアとの約束だからだ。

「なるほどな・・・」

「うん・・・ごめんね？黙ってるつもりはなかったんだけど、何となく・・・。でも、カノンを任せるって言われちゃった」

「シルヴィアが？・・・そうか」

カノンは複雑そうな顔で呟く。少しだけ、寂しいと思う。だが、その言葉を聞く限り彼女はカノンの背を押してくれているのだ。ここで前に進まなければ、見せる顔がなくなってしまう。

「とにかく、オレとレオンは、大人の目を盗んではシルヴィアを連れ出して遊んでいた。アレンは首長の息子だったから、隙をつくのが巧かったな。ある時シルヴィアはオレに親がいない事を知って、姓名をくれた。それまではずっとカノンという名だけで、他の奴らは皆姓名を持っていたからな。アークナイトは、シルヴィアがくれた名だ」

「へぇ・・・そうだったんだ。じゃあ、シルヴィアと恋人になったのはその頃？」

「何故そんな事を・・・まぁ、付き合い始めたのは１２歳かそこらだったはずだ。２年後の１４歳の誕生日にプレゼントとして貰ったんだ」

「・・・・・・」

７年前といえば、カノンが１４歳の時だ。たった１年。幸せの只中であった２人は、あっさりと引き裂かれたのだ。どれだけの苦痛がカノンを襲ったのか、フェイトには想像できない。けれど、カノンはその短すぎる時間をとても大事に思っていたのだ。無気力に見

えて、常に亡き恋人を偲び、思い続けていた。強い人だ、とフェイトは思う。だが、同時にカノンは脆いとも思う。今はいい。先日、シルヴィアと話したことがカノンの支えになっているからだ。だが、それがいつまでも続くとは限らない。シルヴィアがフェイトに話した、カノンの秘密。それを突きつけられた時、カノンが崩れないという保証はないのだ。

「カノン」

「・・・？どうした？」

「私がカノンを支えるから。頼まれたからじゃない、私自身の意志で、貴方を護りたい。だから、ね？」

「・・・・・・」

微笑むフェイトをカノンは呆気にとられた顔で見る。その表情はだんだんと歪み、それを隠すようにカノンは俯いた。

「・・・卑怯だ、お前は」

震える声でカノンは呟く。この間の件がカノンにとっては支えだった。だが、いつでも不安は押し寄せてくる。カノンは未だにシル

ヴィアの事を引きずっている。彼女が既に許してくれた。その上で、自分を赦せと言ってくれた。だが、本当にそれでいいのかと思ってしまう。フェイトは、そんなカノンの未練や迷いを見抜いていたのだ。いや、それはシルヴィアと話した彼女だったからこそだろう。そんな彼女が、手を差し伸べてくる。迷い、未だためらっている自分の支えとなると言ってくれる。

「・・・・・いいのか、本当に。オレは・・・オレを赦しても」

「いいんだよ。カノン・・・お疲れ様」

フェイトはシルヴィアもそう思っている、とは言わなかった。カノンは自分で自分を赦さなければならない。そんな事を言うのは無粋だし、必要のない言葉だ。カノンは長い間俯いていたが、嗚咽が聞こえる事は無かった。フェイトは黙ってカノンを見つめている。

「・・・・・昼食時には、重い話だったな」

「そうだね。でも、よかったでしょ？」

おどけたフェイトにカノンは苦笑する。カノンが何を思い、どんな決断をしたのかフェイトには分からない。だが、これからカノンは強く進んでいく。そんな予感がフェイトにはあった。何故なら、カノンの目には鋭い光が、口元には、小さいが強い笑みが浮かんで

いたからだ。

「・・・・・・」

カノンは腕のミサンガを付け直す。きつく締められたそれは、カノンの決意を示すように鈴の音を力強く鳴らした。

追憶１４～カノン、その想い～（後書き）

いかがでしたか?デートはまだまだ続きます。今度はちゃんと甘めにできる・・・・・はず。できるよな、俺・・・?

次回もお楽しみに!それでは!

追憶１５～安らぎの時～（前書き）

デート続きです。なるべく甘く、なるべく甘くなるように書きました。はぁ、なんだろ、めっちゃ悔しい・・・。虚しさが・・・辛い。

それでは、どうぞ・・・

追憶15～安らぎの時～

カノンとフェイトがデートをしているその頃。刹那となのはもまた、一時の休暇を与えられ、街に出ていた。休日ならばヴィヴィオも一緒だが、今日は平日。まだ娘は学校である。なので、2人は久々の2人きりのデートを楽しんでいるのであった。

「そういえば、初めてのデートもこんな感じだったかな」

「あの時の事？う～ん・・・周りの視線が気になる？」

過ぎ行く人々を眺めながら刹那となのはは苦笑する。刹那達の服装自体はあまり珍しいものではない。だが、刹那達がそこにいる事が問題なのだ。仮にもなのはと刹那・・・いや、前機動六課はＪＳ事件を止めた事で有名である。2年の月日が流れたとはいえ、未だに覚えている人も少なくない。更に、その最大の功労者であった高町なのはに恋人がいた、それも民間協力者として同じ場所にいたというのだから、事件後に大きな話題を呼んだのである。

「そうでもないかも。でも、珍しいんだろうね・・・俺たちが此処で歩いてるっていうのは」

「そうじゃないと思うけど・・・でも、原因は刹那君にもあると思うな」

空を仰ぎながら他人事のように話す刹那になのはは頬を膨らませる。

「どういう事？」

「刹那君、美人だし・・・それに、結構有名でしょ？スケートとか、ヴァイオリンとか」

刹那の顔は中性的で、一見しただけでは女性と変わらない。が、高めの身長や態度から男だと分かったのだろう、道を歩く女性達がチラチラと刹那を盗み見ている。ついでに、刹那は教導の後には必ずかつての本業であったフィギュアスケートの練習をする。ミッドにはそのようなスポーツはないので、当然リンクもないのだが、刹那は空を飛ぶことを応用してやっているため、それが珍しさを生んだのだろう、それを目当てに人々が集まる事も珍しくないのだ。

「美人って・・・男に付けるものじゃないよね。それを言ったら、なのはだって相当美人だし、可愛いじゃないか」

「にゃっ！？もう、恥ずかしいから、そういう事言うの禁止！！」

「あはははは！！」

ボンッ！！と音を立てて真っ赤になったなのはを見て刹那は笑う。本当に、こういうところは変わらない。空を飛ぶときのどこか楽しげな表情、教導時の凛々しい顔、真っ赤になって照れる顔、甘えてくるときのどこか子供のような顔、その全てが刹那は好きだった。だから、もっと見せてほしい。刹那は自分がここまで独占欲が強いとは思っていなかった。以前はもっと達観していたはずなのだ。

「・・・・・・」

「どうしたの？」

「いや、なのはに見惚れてたんだよ」

微笑みながら告げられた一言にまたもなのはは赤くなる。ずるい、となのはは思うが、どうやっても敵わないのは分かりきっている。これまで色々な刹那を見ていたが、そのどれもが違う刹那だった。達観していたかと思えば負けず嫌いな一面があったり、穏やかに笑う大人っぽい雰囲気かと思えば子供と一緒にはしゃぎ回っていたり。まるでビックリ箱のような人だとなのはは思う。違う刹那を発見するたびに、愛しさは更新され続けている。今もからかわれていると分かっていても、悪い気はしていない。愛しさが募って、身体が熱くなっていくのが分かる。

「少し休もう。あそこはどうかな？」

「うん、いいよ。冷たいものが飲みたいな～」

刹那が指差したのは喫茶店。なのはは頷くと、刹那の腕を引っ張るように組んで歩く。刹那はいつものように穏やかな笑顔を浮かべながら続く。店内は明るいが静かで、大樹の木陰のような涼しげな雰囲気だった。

「あ・・・『亜麻色の髪の乙女』か」

「え？・・・ああ、ＢＧＭ？」

店内に流れる音楽を聴き、刹那が呟く。なのはも耳を澄ませると、それは確かにクロード・ド・ドビュッシー作曲の『亜麻色の髪の乙女』であった。店員に確かめると、地球文化に興味を持った店長が地球の音楽を漁ったところ、偶然見つけたらしい。

「ほんとに偶然とは思えないな・・・クラシックって、今じゃあまり聴かれないし」

「あはは、照れ隠しだったりしてね」

刹那となのははそんな事を言いながら席に着こうとして、意外な顔を見る事になった。

「あれ？なのは？それに、散空教導官も？」

「え、ユーノ君！？」

そう、そこにいたのはユーノ・スクライアその人であった。今朝には話題にしていたこともあって、偶然の重なりに刹那となのはは驚きを禁じ得なかった。

「2人は・・・ああ、デート？」

「ええ、まあ・・・お1人ですか？」

「うん。ついさっきようやく休みが取れて・・・それと、敬語じゃなくていいですよ。散空教導官は年上ですから」

ハッと気づいたように言葉を正すユーノに刹那は苦笑する。

「う～ん・・・じゃ、俺にも敬語は無しで。それから、刹那で構い

ませんよ？」

「そう？じゃ、そうさせてもらうよ？」

人の良い笑みを浮かべるユーノに刹那も笑顔を浮かべる。

「考えてみると、こうして会うのは初めてかな？」

「だね。２人が付き合ってからもう２年だっけ？」

刹那もユーノも笑いながら話し出す。初めての会話なのだが、とてもそうとは感じられない程自然な流れだった。

「そうだね」

「うまくいってるみたいでよかったよ。噂は届くことはあったんだけど、やっぱり会ってみるとそれがよくわかる」

「ユーノ君、噂って？」

ニコニコと笑いながら話すユーノになのはが恐る恐る訊く。噂の

内容が気になるのだろう。

「えっと・・・そう、休憩の時とか、色んなところでいちゃついてるって」

「にゃあっ!?だ、誰が言ったの、そんな事!?」

「そんなつもりはないんだけどね・・・」

悪戯っぽく告げられたユーノの言葉になのははは赤くなるが、刹那は苦笑するだけ。それでも否定はしていない所を見ると自覚はあるらしい。

「あながち間違いじゃなかったね。今もピッタリくっついてるし」

「あ・・・それは・・・その・・・」

ユーノの言うとおり、隣同士で座る刹那となのはの身体の間には隙間がほとんどない。しどろもどろになるなのはを見てユーノは更に笑みを深める。

「本当に、良かった・・・と、もうこんな時間だ、行かないと!」

「そう？大変だね。頑張って」

時計を見て慌てだしたユーノは席を立つと挨拶もそこそこに伝票を取る。刹那の挨拶に頷いて返すと、そのまま走って出ていった。

「大変なんだね、やっぱり」

「そうだね・・・・・・ま、それだけじゃないと思うけど」

しみじみとユーノを気遣うなのはに刹那は何かを含むように返す。なのはが不思議そうに見上げるが、刹那は首を振るだけで答えない。

「・・・・・・それでも、譲れないものは譲れないんだよね」

「ん？」

噛みしめるように呟く刹那になのはが刹那の目を見つめる。刹那は見つめ返すと、何でもないと首を振り、耳元でこんな事を囁いた。

「ところで・・・今夜、ちょっと頑張ってみようか。なんか、なの

はの事が欲しくなったし」

「うにゃあ!?、な、何言って・・・その、私も、いいけど・・・こんな所で言わないでよ!」

内心、刹那は独占欲全開だったのである。ユーノと会って、一層強まったそれを悟られぬよう、ついなのはをからかってしまった。無論、内容は本気だが。当のなのはは叫び声こそ上げたが、周りの目が向いたのと刹那の言葉の内容に顔を真っ赤にし、小さな声で叫ぶという奇妙な事をやってのけた。刹那はそれに笑うと、店員にアイスティーのおかわりを頼むのだった。

＊　＊　＊　＊　＊

「ふぅ・・・」

無限書庫に帰る道の途中、ユーノは小さく溜息を吐いた。予想外の出会いではあったものの、それなりに雰囲気は悪くなかったと感じる。ユーノの感触では、刹那はどこか捉えどころのない人物だと思う。前に遊びに来ていたヴィヴィオから聞いた彼の二つ名そのものだと感じる。一見、彼は達観したようだが、捻くれている訳でもなく、ただ見守るような温かさがある。会話中にも絶やさなかった穏やかな笑みからもそれは読み取れた。しかし、その紫紺の瞳に眠るのは強い炎だ。なのはとはまた違う強さを感じる。

「・・・幸せそうなら、何よりかな」

刹那となのははずっと寄り添ったままだった。依存しているわけでもなく、ただ支えているだけ。だが、そこには強い絆がある。2人は既に恋の期間を終え、愛を育んでいる。恋ならばまだ可能性は残されていたかもしれないが、ここまで来たら入り込む隙間など無い。

「未練がましいな、僕も・・・」

最初に聞いた時はひどく驚き、ショックを受けたものだとユーノは苦笑する。その時にようやく気付いた気持ち。伝えなかったことを後悔しつくしたかと思ったが、そうではなかったらしい。

「これからも、幸せのままでいてよね・・・」

若干の挑発とからかい、そして出しつくせなかった後悔を言葉に乗せ、ユーノは微笑んだ。涙は――――――――流れなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

食事を終えると、再びカノンとフェイトは街を歩いていた。やはりカノンは珍しいものを見るようにキョロキョロと行きかう人や賑わう店を見つめている。

「そんなに面白い？」

「いや・・・集落にはこんな風に人の流れは無いし、旅をしているときはそんな余裕はなかったから、つい・・・」

どこか吹っ切れたのか、カノンの態度は少し軽いものになっていた。無表情は変わらないが、瞳には僅かに子供のような輝きがあり、好奇心を隠しきれていないことがわかる。

「む・・・フェイト、あれは何だ？」

「あれ？ああ、クレープ屋さんだね、気になるの？」

そこにあったのは移動型の屋台だった。クレープを売っているらしいそれに目を向けるカノンに上目づかいで覗き込むようにフェイトが問う。カノンは屋台から目を逸らさないまま小さく頷いた。

「じゃあ、買ってく？」

「いいのか？」

目を少しだけ輝かせたカノンにフェイトは笑いながら頷く。２人は昼食を終えてからは殆ど歩き詰めであり、時刻はもう夕方で小腹もすいてたため、丁度良かったのである。

「いらっしゃい、何にしますか？」

「え・・・と、カノン、どうする？」

「オレが決めていいのか？」

ニコニコと笑いながら注文を取る店員にフェイトは少し悩んだ様子を見せるとカノンに話を振る。

「いいよ、ほら」

「む・・・じゃあ・・・ラズベリー&ブルーベリー」

「私はイチゴとレアチーズケーキで」

注文をすると店員は慣れた手つきですぐに作り上げると、２人に手渡す。カノンとフェイトはそれぞれ礼を告げると、少し離れたベンチに座った。

「・・・ん、おいしい！カノンも食べたら？」

「あ、ああ・・・」

満面の笑みでクレープを食べるフェイトに促され、カノンもクレープを口に運ぶが、その動きが止まる。カノンの視線の先には、泣きじゃくる小さな男の子の姿があった。

「・・・・・・」

「ふふっ、行こうか」

そわそわと男の子の方へ行きたがるカノンをフェイトは促す。すぐにカノンは立ち上がると、歩きはじめる。フェイトもその後を追った。

「ひっぐ・・・えぐ・・・おかーさん・・・」

「・・・・・・」

泣きじゃくる男の子にカノンは無言でクレープを差し出す。目を潤ませたまま自分を見上げる男の子にカノンは微笑むと、何か問いかけようとしたのだろう、口を開いた男の子にクレープを突っ込んだ。

「むぐ!?」

「カ、カノン!?」

「・・・・・男がこんなところで泣くんじゃない。泣くならトイレか森の中だ」

慌てる男の子とフェイトを余所に、カノンは静かに言う。男の子はクレープを口から離すとカノンを見上げ、一緒にいたフェイトと交互に見る。

「君、どうしたのかな?どこか痛いの?」

「・・・おかーさん、いなくなった・・・」

フェイトが男の子に目線を合わせ、優しく問いかけると、男の子は小さく囁いた。

「そっか・・・はぐれちゃったの？」

「うん・・・」

優しく問いかけ、状況を把握していくフェイト。寂しさがこみ上げてきたのか、再び顔が歪み始める男の子に今度はカノンが口を開く。

「・・・・・よし、宝探しだ」

「「え？」」

予想外の一言にフェイトと男の子が呆然とカノンを見上げる。当のカノンはうむ、となぜか偉そうに頷くと再び口を開く。

「だから、宝探しだ。お宝はお前の母親。どうだ？」

「おかーさんが、お宝・・・」

呆然と男の子はフェイトと顔を見合わせ、再びカノンを見ると破顔し、元気よく頷いた。

「うん！やる！」

「よし、お前の名は？」

「ロイ！」

「良い名だ、ロイ。オレはカノン。こっちはフェイトだ。行くぞリーダー」

ポンポンとロイの背中を叩き、カノンは促す。フェイトはハッと我に返るとカノンに声を掛けた。

「いいの？」

「楽しい方が気がまぎれるだろう」

戸惑うフェイトにあっさりとカノンは告げる。フェイトは驚くが、カノンの顔を見ると言葉を失くした。カノンは微笑んでいたのだ。夕日に照らされたそれは一枚の絵のように美しい笑みで、頬が熱くなるのがフェイト自身にも認識できた。そこに、ロイから声が掛かる。

「カノンにーちゃん！フェイトねーちゃん！早く早く！！」

「今いく。・・・ほら、行くぞ」

「あ、うん！」

カノンはフェイトを促すと、すぐにロイに追いつき、並んで歩きはじめる。フェイトも彼らに追いつくとロイを挟むように隣に並んだ。人々をかき分け、店を覗く。因みに、人に尋ねる事はしていない。カノン曰く、それじゃ宝探しにならないらしい。妙に説得力を持った言葉にフェイトとロイは疑うことなく頷いてしまった。しばらく歩き回ると、前方から辺りを見回しながら早歩きで進む女性が見えた。

「あ！おかーさん！！」

「え？」

ロイが上げた歓喜の声に女性が此方を見ると、驚きと安堵の表情を浮かべる。

「ロイ！よかった・・・」

「だいじょーぶ！！宝探ししてたから！」

ロイの言葉に首を傾げる母親にフェイトが苦笑しながら説明する。聞き終わると、母親もまた苦笑しながら頭を下げた。

「どうもありがとうございます・・・ほらロイ、貴方も」

「うん！ありがとう、カノンにーちゃん、フェイトねーちゃん！」

「お宝探しは終わりだ。でかい捕り物だったな、ロイ。いや、リーダー？」

おどけて茶化したように肩を竦めるカノンに笑いが起こる。

「本当にありがとうございます。ごめんなさいね、デートだったんでしょう？」

「え!?えっと・・・だ、大丈夫ですよ!私も楽しかったですから!」

笑いながら、申し訳なさそうに告げられた一言にフェイトは顔を赤くしつつも首を振る。無意識にデートであることを否定していなかった。母親はもう一度頭を下げるとロイの手を引いて夕暮れの中を去っていく。ロイが振り返り、手を振るのに此方も振り返しつつ、フェイトはカノンを見上げた。

「ちょっと意外。カノン、いつもより子供っぽかった」

「なんだそれは。・・・子供の時によくやってたんだ。ターゲットは食べ物だったり、そこらのオヤジのカツラだったり、色々だな」

「そ、そう・・・」

悪戯っ子だったらしい。

「それにしても、お母さんがお宝か～・・・大切な事だよね」

「・・・・・そうだな」

フェイトの生みの母はもういない。フェイトを否定し、虚数空間に消えていった。だが、フェイトは母、プレシアを恨んでも憎んでもいなかった。むしろ感謝している。自分を生み出してくれたことに。そんなフェイトだからこそわかる、母の大切さ。カノンには母がいない。父もいない。カノンは親の愛を知らないのだ。だからこそ、はぐれて泣きじゃくるロイを見捨てられなかったのだろうとフェイトは思う。

「ふふっ・・・」

「なんだ?」

笑い声を隠せなかったフェイトをカノンは睨む。だが、それは怒りなどは含まれておらず、むしろ面白がるような響きがあった。

「やっぱり、優しいよ、カノンは。シルヴィアの言った通りだね・・・ううん、そうじゃなくても、やっぱりカノンはずっと優しいんだよ」

「・・・・・うるさい。さっさと帰るぞ。勘違いするな、オレは優しくも親切でもない。ただ面倒事を片付けたかっただけだ」

早口でそんな事を告げるカノンにフェイトは微笑むとカノンと並んで六課への帰り道を歩く。カノンは不服そうに歩きながらもフェイトに詰め寄る。

「聞いてるのか？いいか、オレは――――――」

「聞いてる聞いてる。ちゃんと聞こえてるよ」

「聞いてないだろ・・・」

まったく悪びれずに微笑み続けるフェイトにカノンは溜息を吐く。諦めるしかないことを悟ったらしい。人間、諦めが肝心とはよく言ったものである。

「・・・・・はぁ」

「ふふっ♪」

２人の影が長く伸びる。夕陽が、ゆっくりと、帰りを惜しむように歩くカノンとフェイトを照らしていた。

追憶１５～安らぎの時～（後書き）

いかがでしたか?楽しんでいただけたでしょうか。ニヤニヤしてくださったのなら私が苦しんだ甲斐もあるというものです。彼女いないのにデート話って・・・生殺しみたいでいやですね。書くことはやめませんが。

次回は任務です。スコラとベニト、リゼットについて書きたいな～とか思ったり。ストックが切れたので考えながら書きます。ちょっと時間がかかるかもしれませんが、お楽しみに!それでは!

追憶１６～双子の魔法使いが夢見る世界　前篇～（前書き）

はい、任務です。今回はシリアスは薄目です。

今回も謎かけが沢山です。なんでこう複雑になるかな・・・？単純な事を書いてるつもりで難解になったりとか、します？

それでは、どうぞ！

追憶１６～双子の魔法使いが夢見る世界　前篇～

しばらくぶりの休日を楽しんだ数日後、とある世界でフラグメント出現の報せがあったため、カノンとフェイト、アレンにギンガ、そしてリゼットが任務にあたる事になった。

「これから行く世界って、どんな所なんだ？」

「第２８管理世界、ファンタズマゴリア。双子の魔法使いが描く幻想の世界。誰かの夢の世界、誰の夢でもない世界。・・・私の、故郷」

謡うように、どこか遠くを見るように話すリゼット。物憂げなその様子はあまり任務に乗り気でない事を如実に表していた。

「じゃあ、リゼットにとっては里帰り？」

「ええ・・・でも、あまり戻りたいとは思わないわ」

ギンガが問うのに対し、リゼットは苦笑で答える。

「え、どうして？」

「それは・・・行けばわかります」

フェイトが驚いてリゼットを見る。それでも彼女は物憂げな表情を崩さなかった。

＜＜・・・リゼット＞＞

＜＜悪いな、リゼット。面倒事をぶり返してさ＞＞

ホログラムのように男女の子供が浮かび上がる。スコラスティカとベネディクトゥスだ。

「あなた達の所為じゃないわ、気にしないで？」

＜＜でも・・・＞＞

微笑むリゼットにスコラスティカは未だ不安そうな表情を崩さない。

＜＜リゼットが気にしないなら、構わないけどね。なら、しっかり

気を持ちなよ。また夢に戻る前にさ＞＞

「そうね・・・夢の中では、生きられないもの。しっかりしなきゃね」

意味深に告げるベネディクトゥスにリゼットは頷く。此方も意味深ではあるが、物憂げな雰囲気は消えうせ、いつものリゼットに戻っていた。

「・・・どういうことだ？」

＜＜リゼットにも色々あるんだ。もうすぐわかる事なんだし、今は聞かないでくれるとありがたいけどね＞＞

「う～ん・・・？」

訝しげに尋ねるカノンにベネディクトゥスが答える。小生意気な口調だが、リゼットを気遣っているのは本当のようだ。皆は納得いかないながらも、口を閉ざすしかなかった。やがて、転送ポートの光が晴れると、広大な田畑が目の前に広がる。

「うおっ・・・」

「ここは農耕区域ね。ファンタズマゴリアの中ではあまり意味を持たない場所だけれど」

「え、どういう事？」

リゼットの何でも無さそうな一言にギンガが問い返す。科学の発展で人間の生活は豊かになるが、それだけでは生きていけない。食糧は必ず必要であり、その為の場所もまた必要不可欠のはずだ。だが、リゼットはそれを意味のない場所という。

「集落は向こうにあるわ。案内します」

「う、うん・・・」

広がる田畑には麦や野菜等が実っている。その中を歩くと、そう時間も経たずに集落の入り口が見えてきた。入り口に近づいた一行に警備をしているであろう男が話しかける。

「おや、旅行の方々ですか？」

「いえ、私達は・・・」

入り口から見える人々は何の不安も無さそうな笑顔で歩いている。
男も人の良さそうな笑顔でニコニコとフェイト達を見つめている。
だが、それにしては男の装備が物々しいのだ。

「ああ、これですか？最近妙なものが出始めましたからね。一応です」

「・・・・・最低限の心がけね。ご苦労様。私達は中に入らせてもらうわ・・・時間がないの」

ゾッとするような冷たい声。その声を出したのはリゼットだった。
男はリゼットの姿を確認すると、顔を真っ青にして震えだす。

「あ、貴女は・・・！」

「まだ通じるようね。この方々はあなたの言う妙なものへの対策のために呼ばれたの。私もそれに応じたわ。この意味、理解できるかしら？」

冷笑を浮かべて詰め寄るリゼットに恐れをなしたように男は道を空ける。いきなりの事態の豹変にフェイト達は困惑したまま中に入る事になった。

「・・・・・・」

「リゼット・・・？」

無言で前を歩くリゼットに続くフェイト達は、やがてある異常に気付いた。彼女を見た大人達は目を逸らし、家の中に戻るが、子供達は逆に喜びの表情を浮かべているのだ。やがて、全ての大人が消える。後に残されたのは、状況の分からないフェイト達と、リゼットを見つめる子供達、そしてそっと息を吐いたリゼット本人だけだった。

「・・・・・・おいで、皆」

「「「「・・・・・・・！」」」」

先ほどからの態度から一転し、リゼットは手を広げて、子供達を呼ぶ。その声はいつも通りのリゼットのものだった。

「リゼットお姉ちゃん、お帰り！」

「久しぶりー！！」

わっと子供達が群がる。

「ただいま、皆」

「おい、リゼット・・・？これ、どういう事だ・・・？」

皆の頭を撫でるリゼットにアレンが呆然と問いかける。目まぐるしすぎる状況変化に耐えられなかったのだろう。だが、そんなアレンの脛を子供の1人が蹴り上げた。

「いてぇ！」

「リゼット姉ちゃんに近づくな」

「なっ・・・このガキ！」

「はいそこまで。ごめんね、私達、こういうところの人なんだけど・・・」

激昂しかけたアレンを制し、ギンガが管理局の局員証を見せる。
すると子供達は顔を見合わせると、真剣な顔で口を開く。

「おねーさん、それ、大人の前で見せちゃダメだよ」

「え？」

思わぬ一言。冗談かと思えるがそうではないらしく、他の子たちも次々に続く。

「入ってきた時、リゼットねーちゃんに通してもらったろ？」

「そう・・・だね。でも、なんで？」

「それは、私が説明しよう」

と、急に後ろからしわがれた声がした。振り向くと、そこには老いた男がリゼットを無感情な瞳で見つめながら立っていた。

「あんたは？」

「この集落の責任者だ・・・もっとも、一番偉いわけではないが」

警戒したように声を上げ、カノンが問う。老人はそれにも無感情に反応すると、その後には何も言わず、背を向けて歩き出す。

「いきましょう、フェイトさん。私もそこで話をします。・・・皆、いい子で待っててて」

「うん、とにかく、今の状況が分からないと何も言えないからね」

リゼットが子供達を再び撫で、老人の後を追う。フェイト達もすぐにその後を負った。

＊　＊　＊　＊　＊

「入るわよ」

集落の奥に位置する屋敷、その一室の扉をリゼットは何の遠慮もなく開ける。すると、先程の老人が待ち構えていた。

「ふむ・・・管理局の皆さん、ようこそ。何もない所ではあるが、くつろぐがいい」

「はい、ありがとうございます。フラグメントの件について報告してくださったのは貴方ですか？」

執務官でもあるフェイトが一番最初に口を開く。

「その通り。だがまさか、禁忌の魔女を連れてこようとは思わなんだ」

「禁忌の魔女？」

リゼットを睨みながらも、彼女を労わるような口調で話す老人にフェイトが問い返す。そこでリゼットが口を挟んだ。

「その事は後程話します。今は・・・」

「うむ。その前に、我が名はサウロン。先程の通り、この集落の責任者だ。さて、例の・・・フラグメントといったか、アレ等が出現したのは数日前の事。此方に害が及ぶことは無かったが、ここから数百メートル程をうろついておる。ヒトではないモノを近づかせるわけにもゆかぬ故、こうして救援を求めたのだ」

「原因に心当たりは？」

フェイトが問うのは追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の事だ。フラグメントが現れたのなら、殆どの確率でそれはある筈なのだ。

「いや、ない筈だ。此処の人間、いや・・・ファンタズマゴリアにいる人間は何も持たぬ。ただ暮らし、双子の魔法使いの見る夢に従って自らの夢想に生きるのみよ。ただ例外は、そこの禁忌の魔女のみだ」

「夢想に、生きる・・・？双子の魔法使いだと・・・？」

訝しげに尋ねるカノンにサウロンは首を振る。態度には出してこないが、何も話すことは無いという意思が感じられた。気になるが、今はその事を追及する時ではない。

「お主等は知っているのだろう？フラグメントが何を求めているのかを」

「はい。ロストロギア、追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）。フラグメントはその欠片を求めているんです」

「ロストロギア・・・その欠片となな？」

因みに、フェイトは既に追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の概要を皆に伝えている。無論、カノンの中にある核の事は隠してだ。シルヴィアと話してから数日後の話であるので、はやてにはこってり絞られていた。

～回想～

「なるほど・・・話は分かった。それは確かな情報なんやな?」

「うん、間違いないよ」

はやては腕を組み、難しい顔で考え出す。追憶の歯車(ノスタルジック・ギア)のデタラメな力に頭を抱えているのだ。

「欠片のくせに完全体と変わらんって・・・しかもそれが何個も?」

「うん・・・」

「どんだけの数があるのか分からへんし、何より一般人にも手にする機会がある。犯罪者に持ってかれてるかもしれへんし、それが堕(カ)ちた聖典(ラプト・バイブル)なら最悪や。確認されたメンバーの全員が頭のネジがイッてる奴らやで?悪用されでもしたら・・・!」

「大変なことになるね。しかも、意図的に過去を改竄するって事は、使われてから使用者が指定した期間の記録と記憶が消えちゃうって事だから、私達は使われても認識できない」

フェイトも苦々しげだ。何も分からぬままに、世界が塗り替えられていく。それは、どれだけ恐ろしいものなのだろう。歴史は意味

を為さなくなり、過去の記憶や経験に左右されるアイデンティティーすら曖昧となる。自分がいなくなり、そこにいる誰かが自分と変わらなくなる。ドッペルゲンガーよりもたちが悪い。そこにあるのは、自己否定と他人否定が混じり合う混沌だ。その恐ろしさに、フェイトだけでなくはやても戦慄する。

「この件は皆にも伝えておくな？報告ご苦労さま。」

「お願いします」

「けど、もうちょい早く知らせてほしかったな。聞いたのは数日前やろ？幽霊騒動の内容は私も大体把握してるけど、報告だけはきっちりしないと」

尤もな正論である。はやては書類仕事に追われていた為にシルヴィアとは会っていない。あくまで間接的、報告による認識である。対するフェイトはシルヴィアとは他のメンバーよりも接触した時間が長い。整理が必要だったこともあるが、長すぎるのも問題なのだ。

「申し訳ありません」

「ええよ、次は気を付けてな？さて、罰として・・・」

はやてはニヤニヤとフェイトの胸を見る。咄嗟にフェイトは胸を隠したが、かえってその姿は煽情的に見えてしまう。はやては手をワキワキと蠢かせながら飛びついた。

「自由へのダイブ！！」

「え、はやて！？い、いやぁぁぁぁ！！」

～回想・終～

「・・・・・・」

頭に浮かぶ忌まわしき記憶を振り払い、フェイトは更に説明を続けた。ただ、大まかな事を伝えるのみで深い所までは話さない。危険物である以上、細心の注意が必要なのだ。

「なるほど・・・完全に理解したわけではないが、それらしきものが無いわけではない」

「なんだって!?」

サウロンの思わぬ一言にアレンが大声を上げ、立ち上がる。皆に目を向けられ、口を押えて着席する。

「わるい、でも・・・出来すぎな話じゃねぇか?」

「そうでもない。フラグメントが出現した場所には高確率で欠片がある。現にオレの故郷でもそうだった。それがどうなったかまでは知らないがな」

「・・・・・・」

カノンの言葉にフェイトの胸がチクリと痛む。カノンは故郷に欠片があったことは知っている。恋人であったシルヴィアの役割を知っていた以上、それは明らかだ。だが、自身の身体に埋め込まれているなど考える事さえしていないだろう。騙している・・・事になるのかもしれない。だが、今は知らせない方が良い事は分かっているのだ。だから、痛む心を無視してでも嘘をつき続ける。

「そうか、そうだったな、悪い・・・」

「気にするな。で・・・説明は終わっただろう？そろそろアンタがさっきから口にする言葉の意味を教えてくれ」

ばつの悪い顔で謝るアレンにカノンは気にしていないと首を振る。

「そうですね。立場を気にせず、リゼットの友人として言わせてもらうなら、先程の言葉は許しがたいものなんですが？」

「ギンガ・・・？」

サウロンを真っ直ぐに見つめ、啖呵とも取れる発言を堂々とするギンガにリゼットは目を丸くする。

「そうだぜ？リゼットは俺の恩人でもあるからな、悪く言われんのは許せねぇんだ」

「そうですね。たとえ理由があったとしても、誰かの名誉を陥れていい理由にはなりません」

「アレン・・・？フェイトさん・・・？」

目を丸くしたままリゼットは自分を擁護する仲間の顔を見つめる。彼女とて打算で信頼関係を結んできたわけではないが、こうまではっきり言われると困惑するし、嬉しくもなる。

「なるほど・・・友、か・・・」

「その通りだ。だから、話してくれ」

目を閉じ、しみじみと呟くサウロンにカノンが最後の後押しをする。そこでリゼットの覚悟が決まった。

「皆、ありがとう。サウロン、これが今の私よ。もう、誰かの無責任な夢想なんて押し付けさせない。だから、私から話すわ」

「・・・・・よいのか？リゼット・ユースティア」

「ええ。ファンタズマゴリアに伝わる双子の魔法使いの物語と、禁忌の魔女の所以を、今から語るわ」

念を押すように名を告げられたリゼットは微笑むと、その表情を真剣なものに変え、語り始めた。

追憶１６～双子の魔法使いが夢見る世界　前篇～（後書き）

いかがでしたか？リゼットは大人からは恐れられていますが、子供には人気です。それも彼女のおねーさん気質故のこと。私もお姉さんがほしかったな・・・いや、お兄さんでもいいけど。

次回、タイトルにリゼットの過去が明らかに！ファンタズマゴリアに伝わる物語とは！？

それでは！

追憶１７～双子の魔法使いが夢見る世界　中篇～（前書き）

今回は長いです。この小説で初めて一万字を突破しました。

リゼットの過去と双子の魔法使いの物語です。

それでは、どうぞ！

追憶17～双子の魔法使いが夢見る世界　中篇～

「まず、双子の魔法使いについて話すわね？」

「ねぇリゼット、さっきから魔法使いって言ってるけど、魔導師じゃないの？」

話を切り出したリゼットにフェイトが尋ねる。一般的には魔法を使うのは魔導師だ。ベルカ式なら騎士と呼ばれるが、ミッド式魔導師とは遠距離特化か近距離特化程度の違いだけだ。魔法使いとしてイメージできるのはそれこそお伽噺に出てくる存在のみだ。

「魔法使いで合っています。旧暦の戦乱以前、まだ平和だった頃の話ですから。では、始めますね？」

そう言うと、リゼットは目を閉じて語り出した。ファンタズマゴリアの、双子の魔法使いの話を。

＊　＊　＊　＊　＊

遠い昔。争いの無かった頃、錯視する幻想（ファンタズマゴリア）と呼ばれる世界にとても優秀な魔法使い達がいました。双子の兄妹で、２人は離れる時がないほど仲が良かったそうです。兄の名はベネディクトゥス。妹の名はスコラスティカ。兄は強き熱情を秘め、妹は穏やかで慈愛に満ち溢れていました。２人とも幼いながらも強大な魔力を持ち、それを鼻にかけぬ強く美しい心を持っていました。人々は彼らを愛し、自らの子のように接していました。兄妹はただ、この穏やかな日常がいつまでも続くことを願っていました。

スコラスティカは魔導書に自らが研究し、造りあげた魔法を記していきました。その数は六百六十六。無尽蔵の魔力と高速の詠唱、それによる高威力の魔法がスコラスティカの力でした。対してベネディクトゥスは魔法もさることながら、武器を使った戦闘をもこなしました。彼の特徴であった自らの身長を超える大鎌。紅い水晶で造られたかのようなその大鎌を、彼は舞うように操り、スコラスティカを護りました。

彼らの住む土地が襲われた時、２人は常に前に立って人々を守り、導きました。彼らは敗北を知らず、相手を殺すことなく勝利を手にしていました。人々の暮らしは平和でした――――――そう、戦乱が訪れるまでは。

ベネディクトゥスとスコラスティカが生まれてから１０年を数えた年、その戦乱は起こりました。突然現れた永遠の名を持つ黒き鎧が、異形のモノを率いて全てを呑み込んでいきました。世界の人々は瞬く間に蹂躙されていきました。戦火は広がり、とうとう双子の住む土地にも及びます。住民達はただ迫りくる死に怯え、震えるだけでした。そこで、幼い兄妹は住民達を護るために立ち上がりました。死力を尽くして戦い、異形のモノ達を屠り、幼い身体に不釣り合いな血を浴び続けました。

けれど、どれだけ魔法を放っても、どれだけ鎧に斬りつけても、その黒い鎧には１つの傷もつける事はできませんでした。鎧の中心にある翡翠色の水晶で出来た歯車は、双子の決死の攻撃を巻き戻すように掻き消してしまったのです。それでも双子は傷ついていく身体に鞭打って立ち向かい続けました。

戦いは１週間に及びました。骨が折れ、魔力が尽きかける中、とうとう黒き鎧の隙をつき、ベネディクトゥスの大鎌が鎧の胸を貫き、その中心の歯車を砕きました。その一瞬の間に、スコラスティカは魔力の全てを使い切り、自身の持つ最大の魔法を使いました。青白い死が鎧を呑みこみ、周りの全て諸共消し去っていきました。

けれど、黒き鎧は未だ生き永らえていました。最早動けない双子の胸に剣が突き立てられました。黒き鎧がその場を去ろうとした時、兄妹は残された最後の時間を使い、ある魔法を発動させました。

魔法は鎧の四肢を縛り、水晶の中に磔にして捕えました。砕け散

った歯車は水晶に紛れて数多の時空の海に飛ばされ、散り散りになりました。鎧を捕えた水晶は1つの神殿を創り上げ、やがてそれすらも時空の彼方に消えたのでした。

後に残されたのは、冷たくなって動かない小さな2人の身体だけでした。人々は兄妹の死を悲しみ、彼らの亡骸を丁重に葬って奉りました。兄妹の武器は小さな社に奉られ、人々は信仰の対象としました。悲しみに暮れる人々は、やがてある誓いを立てました。この世界が、双子の兄妹が愛した穏やかな日々の幻燈となるように、錯視（アンタズ）する幻想（マゴリア）を本物とするために生きると。

やがて月日が過ぎ、世界が再び平和になった頃。このファンタズマゴリアでは、今も人々は双子の幻想を錯視し続けているのでした。

＊　＊　＊　＊　＊

「・・・これが、この世界に伝わる物語です」

閉じていた目を開け、リゼットは囁くように語りを止めた。物語というには余りに衝撃的な話に皆動揺を隠せずにただ黙り込む。

「ちょっと待ってくれ！ベネディクトゥスとスコラスティカ！？それ、お前が持ってる本の管理人格じゃねぇか！！どうなってるんだ！？」

「あ・・・え・・・！？」

最初に我に返ったのは意外にもアレンだった。両手を振り回し喚く。そう。リゼットの持つ魔導書の管理人格の名は、物語の双子と同じ名だった。そして、双子という点も同じ。ようやくその事実に気付いたのか、ギンガが呆けた声を出す。

「どういう事だ？まさか、リゼットの持つ魔導書は物語のスコラスティカの持ち物だったとでも言うつもりか？」

「然様。禁忌の・・・いや、リゼット・ユースティアが持つ魔導書は、確かにかつてスコラスティカが使っていたものと同じものだ。そして、ベネディクトゥスの大鎌もこの娘は所持している」

鋭い眼光でサウロンを睨むカノンが低い声で問い詰める。それに怯むことなく、サウロンは淡々と答えを返した。

「待ってください！その物語は史実なのですか！？そんな話は一度も・・・」

「知らぬのも当然。この物語はファンタズマゴリアに住む人間しか知らぬし、ここの人間は他の世界に旅立つようなことはしない。そうでなくても、物が残っているのだから、否定することは愚かな事ではないかね？」

「此処の人間は、ただ夢の中で幻想に縋っているだけに過ぎないんです。スコラとベニトは、そんな事を望んではいないのに」

フェイトが身を乗り出し、信じられないと叫ぶ。だが、サウロンは動じることは無く、抑揚のないしわがれ声でフェイトの考えを否定する。それを遮るかのようにリゼットが口を開き、苛立たしげに吐き捨てる。普段の落ち着いたどこか神秘的な雰囲気とはとはかけ離れたその姿にフェイトだけでなくカノンやアレン、ギンガ、そしてサウロンまでが息を呑む。それ程までに彼女の言葉は荒かった。

「どういう事？」

「スコラとベニトは、確かに平和な日々を愛していたけれど、そこに溺れる事を良しとはしていないわ。彼らが生きていた時の人々は、緩やかな時の流れでも輝いていたわ。でも、今の人々は違う。ただ

物語を理由にして無為に過ごすだけ。惰性で過ごす日々は夢のように穏やかだけれど、輝きはない。ただ心と身体を閉じ込める牢獄と同じよ」

声を荒げるリゼットを心配しつつも、フェイトは先を促す。まるで彼らの意思を知っているかのような物言いを不思議に思った事も理由だが、スコラスティカとベネディクトゥスの意思も気になったのだ。対するリゼットは未だ興奮が収まらないのか、激しい言葉遣いのままで言い切る。

＜＜そうだよ。ボク達はただ誰かの輝きを見る事が好きだった。でも、今の人は輝きなんか持っちゃいない。だからリゼットに呼びかけたんだ。偽りの輝きの中で、リゼットだけが本物だったから＞＞

＜＜鈍くて・・・虚ろな心は、皆を縛ってる・・・＞＞

「なんと・・・これは・・・」

現れたスコラスティカとベネディクトゥスが悲しげに俯く。彼らの存在を知らなかったのか、サウロンは目を見開き、驚きを露わにする。

「スコラ・・・ベニト・・・」

「やっぱり、スコラスティカとベネディクトゥスは物語の彼らと同一人物なの？」

ようやく落ち着いたのか、静かな声で現れた2人の愛称を呼ぶリゼット。フェイトは今一番気になる事を口にし、小さな2人に問いかける。

＜＜違うよ。ボク達は確かに同じ記憶や同じ性格を持っているけど、本人じゃない。ボク達は彼らが自分をサポートさせる管理人格を自分の人格をベースにしたんだ。自分ほど自分を理解した存在はいないからね＞＞

「・・・・・・・つまり？」

どこか得意げに語るベネディクトゥスにアレンが呆けた表情でぼんやりと呟く。アホ丸出しなアレンにベネディクトゥスは呆れの溜息をこれ見よがしにお見舞いしていた。

＜＜・・・前々から思ってたけど、その頭の悪さはどうにかしなよ、アレン。個性で許される時代はもう終わったんだよ？＞＞

＜＜アホの子は・・・ダメ＞＞

「うるせっつーの！！良いだろ、別に！！」

尤もというか、余りに現代的な発言をするベネディクトゥスに追随するようにスコラスティカが眉をひそめて断罪するように言い放つ。アレンは喚くが、バカの烙印を改めて押されたその姿は滑稽なものだった。

「そんな事はどうでもいい。要するに、サポートするのが自分と同じ思考を持つのなら、より強い力を呼び起こせる・・・そういう事だろう？」

＜＜そういう事＞＞

カノンはばっさりとアレンを切り捨てると、已然鋭い視線で射抜くようにベネディクトゥスを見る。それに頷いたベネディクトゥスは満足げにリゼットの肩に乗る。

「そういう事だったんだ・・・でも、それがリゼットが禁忌の魔女って呼ばれることと何の関係が・・・？」

「待て、その前に訊くことがある。永遠の名を持つ黒き鎧・・・その中心にある翡翠の歯車・・・これは追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車の事じゃないのか？」

フェイトがほっと息を吐き、もう一つの疑問を問おうとした時、カノンがそれを遮る。彼が発した問いは、緩み始めていた場の空気を再び凍らせた。

「あっ・・・」

「そう言えば、確かに能力が似ている・・？」

「スコラ、ベニト！何か知ってる！？」

思いがけず掴んだ手がかりに、ようやくフェイト達の思考が追い付いていく。慌ててリゼットが方に乗る2人の相棒に問うが、2人とも悲しげに首を振る。

＜＜ごめん、？彼ら？の記憶の中のものと、今探している物の能力は確かに一致しているように思えるよ。でも、それらはもう散らばってるから・・・＞＞

＜＜いろいろな世界にとんでいって、どこにあるかもわからない・・・＞＞

「そう・・・だったわね。ごめんなさい」

謝るリゼットにスコラスティカとベネディクトゥスは首を振る。力になれない事を悔やんでいるのか、力のない振り方だった。

「これまで通り、地道に探すしかないね。じゃあ、この話は一旦お終い。今できる事に専念しよう？と、いう事で・・・」

「・・・・・・はい」

フェイトは気を取り直すように手を叩くと、キッパリと話を終わらせる。どうしようもない事をいつまでも悩んでいても、状況が好転する訳ではない。それが解っているからこその行動だった。フェイトがリゼットを見つめ、リゼットもまた強い視線でフェイトを見つめ返すと、全員を見回す。

「話しましょう。私が禁忌の魔女と呼ばれる所以を」

「「「「・・・・・・・」」」」

厳かに告げるリゼットに皆が息を呑み、注目する。どこか妖艶で神秘的な姿に、皆リゼットの魔女の異名が間違いに思えなくなってきていた。

「私には・・・兄がいました。それも、物語のように双子の兄です。優しく、芯の強い人でした」

「双子・・・」

告げられた事実に、意外にもフェイトは冷静でいられた。何故かはわからないが、何処かで覚悟していたのかもしれない。

「本来なら、このファンタズマゴリアでは喜ばしい事です。伝説の物語の再来となる筈でしたから。でも、そうではなかった。私達の生まれが、そのまま禁忌だったんです。その理由は・・・」

双子の兄妹であるならば、それは物語の兄妹と同じ生まれ。確かに喜ぶべきものかもしれない。だが、生まれた時から禁忌、とリゼットは言った。その理由が分からずに、皆は眉を顰める。

「私達の親は・・・実の兄妹だったんです。双子では・・・なかったようですが。禁じられた愛の果ての子供・・・それが私達です。集落の人々はそれを許さなかった。皆が両親を弾劾し、処刑したのです。私達も捨てられました。でも、何の因果か、私達は生き延びたのです。けれど、そのまま成長したところで、集落に私達の居場所は無かった」

捨てた筈の子供が生き延び、再び自分達の前に姿を現す。しかもその子は禁忌の子なのだ。さらに、伝説と同じ双子。集落の人々にとって、それは災厄よりも恐ろしいものだったのだろう。

「私達は集落の奥にあるみすぼらしい小屋で成長しました。兄は身体が弱く、長い命ではありませんでした。丁度１０歳の時、病の果てに亡くなりました。最期の瞬間にも、兄は笑っていました。生きていれば、いつかは幸せが見つかるよ、と、そう言って・・・本当に静かに、眠るように亡くなったんです」

近交弱勢というものがある。遺伝子が近い者同士が交配した場合、劣性遺伝子に隠された有害遺伝子がホモ接合化、有害形質が表面化するものだ。繰り返して行き過ぎれば、やがてそれは絶滅へと繋がっていくことになる。リゼットの兄には、それがいきなり出てしまったのだろう。

「けれど、私は逆でした。ボトルネック効果とでも言えばいいのか・・・恐らく、２人同時の死を防ぐための遺伝子の悪戯でしょう。私の遺伝子は、他の人たちと違って、生き延びる事に特化していました。病にかかりにくく、怪我の治癒能力が高いんです。それに、魔力量もまた成長するにつれて大きくなっていきました」

ただ１人残された幼い少女。だが、誰１人手を差し伸べる事は無かったのだろう。禁忌は遠ざけなければならない。平穏という夢想を錯視し続けるために、守るべき幼き命を見捨て続けたのだ・・・

・・その罪深さに気付かぬままに。

「それが、禁忌の名に拍車をかけました。兄の命を吸い、生き延びた魔女。罵られ、虐げられ続けた私はいつも1人でした。私のできるのは、1人で生きていけるようになった時、この牢獄を抜け出すことを誓う事だけ」

どれだけの苦痛が、彼女を襲ったのだろう。周りの全てが敵。集落の悪意を一身に受け続ける地獄のような日々の中で誰一人信じられぬまま、誰にも顧みられぬまま、少女は独りきりの生活を強いられたのだ。

「それでも救いはできました。兄の死を嗅ぎ付けたのか、数人の幼い子供達が私をからかいに来たんです。石を投げられ、木の棒で叩かれて。でも、私は抵抗なんてしなかった。ただ黙って立って、耐え続けました。そうなれば当然、血は流れます。私の血に怯えたのか、動きの止まった彼らに、私はこう言ったんです」

自分は、皆と何も変わらない人なのだと。誰かの死を悲しむ感情を持ち、傷つけられれば血を流し、何時かは死んでしまう脆弱な存在なのだと。

「その時からです。だんだん子供達は集まってくれるようになりました。皆で食べ物を持ち寄っては料理して、日が暮れるまで遊んで。皆で笑いあって、だんだん生活が楽しくなっていたんです。まぁ、

それが今度は子供を誑かす魔女と陰口をたたかれる原因になりました。でも、私はそんな事気にしなかったし、子供達も親に怒られても私の元に来ることをやめないでいてくれました」

色のなかったはずの生活にただ一つ加えられた色。だが、彼女にとってそれはどんな色よりも美しいものだった。

「そんな毎日を過ごすようになって、12歳の夏。子供達のためにせめて木の実だけでも採ろうと森に向かう途中、小さな社で休憩を取りました。誰も世話をしていなかったのか、雑草だらけで苔に覆われていました。どうしてか気になって、入ろうと試みたんです。鍵は既に錆びついていて、扉はすぐに開けられました。そうしたら、見つけたんです」

そこでリゼットは肩に乗るベネディクトゥスとスコラスティカを愛おしげに見つめ、その頬を撫でる。

「一冊の魔導書と、紅い水晶の大鎌。社の全てが古びていたのに、それらだけは完璧な状態でした。私も物語は知っていましたから、それが何であるかはすぐに推測できました・・・・・・まぁ、半ば半信半疑だったのですけれど。それに興味を持って、手に触れた瞬間、いきなり認証が始まったんです。訳の分からぬままに名前を告げて、光が溢れたかと思ったら、この子達が浮いていたんです」

偶然か、はたまた必然か。恐らくは両方が奇跡的に絡まったのだ

ろう。ベネディクトゥスはリゼットに呼びかけた、と言っていた。だが、その声が聞こえたという話は出ていない。リゼットが社を見つけたのは偶然だろう。だが、突然の認証はベネディクトゥスが呼びかけた結果の必然だ。

「突然の事で呆けていたら、溢れた光が見えたのか、集落の人々が集まってきました。私の手の中にあるものを見つけると驚き、すぐに罵倒し始めました。彼らにとってそれは当然でした。禁忌の魔女に、神聖な物が犯されたように感じたんでしょうね。けれど、罵倒される私を子供達は庇ってくれたんです。涙を浮かべて、必死に言い返して。嬉しくて泣きそうだったけれど、その場で泣くことはできなかった。しびれを切らした大人の1人が投げた小石が、運悪く子供の頭に当たってしまったんです。幸い大きな怪我ではなかったけれど、それが私の怒りに火をつけました」

リゼットと交流を持った子供達だからこそ、理不尽に罵倒される彼女を放っておけなかったのだろう。小さな彼らにとって最大の難敵である親に逆らってまで、リゼットを護ろうとした。どれだけの恐怖が襲っただろう。それでも、小さな勇気を振り絞った彼らを、大人達は踏みにじったのだ。彼らの小さな勇気と誇りを、たった一つの行為で踏みにじった。

「それが、私の最初の戦闘でした。魔法を使うのは初めてだったけれど、ベネディクトゥスとスコラスティカがサポートしてくれたおかげで何とかできました。殺すことはいつでもできたけれど、私は殺さなかった。私の為に勇気を振り絞ってくれた子供達を裏切ることはできなかったから。でもやっぱり、それが一番正しい選択でし

た。傷ついた大人達を家に帰し、私達も戻りました。小さな祝勝会、でしたけど。私にとって、ようやく救われた瞬間でした」

そこからは、皮肉と言うしかない状況となった。大人達は子供に背を向け、自分達の思うままの平穏を演じはじめたのだ。それはもう、狂った人間の行動だった。自らが抱く幻想に溺れ、理想の日々を錯視するなど、狂っていないとどうして言えるだろう?ただ、リゼットの状況は１８０度変わった。大人達は彼女を恐れ、罵倒することはなくなった。徹底した無視は変わらなかったが、集落に顔を出すことも可能になり、子供達と接し続けた。親に背を向かれた子供達は、年が他よりも大きい少年や少女が世話をしていた。大人達を引っ掻き回し、平穏な日常を壊す、小さなレジスタンス。だが、大人達は抗う事は出来ないのだ。平穏な日常を演じていなければならないから。その滑稽な姿を自分たちの手で作り出すのは、なかなかに刺激的な毎日だった。

「それから一年ほど経って、私は管理局に入局しました。他の世界を見たい、というのが一番最初の理由でしたけど・・・でも、管理局に入ればファンタズマゴリアのおかしな状況を打破できる・・・そう思ったんです」

これで、私の話は終わり、とリゼットが囁くように言うと、何とも言えない空気が漂った。だがそれはリゼットを拒絶するようなものではなく、どこか暖かい雰囲気だった。

「リゼットねーちゃん!!一緒にご飯食べよう!!」

と、大きな音を立てて扉が開かれる。同時に現れた男の子が満面な笑顔で言うのを皆がポカンとした目で見、しばらくの沈黙の後に皆が笑い出した。

「な、なんだよぉ・・・」

「いいえ、なんでもないわ。この人達も一緒でいい？」

「もちろん！皆待ってるよ。早く行こう！！」

男の子に手を引かれ、リゼットがまず外に出る。皆もそれに続いた。

「・・・フェイト執務官、と言ったか。リゼットを頼みます」

「ふふっ・・・あの子には私以外の頼もしい上官がついていますから。でも、ありがとうございます」

しわがれ声でそんな事を言うサウロンにフェイトは常に穏やかな笑みを浮かべる友人を思い浮かべながら笑う。それに満足したようにサウロンは屋敷の中へと消えていった。フェイトはしばらく閉ま

った扉を眺めると、微笑んで先に行った皆の後を追った。

そこからはお祭り騒ぎだった。リゼットが語る他の世界の話に子供達は夢中になり、外の世界に思いを馳せた。アレンをからかって弄り倒したり、料理に舌鼓をうち、やがて疲れて眠るまで食事という名の大宴会は続いた。

「ふっ・・・」

子供達が寝静まった頃、カノンは1人外に出て夜風に当たっていた。既に他の家々も明りが消えており、真っ黒な服のカノンは闇に溶け込んでいた。その頬を生温い風が撫でていく。と、足音が聞こえ、振り返るとそこにはフェイトが佇んでいた。

「フェイト」

「きゃっ!?カ、カノン!?ビックリした・・・。黒いから全然わからなかったよ」

失礼な事を言いつつもフェイトはカノンに向き合う。カノンはどこか寂しげな瞳で夜空を見上げていた。その横顔を見つつ、フェイトは隣に並ぶ。

「どうかしたの？」

「いや・・・少し考えていた。小さいな・・・と」

「小さい？」

問い返したフェイトにカノンは頷く。その言葉の意味が解らずにフェイトは首を傾げる。いったい何が小さいというのだろうか。

「いや・・・不幸に特別なんかなくて・・・そう、誰にでもある事で・・・いや、何と言えばいいのか・・・つまり・・・」

「・・・・・・？」

いまいち要領を得ない発言をするカノンは珍しくも困惑しきった表情で、あー、とかうー、などと唸るその姿はどこか愛嬌がある。こみ上げてくる笑いを堪えつつもフェイトはカノンの言葉を待った。

「自分だけが不幸なんかじゃなくて・・・かといって他がもっと不幸かと言えばそうでもない。不幸かどうかはそいつ自身が決める事で・・・全部捉え方次第で決まってて。要するに、特別だと思っていた自分が恥ずかしい、と言うか・・・」

「・・・痛い人だったって事？それが、恥ずかしい？」

フェイトのある意味的を射た発言にカノンは何かが突き刺さったかのような苦悶の唸り声を上げると顔を顰めた。カノンの言いたいことはフェイトにも理解できた。要するに、カノンはかつての無気力な自分を恥じているのだ。失って悲しいから、辛いから動けない。だから諦める。そんな風に自分を美化し、甘やかしていたと言いたいのだろう。

「・・・そういう事だ。シルヴィアを失った事は今も悲しいし、辛い・・・けど、だからと言ってそこで止まっていたら、何にもならないんだ。だから・・・そう、目が覚めた・・・そんな気分だったんだ」

「そっか・・・。カノン、私はね、悲しかったら止まってもいいと思うんだ」

星空を見つめて動かないカノンにフェイトはカノンとは逆の事を言う。不思議そうにフェイトを見るカノンをフェイトは真っ直ぐに見つめる。

「悲しむのを止めちゃったら、きっと私達は大事な事を見失っちゃうから。止まってるってことは、休んでるのと同じなんだよ。たくさん休んで、立ち上がって走れるだけの元気が出たら、今度は少し

だけゆっくりなペースで走るの。それが、乗り越えるって事なんだよ」

「・・・・・・」

カノンは優しすぎたのだ。それは悪い事ではないが、カノンの場合それが仇になった。その結果があの無気力な姿だ。だが、フェイトはそれを休んでいただけと言う。そして、また立ち上がって走れると言う。その言葉は何故かカノンの心の奥を揺らした。

「・・・・・・そうか。そういう考え方もあるんだな」

「そうだよ?結局、考え方次第で良くも悪くも変わるんだよ」

「ああ・・・本当に小さいな、オレは」

カノンは星空から降り注がれる光を浴びるように目を閉じ、そんな事を呟いた。そんなカノンに寄り添うようにフェイトは身を寄せた。

(今なら走れるよ、シルヴィア・・・)

温もりを感じながら、カノンは目を開け、再び星をその瞳に映した。そんなカノンの思いに答えるように、流れ星が一条流れた。

＊　＊　＊　＊　＊

カノンとフェイトいる場所を見下ろせる場所、子供達が住む家の屋根の上でリゼットは夜風を浴びていた。そこに、アレンが登ってくる。

「紅茶、入れてきたぜ」

「あら、ありがとう」

リゼットは渡されたカップを両手で包み込むように持つと屋根に座り込む。

「隣、いいか？」

「いいわよ？というか、知らない仲でもないんだから、遠慮しないで」

「サンキュ」

アレンも座ると、その手に持ったコーヒーを飲む。

「どうかした？」

「いや・・・なんというか」

「？」

珍しく歯切れの悪いアレンにリゼットは不思議そうに見つめる。
その視線を受けたアレンは更に焦ったように視線を動かすと、ようやく口を開いた。

「いや・・・謝っておこうと思ってさ。あの時、迷惑かけたから。ひでー事も言ったし。だから・・・ごめん。うっ・・・ええっと・・・あ、ありがとう」

「・・・・・・」

照れつつもしっかりとした目でリゼットを見つめ、謝罪と礼をするアレンにリゼットはしばし沈黙する。アレンが言うのは1年前の事だ。その当時、アレンは他の隊員と折り合いが悪く、孤立していた。ただ1人リゼットが声を掛け続けたが、アレンはそれさえも拒絶していた。結局、教導に来た刹那によって文字通りぶっ飛ばされ、ようやく和解できたのだった。

「あれは私じゃなくて、刹那さんでしょ？」

「いや、そうなんだけど・・・でもさ、お前、ずっと俺に声かけてくれてたろ？今だから言うけど、すげー嬉しかった。けど、俺と関わったらお前もなんかされるかもしれなかったから、ちゃんと聞かなかった。悪かったよ。んで、ありがとう」

「・・・・・・」

言いたいことを言い切ったのか、アレンは立ち上がると伸びをする。その顔が紅く染まっているのは間違いない。慣れない事に照れがあったのだ。無言で見つめるリゼットを見ると、ニッと口角を上げる。

「まぁ・・・さ。色々あったのかもしれないけど。でも、俺はリゼットと会えたこと、良かったと思ってるからな。だから、これからもよろしくな？」

「・・・・・・ええ」

アレンは空になったカップを持つと屋根を飛び降りた。着地に失敗したのか、「んぎゃっ」と悲鳴が聞こえたが、リゼットは笑う事もなくアレンが飛び降りた地点をずっと見つめたままだった。

「・・・・・まったく、いきなり言うから驚いたじゃない。ありがとうなんてこっちのセリフよ・・・・・ありがとう」

リゼットが話をしている時、アレンはずっと震えて俯いていた。それは恐怖ではなく、怒りだ。どちらに怒りの矛先があったのか、言うまでもない。話している間、リゼットは何度も折れそうになったが、アレンの姿で逆に落ち着いて話ができた。

「今夜は星の綺麗な夜ね・・・眠るのは、惜しいかしら」

少しだけ紅くなった顔を星空に向け、リゼットは微笑んだ。それは、普段の大人びた優雅なものとは違い、少女らしい明るいものだった――――――

追憶17～双子の魔法使いが夢見る世界　中篇～（後書き）

いかがでしたか？重いながらもそれなりに救いのある話だったと思います。近親婚をすると遺伝子リスクが大きくなる事については本当らしいです。ただ、近親婚で出来た子供は非摘出子として認知することは可能らしく、戸籍には近親者同士が名を連ねることになるそうです。認知していない場合は養子縁組として実父が空欄、養父として登録されるそうです。まあ、本来近親者同士の結婚は禁止されてますし、かなり例外的な措置らしいです。

次回は任務の話です。お楽しみに。それでは！

追憶１８～双子の魔法使いが夢見る世界　後篇～（前書き）

前回から間が空いてしまいました、お詫び申し上げます。

今回は任務の話。カノンに関係するあの人も登場です。

活動報告にも書きましたが、諸事情により、これからしばらくは更新スピードが落ちそうです。なるべく早く更新できるようにしますが、どうかご了承くださいませ。

それでは、どうぞ！

追憶１８～双子の魔法使いが夢見る世界　後篇～

翌朝。全員の確認を取ると朝食をとり、調査へ行くこととなった。何事も早い方がいいし、フラグメントに追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車を見つけられてはたまらないという理由もあった。子供達に見送られ、カノン達はフラグメントがいるという場所を目指していた。

「でもさ、アレだよな」

「なに？」

どこか不機嫌な様子でアレンが口火を切る。それにリゼットが反応した。

「あの集落の奴らだよ。子供はともかく、あいつ等俺達の事を完全に無視してたろ？」

「そういう人達なのよ。言っておくけれど、他の集落も大差ないわ」

「マジかよ・・・リゼット、お前には悪いけどさ、俺この世界あんまり好きになれそうにねーわ」

「あら、言わなかった？この世界は誰かの夢。自分の夢を見ることは許されない。そういう世界よ？」

顔を顰めて嫌そうにそんな事を言うアレンにリゼットは嫌な顔をするどころか笑みまで浮かべて答える。子供達の事は抜きに考えても、リゼットの言葉は的を射た発言だった。いや、リゼットは最初からそのような事を繰り返し言っていた。あれは比喩でも何でもなく、真実そのものだったのだ。

「ん・・・もうすぐ着くよ。皆、注意してね」

「・・・・・・」

目撃情報があった地点まで近づくと、フェイトが皆に注意を促す。言いながらフェイトはカノンをチラリと見るが、特に変わりなく遠くを見るように目を細めている。それにほっとしつつも、フェイトにはある懸念があった。それは前回の任務で、カノンに一斉に襲い掛かったフラグメントの事だ。原因はカノンの中に隠されている追憶の歯車（タルジック・ギア）（ノス）の核だが、今回もまた同じことになるかもしれないのだ。前回は人数がいた為に何とかなったが、今回は一分隊程の人数だ。同じ数で攻められたらどうなるか分からない。

「此処には探し回っただけのようですね。荒れてはいますが、原生物が襲われた形跡も、人が襲われた形跡もありません」

「そうだね。でも、じゃあなんで現れたのかな・・・もちろん、フラグメントのいた場所にそのまま追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）がある訳じゃないのは解ってるけど、それにしたって・・・」

ギンガの報告にフェイトが考え込む。その場の違和感が大きすぎるのだ。踏み荒らされた草木は精々半径２０メートル程で、移動したのだとしても移動した形跡が見当たらない――――――

「・・・・・・え？」

フェイトは浮かんだ自分の考えに戦慄した。そう、移動した形跡がまるで無いのだ。何処から来て何処へ行ったのか、その足跡が全く無い。まるで急に現れてから探し回り、再び消えていったかのような――――――。

「・・・・・・？これは、人の足跡か？」

「え？」

フェイトが思考を止めていた間にカノンが何か見つけたのか、屈んでいく。皆も集まって確認すると、それは確かに人の足跡だった。フラグメントの足跡に紛れ、見過ごしていたらしい。ぴったりと揃えられたやや大きめの足跡と、それの１、２センチメートル程しか

違わない足跡。

「女性にしては大きいわね。やっぱり男性かしら？」

「そうね。でも、そうするとカノンさんやアレン君も該当するじゃない？」

リゼットが興味深げに覗き込み、考察を始める。ギンガも加わり、メンバー内の男性陣２人に目を向けた。

「いや、ちげーよ。確認したけど、靴の模様が違う」

「オレも同じだ。大体、両方不自然なまでに揃えられているだろう？オレ達はそんな風に立ったことは無い。これはむしろ・・・」

アレンは靴の後ろを全員に見せるように掲げ、模様の違いを確認する。カノンは顎に手をあて、冷静に状況を判断したうえでの否定だった。

「・・・・・転移の跡。そういう事？」

「・・・ああ。そうでもなければこんな跡はつかないだろう」

カノンが言いかけた考察をフェイトが引き継ぐ。チラリとカノンに目を向けると、カノンもまた見返し、真剣な眼で頷いた。何故だか一瞬心が通じ合ったようで恥ずかしくなり、フェイトは慌てて頭に浮かんだ思考を振り払う。一体自分は何を考えているのか。少なくとも、今は任務中なのだ。

「謎が増えちまったな。っていうかこいつら、フラグメントと一緒にいたのか？フェイトさんが言ったみたいに転移だとしたら、こいつらが呼び出したって事になるだろ？だとしたら何者なんだよ」

「っ・・・！？まさか、堕ちた聖典（カラプト・バイブル）・・・！？」

「堕ちた聖典（カラプト・バイブル）・・・犯罪者集団が何故・・・っ！？まさか、追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車を狙って・・・！？」

アレンが何気なく疑問を発する。それはフェイトやカノン、そして皆の思考を一瞬にして凍らせた。フェイトは衝撃からいち早く立ち直ると、はやてから聞かされた犯罪者集団の介入の可能性に行きつく。リゼットも困惑していたが、フェイトと同じ可能性に行きつくと戦慄する。そう、堕ちた聖典（カラプト・バイブル）は追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車を狙う犯罪者集団。もしかしたら、フラグメントを利用しているかもしれないのだ。その恐るべき可能性に皆が気づき始めると、一様に表情が凍っていく。そこに、遠くから声が聞こえてきた。

「・・・ーい！おーい！！リゼットねーちゃん！皆！」

「！？どうしたの！？危ないんだから来ちゃ駄目でしょう！？」

近づいてきたのは１人の男の子だった。ひどく慌てたその顔には恐怖と混乱が刻まれている。思わず叱ってしまったリゼットだが、それにも構わずに男の子は両腕を振り回した。

「それどころじゃないんだって！大変、大変なんだよ！」

「どうした！？」

カノンがいち早く反応する。嫌な予感がカノンを覆っていく。それを振り払おうとしながらも、男の子の顔を見るだけで最悪の想像が当たってしまった事が解った。

「変な二人組が集落に襲ってきたんだ！僕たちはすぐ逃げ出したけど、大人はダメだ！」

「まさか・・・！」

カノンの脳裏に7年前の悪夢がフラッシュバックする。どうやら子供達だけは無事のようだが、大人達は手遅れになってしまったらしい。ギリッと音がなるほど強く歯噛みすると、カノンは一気に集落に駆けだした。

「カノン、待って！・・・皆、行くよ！」

「「「「はい！！」」」」

慌ててフェイト達はカノンを追いかける形で集落に急いだ。

＊　＊　＊　＊　＊

「チッ・・・どうして無いんだ・・・・！？」

「あ、あぁぁぁ・・・」

集落が炎に包まれている。？彼？は苛立ちに声を荒げながらも、その眼は冷徹に恐怖に震える男性を見つめている。？彼？にとって、この集落の住人に価値はない。いや、たった2人を除いたそれ以外の人間を最早人間と考えてはいなかった。だから、手に持った大剣をこの哀れなナニカに振り下ろす。命乞いをするように腕が上がったまま、男性の顔は信じられない、と語っていた。その浅ましさに更に？彼？の苛立ちが増していく。

「随分と苛立ってるじゃねぇか、ええ？レオンの坊主」

「苛立ちもするさ。目当ての物が見つからないからな。それを言うなら、アンタも随分余裕じゃないか。なぁ、ジェレミア？」

レオンと呼ばれた？彼？はその黒髪を苛立ちに掻き毟りながら朱い瞳で近づいてきた男を睨む。男――――――ジェレミアは面白がるように口角を上げると手に持っていた斧剣を肩に担ぐ。

「ふん。最初から解りきっていた事だろう？見つかろうが見つかるまいが、いちいち喚くなよ、小僧」

「ぐっ・・・」

上から目線で言われても、レオンには何も反論できなかった。悔しげに表情を歪める彼を余所に、ジェレミアは遠くを見つめると、驚嘆の声を上げる。

「管理局か。随分とお早い到着・・・ん？」

「どうした？」

急に警戒した様子になるジェレミアにレオンは訝しげに声を上げる。この常に傍若無人な人物からは想像ができないぐらいの変化に、レオンもつい警戒度を上げてしまう。

「いや・・・会いたくねぇ顔が１つあった。俺は帰る」

「なに・・・？」

アレンが振り返る間もなく、ジェレミアは転移で消えていた。残されたレオンは訝しがりつつも近づいてくるという管理局員に目を向けた。すると、遠い過去の記憶と重なる姿が見えた。懐かしさと疎ましさが一緒になった複雑な面持ちで、レオンはかつての親友を迎えた。

＊　＊　＊　＊　＊

「お前は・・・」

炎の中に立ち尽くす青年。黒髪に隠れる朱い瞳がカノンを射抜く。

硬直するカノンに追いついたフェイト達もまた、目の前の青年に動きを止められていた。

「・・・・・久しぶりだな、親友」

「レオン・・・お前が、これをやったのか・・・？」

再会とするには余りにも殺伐したものだった。視線に感情を滲ませず、だだ言葉だけの確認をする。

「此処の連中は子供の方が優秀だな。奴らはどこかに逃げた。だが、追うつもりはない。俺の目的は１つだ」

「待ちなさい。貴方は、堕ちた聖典（カラプト・バイブル）の一味ですか？集落を襲ったのは・・・」

「そうだ。俺は堕ちた聖典（カラプト・バイブル）の１人。ついでに此処を襲ったのも俺を含めて２人だ。大人連中のうち、半分はフラグメント共が喰った。後は俺ともう１人で殺しつくした」

淡々と自らの行為を語るレオン。フェイト達の鋭い視線を浴びても意に介すことは無く、ただカノンを見据えるのみ。

「そうか・・・なら・・・っ！」

「ふん・・・やる気か？俺と？たかが７年程度磨いただけの剣の腕で？」

アスフォデルスセットアップし、黒いコートと全身を縛る鎖に身を包み、双刃を逆手に構えるカノンにレオンもまた大剣を逆手に持ち、挑発する。

「それもいいがな・・・ほら、見ろ。フラグメント共が隠れたネズミに気付いたぞ？放っておいていいのか？」

「・・・・・っ！？」

「カノン、私達が行く！カノンはその人を・・・！」

レオンの言うとおり、フラグメントの群れは一様に１つの場所に向かって進んでいる。恐らくそこに子供達が隠れているのだろう。息を呑むカノンの側をフェイトが駆け抜けながら懇願する。アレンやギンガ、リゼットもまたフェイトに続く。一瞬だけ振り返ったリゼットの目には確かな信頼があった。その視線を受け、カノンは一度目を閉じる。再び開けられたその眼には決意があった。カノンが一瞬でレオンとの距離を詰める。レオンもまた、迎撃すべく飛び出

していた。

「レオォォォォォォン！！」

「ゼアァァァァァァ！！」

双刃と大剣がぶつかり合い、火花を散らす。交差する刃の奥で獣の瞳が２つ、殺意を交錯させていた。

＊　＊　＊　＊　＊

「皆！大丈夫！？」

「リゼットお姉ちゃん！」

駆けつけたフェイト達を子供達が迎える。皆恐怖を滲ませていたが、気丈にも泣き出すような子はいなかった。

「皆は隠れててね。私達がフラグメントを倒すから」

「・・・・・お願いします。皆を、助けて・・・」

フェイトが一際小さな子の頭を撫で、安心させるように笑う。それを見て子供達のリーダーであろう少年が不安げな、しかし信頼を以てフェイト達を見据えていた。フェイト達は揃って頷くと、それぞれのデバイスを起動させる。

「バルディッシュ、セットアップ！」

＜＜Ｓｅｔ　ｕｐ＞＞

「ブリッツキャリバー、セットアップ！」

「ウト・ナビシュティム、セットアップ！」

＜＜Ｓｅｔ　ｕｐ＞＞

それぞれがバリアジャケットに身を包み、フラグメントを見据える。リゼットもまた、魔導書であるスコラスティカを展開していた。

「リゼットお姉ちゃん・・・」

「・・・大丈夫よ。皆の事は、私が・・・私達が守るわ」

「・・・うん！」

優しく微笑むリゼットに不安げだった子供の顔が満面の笑みに変わる。リゼットは頷き返すと、前を向いて一歩踏み出した。

「ベニト、準備はいい？」

＜＜もちろん。化け物の手前だからね、遠慮することなしに散らし

てあげよう＞＞

リゼットとベネディクトゥスは不敵に笑いあう。目を閉じ、その一言を叫んだ。

「＜＜ユニゾン・イン！＞＞」

リゼットのシャトルーズグリーンの髪が瑠璃色に染まり、エメラルドグリーンの瞳は金色に変わる。

「我が命によりその理の禁を解く。彼方より来たれ、破魔の結晶、断罪の鎌よ！」

詠唱と共に、紅い水晶の大鎌――――――ベネディクトゥスが召喚される。リゼットは大鎌を手元で一回転させ、構えると不敵に笑い、言い放つ。

「来なさい、化け物。魔女の神髄、見せてあげるわ！」

「――――――！！」

咆哮を上げて迫るフラグメントの群れを前にリゼットは揺らがな

い。不敵な笑みを維持したまま、一気に飛び出す。横薙ぎに振るわれた大鎌は、数体のフラグメントの首を一瞬で斬り飛ばしていた。

「ハーケンセイバー！！」

「はぁぁぁぁぁ！！」

金の光刃がフラグメントを切り裂いていく。その後を追うようにギンガが突撃、無駄のない動きで屠っていく。

「俺も忘れんなよ！」

アレンが叫びながらリゼットを追い越していく。一瞬で突進すると左の鉄鞭を突き刺し、右の鉄鞭でとどめの一撃を放つ。刹那の技である「優美なる行進曲（エアリー・マーチ）」をアレンは自己流で改良し、自身の技としていた。

「負けてられないわね・・・」

＜＜まあ、アレンに負けるのは嫌だね。それより、さっさと終わらせてしまおう？＞＞

フラグメントを屠りながらも仲間の動きを見て苦笑するリゼットにベネディクトゥスは憎まれ口を返す。それにまた苦笑しつつ、リゼットは更に鎌を振るスピードを上げた。

「そう・・・ね！！」

４人は動き回りながらも一定のラインを越えさせず、無駄を徹底的に排除した動きで効率よくフラグメントを屠っていく。フラグメントの数はそれほど多くないのか、新たに出る様子もなく、ただその数を減らしていった。

「フェイトさん！殲滅します！」

「うん・・・アレン、ギンガ、下がって！」

リゼットがスコラスティカを開く。フェイトもアレンとギンガを下がらせつつ、掌に魔力球を作る。

「我が命によりその理の禁を解く。天上より注がれし月光の福音、その微笑みで穢れを浄めよ！」

「トライデント・・・」

上空に巨大な魔法陣が描かれる。それは輝きを増すと同時に所々でパルスを奔らせていた。また、フェイトの掌の光球も大きさを増す。

「ムーンライト・ピュリフィケイション！！」

「・・・スマッシャー！！」

光の奔流がフラグメントを呑みこんでいく。同時にフェイトから放たれた三叉の砲撃も加わり、フラグメントの群れはその存在を塵に還していく。その塵が晴れると、後には何も残ってはいなかった。

「はぁ・・・」

「だ、大丈夫？」

ユニゾンを解き、元の髪と瞳の色に戻ったリゼットは溜息を吐くと地面に座り込む。余程緊張していたのか、息が荒かった。ギンガが近づき、声を掛けるとリゼットは汗を拭いながら満足げな笑みを浮かべる。

「ええ・・・大丈夫。少し疲れたけれど、そうも言ってられないで

しょう？」

「そうだね。皆、カノンの所に行こう」

リゼットが息を整えながら立ち上がる。フェイトが皆を見回しながら号令を出し、真っ先に走り出す。皆はすぐにそれを追った。

＊　＊　＊　＊　＊

「はぁぁぁぁぁ！！」

「らぁっ！！」

咆哮を上げながら剣が交差する。乱舞するように激しい連撃を放つカノンの斬撃に対し、レオンは一撃が重い。武器による攻撃の仕方に違いがあるのだろう、カノンがスピードを重視するのに対し、レオンはパワーで押し切るタイプだ。既に2人は非殺傷を無視し、互いの急所を狙って斬撃を繰り出している。2人の身体には回避しきれなかった傷が幾つもできていた。

「・・・7年前の俺達の境遇とこの集落の末路は同じだ。何も思わないのか？」

「知るか！俺は追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を手に入れる！そうすれば、何もかもが元に戻る！あの日々が戻る！シルヴィアも・・・お前も！」

「っ・・・！」

振り下ろされる大剣がレオンの一言ごとに重さを増す。受け止め、いなし、躱しつつカノンは歯噛みする。激情を剣に乗せるレオンに浮かぶ表情は今を捨てた人間のそれだ。自分もかつてはそんな表情だったのだろうかとカノンは冷えていく頭で考えた。カノンとて、かつて過ごした日々に郷愁が無いわけではない。だが、シルヴィアと再会し、言葉を交わしたことがきっかけで前に進もうとしてきた。

そして、リゼットの話でその思いは更に強まったのだ。だから、想い出を想い出のままにできる。レオンの描くものに、何の魅力も感じなかった。

「・・・・・変わったな、お前。昔はそんな激情家じゃなかったくせに」

「変わったのはお前だ！シルヴィアを取り戻そうともせず、ただ無為に彷徨うだけ！お前は俺達との思い出をお前は捨てた！そんなお前に、シルヴィアを愛する資格など無い！」

「ぐっ・・・」

レオンの大剣がカノンの腹を掠める。続いて横薙ぎされた剣を弾き、距離を取る。レオンの言葉は棘――――――いや、槍と同じだ。彼が言葉を発する度、それはカノンに突き刺さる。確かにカノンは無為な日々を過ごしていた。失った日々を取り戻そうとするレオンからすれば、それは裏切り同然のものなのだろう。いや、カノンにも自覚はある。これまでの7年は、確かに裏切りだった。だが、それはレオンの考えるものではない。失ったものは、取り戻せない。だからこそ、新しいものを得るために人は過去を想い出に変えて未来へ進む。これまでの裏切りは、未来へ進むはずだった自分に対してだ。そして、自分を見てくれていたであろうシルヴィアに対しての。決して、レオンの言う過去に囚われ続け、取り戻そうとする事に対してではない。

「オレは・・・前に進むと決めたんだ。約束したから・・・想い出は、想い出のままでいい！」

「なっ・・・！貴様ァァァァ！！」

だから、カノンはレオンを睨み付ける。構えた双刃に黒い雷が纏われる。そう、幽霊騒動の終わりに、カノンは確かにシルヴィアと約束したのだ。未来へ進むと。前を見続けると。突きつけた想いと共にカノンは突進し、逆手に持ったアスフォデルスを斬り上げる。同時にレオンもまたカノンに迫り、大剣を振り下ろす。剣同士がぶつかり合った衝撃で地面が抉れ、黒い電撃が地面を奔っていく。カノンとレオンの力は拮抗し、同時に弾き飛ばされながらも体勢を崩すことは無い。互いを睨み、動かない中でレオンがゆっくりと口を開く。

「それが・・・・・お前の意思か」

「ああ」

低い声で問うレオンに対し、カノンは淡々としたものだった。だが、カノンの蒼い瞳には確かな想いがあった。それをレオンの朱い瞳は憎らしげに見据え、やがて黒髪に隠れる。

「・・・・・お前にもう用はない。お前の意思など関係ない・・・俺は、全てを取り戻す・・・！」

「・・・・・・・」

背を向け、暗い激情を以て語るレオンに、カノンは何も返さなかった。もう、同じ道は歩めない。かつての親友との決別だった。レオンの姿が消える。カノンが詰めていた息を吐くと同時に、フェイト達が到着する。

「カノン！」

「・・・・・・すまん、取り逃がした」

淡々と失態を告げるカノンにフェイト達は複雑な眼を向ける。勿論、わざと逃がしたなどという疑いの目ではない。フェイト達が解れる前、レオンがカノンを親友と呼んだ事が引っかかっているのだ。この状況から見て、カノンはレオンと激しい戦闘――――――それも、カノンの傷の多さから見ても純粋な殺し合いをしていた事が解る。それを気遣ってのことだった。

「・・・・・・よかったの？」

「ああ。敵だ」

気遣わしげに尋ねるリゼットにカノンは何の感情も見せずに淡々と答える。

「敵って・・・おい！」

「待って、アレン・・・・・・良かったの？」

カノンが親友を敵と呼んだからだろう、アレンが激昂しかけるもフェイトに制される。カノンの瞳には苦々しげな光があり、快く思っていないことが解ったからであった。いろいろな意味を持った問いをカノンに発する。カノンは目を閉じると、傍目には淡々とした無感情の声で答えた。

「・・・・・・敵なんだ。今は、もう」

「・・・・・・」

隠された思いに気付き、アレンが息を呑む。バツの悪い顔でカノンを見るが、カノンに変化はない。ただ、蒼い瞳は虚空を見つめたままだった。

「・・・・・帰ろう。この件は報告しないと」

「ですね。では・・・あら？」

フェイトが静かに帰還の意を示すと、ギンガが同意する。だが、その言葉の途中で、自分達に近づいてくる影に気付いた。

「リゼットお姉ちゃん！皆！」

「あら・・・あなた達、どうしたの？」

影は子供達だった。リゼットが不思議そうに彼らを見る。ポカンとして子供達を見るフェイト達に子供達はニコニコと笑う。

「どうしたじゃないよ！帰るんでしょ？お見送り！」

「・・・・・リゼット・ユースティア」

嬉しそうに告げる子供達の後ろから、しわがれた声がした。見ると、サウロンが静かな瞳でリゼットを見据えていた。

「あら、無事だったのね。良かったわ」

「運が良かったのだろう・・・それより、礼を言おう。子供達を救ってくれたことにな。そして・・・すまんかった」

本心かどうかわからない不思議な微笑みで言うリゼットに対し、サウロンは苦笑で応える。彼の発した礼と謝罪は、リゼットを固まらせるには十分だった。

「・・・・・謝罪なんて、今更ね。それに子供達を護ったのは、貴方の為じゃないわ。この子達が私の友達だからよ」

「そうか・・・そうだったな。だが、ファンタズマゴリアの民はもうこれまでと同じようにはできまい。他にも襲われた集落があると聞いた。圧倒的な現実を前に、人は幻想を錯視し続けることなど出来ん」

「そもそも、この状況が既におかしかったのではなくて？間違っていたというのなら、これからは過去の幻想なんてふざけた夢なんて見てないで、未来に向かう理想を夢見る事ね」

静かに自らの間違いを認めていくサウロンにリゼットはあくまでも辛辣だ。彼女が受けた痛みや苦しみは、この程度のものとは比べ

物にならないのだから。だが、リゼットはそれをやり返すことなど考えていない。その証拠に、リゼットは辛辣な口を叩きながらもその口元は微笑んでいる。

「・・・・・その言葉、しかと受け止めよう。では、さらばだ、リゼット・ユースティア」

「ええ、さようなら。それなりに楽しい帰郷だったわ」

最後の言葉は皮肉だったのか。それはリゼット本人にしか解らない。だが、それは本心からのものに思えた。手を振りながら再会を誓う言葉をリゼットに投げる子供達にリゼットは微笑むと、転送ポートに足を踏み入れる。フェイト達も続き、全員が入ったところで転送ポートが起動した。ファンタズマゴリアの景色が霞んでいく。子供達の笑顔を最後に、フェイト達は幻想の世界に別れを告げた。

こうして、双子の魔法使いを巡る任務は終わりを告げた――――――

追憶１８～双子の魔法使いが夢見る世界　後篇～（後書き）

いかがでしたか？今回は前、中、後篇含めてすべて重い話だったと思います。

でも、過去に囚われるというのはそれだけその思い出が大事だったという事でもあります。しかし、それだけを見つめるのはやはり問題がありますよね？今回は過去との付き合い方にスポットを当てていました。まぁ、リゼットさんの問題もまた重要なテーマではあったんですが・・・。

なにか伝わっていれば僥倖ですね。といっても私の文章力の無さで伝わるものも伝わらなかったりするでしょうが。

次回もお楽しみに！それでは！

追憶・欠片～キャラクター設定？～（前書き）

キャラが増えてきたので、またキャラ設定です。今回はエネミーサイドですが、本編で出さない（予定）のものが含まれていたりいなかったり。あと何人か追加予定です。

それでは、どうぞ！

追憶・欠片～キャラクター設定？～

名前：ハラール・クロウクルワッハ

年齢：不詳

身長：１８７ｃｍ

体重：７８ｋｇ

初登場：追憶９

備考：危ない発言が多い男。凶暴な性格で、人間を食用動物としか認識せず、実際殺す時は『喰う』。戦闘スタイルは不明。犯罪者集団である堕ちた聖典（カラブト・バイブル）においても、彼を抑えられる者はいない。唯一の希望はアイオンらしいが、それも怪しいと言われている。

７年前、フラグメントを率いてカノンの故郷を襲ったのはこの男である。カノンはハラールがシルヴィアを殺したと認識しているが、シルヴィアやハラール自身の記憶とは齟齬が生じている部分がある。執拗なほどカノンに固執し、喰おうとその身を狙う。

名前：レオン・クロフォード

年齢：２２歳

身長：１７５ｃｍ

体重：６３ｋｇ

初登場：追憶９

備考：黒髪朱眼の青年。カノンと同郷であり、幼馴染でもある。７年前の集落襲撃でカノンと共に生き残る。ハラールは全員殺したと思っていたが、レオンはフラグメントに囲まれていた為にハラールの目に留まらなかった。戦闘スタイルは大剣。かつての日々を取り戻すため、追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を求める。

もう１人の幼馴染であったシルヴィアを失い、復讐に燃えながらも半分無気力だったカノンに剣を教えたのは彼。が、旅に出ても尚何も為さず、ただ無気力になっていったカノンに怒りを燃やしていたが、再び未来を見据え始めたカノンと再会、彼を思い出を捨てた裏切り者と断じ剣を向ける。

クラウン・アワリティア

年齢：３０歳

身長：１８２ｃｍ

体重：７５ｋｇ

初登場：追憶１２

備考：常に微笑みを浮かべる男。だが、その微笑が向けられた相手は不快感しか持てない。３０という年齢ながら若作りであり、２０代前半にしか見えない。人間に価値を見出さず、人間が苦痛に悶える姿に愉悦を感じる捻じ曲がった性格の持ち主。戦闘スタイルは不明。

名前：ジェレミア・フリージア

年齢：４７歳

身長：１９０ｃｍ

体重：８０ｋｇ

初登場：追憶１８

備考：身の丈ほどもある斧剣を振り回す男。人を小馬鹿にするような態度と粗野な言動が目立つ。年は５０近いが、そうとは思えないパワーを誇る。力で勝てるのはハラールとアイオンのみらしい。彼曰く、「アイツらは反則」だとか。

かつては妻と子供がいたらしいが、子が3歳の時、自身が留守の所を犯罪者に襲われて妻を失い、子は何処へと消えたらしい。カノンを見て会いたくない顔と発言したが、その真意は謎である。

名前：ミレーヌ・アンゲルス

年齢：２６歳

身長：１６８ｃｍ

体重：？？

初登場：追憶９

備考：犯罪者集団堕ちた聖典（カラプト・バイブル）内において紅一点の女性。問題児のハラールにも臆することなく接する。堕ちた聖典（カラプト・バイブル）の中ではクラウンだけが嫌いらしい。後は普通なのだとか。ただ、レオンと？？？にはまるで姉のように接することがあり、一癖も二癖もありすぎるメンバーの中ではもしかすると常識人なのかもしれない。

名前：？？？

年齢：？？？

身長：？？？

体重：？？？

初登場：未登場

備考：？？？

名前：アイオン

年齢：不明

身長：１６３ｃｍ

体重：？？？

初登場：追憶２４

備考：何かを捕えるような造りの水晶で出来た宮殿の奥、その玉座に座る堕ちた聖典（カラプト・バイブル）の主。全身を黒い鎧で覆い、フルフェイスの兜で顔を隠しているために中の人物像は不明。男の声と女の声を同時に出しているような声をだす。一切の万象に興味を抱く事は無く、ただ座して己の目的を夢想する狂人。その鎧の胸部には追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の欠片が埋め込まれており、中央の核となる部分と周囲の半分ほどが欠けているが、逆に言えばその鎧に開く歯車状の孔には既に半分が埋め込まれている。

追憶・欠片～キャラクター設定？～（後書き）

いかがでしたか？まだ謎に包まれていることが多いです。順次更新していきますので。よろしくお願いしますね。それでは！

追憶１９～その感情、想いの行方～（前書き）

今回の話は前作の設定が大きく影響してます。刹那がらみで。なので、この作品のみ読まれてる方は「なんのこっちゃ？」なんてことになるかもしれませんがご安心を。大まかな説明みたいのは入ってますので。

話が進むにつれてカノンがだんだん壊れていってる気がする・・・いや、気のせいじゃないか。

ここでちょっとお詫びです。追憶・欠片のカノンのデバイス、アスフォデルスですが、人格ありから非人格のアームドデバイスに変更です。いままで一度もしゃべらせていないので、無駄になるよりは変更してしまおうと・・・勝手ですいません。

そういえば、５万ＰＶ突破してました。読んでくださっている皆様に感謝申し上げます！

それでは、どうぞ！

追憶19～その感情、想いの行方～

「・・・・・・以上です」

「そか、ご苦労様。デスクワークは無しでいいから、ゆっくり休んでな」

「はい」

報告を終え、フェイトは一礼すると部隊長室を出る。ほっと息を吐くと、カノンが歩いてくるところだった。

「報告は終わったのか？」

「うん・・・ねぇカノン、あの人の事も言っちゃったけど・・・いいの？」

フェイトが気遣わしげに表情を曇らせる。カノンのかつての親友を敵と判断することに抵抗があるのだろう。

「構わない。今はもう・・・どうしようもないからな。お互いがお互いの変化を認められない。だが、思い通りにならないのは当たり

前だ。オレ達は・・・・・・人間だからな」

「でも・・・友達でしょ？」

あくまで淡々とした口調のカノンにフェイトは小さく反論する。極端な言い方をすれば、カノンは親友であったレオンを敵になったから切り捨てる、と言っているのだ。いくら確執があるとはいえ、そこまで極端な選択はフェイトにはできない。もし、なのはやはやてが敵となった時の事を考え、フェイトは地面が無くなるような不安を覚えた。とても、親友である彼女達を討つ事などできない。

「友達だろうとなんだろうと・・・いや、友達だったからこそ、今のアイツの考えを認める事は出来ない。言葉で止まらないなら、力で捻じ伏せる。・・・過去に戻ったところで、やり直しなんか利かないのに」

「・・・・・・」

バカな奴。そう呟くカノンの瞳には苦渋と、言い表せない程深い悲しみがあった。その表情を見て、フェイトは哀しくなると同時にどこか安心してしまった。カノンとて、好きで戦おうとしているわけではない。それが解った。カノンは過去を想い出として未来を見据え始め、レオンは過去を見続けている。当人たちにとって、どちらも譲れない選択なのだろう。ならば後はその選択、信念同士のぶつかり合いだ。話し合いが意味を為さなくなったから、力で示す。

それはどこか、かつてのなのはとフェイトと同じように思えた。

「・・・・・・そっか」

「理解したか？」

「うん、一応・・・だけど。じゃあカノン、あのレオンって人は、昔はどんな人だったの？っていうか、カノンがどんな風に暮らしてたのか知りたいな」

一応納得した態度を見せたフェイトにカノンはホッと息を吐く。が、続いて発された言葉にビシッっと音を立てて固まる。壊れたブリキ人形のように振り向く彼をフェイトは不思議そうに見つめる。

「・・・・・本気か？」

「ダメ？あ、シルヴィアさんの事があるから、やっぱりダメかな。カノンも振り切れたわけじゃないだろうし・・・」

カノンが不自然な動きをする理由が解らず、フェイトは首を傾げる。が、すぐに理由を推測する。シルヴィアの名前を出した時にフェイトの胸に痛みが奔ったが、それを抑えてカノンの顔を覗き込む。対するカノンはフェイトの瞳をじっと見つめると、諦めたように溜

息を吐く。

「・・・まったく、なんて顔をする。シルヴィアの事は、今回の件で整理をつけた。愛していたし、大事に思っていた。そういうオレがいたのは確かで、全部含めて想い出になるんだ」

「・・・過去形なんだね。え、待って、私どんな顔してたの!?」

そう。カノンがシルヴィアの事を過去形で話した。以前まではどこか現在進行形のような言い方で話していたが、変わっている。今の言葉通り、整理が付けられているのは本当のようだ。それよりも、とフェイトは自分の顔を触る。カノンの事だからからかわれる可能性もあるが、どんな顔をしていたのかは非常に気になる。みっともない顔をしていたのなら、精神に大きなダメージが残る事は間違いなさそうだった。

「いや、不安そうというか、怖がってるというか・・・痛みを堪えるみたいな顔だ。どうした?」

「・・・・・・ううん、大丈夫だけど」

いつの間に顔に出していたのか。そんな表情をしているとはフェイト自身思ってもみなかった。フェイト自身、カノンにある種の好意を持っていることは自覚し始めている。カノンとシルヴィアの事

を考えると、言いようのないもやもやした感情が湧き上がってくる。今回もそうだったが、まさか表情にまで出ているとは。

「・・・そうか。で、話だが・・・」

「あ、うん」

「正直お勧めしたくない。何と言えばいいか・・・オレのイメージが崩れると思う。だから、やめとけ。いや、やめてくれ」

呆けているフェイトを我に返らせると、カノンは話をする事をやんわりと断ろうとする。どこか焦っているようにも見え、挙句の果てにイメージなどというカノンには不釣り合いな単語まで飛び出す。それが可笑しくて、フェイトは微笑むと動揺するカノンの目を覗き込む。

「いいよ、それでも。色んなカノンを知りたいから・・・ダメ？」

「・・・・・後悔するぞ？」

フェイトがどうあっても引かないと理解したか、カノンは悔しげに表情を歪めると、踵を返す。慌ててフェイトが追うと、部屋に戻ろうとしていた。どうやらそこで話をしようという事らしい。だが、

フェイトはその手を掴むと、一気に引っ張る。

「お、おい？」

「食堂に行こう？皆も聞きたいと思うんだ」

フェイトの発言にカノンが凍る。フェイトは皆を理由として挙げたが、内心かなり面白がっていた。カノンが固まっているのをこれ幸いに、食堂へと連れ込む。直後、カノンの悲痛な絶叫が響き渡った。

＊　＊　＊　＊　＊

「・・・・・・そう」

刹那の部屋では、アレンとリゼット、そしてギンガが任務の報告をしていた。リゼットの過去も話すという事で若干緊張していた3人だが、刹那は短く答えた後は普段通りの穏やかな笑顔を浮かべるだけだ。

「・・・・・・あの、刹那さん？」

「なに？」

「何とも思わないんですか？」

どこかのんびりとした態度の刹那にリゼットは恐る恐る問う。刹那の人柄は承知しているが、彼とて人間。相応に嫌悪などはあるのではないか。それがリゼットは恐ろしかった。

「ん～？ああ、そういう事。いや、別に何も」

「別にって・・・」

あっさりと告げる刹那にリゼットだけでなくアレンやギンガも脱力する。流石にこの対応は想像していなかったのだ。もう少し反応が――良くも悪くも――あると思っていた。だが、これだ。逆に自分達がどう反応したらいいか解らなくなってしまった。

「いや、過去や生まれを理由にして陰口を叩く奴なんてどこにでもいるよ。同じように、自分の過去を否定してしまう奴だっていない訳じゃない」

「・・・・・」

「でも、馬鹿馬鹿しいでしょ？そんなのって。過去は現在に繋がってるけど、それだって？今？の選択の繰り返しだよ。どんな言葉で話して、どんな行動をするか。選んで取って切り捨てて、進んだ先に今がある。そして、今を選んで未来に踏み出す。過去を否定するって事は、選択をした自分も否定することと同義だよ。それは、自分の生まれも同じ。親がその選択をしなければ、俺達は此処にいないんだから。それを否定したら自己否定もいいとこだよ」

真面目な顔に変わって話す刹那は3人の目を見据える。不思議な輝きを放つ紫紺の瞳に吸い込まれるような錯覚を覚え、思わず息を呑む。

「他人が悪く言ったからって俺達にはそんな事関係無いんだよ。胸を張るだけ。生まれなんて確かにどうにもならないよ。過去の選択だってもうやり直しなんか利かない。でも、それが良いか悪いかなんて自分が決めるんだ。他人なんてお呼びじゃない」

「・・・・・・」

「過去に自信が無いなら、今の自分を見つめなおすといいよ。満足はできないだろうけど、悪くはないと思うよ」

静かに、しかし強い響きをもって刹那の言葉は部屋に響く。唯我独尊な言い分だが、理解できなくもない。自分の生まれはもとより、過去についても、選んだ結果の良し悪しは自分で決める。社会的な成功や失敗の区別があろうが、それが自分にとって良い事か悪い事かなんてものは他人が決める権利はひとかけらも持ち合わせていないのだ。社会的な成功に満足できない事もあるし、その逆も然りだ。

「・・・見つめなおす必要は無いです。私は、今の私が好きですから」

「そう?なら、それでいいよ。・・・今日は3人とも仕事はお休み。もう聞いてるかもしれないけど、一応ね」

リゼットは微笑むと首を振る。幼い頃ならともかく、今のリゼットは負い目など持ち合わせていない。それが伝わったのか、刹那もまた微笑む。

「あの、教官。さっき満足できないって言ったけど、何で？」

「アレン、自分に満足したら終わりだと思わない？もっと高みが残されてるのに、妥協して先を潰すのは愚の骨頂だよ」

「あー、なるほど。確かに俺も満足はしてないっすね。もっと強くなりてぇ」

アレンは刹那の言葉に納得した様子を見せると、うんうんと頷く。何やら思うところがあるらしく、目を閉じて唸っている。

「そういう事。じゃあ、話は終わり。ゆっくりしてるといいよ」

「「「はい！」」」

3人は勢いよく返事を返すと、刹那の部屋を出ていく。そこに、なのはが入れ替わりで入ってきた。

「刹那君」

「なのは。どうしたの？」

ほっと息を吐いて椅子に身を沈めた刹那になのはが声を掛ける。
刹那は座ったまま振り向くと、微笑む。

「ううん、ちょっと休憩入ったから。ここに居ていい？」

「もちろん。待ってて、今コーヒー入れるから」

「うん」

刹那がコーヒーを入れるために立ち上がる。なのははベッドに座ると、部屋を見回し、微笑を漏らす。刹那は元々私物は少ない。そして、不必要に金を使わない。服が破れたりほつれたりしている時は大抵自分で直してしまうし、買い物をする時には安く、良い品をいつの間にか手に入れてしまう。まぁそれも、幼い頃から祖父と２人暮らしだったという彼が時間を犠牲にして身に着けたものなのだろう。

「お待たせ。砂糖とミルク、いる？」

「うーん・・・じゃあ、少しだけ」

刹那は注文通りに砂糖とミルクを入れる。なのはにそれを手渡すと、自分もまたなのはの隣に座る。

「うん、インスタントって、やっぱりおいしくない」

「にゃはは、刹那君、ミルをちゃんと買って、自分で豆挽いてるもんね」

「うん・・・」

苦々しげに文句を言う刹那になのはは苦笑する。それきり2人とも黙り込み、暫くコーヒーを飲むだけの静かな時間が過ぎる。やがて飲み終わり、刹那がカップを洗い終えて戻ると、なのはは刹那の肩に頭を預ける。刹那もなのはを抱き寄せ、目を瞑る。

「・・・なにかあった？」

「いや・・・リゼットの話を聞いてね、昔を思い出しちゃったかな」

なのはの静かな問いに刹那は苦笑を湛えて答える。

「昔の事？」

「うん・・・小さい頃とか、ミッドに来る前とか。整理はついてるんだけど、苦い思い出だよ」

「・・・・・聞かせてもらってもいい？」

刹那の顔を覗き込みながら、なのはは問う。リゼットの話をなのはは聞いていないが、重要な話だったことは解る。恐らくそれに刺激されたのだろう。

「うん、いいよ。・・・そうだな・・・ふむ。俺に親がいないのは知ってるよね？」

「うん」

刹那の両親は刹那が生まれてすぐに亡くなったと聞かされていた。なのはは一瞬顔を曇らせるが、当の刹那には何の感情も浮かんでいない。

「子供って、純粋な分残酷だったりするから、よくネタにされてた。周りの大人も、憐れむような視線ばかりで・・・」

「うん・・・」

「でも、どうすることもできなかったんだ。爺さんに頼る事も出来なかった。爺さんは、子供を育てるには向いていなかったからね。勿論、色々な事を教えてくれて、大事に思ってくれてたのは知ってる。尊敬してるし、大事な人だった。でも・・・孤独感だけは、本当にどうしようもなかった」

色々あったのだろう。虐め、陰口。悪意のある攻撃というのは数限りない。だが、嫌な過去を思い出している筈の刹那の顔は揺らがない。まるで録音したものを再生しているだけのように無機質な声。普段の刹那からは想像もつかないその姿は、ひどく透明だった。今にも砕けてしまいそうな錯覚を覚え、なのははぎゅっと刹那の手を握り締める。刹那は驚いた顔をすると、嬉しそうに微笑む。

「・・・ありがと。でもさ、笑っちゃうことに、スケートを始めて、名前が売れだしたら皆正反対の態度。愛想笑いとお世辞。爺さんが死んでからは、本当に俺を見てくれる人なんて、ほとんどいなかった。」

「刹那君・・・もういいよ・・・」

聞いているのが辛くなり、なのはは止めようとするが、刹那は止めようとしない。まるで溜まった毒を吐き出すかのように話し続ける。

「意地になってたのかな・・・馬鹿にされたくなくて。怪我をするまで、本当に余裕なんてなかった・・・」

「・・・・・・」

刹那は交通事故に遭い怪我をしたが、打ち所が悪かったのか思いのほか重傷だった。1年を療養に使い、ようやく復帰・・・というところで、刹那はミッドに次元漂流という形で来たのだ。

「でも・・・良かった。あの怪我がなければ、きっと壊れていたから。良かったよ。ミッドに来れて・・・なのはに逢えて、皆に逢えて。あの時は、ずっとありのままでいられたんだ。だから・・・」

「刹那君・・・！」

刹那の声が震える。刹那が幼い頃から溜め込んできた孤独。成長し、閉じ込めて尚残っていたそれが今回のリゼットの件で表に出てきたのだろう。寒さに震えるように身体を抱える刹那をなのはは抱きしめた。子供をあやす様にその背を撫でる。刹那の目から一筋、

涙が伝う。すぐに抑えられていたものが決壊したかのようにその涙は次々に溢れた。

「く・・・ぅ・・・・な、のは・・・おれ、は・・・もう・・・ひとりは、いやだ・・・！」

「・・・うん。大丈夫だよ。ずっと一緒にいるから。大丈夫、大丈夫・・・」

行き場を失くした子供の様に泣く刹那をなのはは受け止める。刹那は感情を表現するのが下手だとなのはは思う。嬉しい時も悲しい時も、いつも穏やかに笑うだけでその本心をどこかに隠してしまう。それはある意味で壁だったのだ。だが、なのはの前でその壁は崩れた。そして、もう二度とその壁は造られることは無い。

「あ、あぁぁ・・・」

「愛してるよ、刹那君・・・」

精一杯の愛情を込めて、なのはは囁く。何度も、何度も。刹那の孤独が癒えるまで、その傷が癒えるまで、ずっと。自分の身体が熱くなるのを感じながら、なのはは抱きしめ続けた。強くて弱い愛する人を、ずっと支えたいと願いながら。

「・・・・・ごめん」

「いいよ。すっきりした？」

結局、刹那が泣き止んだのは１０分後だった。流石に恥ずかしいのか、刹那はバツが悪そうに視線をうろつかせる。なのはは微笑みながら刹那に問う。刹那はしばらく落ち着かなそうにしていたが、やがて落ち着くと頷く。その瞳はしっかりとなのはを映しており、顔には微笑が湛えられていた。

「ありがとう。もう大丈夫だよ」

「うん。刹那君、これからも一緒に頑張ろう？」

笑顔で告げるなのはに刹那の目が見開かれる。が、すぐに破顔すると、大きく頷いた。

「そうだね。頑張ろう。負けないよ、なのは」

「む。魔導師としても教導官としても私の方が先輩だもん。まだまだ抜かせないよ？」

「それはどうかな？」

挑発の応酬。２人の顔には不敵な笑みが浮かんでいる。いつも通りの、だが少しだけ晴れやかな気分で。２人はただ笑っていた。

「・・・さて、そろそろヴィヴィオを迎えに行かないとね。・・・そうだ、なのは」

「なに？」

ヴィヴィオは現在六課から学校に通っている。距離があるため、送り迎えをする必要があるのだ。上着を着つつ、刹那が思い出したようになのはに声を掛ける。なのはが振り向くと、刹那はすっかりいつも通りの穏やかな笑みを浮かべている。

「今度の休みにさ、海鳴市に行かない？士郎さんと桃子さん・・・なのはのご両親にヴィヴィオを紹介しなきゃいけないし、その、まあ・・・」

「？」

なのはもヴィヴィオの事はいつか紹介しようとは思っていたが、

時間が取れなかった。だが、休みの時ならば申し分ない。刹那が一瞬口篭ったことに首を傾げつつ、なのはは先を促す。

「・・・色々、話したいこともあるし。その・・・結婚、とか」

「あっ・・・・・・うん！そうだね！」

顔を薄く染めながらも目を逸らさずに告げた刹那になのはは一瞬驚きを露わにすると、すぐに満面の笑顔になる。なのは自身時折考える事もあったが、刹那も考えていてくれた事に一層なのはの中で愛おしさが膨らむ。思わずなのはは飛びつくように抱き着いてしまった。

「わっ・・・危ないって・・・」

「支えてくれるでしょ？大丈夫って解ってたもん」

「はぁ・・・しょうがないな。じゃあ、行こうか」

「うん！」

笑いながら2人は部屋を出る。最愛の娘に駆け寄り、いつも通り

の笑顔に逢うために――――――

追憶19～その感情、想いの行方～（後書き）

いかがでしたか？支離滅裂になっちゃってるかも・・・と不安だったりしてます。

まあ、昔がどうあれそれがなければ今の自分はいない訳ですし・・・要は今の自分が好きか否か。それだけだと思います。・・・私？小説を書いてる時の私は好きです。楽しんでるって解りますしね。

では、次回もお楽しみに！それでは！

追憶２０～幸福な記憶？～（前書き）

今回はカノンの過去に触れます。

だいぶキャラが違うかも。

それでは、どうぞ！

追憶２０～幸福な記憶？～

～とある管理世界～

荒れ果てた大地が広がる世界に、似つかわしくない程美しい水晶の神殿があった。紅く輝くその神殿は妖しく煌めく水晶の中をレオンは歩いていた。

「・・・・・・」

「あら、お帰りなさい。どうだった？」

苛立たしげに足音を響かせるレオンに女性が話しかける。

「ミレーヌ・・・さん。いや、失敗だ。クソッ！」

「それだけじゃないように見えるけど？」

「・・・・・・」

ミレーヌと呼ばれた女性の唇が笑みを形作る。からかう様に前を

歩く彼女を苛立たしげに見るレオンだが、頭を振ると冷静な表情に戻る。ミレーヌに八つ当たりしてもどうしようもないし、何よりカノンとは決別した。今は、その事実があれば十分だった。

「何があったかは聞かないけど、あまりうるさくしないでよ？」

「ああ」

手を振って呆れたように溜息を吐くミレーヌに頷くとレオンは奥を目指す。大広間のような部屋に着くと、背を向けて立つ男――――ジェレミアに近づく。

「おい」

「なんだ、もう戻ってきたのか」

不敵な笑みを浮かべるジェレミアにレオンは舌打ちする。この男は好きになれない。色々な意味でそう思うレオンはそれをぶつける。

「アンタこそ、久々の再会だったろう？」

「何の事か知らねぇな」

「隠すな。アンタの事は十分すぎるほど知ってる。カノンの奴はアンタの――――――」

核心に迫ろうとするレオンの言葉はしかし、振り下ろされた斧剣に遮られた。黙り込むレオンにジェレミアは殺気を向ける。

「それ以上は打ち止めだ。俺達は俺たち自身の目的の為だけに此処にいるんだ、仲間だなんて思うなよ？邪魔になればいつでも殺すぜ」

「・・・・・ハラールの論じゃなかったか？」

「ハッ、アイツもいい事を言うじゃねぇか」

不敵に笑うジェレミアを見つめ、レオンはやがて溜息を吐くと両手を上げ、降参のポーズをとる。

「とっとと失せろ。俺の邪魔はすんなよ」

「・・・・・ああ」

レオンが去っていく。ジェレミアはそれを見送るとゆっくりと息を吐き、自嘲するような笑みを浮かべる。

「・・・皮肉なもんだ・・・。親子揃って同じ境遇とは、笑い話にもならねぇ」

ジェレミアの脳裏に罪人の衣を纏う黒い姿が浮かぶ。かつて愛し、亡くした女の美しい銀髪を受け継いだ?彼?を思い浮かべ、皮肉げな笑みを一層深くする。

「俺と同じになるんじゃねぇぞ・・・」

一転、ジェレミアは静かに呟くと斧剣を床に突き刺す。片膝を着き、胸に拳を当てる。蒼い瞳を閉じると、ゆっくりと言霊を紡ぎ始めた。

「遠き天に眠る君よ、その清き身に安らぎあれ。膝元に清水、両手に花。君に浮かぶ微笑みに祝福の光を・・・」

紅い水晶の中でジェレミアは祈り続ける。その姿は、まるで一枚の絵のようだった。

＊　＊　＊　＊　＊

「どうしてこんな事になっている・・・？」

食堂、そのテーブルに顔を伏せ、カノンは力なく呟く。正面にはフェイトが座っており、何故かその周りにははやてやヴォルケンリッターの面々、フォワード陣になのはと刹那、挙句の果てにヴィヴィオまでがカノンを見つめていた。

「カノンが抵抗するからだよ。でも、皆を呼べたからいいよね？」

「良くない・・・」

にこにこと笑うフェイトにカノンは疲れた声で応じる。恨みの籠った視線をフェイトに向けるも、フェイトが動じることは無い。カノンは自身の間抜けさを呪った。何も言わずにじっとしていれば他の人間が集まってくるのは道理だ。フェイトは既に呼んでいたのだから。他のメンバーもこれから何を話されるか解っているのだろう、じっとカノンを見つめ続けている。スバルなどは既に期待を抑えられず、そわそわしてはティアナに小突かれていた。

「うぐっ・・・」

「往生際がわりーぞ？早く吐いて楽になれよ」

呻くカノンにヴィータが呆れながら言う。ヴィータは同情こそしているが、この事態を招いたのはカノン自身でもあるため、どこか素っ気ない。

「はぁ・・・解った、もうどうにでもなれ・・・」

「わっ！ティア、カノンさんが話してくれるって！」

「ああもう、いちいちはしゃがないの！」

ぐったりと項垂れるカノンにスバルがはしゃぎだす。ティアナは窘めつつも興味があるのは同じなのか、黙ってカノンの言葉を待っている。

「じゃあ、いいか？」

カノンが一人一人の顔を見回す。全員が頷くのを確認すると、カノンはゆっくりと口を開く。カノンの脳裏に、懐かしい情景が浮かんだ。

＊　＊　＊　＊　＊

「レオン！早くしろって！」

「分かってるよ、急かすな！」

森の中を進みながら、銀髪蒼眼の少年、カノンが手を振る。その後から黒髪の少年、レオンは溜息を吐くと声を張り上げた。レオンが3つの年を数えた丁度その年、カノンは集落に来た。その姿はボロボロで、何があったのか服に血がこびり付いていた。意識は朦朧とし、自我があるのかもわからない程憔悴しきったその姿にも、排他的だった集落の人間はすぐにカノンを追い出す事を提言した。が、レオンの父であった族長はその意見を退け、家に引き入れた。当然非難はあったが、人道を無視する事に抵抗もあったのだろう、その意見はすぐに消えた。それから8年、同い年と判明したカノンは自分の名しか覚えておらず、出自や姓も分からないまま時間は過ぎ、今に至る。

「遅いって！誰かに取られちゃうだろ！」

「木の実ごときで何をそんなに・・・」

「ごときじゃない！お前、木の実の大切さを・・・って、あ・・・」

カノンが立ち止まる。レオンが追い付き、目を向けるとポカンと口を開ける。カノンもまた呆けていた。そこにいたのは、銀紫の髪に瑠璃のように青い瞳をもった少女が木に寄りかかっていた。憂いに満ちた儚げな姿にカノンは見惚れる。ハッと我に返ると、レオンをつついた。

「おい、レオン・・・あの子って、確か」

「ああ、巫女様だ。なんでこんな所に・・・って、オイ！」

呆然とするレオンを余所に、カノンは無遠慮に少女に近づいていく。レオンは慌てて止めようと手を伸ばすが、遅い。少女は足音に驚いた顔をすると、警戒したように身構える。が、足音の主に気付くと、ほっと息を吐いた。だが、警戒は解けていないのか睨むようにカノンを見ている。

「・・・・・なに？」

「お前もこの木になる実を取りに来たのか？」

「えっ？」

少女の警戒した様子すら意に介さず、カノンはのんびりと木の上を見上げる。発せられた的外れな問いに少女は素っ頓狂な声を上げる。

「いや、この木ってさ、上に行けば行くほど美味い実が生るんだ。取りに来たんじゃないのか？」

「う、ううん、違うよ。私は・・・」

「巫女様！１人でこんな所にいて、怪我でもしたらどうするんですか！？」

少女の反応に不思議そうな顔のカノンに少女は何か言いかけるが、我慢できなかったのだろう、レオンがとび出し、少女の腕を掴む。

「あっ・・・」

「さあ、帰りましょう。カノン、遊びは終わりだ。今は巫女様を連れ戻さないと・・・」

顔を寂しげに曇らせる少女に構わず、レオンは集落へと足を向ける。チラリと助けを求めるように少女はカノンを見る。その目を見

た瞬間、カノンの眉が吊り上る。右腕を横に振ると、レオンの脚に黒い糸が絡まり、転倒させた。

「うわっ・・・何をするんだ、カノン！」

「何もカモもあるかよ。嫌がってるだろ」

険しい表情でレオンはカノンに怒鳴る。だが、カノンのグローブから出る魔力の糸にぐるぐる巻きにされており、間抜けな格好となっている。少女はカノンに抱えられ、キョトンとした顔でレオンとカノンを見比べている。

「お前・・・！その人は、集落では父上と対等の立場なんだぞ！？こんな所に居たら・・・！」

「だーかーらー！いいだろ、別に！誰に迷惑かけてる訳じゃないんだから！」

尚も言い募るレオンにカノンもイライラと叫び返す。少女はカノンの言葉を聞くとハッと息を呑み、カノンを見つめる。そして、尚も言い合おうとする2人を遮るように叫んだ。

「あ、あの・・・待って！」

「「え？」」

いきなり隣から聞こえた声にレオンはポカンと口を開け、少女を見つめる。カノンもまた、腕の中の少女を見つめると、次第に口元が緩み、ニッと口角が上がる。それに勇気を得たように、少女は再び口を開く。

「私は・・・ここに居たいです。少しだけでいい・・・お願いします」

「巫女様・・・しかし・・・」

「断る必要なんかないって！好きなだけいろよ！」

ひどく真剣な声で言う少女にレオンは難色を示すも、カノンは満面の笑顔でそう言うと少女の肩を叩く。

「カノン！」

「諦めろって。どうせなら、僕が連れだした事にすれば、万事解決！な！？」

「・・・・・・はぁ、わかった」

レオンも余りに頑固なカノンに気勢をそがれたのか、溜息を吐いて頷く。少女の目が輝く。カノンも満足げに頷く。レオンはもう一度溜息を吐くと、踵を返す。

「レオン?」

「別に、お前だけの話じゃない。父に許可をもらってくる。それまで此処で大人しくしてろよ?」

「・・・・・・!ああ!」

僅かに振り向きながら言うレオンにカノンが頷く。レオンはカノンを利用せず、怒られるのを覚悟で父親を説得しようと言ったのだ。カノンが頷くのを確認すると、レオンは振り向かずに集落に戻っていく。

「あ、あの・・・本当にいいの?」

「自分でここに居たいって言ったんだろ?ならいいじゃん。さて」

「・・・・・・？」

恐る恐るといった風にカノンを見上げる少女に笑いかけると、カノンは再び木に目を向ける。不思議そうに首を傾げる少女を余所に、カノンはグローブから再び魔力糸を伸ばし、枝に巻きつけると屈伸をする。どうやらジャンプして登るつもりらしい。

「あの！私も登ってみたい！・・・ダメ？」

「いいよ？じゃあ、掴まって？」

「う、うん」

少女としては精いっぱいの勇気で言ったのだろうお願いをカノンは当たり前のように返す。少女を招きよせると腕に抱き、腰を掴ませる。一瞬、少女の顔が紅く染まるが、カノンは気づかなかった。

「さてと、じゃあ、行くよ！」

「うん！」

カノンは弓を引くように糸を引っ張る。力を抜くと、発条のように2人の身体が宙に浮き、一気に木の上まで登り詰める。

「わ・・・わわっ!?」

「よっ・・・と!」

目を白黒させる少女をカノンは抱きしめる力を強くするとグローブから再び魔力糸を数本伸ばす。枝に巻きつかせ、落下の勢いを削ぎながら柔らかく枝に降りる。木は枝すら揺れることはなかった。

「わぁ・・・!」

「凄いだろ?えっと・・・あった!」

感嘆の声を上げる少女にカノンは自慢げに鼻を鳴らすと、枝をぐるりと見回す。やがて目当てのものを見つけると顔を綻ばせて腕を伸ばす。アーモンド形の実を2つもぎ取ると、片方を少女に差し出す。

「え?」

「あげるよ。甘くて美味いんだぞ？」

「う、うん」

少女は受け取るとしげしげと実を眺める。カノンと実をかわるがわる見、カノンが頷くと先の方を小さく齧った。果汁が大量に滴ると同時に甘い匂いが辺りに広がる。果汁の量に驚いたのか、目を見開いて口元を抑える。

「むぐっ！？・・・んわ、ど、どうしよう・・・」

「あはは、先で食べるからだよ。これは、腹の方から食べないと」

「んむ・・・は、早く言って・・・」

満足げに舌鼓を打つカノンを少女は半眼で睨む。が、カノンは意に介した様子もなくあっという間に食べ終わると、幹に身体を預け、少女をじっと見つめる。少女は気づかずに一心不乱に食べていたが、食べ終わるとようやく気付いたのか、頬を赤く染める。

「な、なに？」

「うん？いや、君さ、いつもつまらなそうな顔してるから、ちょっとびっくりしただけ」

「・・・・・・？」

ぼんやりと呟いたカノンに少女は口元に手を当てる。その唇は確かに微笑みを形作っていた。驚いて固まる少女にカノンは呆れの混じったジト目を向ける。

「気づいてなかったのか？」

「・・・・・・うん」

「色々縛られてるのは知ってるけどさ、つまんない顔してたってどうにもなんないだろ？今日みたいに悪戯して、困らせちゃえばいいんだよ」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべるカノンを少女は驚きと困惑の入り混じった顔で見つめる。

「そんな事、できないよ」

「そりゃそうだよ。やろうとしなけりゃできる訳ない。じゃあ訊くけどさ、楽しいのと詰まんないの、どっちがいい？」

「それは・・・」

楽しい方が好きだ。彼女とて人間。できれば楽しい人生を送りたい。だが、少女の立場がそれを阻む。それを理解しているのかいないのか、カノンはずかずかと核心ばかりをついてくる。苛立ちが募り、カノンに向かってその苛立ちをぶつける。

「だって・・・皆、私に役割ばっかり！私だって自由に生きたいよ！」

「できてるじゃん。此処に来たのだって誰かに言われた訳じゃないでしょ？それでいいじゃん。君、気づいてる？自分で何かした時から自由は始まってるんだよ？」

「え・・・？」

苛立ちが霧散する。唖然として少女はカノンを見つめる。カノンはそんな少女を見つめると、急に間抜けた顔を見せる。

「・・・？」

「君の顔。うん、かなり面白いね。僕さ、睨めっこって苦手なんだ。やっぱり変な顔を見せられるとからかいたくなっちゃって。君、今までで一番間の抜けた顔だよ」

「なっ！？」

喉から引き攣った笑い声を漏らしつつ、カノンは涙目で少女を見つめる。そこでようやくからかわれていた事に気付いたのか、少女の顔が羞恥に真っ赤に染まる。

「ぷっ・・・ダメだ、もうダメ。あはははははは！！」

「なっ・・・なっ・・・！もう！笑わないで！」

爆笑するカノンに少女は頬を膨らませて抗議するが、カノンの爆笑は止まらない。ポカポカとカノンを叩くも、その動きが更にツボに入ったのか、更に笑いまくる。やがてヒーヒーと引き攣ったような息が出ても笑うのをやめない。それを見ているうちに、少女もいつしか笑い始めていた。

「もう・・・笑わないでって言ってるのに・・・ふふっ」

「そっちだって笑ってる・・・くふっ・・・はははは!!・・・・癖に!あははは・・・うわ!?」

「きゃっ!?」

笑いすぎてバランスを崩したのか、カノンが枝から落ちる。少女が手を伸ばすが、同じようにバランスを崩して一緒に落ちてしまう。ドシンと音を立てて落ちたカノンの上に少女が乗っかるように落ちてくる。

「ぐぇ・・・!」

「あ、ご、ごめんなさい!」

「ごへっ・・・だ、大丈夫・・・!」

蛙を潰したような呻き声を上げるカノンに少女は慌てて謝ると、カノンの身体から飛びのく。弱弱しく咳をしながら腹を抑えるが、少女を見ると安心させるような笑顔を浮かべる。

「ほ、本当にごめんなさい・・・!」

「いいってば・・・。でさ、君の名前、教えてくれない？」

「え？知ってるんじゃ・・・」

妙な事を言うカノンに少女は首を傾げる。少女は集落では名を知らぬ者がいない有名人だ。なのにカノンは知らないという。その奇妙さを問うようにカノンを見ると、バツが悪そうに目を逸らす。

「いや、皆巫女様としか言わないし、興味もなかったから。それに、僕は皆から嫌われてるからね」

「あ・・・！」

そこでようやく少女も思い出す。目の前にいる少年もまた、少女と違った意味で有名人だ。集落で唯一の余所者。血に塗れた姿で現れた少年。少女も周りの大人からはカノンにだけは近づくなと言われていた。その大人達は確かにカノンを嫌っているようで、他の大人や子供達も何処か敬遠している。が、いつも楽しそうに過ごす少年を不思議に思っていたのだ。その少年が、今目の前にいる。

「えっと・・・じゃあ、あなたがあの・・・」

「あのってなにさ。そうだよ、僕がカノンだ。で、君は？」

「あ・・・私、シルヴィア。シルヴィア・カエレスティス」

少女――――――シルヴィアの名を聞くと、カノンは満足げに頷く。

「カエレスティス・・・どっかの言葉で天空、か。凄いな、何処にだって行けそうだ！」

「え・・・そ、そうかな・・・？」

はしゃぎだすカノンをシルヴィアは驚きを込めて見つめる。そんな事を言われたのは初めてだった。

「行けるかな・・・？」

「行けるさ！何処にだって行ける！よろしく、シルヴィア！」

「・・・・・うん！」

差し出された手をシルヴィアはしっかりと握る。自分の手が熱く燃えるような錯覚がする。僅かに頬を染め、シルヴィアはカノンを見つめる。シルヴィアにとって、カノンは初めての『友達』だった。と、シルヴィアの視線に気づいたか、カノンは首を傾げる。

「ん？」

「カノンって・・・女の子みたいな名前だね」

「うぐっ・・・」

思わず呟いた一言にカノンの顔が歪む。その顔が可笑しくて、シルヴィアは笑う。カノンはその表情を見て苦笑すると、すぐに微笑みに変わる。これが、カノンとシルヴィアの最初の出逢いだった。

追憶２０～幸福な記憶？～（後書き）

いかがでしたか？カノンってば、昔はやんちゃっ子です。でも一人称は僕。うん、違和感バリバリ。

次回も過去話です。お楽しみに！

それでは！

追憶２１～幸福な記憶？～（前書き）

・・・・・期間が空いてしまいました、すいません。

難産でした。

今回はちょっとお知らせです。

実は私、無謀にも一次創作に手を出そうと考えており、もうストックづくりが始まっております。既にプロローグと一話は完成してるんです。

で、肝心のタイトルはまだ決まってませんが、活動報告で行ったアンケートでは、「Ｒｅｓｏｎａｎｃｅ　？Ｗ？」が一番票が集まってます。もう少し待っていますので、どうかご協力ください。

そんな訳で、もしかしたらこちらの更新も今までのスピードではいかない可能性・・・というか無理になりそうです。なので、少しばかり皆様には申し訳ないのですが、どうかご了承ください。

なるべく早く更新できるようにしますので・・・・・・

さて、お知らせは此処まで！それでは、どうぞ！

追憶21～幸福な記憶？～

「このバカ共が！！」

怒声と共に2つの拳がカノンとレオンの頭に炸裂する。痛みに頭を押さえて悶える2人の頭を族長は掴むと締め上げる。交渉していたレオンだが、さすがに許されることは無く、帰ってきたカノンと共に絞られているのである。

「いだだだだだ！！」

「時の巫女様が大事な役割を持っておられる事ぐらい知っているだろうが！それを貴様ら――――――！」

「待ってください、族長様」

涼やかな声が響く。見ると、シルヴィアが真剣な瞳で族長を見つめていた。

「彼らには何の非もありません。私は、私の意思で集落を離れました」

「な・・・まさか・・・」

「本当です。彼らは私を探しに来た訳ではありませんが、とても良くしてくれました。特に、そこにいるカノンは」

レオンと族長は同時にカノンを見る。カノンは驚いた表情を見せると笑顔に戻る。

「僕は何もしてないよ。シルヴィアが自分で動いたんだから」

「シルヴィア・・・？」

「カノン、時の巫女様を呼び捨てなど・・・」

カノンがシルヴィアを呼び捨てにしたことに対し、レオンはキョトンとした顔を見せ、族長は額に青筋を浮かべる。それはそうだ。シルヴィアは重要な立場にあり、そんな人物を呼び捨てにするなど許されないのだから。

「いいんです。私が呼び捨てにするように頼みましたから。ね、カノン？」

「ああ、俺達、友達になったんだ」

頷きあうカノンとシルヴィアをレオンと族長は信じられないという目で見る。だが、本人たちはいたって真面目であり、本当の事だと分かる。

「む・・・しかし・・・」

「・・・族長、私は、役割を果たす事だけが私の生きる意味だと思っていました」

「・・・？」

いきなりの話題変換に族長は目を白黒させるが、それに構わずシルヴィアは続ける。

「けれど、窮屈だったのです。自分と、集落の子供達の間に温度差がある事が。皆が私を敬う事が。自分が本当にしたいことが分からず、ただ鬱屈した思いを抱えていただけでした」

「・・・・・・」

「けど、カノンは他の人たちとは違いました。私を特別扱いしないで、普通の女の子としてみてくれたんです。私が欲しかったのは尊敬なんかじゃない。ただ、誰かの温かさが欲しかった」

その告白は、シルヴィアにとって最初の冒険だった。役割を淡々とこなす毎日から脱却するための、カノンの友達として歩む第一歩。小さいが、力強い一歩をシルヴィアは踏み出していた。

「・・・・・・・」

「・・・・・・分かりました。それが、あなたの為になるのなら、私には何も言う権利などありません。どうか、ご自由に」

族長は溜息を吐き、目を伏せた。カノンは見えないようにガッツポーズをとると、シルヴィアの手を取る。

「行こうシルヴィア！」

「うん！」

満面の笑顔を浮かべて走り出す2人を、レオンは複雑な面持ちで、族長はしっかりと見据えて見送る。

「・・・・・よろしいのですか？」

「何がだ？」

遠慮がちに尋ねるレオンに族長は短く答える。その顔には微笑みすら浮かべられ、レオンがこれまで見た事のない優しげな目をしている。普段から父の厳しい面を見ていたレオンにはそんな態度をとる父が意外だった。

「いえ・・・カノンはまぁ、ああいう性格ですから、どうせ言った所で効果はないですが・・・本当にシルヴィア様と接させて、何か事故でも起きたら・・・」

「ふむ・・・確かに懸念すべき事項ではある。だが、今はただ喜んでいたいのだよ。シルヴィア様が先代の巫女様から役目を受け継いでから、あの方は一度も笑わなくなってしまった。あれは丁度、カノンがこの集落に姿を現した頃だったな」

「はい、覚えています」

その時の事はレオンも父に言われるまでもなくよく覚えていた。服に血がこびり付き、ボロボロになった身体を震わせる小さな姿。何も映さぬガラス玉のような瞳には感情の揺らぎも全く見る事は叶

わなかった。当時のレオンはその姿のおぞましさから家に引き入れる事を嫌がったが、こうして長らく過ごすうちに慣れていった。

「あの頃からカノンも随分と明るくなった・・・お前はよく面倒を見てくれたな。感謝している」

「い、いえ！アイツは、私の・・・いえ、俺の親友で弟ですから」

「そうか、そうだったな。そして、カノンはシルヴィア様の心を誰よりも早く、温かく解した。シルヴィア様は本来優しく、繊細な方だ。だからこそ、カノンを受け入れたのだろうが」

そう言うと族長は息子の顔を見る。神妙な顔をしているので笑いがこみあげてくるが思い直す。最初に飛び込んできたのはレオンだった事を思い出したからだ。誰に似たのか生真面目で融通の利かないこの息子が、自ら禁を破る事をしようとした。今までは叱れば行動を改めたが、今回だけは引かなかった。きっと、何か思うところがあったのだろう。

「さて、仕事に戻らねばな。レオン、お前も行きなさい。お前があの子達を守ってやれ」

「はい、父上。では」

小さく一礼し、レオンは家を出る。既にカノンとシルヴィアは何処かへ行ったのか、姿を消している。また探し回らなければならない苦労に思いを馳せ、レオンは顔を顰めるが、口元に浮かんだ笑みは隠し通せてはいなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

「わあ～・・・・・・」

「凄いだろ?ここ、レオンも知らない僕の秘密の場所なんだ。シル

ヴィアには特別って事で、見せてあげるよ。入って」

それから1年が過ぎた頃、カノンがシルヴィアを案内した場所は、森の木々の間にできた洞窟だった。意外にも中は広く、また通気性に優れているが雨風が入らないようになっている。

「凄い・・・！でも、私だけいいのかな？」

「いいのいいの。たまに此処に籠ってさ、一人でいる時もあるんだ。シルヴィアだから見せるんだぞ？」

にぱっと笑うカノンにシルヴィアは体温が上昇するのを感じる。2人きりの場所で、思わせぶりなセリフ。元来女子というものは精神の成長が男子より早い傾向がある。そして、１２歳という年齢なら恋をする事にも憧れるものだ。シルヴィアはこれまで役割があったために自由がなかった・・・というより、考えても仕方のない事だったのだが、それでも1人の少女であることもまた事実で、恋愛というものに淡い夢を描いてしまうのも仕方のない話だった。

「・・・・・・」

「シルヴィア？」

顔を赤くして動きの止まったシルヴィアをカノンは不思議そうに見つめる。自身の発した言葉が、どんな意味をもって相手に捉えられるか全く念頭に置いていなかった彼には今のシルヴィアの態度は理解できるものではなかった。

「おーい、シルヴィアってば」

「ふぇ!?な、なななにかな!?」

「なにじゃないって。どうしたの?」

挙動不審になったシルヴィアをカノンは呆れながらも落ち着かせる。

「う、ううん!?なんでもない!」

「そう?じゃあもっとこっち来て。とっておきを見せるから」

「とっておき・・・?」

カノンが手招きするのに従い、シルヴィアは奥に入る。そこには、カノンが集めたと思われる様々な物が綺麗に並べられていた。どれ

も目を引くものばかりだが、その中でも特にシルヴィアの興味を引いたのは、空をそのまま映したような宝石だった。

「綺麗・・・・・・」

「あ、やっぱり？これを見つけた時はさすがにびっくりしたよ」

カノンは慎重にそれを掴むと頭上にかざす。キラキラと輝くそれを見つめるカノンの瞳はこれ以上ないほど真剣だった。その瞳をシルヴィアがじっと見つめる。

「この宝石、カノンの目の色と一緒だ・・・・・・」

「そうかな？・・・僕はさ、もっと色んな世界を見たいんだ」

「・・・・・・？」

真剣な口調で語るカノンをシルヴィアは黙ったまま不思議そうに見つめる。

「世界にはきっと色んな物がある。人も、物も、空も、海も、森も。見てみたいんだ。こんな狭い所じゃなくて、もっと広い所を」

「・・・・・・」

カノンが語る夢を、シルヴィアは複雑な気持ちで聞く。せっかく友達になれたのに、カノンはいつか離れると言う。そのころには、シルヴィアも役割に戻っているだろう。きっと、すぐにお互いの事を忘れていくだろう・・・・・・そんな暗い考えがシルヴィアを支配する。だが、そんなシルヴィアに気付かないままのカノンは暫し言葉を止めると俯く。

「でもさ、分からないんだ。本当に、そこに僕が望んだものがあるのか。本当は、そんなものは無いんじゃないかって思う時がある。結局、何処の世界もここと同じなんじゃないかって。それが怖い・・・」

「・・・・・・そっか」

きっと、それでもカノンの気持ちは変わらないのだろう。そう確信するシルヴィアの胸には鋭い痛みが棘となって突き刺さり続けている。その原因が何なのか、シルヴィアは既に理解していた。

「・・・・・・分からない時は、分かるまで進めばいいよ。進んだその先には、必ず答えがあるから。ね？」

「・・・・・・」

溢れ出そうになる想いを抑えつけ、シルヴィアは精一杯の笑顔で言う。カノンは動かずにいたが、ホッと息を吐く。

「そう、だよな・・・うん、そうだよな！行ってみなくちゃ分からないままだ。ありがとう、シルヴィア！・・・・・・シルヴィア？」

にぱっと笑い、振り向いたカノンは俯いたシルヴィアに怪訝そうな声をだす。

「どうしたの？何処か痛いの！？」

「・・・・・・よ」

「えっ！？」

子供を相手にするようなカノンのセリフにもシルヴィアは注意を払うことは無く、ただもう押さえつける事が困難となった想いを涙と共に出すことしかできなかった。

「イヤだよ・・・・・・行っちゃやだ・・・」

「シルヴィア・・・？」

「もっと一緒にいたいよ・・・何処にも行かないでよ・・・！」

ぽろぽろと大粒の涙を流して懇願するシルヴィアに、カノンもまた、自身に向けられた感情がどういったものかを理解した。同時に、自身の気持ちも。本来、カノンは自信家だ。それも、無闇に自分の力を過信した理論を元にするのではなく、自分の力を完全に理解した上で出来るか出来ないかの判断をする、地に足の着いた自信家。それ故に、カノンは徹底した現実主義者でもあった。だが、先程のカノンの発言からは本来の自信がまるでない。まるで、慰められる事を求めているような発言だ。

「シルヴィア・・・僕は・・・」

「いやだよぉ・・・好きなのに・・・大好きなのに・・・私とずっと一緒にいてよ・・・」

だが、カノンは慰められたかったわけではない。シルヴィアに、元気づけられたかった。頼ったのだ。それがどんな感情によるものか、先刻までは理解していなかったが、今ならわかる。

「・・・・・ねぇ、シルヴィア」

「ぐすっ・・・・・・なに？」

だからカノンは、シルヴィアの告白に、熱くなっている頭を冷やすことを考えず、自分が望むままに、それを求めた。

「一緒に行こう。２人だけで、どこまでも一緒に行こう」

「・・・・・・えっ？」

目を真っ赤に腫らしながら驚いた表情で固まるシルヴィアに、カノンは心を真っ直ぐに解き放つ。

「ううん、嫌だって言っても連れて行く。僕は・・・君が誰よりも大切で、好きだ。だから、絶対に離さないし、誰にも渡さない」

「あ・・・・・・うん・・・・・・うんっ！！」

答えは聞いてない、と顔を僅かに紅く染めながらも自信満々に胸を張るカノン。告白というには余りに荒っぽく、独占欲全開の、傲

慢な言い草ではあったが、シルヴィアの顔を耳まで真っ赤にさせるには十分すぎる威力だった。シルヴィアは再び溢れてくる、しかし意味合いの違う涙を堪えようとせず流れるままに任せ、勢いよく頷く。自分から先に告白していた彼女に断るという選択肢は存在していなかった。シルヴィアはカノンに飛びついて抱きしめると、、再び泣き出す。カノンはしっかりとシルヴィアを抱きしめた。

＊　＊　＊　＊　＊

「ねぇ・・・さっきの話・・・本当？」

「さっきの・・・？ああ、一緒に行こうって話？」

しばらくして落ち着いたのか、シルヴィアが静かな声でカノンに問う。時刻は既に夜となっているが、2人は帰ろうとしなかった。なんとなく、離れがたかったのだ。カノンはシルヴィアの顔を見つめると、しっかりと頷く。

「本当だよ。今は無理だけど、いつかは僕たちも大人になる。その時は、2人でここをとび出して、色んな世界を見よう」

「出来るかな？だって私、時の巫女って役割がある。もしかしたら、一生出れないかもしれないのに・・・」

「それこそ分らないじゃないか。だから、やるんだ。大丈夫だよ、シルヴィア。僕達ならやれないことは無いよ」

不安げなシルヴィアにカノンは不敵な笑みを浮かべる。普段のカノンなら絶対に言わないような無茶な理論だが、その言葉はシルヴィアに小さな勇気を絞り出させるには十分だった。カノンはカノンで自分の無茶な言い分に苦笑してはいたものの、取り消すことはしない。早い話、浮かれているのである。それでも理性的な部分を失ってないのは彼らしいと言えない事もない。

「もしかすると、レオンも一緒かもしれないけどね・・・・・で

も、それはそれで面白そうだ。あいつを振り回せるのなんて、僕達しかいないからね」

「うん、そうだね。・・・でも、女の子としては2人っきりの方がいいな」

「それはもちろん、僕だってそう思うさ。兎にも角にも、時間は沢山あるよ。その時が来るまでは、こうしていよう？」

空気をぶち壊すような発言をするカノンにシルヴィアは頬を膨らませる。カノンはそれを見て笑うと、シルヴィアを抱きしめる。若干拗ねつつも、シルヴィアはすぐに頬を緩ませる。そのままカノンを見上げると、彼女にとって、いや、カノンにとっても大きすぎる爆弾を投下した。

「ねぇカノン・・・・・・その、キス・・・・・・してみない？」

「えっ！？」

「その、やってみたいなって・・・・・・だめ、かな？」

顔を真っ赤に染めたシルヴィアの、背伸びしたお願いにカノンの身体も熱くなる。顔が真っ赤になっていることを自覚していても、

どうしようもなかった。キスという行為の事はカノンも既に知識だけはある・・・が、いざそれをする、したいと迫られるとやはり混乱する。もちろん、したいという欲求は少なからず、いや、大いにあるのだが。

「えっと・・・じゃあ、しよっか・・・？」

「・・・・・・うん」

たどたどしく確認をするカノンにシルヴィアは真っ赤になりつつも頷く。正面をむき、向かい合う形になる。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

お互いの心臓の音が聞こえる距離まで近づくと、見つめあう。シルヴィアの潤んだ瞳を見てカノンは落ち着かなくなるが、目を逸らす事だけはしない。やがて2人の目が閉じられ、ゆっくりと顔が近づき――――――唇が、重なった。

「・・・・・・ん」

「・・・・・・んん、ぷはっ」

どれだけの時間そうしていたのか、それは分らないが、どちらからともなく唇を離すと、息を吐く。２人とも顔が真っ赤だが、どこか物足りなげでもあった。２人の視線が交わり、逸らされ、もう一度交わって、２人はもう一度お互いの唇を塞いだ。

それは、彼らにとって、忘れられない想い出となった。

追憶２１～幸福な記憶？～（後書き）

いかがでしたか？もう少しカノンとシルヴィアのイチャイチャ話を書いてから、あの事件を書いて・・・・・あれ、壮絶ＢＡＤＥＮＤ？

兎にも角にも、しっかり書かねばなりませんね。

前書きに関しては本当にごめんなさいとしか言えないです。

これからも頑張りますので、どうか見捨てないでくださいね（苦笑

それでは、次回もお楽しみに！

追憶２２～幸福な記憶？～（前書き）

今回の話は最後に少しだけシリアスです。

想像はつくかもしれませんが、カノンの最悪な過去についてなので。

そういえば、前回の話はカノン達が１２歳の時の話、今回は１４歳の話となっております。

それでは、どうぞ！

追憶22～幸福な記憶？～

それからの毎日は、カノンとシルヴィアにとって劇的に変化したものとなった。レオンには早々に関係がばれ、大目玉を喰らったが、そんな事で付き合いをやめる気はなく、それを分っていたレオンは力のない足取りで族長の元へ向かっていた。主に自分達の所為とはいえ、哀愁の漂うその後ろ姿に吹き出すのを抑えられず、また申し訳ない気持ちもあった。族長にはすぐに呼び出され、詰問を受けたが、関係を撤廃する様子を見せない2人にもはや諦めの境地に入っていたのか、それはそれは深い溜息を吐くと、心構えだけを徹底的に教え込まれ、解放された。暗に関係が認められたことで、後で2人はレオンを巻き込んで大騒ぎをしたのであった。それから既に2年が経つが、特に変わった出来事もなく、平穏な日々が続いていた。

「ふぁ、あ～・・・・・・」

「眠いの、カノン？」

大欠伸をしながら目を擦るカノンをシルヴィアは面白がるように見つめる。集落にも一応勉強をする場があり、そこで子供達は勉学に励むのだが、カノンには退屈だったようだ。

「だって、退屈だし・・・日差しは温かいし、眠いし、腹減ったし。活動できないのも当たり前じゃないかな？」

「それじゃ怠け者だよ・・・あ、じゃあ、そんなカノンにはコレ、いらないかな？」

悪戯っ子のような笑みを浮かべるシルヴィアが取り出したのは、小さなバスケットに入ったサンドウィッチだった。

「あ、だめ。いる。欲しい」

「どうしよっかな～。ん～・・・」

「お願いだよシルヴィア。さすがに空腹は耐えられない」

手を合わせて懇願するカノンにシルヴィアはクスクスと笑うと頬を染めて上目使いでカノンを覗き込む。

「じゃあ、キスしてくれたらいいよ？」

「え、ここで？人目は・・・・・あ、ない」

驚いて固まり、辺りを見回したカノンは人がいない事に今更ながら気づき、目を見開く。

「でしょ？ほら、早くしてくれないとあげないよ？」

「わ、それは困る。でも、なんだかうまく操られてるような・・・？」

ひらひらとバスケットをチラつかせるシルヴィアにカノンは首を傾げてぼやく。だが、その目は揺れるバスケットを追いかけ続けている。

「む～・・・・・・」

「わ、わかった。じゃあ・・・」

いつまで経っても動かないカノンに業を煮やしたのか、シルヴィアは拗ね始める。慌ててカノンはもう一度辺りを見回すと、素早く唇を合わせる。

「んっ」

「ん・・・えへへ」

時間にしてはほんの一瞬ではあったが、それでもキスには違いない。満足したのか、シルヴィアは唇をぺろりと舐めると上機嫌に笑う。カノンも満更ではない様子を見せるが、後ろから聞こえた声に動きが止まる。

「お前たちは・・・白昼堂々こんな場所で何をしてるんだ？」

「レ、レオン・・・いつの間に」

「あはは、レオン、こんにちは」

呆れて溜息を吐くレオンにカノンは冷や汗を流すが、シルヴィアは上機嫌なままビシッと敬礼の形を真似した挨拶をする。

「はい、シルヴィア・・・・・様。って、そうじゃない、お前達、そうしているのも構わないが、いい加減俺の事も考えてくれ。隣で見ているとおかしくなりそうだ」

「もう、様はいらないよ、レオン。それから、コミュニケーションなんだから、これくらい普通だよ。ね、カノン」

こめかみを押さえ、眉をひそめて溜息を吐くレオンにシルヴィア

は不満そうに頬を膨らませる。レオンが様を付けた事が気に食わないのだろう。とはいえ、族長の息子であり、同い年の少女を敬えと教えられてきた彼には難しい。それを理解したうえで言っているのだから、シルヴィアは中々に小悪魔と言えなくもないだろう。しかしながら、シルヴィアはその事が本題なのではなく、レオンの言葉の後半が重要なのだ。恋をすれば変わる、という俗説があるが、シルヴィアの場合はこれがぴったり当てはまる。以前なら人の目がないとはいえ、誰かに甘えるという事をしない少女だったのだから。無論、状況も状況だったが、これでは変わりすぎ言われても仕様がなかった。

「ああ、普通だと思う。そんなに溜息ついてばっかりだと、今に禿るぞ、レオン？」

「誰の所為だ、誰の！」

明らかに面白がっている顔と口調でからかうカノンをレオンは小突くと、再び溜息を吐く。

「はぁ・・・・・これじゃ、俺がバカみたいじゃないか。ほら、コレ。お前、今日が此処に来た日だろ？」

「え・・・？」

キョトンとするカノンにレオンは腕輪を渡す。しげしげと眺めるそれはデバイスのように見えた。シルヴィアも興味深そうに見つめる。

「なにそれ？デバイス？」

「ああ。カノンのために作った。カノンの今持ってるデバイスだけじゃ不安だからな・・・・・カノン、お前はいつかシルヴィア・・・を連れて集落を出るんだろう？何があるか分からないからな」

「レオン・・・」

驚愕を隠さずにカノンはレオンを見つめる。いつか集落を出る事を知っていた事もそうだが、それをあっけなく許すこともそうだ。レオンは本来ならそんな事を言う人間ではない。

「ま、そういう事だ。形状は刀・・・双刃ってやつだ。名前は好きに決めろよ。剣術は俺が教えてやる」

「いや、それはまあ、願ってもない話だけど・・・でも、俺にはこいつがあるぞ？」

カノンが取り出したのは同じような腕輪だった。形状はグローブで、魔力で造るワイヤーが武器のデバイスだ。

「それを踏まえて、だ。大体、近くまで迫られたら危険だろうが。お前のデバイスは本来近接用じゃない」

「使い方次第なんだけどな・・・まあいいや。くれるって言うなら貰っておくよ。ありがとう」

「ああ。ま、教えるのは冗談としても、木の棒を振るぐらいはしておけよ。基礎がなくちゃ話にならないからな」

口元が緩むのを抑えられていないカノンにレオンは真面目くさった顔で付け加える。

「よかったね、カノン」

「ああ、そうだね」

ニコニコと笑いあうカノンとシルヴィアにレオンは苦笑すると、踵を返す。

「ま、俺はここで帰るから、後はお前たちの好きに過ごせばいいさ」

「言われなくても、そのつもりだよ！」

「そうそう、行こう、カノン！」

ひらひらと手を振るレオンにカノンは叫び返すとシルヴィアの腕を取る。シルヴィアは腕を絡めながら緩みきった笑顔で同意すると歩き出し、カノンに寄り添う。

「そういえば、今日がカノンの来た日だったね～」

「うん、まぁ、あんまり覚えてないんだけどね。でも、レオンは律儀に祝ってくれてるんだ」

「そうなんだ？でも、レオンらしいね」

カノンには誕生日がない。カノンとしてはそれを気にしたことは無いのだが、レオンと族長はそれでは家族の意味がないと断言し、カノンを家に引き入れたその日を記念日とした。誕生日、ではないのが皮肉じみてはいるが、カノンにとってその好意は嬉しいものだった。ともあれ、シルヴィアは何やら真剣な顔になると唸り始める。どうやら忘れていたらしい。恋人としてそれはどうかと思われるが、

カノン自身完全に忘れていたのだから言っても仕様のない事である。

「まあでも、デバイスってのは驚いたな。器用な奴だってのは知ってるけど、でも、こんな事が出来るなんて聞いてない・・・」

「カノンの為だから、じゃないかな？レオンはカノンの事、親友だと思ってるんだし、カノンもそうでしょ？」

「それは・・・そうだけど」

いまいち納得できていないカノンにシルヴィアは笑う。

「難しく考えなくていいよ。友達だから、精一杯の事をしてあげたかったんだよ」

「そういうもの？」

「そういうものなの。分かった？」

「う、うん」

ビシッと人差し指を突きつけるシルヴィアにカノンは戸惑いがちに頷くと、頬を緩ませる。なんだかんだでカノンはレオンを親友と言って憚らないし、逆も然りであることは既に暗黙の了解だ。だから、こういったサプライズは新鮮で嬉しかったりする。

「うーん、じゃあ、私はどうしよっかな？」

「気にしなくてもいいってば。僕はシルヴィアがいてくれたら、それで」

「それじゃ私の気が済まないもの。うーん・・・」

可愛らしく小首を傾げて唸るシルヴィアにカノンは苦笑するが、シルヴィアは真剣に唸り続ける。形のある物はすぐには用意できない。と、此処でシルヴィアは妙案を思いついた。

「あ、そうだ！」

「どうしたの？」

「こっちこっち！」

シルヴィアは球に走り出すとカノンの腕を引っ張る。問いかけるカノンに悪戯めいた笑みを投げかけ、さらに速度を上げる。

「ほら、ちゃんと走らないと転んじゃうよ？」

「い、いきなり言うなよ・・・って、わっ！」

転びそうになるのをなんとか堪え、カノンはただついて行くことになった。

＊　＊　＊　＊　＊

「はぁ・・・はぁ・・・此処って・・・・」

「うん、私達の秘密の場所」

息も絶え絶えにカノンが見回すのは、カノンが秘密の場所とし、シルヴィアと恋人同士になったあの洞窟だった。

「なんで此処に・・・？」

「うん、そこに座って」

すっかり寛ぐ・・・とまでは言わないが、そこそこリラックスした様子でシルヴィアは正座し、カノンと向い合せに座る。先程までの無邪気な姿と違い、どこか神秘的な雰囲気を纏った彼女に、カノンも姿勢を正す。カノンもこの雰囲気のシルヴィアの事は知っている。祭事や大事な時に？時の巫女？としてふるまう時に纏う雰囲気。だが、今はそれほど大事な時ではないので若干柔らかいものとなっている。

「・・・・・・」

「カノンは、お父さんとお母さんのこと、覚えてないんだよね？」

「うん。だから、僕の名前が本当にカノンかどうかも分からない」

淡々と、事実を語るカノン。カノンはが当時覚えていたのは自分の名前だけだが、それが本当の名かどうかは不明である。

「だからね、私が、カノンに名前をあげる」

「名前・・・？」

「そう」

意味が分らない、といった風に首を傾げるカノンに、シルヴィアは微笑む。名前には意味があり、それは本人の性質を悉く映す鏡だ。それが、カノンにはない。故に、何処か不安定だ。だからシルヴィアは、名を与え、『カノン』の人と為りを確実にしてあげたかった。

「貴方に名を与えます」

「・・・・・はい」

「貴方の名はカノン。貴方の輝き、美しい音。貴方を映す鏡の名は、アークナイト。聖櫃の騎士、私を導く方舟の護り手」

厳かに告げられる言の葉はやがて意味を為し、カノンの身体に刻まれていく。カノンは不意に、自分の身体に強い力が漲るのを感じた。それが気のせいではない様に思え、カノンは少しだけ笑う。

「・・・・・・貴方に、祝福がある事を祈ります」

「・・・・・・」

シルヴィアがそう締めると同時に、静寂が辺りを包む。音のない世界の中、カノンとシルヴィアは見つめあっていた。

「・・・ありがとう・・・この名は、一生大事にする」

「うん、そうしてくれたら嬉しいな」

ふわり、と微笑むカノンにシルヴィアははにかむ。２人は姿勢を崩すと、静かに笑いあう。カノンがシルヴィアを抱き寄せる。

「シルヴィア・・・好きだよ。大好きだ」

「うん・・・私も、大好き」

お互いのぬくもりに身を任せたまま、２人はいつまでも抱き合っていた。

＊　＊　＊　＊　＊

やがて時間は過ぎ、冬になった。寒さが際立つようになり、霜が降りる。冬になるには、そう時間はかからなかった。

「はぁ・・・あったかい」

「そうだね・・・」

「まあ、冬には定番だよな」

カノン、シルヴィア、レオンは族長――――――つまりはカノンとレオンの家で夕食を楽しんでいた。族長は吹雪の予兆が見えたとの理由で、対策のために食事の席を外していた。カノン達はシチューに似たスープを飲みながらその帰りを待っている、という訳だ。

「今年・・・というか、今日は凄いよな。段々風が強まってるし、雪もすごい降ってる」

「そうだな・・・屋根に影響がなければいいが」

「そうだね・・・」

感心したように外を見たカノンに、レオンも厳しい顔で同意する。

シルヴィアもチラリと天井を見上げる。が、心配するでもなく苦笑だけに留まっていた。

「・・・・・？外が騒がしい」

「え？」

最初に異変に気付いたのはレオンだった。椀を置き、外を睨む。その手にはいつの間にかデバイスが握られていた。カノンも呆気にとられつつ、シルヴィアを護るように抱き寄せ、耳を澄ます。すると、慌てて走ってくるような足音と、誰かが叫んでいるような大声が耳に届く。

「3人とも、無事か！今すぐ逃げなさい！」

「えっ・・・」

「父上、どういう事ですか？」

入ってきたのは族長だった。3人の顔を確認するとホッと息を吐くがそれもすぐに強張り、焦りの浮かんだ顔で外に促す。絶句するシルヴィアを余所にレオンが状況の把握に努めた。

「分からん。だが、襲撃であることには間違いない」

「そんな・・・どうして・・・」

「あっ・・・」

状況を早口で告げる族長にカノンは呆然と声を上げ、逆にシルヴィアは何かに気付いたかのように表情を強張らせると、族長を見つめ、頷くのを確認すると急に走り出した。

「シルヴィア！？」

「カノン！お前はシルヴィアを追え！絶対に守れよ！」

「・・・何が起こってるか分からないけど、やるしかないんだろ！」

走っていくシルヴィアを見て驚くカノンにレオンが緊迫した声で命令する。カノンはレオンの顔をじっと見つめると頷き、一気に駆けだした。

「族長・・・追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）ですか？」

「そのようだ・・・何故、あの子達の時に・・・！」

「迎え撃ちます。カノンとシルヴィアには、絶対に手は出させない！」

明確な意思と怒りを以て瞳を燃やす息子を族長は見つめる。やがて苦々しげに頷くと、自身もデバイスを取った。

「集落の男たちは既に応戦に入っている。覚悟はいいな？」

「はい！」

レオンと族長は頷きあうと走り出した。

冬の日の事件の、幕開けだった。

追憶２２～幸福な記憶？～（後書き）

いかがでしたか？シルヴィアとの蜜月・・・なんか語弊がある気がしますが・・・は長くは続かなかったのです。

この後の展開、少しややこしくなるかもしれません。

次回もお楽しみに！感想等お待ちしています！

それでは！

追憶２３～悪夢～（前書き）

いや・・・今回はすっごい難産でした。理由は察してください。

今回で過去話はお終い・・・ですが、ちょっとだけ、お知らせ。
もしかしたら文中で「アレ？おかしくね？」なんてことがあっても、仕様です。此処まで祖語のある、矛盾だらけの話を書いた人っていないんじゃないだろうか・・・

そうそう、一次創作、始めました。あっちはゆったり更新していくつもりですが、興味を持っていただけた方、是非お読みください。ついでに感想くれたらうれしいな～って思ったり。色々指摘をして下さる方がいれば、励みにもなるので。

他力本願の極み？いえいえ、自覚してる事もちゃんとあります。構成とか、設定の甘さとかね。

ま、宣伝とかはここまで。

それでは、どうぞ！

追憶23～悪夢～

カノンがシルヴィアに追いつくのに、そう時間はかからなかった。風が強まり、段々雪が横殴りになっていく中、カノンとシルヴィアは集落の奥にある社にたどり着いていた。

「シルヴィア、ここは・・・・・・？」

「ここには、私が守らなきゃいけない大事な物があるの。誰かに奪われる前に、何処かに隠さないと・・・・・・！」

既に集落からは火の手が上がっており、何かを踏み荒らすような音や武器の音が聞こえてくる。それに焦っているのだろう、手が悴んでいる事もあって、シルヴィアの扉の鍵を開ける動作はなかなか成功しなかった。

「くっ・・・・・・開いた！」

「よし！・・・・・・これか！？」

「うん！」

ようやく鍵が開き、カノンは間髪入れずに中に飛び込む。シルヴ

ィアもすぐに続き、カノンが持ち上げた翡翠色の球状の結晶を見ると頷く。カノンはそれを懐に入れ、シルヴィアの手を掴むと走り出す。雪に覆われ始めた地面は滑りやすくなっていて、何度も転びそうになりながらも集落とは正反対の方向に走る。だが、その足は止まらざるを得なくなった。

「――――――」

「こ、こいつら・・・・・・なんだ・・・・・・・？」

「わかんない、でも・・・・・・・！」

異形。かろうじて人の姿を保っているようなそれは耳障りな音でカノンとシルヴィアを威嚇し、その足を後退させる。だが、それは次々に姿を現し、カノン達を囲おうとしていた。

「カノン・・・・・・」

「逃げられなくなる前に、何とかしよう・・・・・・シルヴィア、コレ、持ってて」

不安そうにカノンの服を掴むシルヴィアにカノンは安心させるように笑いかけると、厳しい顔つきで異形の群れを睨む。グローブ型

のデバイスを展開すると、辺りに魔力の糸が無数に放たれ、その一部がカノンとシルヴィアを護るように陣を為す。カノンが懐から結晶を出し、シルヴィアに持たせると、異形の目は全て結晶に向けられた。

「――――――！」

「カノン！」

「・・・・・・ッ！！ハァッ！！」

咆哮と共に襲い来る異形の群れに、カノンはその場から一歩も動かずに指を動かす。複雑な陣を描いた魔力の糸は異形を絡め捕り、締め上げ、縊り切る。切断された断面からは蝋色の血飛沫が舞い、やがて塵となって消えていくが、消し去る事が出来たのはほんの数体で、数には何の影響もなかった。

「くっ・・・硬い・・・！」

「きゃあ！！」

「ッ！？」

歯を食いしばって呻くカノンの耳に、シルヴィアの悲鳴が届く。いつの間にだろうか、異形の一体がシルヴィアに迫っており、カノンは咄嗟にシルヴィアを抱き寄せると魔力糸を操り、その首を捻り切る。

「どうしよう・・・このままじゃ埒が明かない・・・！」

「シルヴィア・・・牽制とか、できる？」

「少しだけなら・・・！」

糸同士を結び付け、強度を増し、太さも倍以上になった槍状の糸を何本も造りだし、異形の群れを穿ちながらカノンはシルヴィアに目を向ける。シルヴィアは求められたことを理解すると、彼女のデバイスであろう、杖を展開し、魔力弾を形成する。

「はぁっ！！」

「シュート！！」

カノンが糸を操ると同時に魔力弾が放たれる。縛り上げた異形を魔力弾で撃ち落とし、穿っていく。そんな事を何度も何度も繰り返

していく内に、ようやく逃げ出せるだけの隙間が出来始める。

「シルヴィア！」

「うん！！」

当然、そこを見逃すほどカノン達は愚かではない。一気に突貫できるほどの糸と魔力弾で異形の群れの陣形を崩し、一気に駆けだす。異形の群れが迫ろうとするが、カノンはそれらを操る糸で縛り上げ、足止めをする。

「っ・・・はぁ、はぁ・・・っ」

「はぁ、はぁ・・・んっ・・・」

息が上がり、足取りも重くなるが、２人は走るのをやめない。当然ながら、集落には戻れない。襲撃で手助けは期待できず、火の手は集落全体に回っていると見ていい。２人にできる事は、このまま誰にも何にも見つからず、遠くまで逃げ続ける事だけだった。だが、その望みは呆気なく潰える事になった。

「よぉ、何処まで逃げる気だったかは知らねェが、此処で息止めだ。この俺――――――古龍にして邪龍たるたるハラール・クロウクルワ

ッハに喰われることを光栄に思え」

「な、あっ・・・！」

「ひっ・・・！？」

2人の目の前に、男が立っていた。悠然と、傲然と、圧倒的と言うのも馬鹿馬鹿しいまでの覇気と存在感を纏い、その男――――ハラールは君臨していた。息止め――――行き止めではない。ハラールの目的は足止めでも何でもなく、ただカノンとシルヴィアを殺す事。呆然と立ち尽くし、無防備な姿を晒す2人にしかし、ハラールは何もしない。逃げる隙を見せた訳でも、いつでも殺せると油断している訳でもない。単純に、彼は今、食事中だからだ。逆にカノン達にとっては逃げ出せる最大の隙だった。だが、叶わない。ハラールの自分達を見詰める視線を前に、2人は一歩も動かすことを許されなかった。

「人を・・・喰ってるのか・・・お前・・・ッ」

「カノン・・・！」

青褪めてそれだけをようやく絞り出したカノンにシルヴィアがしがみ付く。シルヴィアを庇うように立つカノンに構うことなく、ハラールは咀嚼していた肉を呑みこむ。見ると口元だけでなく、全身

に血がこびり付いていて、それが彼の血でないことは嫌でも分かってしまう。そして更に、彼の手には誰かの腕が握られていた。ハラールはその腕を骨ごと引き裂くように噛み千切り、咀嚼する。ぐちゃり、ぐちゃり・・・という生々しい音と溢れ出る鮮血を前に、恐怖に縛られた2人は何もできずにただ見詰める事しかできない。

「カ、カノン・・・」

「ッ！！」

「・・・・・無駄だっていうのがわかんねェか？」

弱弱しいシルヴィアの声にカノンはハッと我に返ると、シルヴィアの手を強く握って別の方向へ走る。だが、何時の間に食事を終えたのか、何の感情も感じさせない声と共に、ハラールが腕を払う。ただ、それだけ。何でもないただの一動作で、カノンの目の前の地面が抉れてクレーターを作り、森が５０メートルほど消滅する。

「あっ・・・」

「そんな・・・」

余りの光景に2人の足が止まるが、それでもカノンは向きを変え、

走る。だが、その度に何度も地面は抉れ、追い詰められていく。最後に残されたのは、元来た道を戻る一直線の道だった。だが、戻ったところでそこには異形の群れが待ち構えている。一片の希望も見えない中で、カノンは決断を迫られていた。

「くっ・・・くそっ・・・」

「カノン・・・！」

仕方なく、カノンは走る。戻ったところで、何ができる訳でもない。だが、シルヴィアだけは逃がしたかった。その為ならば、カノンはどんな手段でもとる。

「ハハハハハ！！いいぞいいぞ！精々逃げ回って、俺を楽しませろ！」

「・・・・・！」

哄笑と共に、恐怖が迫る。わざと恐怖を煽るようにハラールは攻撃を直接カノンとシルヴィアには当てず、森や地面、再び姿を現し始めた異形に当てていく。

「ヒャハハハハハハハ！！」

「こ・・・のぉ！！」

つんのめり、転びそうになりながらもカノンは魔力糸を自身が展開できる最大まで使い、立ちふさがる異形を殲滅していく。必死で逃げ回り、気付いた時には結晶を持ち出した社にシルヴィアを押し込み、自身は扉の前に立っていた。

「カノン！」

「シルヴィア、それを隠して！アイツにとられる前に、封印！」

「う、うん！」

シルヴィアが封印を開始する。だが、その前に絶望が舞い降りた。ソレは異形を蹂躙し、カノンの前に立ちふさがる。

「ハッ・・・もう逃げねェのか？」

「くっ・・・はぁっ！！」

ハラールに向けて魔力糸を向けるカノン。元々、封印に大した時間はかからない。だが、完全に隠すには時間がかかる。ハラールの狙いは結晶――――――追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）で間違いなく、封印し、隠蔽してしまえば手は出せない。カノンの意図はその時間稼ぎだが、ハラールはそれすら許さなかった。

「フン・・・この程度か？つまらねェ・・・爆ぜろォォォォォォ！！」

「なっ・・・！！」

ハラールの咆哮と共に、焔が溢れる。龍の息吹と似たそれはカノンの魔力糸をいとも容易く焼き尽くした。カノンは再び魔力糸を放つも、今度は力任せに引きちぎられる。

「くっ・・・！」

「つまらんつまらんつまらん！！アァ、もう良い。これ以上遊ぶ義理はねェ。てめぇは此処で燃え尽きろ！！」

呻くカノンにハラールは苛立たしげにカノンを睨むと、焔を呼び出し、その矛先を向ける。圧倒的なまでの大きさと速さで迫るそれにカノンは魔力糸で陣を編み、盾を作る。一瞬、糸に電撃が奔った。直後、爆発と共にカノンが炎に包まれる。ハラールはニヤリと狂笑

の相を浮かべ、その笑みはやがて心底楽しげなものに変わる。

「っ・・・」

「ほぉ・・・人間、それも仔にしては珍しい。俺の攻撃を耐えきったのはお前が初めてだ。褒めてやる・・・だが、その道具はもうお終いだ。後は大人しく、俺に消化されろ」

傷つき、ボロボロになりながらもカノンはまだ立っていた。だが、彼のデバイスは修復不可能なまでに破壊されている。いや、溶けていると言った方が正しい。ハラールの攻撃は、それほどまでの熱量を持っていた。だが、カノンは魔力糸で自身を覆う事で防ぎ切った。電撃を発していたのも功を奏したかもしれない。だが、その代償としてカノンのデバイスはその役割を終えた。そんなカノンの前に、ハラールは傲然と立つ。だが、カノンはまだ諦めてはいなかった。ポケットから取り出したのは、腕輪。カノンはそれを掲げる。

「・・・セットアップ」

カノンの火傷した手に、双刃が握られる。奔る痛みを無視してカノンはハラールに迫る。

「はぁぁぁぁぁぁ！！」

「生きのいい餌はいい・・・だが、遅ェ！！」

悠然と立つハラールに刃が届く前に、カノンの胸から腹にかけてが切り裂かれる。特別な武器があった訳ではなく、ただの爪で、カノンは重傷というのも馬鹿らしいまでの深い傷を負わされていた。血を吐き、よろめくカノンをハラールは足でつつく。ただそれだけで、カノンの身体は吹き飛ばされた。だが、ハラールはそれでもまだ手加減をしていた。正確に言えば、手加減の手加減をした状態だった。脆弱さを嘆くようにハラールは嘆息すると、一瞬でカノンに迫り、爪を振り下ろす。カノンはぎりぎりで避けることに成功するも、その余波でさらにダメージを負い、最早動くことも出来ない。

「久々に骨のある狩りだった。褒美として息の根は苦しまぬように止めてやる」

「ぁ・・・・・・」

「やめてぇぇぇぇぇ！！」

静かな口調とは裏腹に、狂気に塗れた笑みで嗤うハラールは再度爪を振り下ろす。だが、その寸前。悲痛な叫びと共にとび出したシルヴィアがカノンを突き飛ばす。カノンに突き刺さる筈だったそれは狙いを外れ、真っ直ぐに邪魔者に向かって牙をむいた。カノンは最初、それを認識できなかった。何も理解できぬままに、手を伸ば

す。その目の前で。最愛の人は――――――

「これが・・・・・・全てだ」

「・・・・・・・・・・・・・」

重く沈んだ空気の中で、カノンは話を終えると、目を閉じて動かなくなる。誰も、何も言えなかった。すすり泣きの音すらない。悲しみが人の許容限界を超えた時、涙というのは殆ど出ない。ただ呆然としているだけの状態になるのだ。

「あの後、オレは運よく――――ああ、本当に運よく助かっていたレオンに剣を習い、すぐに旅に出た。目的は・・・まぁ、言うまでもないだろ?だが、何処まで行っても見つからず、ただ当てもなく歩き回るだけの日々で、オレは全部諦めてしまった・・・」

カノンは自嘲し、目を伏せたまま黙りこくる。沈黙の中で、最初

に口を開いたのは、やはりフェイトだった。

「カノン・・・ごめんなさい・・・こんな、こんな事、軽々しく聞くんじゃなかった・・・！」

「フェイト・・・」

「私・・・何にも分かってなかった・・・カノンを励ましてるつもりで、勝手に頑張れって言って・・・カノンの本当の悲しみ、分かってあげられなかった・・・！」

言葉を重ねるごとに感情が高ぶったのか、フェイトの目尻に涙が浮かび、それはすぐに止めどなく流れ出す。悲痛な声で紡がれる謝罪にしかし、カノンは首を振る。

「そんなことはない・・・オレは、救われてた。オレは、フェイト・・・お前の中にシルヴィアを見ていた」

「カノン・・・」

「聞け。お前とシルヴィアは良く似ている。外見じゃなくて、中身も違う・・・だが、本質が同じなんだ、きっと。ずっと、それが苦しかった。でも、お前はお前だ。シルヴィアじゃない。お前は、オ

レがここに来てからずっと、オレを見放さないでいてくれた。だから、感謝している。あの時、ほんの一時だけでも、幻だったとしても、シルヴィアと再会したのは、吹っ切る切っ掛けをくれたのは、間違いなくフェイトだ」

いつになく饒舌に、カノンは言葉を重ねる。フェイトから目を逸らさずに、ただ、自分の思いを吐露していく。カノンは、自身を潤んだ瞳で見つめる仲間に目を向ける。

「お前達・・・他の皆もそうだ。お前達がオレを気遣っていてくれた事、分かっていた。だから、お前達には全部話そうと思ったんだ。幸せだった過去も、どうしようもない程理不尽な過去も、全部。オレは、此処で、この場所で、また一からやり直していきたい・・・今は、そう思えるんだ」

カノンは皆を見回し、少しだけ微笑む。それは、嘘偽りのない、心の底からの、真っ直ぐな想い。

「だから・・・・・ありがとう。お前達が一緒で良かった」

その言葉に、最初に泣き出したのは誰だったか。すすり泣きは、やがて隠しようもない程大きくなり、誰もが涙を隠そうとはしなかった。その中で、誰もが祈る。目の前の青年の悪夢が、どうか、少しでも早く覚めますように、と。

「カノン・・・」

「フェイト？」

涙を拭い、目を真っ赤に腫らしながらも、フェイトはカノンを強い光を放つ瞳で見つめた。

「ハラール・クロウクルワッハは、六課の目的である追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を狙う犯罪者グループ、堕ちた聖典（カラブト・バイブル）の一員であるとの報告を受けています」

毅然とした声で告げるフェイトに、ティアナが続く。

「現在捜査中ですが、目撃情報が出ており、六課の目的である追憶（ノスタル）の歯車（ジック・ギア）の確保の他に、堕ちた聖典（カラブト・バイブル）の逮捕が加わっています」

「その際、彼らに関しては、逮捕、拘束が実行不可能な場合、その凶悪性を考慮し、殺害も許可されています」

「もちろん、それはあくまで最悪の場合の処置に過ぎません。法の管理者である管理局の局員だからこそ、軽率な行動はできません。ですが、私達は局員としてだけではなく、貴方の友人の一人として、

最善を尽くします」

ティアナに続き、補足をするように刹那となのはが続く。ヴィヴィオを抱きしめながら、真っ直ぐに、カノンを見据えている。局員として、友人として、助ける。止まる気はなかった。

「私の古巣である陸士１０８部隊の部隊長であり、私とスバルの父でもあるゲンヤ・ナカジマにも捜査協力を要請し、協力を約束してくれています」

「僕達には、大きな力はありません・・・でも！」

「ああ、やれるだけのことはするぜ」

ギンガとスバルが頷き、エリオとアレンが胸の前で拳を握る。

「私達も、忘れないで、ね？」

「はい！」

リゼットとキャロが、からかう様に続く。だが、その目も声も笑ってなどいなかった。呆気にとられるカノンの前に、はやてが立つ。

その後ろには、守護騎士たちが控えて立っている。

「騎士の名に懸け、奴らに好き勝手はさせん。お前に力を貸そう」

「おう！立ちふさがる奴は全部ぶっ叩いてやるよ」

「盾の守護獣の名に懸け、お前を護ると誓おう」

「怪我をしたら、ちゃんと戻ってきてください。私が治してあげますから」

ヴォルケンリッターの面々は各々の信念のままに、誓いを立てていく。主に対する者と違う、盟友としての誓いだった。

「私達機動六課は、この案件に対し、全力で取り組みます！」

「カノン君、君は、六課にとって重要な人や。情報の事だけじゃなくても、な。だからこそ、私達は全力で君を助ける。皆、ええな！？」

「はい！」

リィンとはやての声に、誰も躊躇うことなく頷いた。安っぽい同情ではなく、義務からでもなく、たった一つの想いだけを原動力にして。

「・・・・・・」

「カノン、私達が、堕ちた聖典（カラプト・バイブル）を捕まえるよ。だから・・・」

その先は、なんだったのか。フェイトはその先を呑みこんだ。これ以上は、無粋になる。だから、強く、強く、カノンを見つめる。

「・・・・・そうか。でも、お前達には任せてやらない。オレは、オレの手で決着をつけて見せるさ。お前達は、後ろからついてくればいい」

あくまでカノンは不遜に笑う。自身の心の内に広がる様々な感情を押し殺し、在りし日のようにただただ自信たっぷりに、何処までも不敵に。

（また、一歩。オレは前に進めたかな、シルヴィア？見てろよ・・・オレは・・・）

ふと、カノンは話の中でした約束を思い出す。大きくなったら、大人になったら、世界を見て回ろう――――――そんな、他愛もない口約束。それは今、叶えられたのかもしれない・・・そう、思った。何故かは分からないが、そう、思えた。

――――――チリン、と涼やかな音を立てて、鈴が震える。まるで、笑うように。カノンは少しだけ、微笑んだ。

追憶２３～悪夢～（後書き）

いかがでしたか？今回の話の矛盾点・・・というか、祖語の出ている点については次回で出します。とはいえ、完全に解決とはいかないと思います。

前書きでも書きましたが、一次創作の方もよろしくお願いします。

タイトルは『Ｒｅｓｏｎａｎｃｅ？Ｗ？』です。

感想、ご指摘、アドバイス、待ってますのでお気軽に！もちろん、こっちにもよろしくお願いします！

それでは！

追憶・外～刹那の高町家訪問？～（前書き）

今回は番外編です。本編放っておいて何やってんだ・・・なんて、自分でも思った。でも、書きたい衝動が抑えられなかったんです。後悔はしていない（オイ

今回の話はちょっとはっちゃけ過ぎました。カオスです。どうしてこうなった・・・

あ、ちなみにこの話は時系列を無視した形となっていますので、混乱なさらない様にしてください。

まぁ、どうか楽しんでください。

それでは、どうぞ！

追憶・外～刹那の高町家訪問？～

それは、こんな一言から始まった。

「なぁなのはちゃん」

「なに？」

珍しく、仕事が早く終わったある日の昼下がり。のんべんだらりと過ごしていたはやてが、なのはを横目で見つめる。なのはは訓練のデータを編集しながら、紅茶を口にする。リゼットが来てからは大抵紅茶が六課の主流となっていた。

「いやな、ヴィヴィオの事、高町家の皆に言ったんかなって。刹那君と付き合ってる事もまだ言ってないんやろ？」

「っ！？」

はやての問いになのはは思いっきり吹き出しそうになるのを寸前で堪え、飲み干すと咽ながらはやてに詰め寄る。その顔は真っ赤に染まっており、羞恥の程が見て取れた。

「い、いきなり何言うの！？」

「や、でも、流石に言ってないのはどうかと思うんよ。今のなのはちゃん、できちゃった婚とか、駆け落ちみたいなもんやで？士郎さんとか、恭也さんが鬼と化してるのが目に浮かぶんよ・・・あ、なんやろ、寒気してきた」

「にゃっ！？で、できちゃった婚！？か、かか、駆け落ち！？」

身体を震わせるはやてを余所に、なのはは告げられた特定の言葉に過剰に反応し、元々赤かった頬を更に紅く染める。瞬間沸騰もかくや、の勢いであった。なのはが何を想像したのかが丸わかりである。駆け落ち。なんだか背徳的な響きがあるような、ないような。だが、ここは六課の隊舎で、それもまだ昼下がりである。そんな場所で、今のなのはのように大声を上げると、どうなるだろうか？

「な、なのは！？か、駆け落ちって・・・できちゃった婚って、まさか、本当に！？」

「・・・・・フェイト、落ち着け」

飛び込んできたのはフェイトだった。叫び声から何を想像したのか、顔を真っ赤にしてなのはに詰め寄る。その肩をカノンが疲れた顔をして抑えていた。

「にゃっ!?フェイトちゃん、違うんだよ、あの、その・・・!」

「で、できちゃったって事は、おめでたなのかな!?で、でも、そうなったって事は・・・・・・はぅ!?」

慌てて説明しようとするなのはだが、恥ずかしさからか言葉になっていない。フェイトはフェイトで暴走した挙句自爆していた。兎にも角にも一周回って落ち着いたようだが、その叫び声は勿論、六課中を駆け巡る。

「なのはさん、結婚するんですか!?」

「スバル、落ち着きなさい!」

「・・・ティアナも、顔、真っ赤よ?」

「ギンガもね」

入ってきたのは六課の元気担当、スバルであった。好奇心で目を輝かせる彼女からは犬耳と尻尾が見えている。ティアナはスバルを窘めるが、その顔は真っ赤だ。それを指摘するギンガは一見冷静に

見えるが、何処か瞳が熱っぽく、うっとりとしている。何を想像しているかは推して知るべし。ただ1人、リゼットだけが面白がるように微笑んでいた。

「み、皆まで集まってきちゃったじゃない！は、はやてちゃんの所為だよ！？」

「いや、私の所為言われても・・・なのはちゃんが最初に暴走したんやろ？丁度ええから、皆にも聞いてもらうで？」

「ま、待ってはやてちゃん！」

涙目で責めるなのはにはやては冷静に突っ込みを入れると、今度は悪い笑みを浮かべて集まってきた皆を見据える。なのはの懇願もお構いなしに、はやてはその口を開いた。

「なのはちゃんと刹那君の結婚挨拶、見たい人ーーーーーー！！」

「はーーーーい！！」

隊舎が揺れた。比喩でも何でもなく、声だけで揺れた。内容はともかく、どこかの幼稚園のようなやり取りになのははがっくりと肩を落とす。とはいえ、何時かはしなければならない事であるのは事

実。それに、刹那からも挨拶したいと言われたこともあるのだ。当然、なのはだってそういう事はきちんとしたい。ただ、誰かに言われてからする、というのが気に食わないだけなのだ。

「えへへ・・・」

「・・・・・なんやかんやで乗り気やな、なのはちゃん」

顔を赤く染めるなのははやては溜息を吐く。自分で言いだしたことながら、胸の内に広がる敗北感は何だろうと思わず考えてしまった。はやてももう２１歳である。なんだか『Ｉ』で始まり『Ｅ』で終わる絶望的に素敵な単語が浮かんでしまうが、そんなことはないとはやては心中で否定した。と、丁度その時刹那がヴィヴィオを連れて帰ってくる。

「・・・・・あれ？皆集まって、どうしたの？」

キョトンとしてヴィヴィオと顔を見合わせる刹那に、なのは以外の皆がニヤリと笑い、目がキラリと輝いた。

＊　＊　＊　＊　＊

「まったく・・・・・・何を言っているかと思えば・・・・・・・」

「ごめんなさい」

刹那は呆れた表情でチャクラムへと姿を変えた愛機(ツィガーヌ)を手元で回転させる。なのはとヴィヴィオ以外の面々は何処かしら焦げていたり、凍結したりしていたが、何故かテーブルや椅子などの備品は無事だった。倒れ伏した面々は「鬼・・・」や「最早隠れではない・・・」、「鬼畜・・・」など呟いているが、刹那は気にした風もなく爽やかな笑顔を浮かべる。

＜＜貴方がモタモタするのが悪いんでしょう？＞＞

「俺だって此処まで伸ばすつもりはなかったさ。でも、仕事が・・・」

＜＜それも貴方の所為です。次から次へと仕事を増やしているのは刹那自身ではないですか？なのは様共々、ワーカーホリックも行き過ぎだと思いますよ＞＞

ツィガーヌの辛辣な言葉に刹那は苦笑する。図星であるが故に、苦笑しか浮かべられない。

「ヴィヴィオとの時間はちゃんと取ってるし、やりたい時はやってるよ？」

＜＜白昼堂々何を言っているんですか、貴方は！？・・・それに、まだ挨拶してないのに、良いんですか？＞＞

「ん？ヴァイオリンとか、スケートの話だよ？なのは、歌上手いし、スケートの方もアイスダンスの真似事ぐらいならできるようになったよ？」

色々と危ない発言をする刹那だが、内容自体は割とまともである。だが、穏やかな笑顔に何かを隠している事は明白だった。

＜＜もういいです・・・それにしても、アイスダンス？貴方の得意分野では？＞＞

「違うよ。俺の専門は1人だもの。同じフィギュアでも、2人でやるのは専門外だよ。だから、真似事・・・話がそれちゃった。さて、確かに頃合いではあるから、休暇、貰っちゃおうか。は・や・て？」

あくまで爽やかに、しかし所々に殺気と憤怒を込め、刹那ははやての顔を覗き込む。

「な、何でしょうか、ご主人様？」

「うん、休みが欲しいんだ。なのはと、俺の、２人で。明日から。構わないよね？」

思わず妙な言葉を使ってしまったはやてだが、某喫茶店のような感じではない。魔王に虐げられる人間のメイド・・・のイメージが出来ていた。一も二もなく、はやては頷く。逆らえば、死。確定事項であった。

「なのは、休暇、とれたよ。明日にでも行って来よう？」

「うん！えへへ、ちょっと楽しみ。お父さんとお兄ちゃんが何か言っても、私が何とかしておくから！」

「いやいや、そこはちゃんと俺だって話すよ。なのはの事、本気で欲しいからね。だからさ・・・」

「なのはママ、パパ、わたしも頑張るよ！」

最早、刹那となのは、そしてヴィヴィオの眼中に、横たわる面々は入っていなかった。桃色空間の後に残されたのは、真っ白になった六課の面々だけだった。

「ふ、ふふ、フフフフフ・・・」

「はやて？」

不気味に笑い声を漏らすはやてに六課（フェイト）の良心その1が訝しげな視線を向ける。はやての顔は悪だくみを思いついた人間のそれであり、目は爛々と輝いていた。フェイトは冷や汗を垂らしながらも警戒する。

「皆、明日は仕事なしや。皆、明日は出張な？」

「「「「はい？」」」」

突拍子もない事を言い出したはやてに皆の目が点になる。それはそうだろう。仕事を放棄してしまえば、一体誰がその責を負うのか。それに、緊急事態が発生すれば対処が遅れてしまう。

「あの、八神部隊長、それは・・・」

「問題ない。仕事はグリフィス君に押しつ・・・もとい、一任するし、緊急事態かて空気を読んで発生しないでいてくれる筈や」

「そんなバカな・・・」

苦言を呈しようとした六課(ティアナ)の良心その2の言葉を遮り、はやてはトンデモ理論を展開する。余りのおバカ・・・ならぬ、ズレ過ぎた答えにティアナは脱力してしまう。

「はやて、さすがに拙いよ・・・」

「ほう?フェイトちゃんは、なのはちゃんの人生の決定的分岐点を見逃すって言うんやな?」

「そ、それは・・・」

はやての暴走を止めようとするフェイトは、逆にトンデモ理論に翻弄され、陥落しつつあった。

「親友の門出の瞬間、見たくないんか?」

「・・・・・見たいです」

訂正。良心要塞フェイトは、はやての謀略という破城鎚によって陥落した。南無。

「ほら、ティア！皆で行けば怖くないよ！」

「い、嫌よ！絶対、トラウマ物になるに決まってるじゃない！というか、教訓じみた言い方で煙に巻かないで！」

赤信号、皆で渡れば怖くない・・・と言わんばかりのスバルにティアナは抵抗する。だが、ティアナは焦りで失念していた。スバル・ナカジマという少女は、一度ワガママを言い出すと梃子でも動かない、悪い意味で頑固者だという事。そして、その姉もまた、彼女と同じ血を流しているという事だ。

「いいじゃない、ティアナ？こんな機会、滅多に無いし、それに、刹那さんが何を言うかも興味あるもの」

「ギンガさんまで！？ああもう、どうしてこんな・・・！」

「ティアナ、諦めた方がいいわ。こうなった以上、楽しまないと損よ？」

頭を抱えるティアナにリゼットが微笑を湛えて忠告する。その微笑は天使のようだが、勘違いしてはいけない。何故なら、彼女は最初から、どちらの意見にも否を唱えず、傍観に徹していたのだから。

「リゼット・・・アンタ、絶対楽しんでるでしょ」

「あら？私は魔女よ？楽しんでるんじゃなくて、愛でているのよ。慌てるティアナ、すっごく可愛いわ」

「なっ！？だ、誰が可愛いのよ！？変なこと言わないで、この状況を何とかして！」

ティアナはリゼットの甘言（？）によって真っ赤になり、冷静さを完全に欠いてしまった。そして、それがティアナの敗因だった。

「無理よ。諦めなさい？ティアだって、本当は見たいんでしょう？」

「み、見たくなんて・・・」

「じゃあ、その真っ赤に染まった顔は何？興味がありますって言ってるのと同じじゃない？」

リゼットのそれは悪魔の囁き。だが、冷静さを欠き、前後不覚に陥ったティアナには、抜群の効果を持っていた。

「あ、ぅ・・・」

「私だって見たいもの。だって、刹那さんとなのはさんと言えば、ミッドの有名人の代名詞でしょう？そんな人達が、結婚の挨拶で右往左往するのって、楽しいじゃない？ねぇティア、一緒に行きましょ？」

「ああもう、分かったわよ！私だって興味あります！良いじゃない、私だって女なんだから！」

ティアナ、陥落。リゼットは神秘的な笑みを浮かべ、はやての元に向かう。

「部隊長、全員一致で賛成です。明日からの出張の準備をしますね？」

「おおきに。じゃ、皆もそういう事で。ああ、それから、なのはち

ゃん達には気づかれたらあかんで？」

「「「はい！！」」」

こうして、刹那となのはの門出を見る・・・と言う名目の、ストーカー同盟は結成された。

「フェイトさん・・・」

「カノンさん、私達はどうすれば・・・」

残ったのは、皆の暴走から早々に避難したエリオとキャロ、そして、バカ騒ぎを止められなかった黒衣の青年、カノンだけだった。

「・・・・・すまん、どうにもできない。あいつ等、帰ってくる時に人の形を保っていればいいが・・・」

「「・・・・・・」」

どうしても、口で言うのを憚られるような光景しかイメージできないカノン達だった。カノン達は、騒ぎつつこっそりと暗躍の準備を進めるストーカー達に煤けた背中を見せ、その場を後にするしかできなかった。

「どうして、こうなった・・・・・・？」

カノンの困惑に満ちた問いは誰にも答えられる事もなく、カノンは自室に引っ込んだ。来るであろう混乱と惨劇（笑）に備えるために。

追憶・外～刹那の高町家訪問？～（後書き）

いかがでしたか？今回はまぁ、前篇的な扱いです。どうしてこうなった・・・？

次回はちゃんと地球行きます。

それでは、また次回にお会いしましょう！

追憶・外～刹那の高町家訪問？～（前書き）

お待たせしました・・・・・前回から二週間と少し、もしかすると三週間ほど空いてしまいましたね。どうもすいませんでした。

この回で終わるかと思ったら、予想より長くなってしまいました。なので、あと一回だけ続きます。本編が早く読みたい方、ごめんなさい。あと少しだけ、待って・・・！

それでは、どうぞ！

追憶・外～刹那の高町家訪問？～

「久しぶりかな、海鳴に来るのも。出張以来だっけ？」

「そうだね、ずっと忙しかったから・・・・・・」

転送ポートから街へと出た刹那となのはは、ヴィヴィオの手を引きながら目的地である喫茶店、『翠屋』へと向かっていた。本来ならば、家に向かうべきなのだが、この時間帯はまだ翠屋は絶賛営業中である。一応、連絡はしておいたが、そもそも急だったこともあり、翠屋で話をすることになった。

「ヴィヴィオ、もうすぐ会えるよ」

「ほんとに？えへへ、楽しみ」

「・・・・・・」

ニコニコと笑いあうなのはとヴィヴィオを余所に、刹那は何処か上の空だった。気付いて顔を見合わせているなのはとヴィヴィオにも気づかず、ただ歩みを進める。

「刹那君？どうしたの？」

「パパ？」

「・・・・・・え、なに？何か言った？」

呼びかけられ、ようやく我に返った風の刹那は、普段なら想像もできない、焦ったような光をその瞳に映している。

＜＜まさか、此処にきて緊張した、とか言いませんよね？＞＞

「・・・・・・ごめん、まったくその通り」

「「ええっ！？」」

ツィガーヌの呆れた声に頷いた刹那に、なのはとヴィヴィオは驚きを露わにする。彼女たちから見た刹那は、どんな時も動揺することのない人物だ。特殊とはいえ、人前にでる、と言う点では変わりのないイベントに、此処まで動揺する刹那は珍しいと言える。

＜＜人前は慣れているのでは？＞＞

「慣れてはいるけど、こういう事になると話は別だよ。一生に一度、あるかないか。そうそう体験するようなことじゃないからね」

言いながら、刹那は目を細める。親のいない刹那にとって、交際を親に報告する、というのはなじみのない話であった。精々、安い恋愛ドラマのワンシーンぐらいだ。故に、現実感などある筈もないのだが、以前『翠屋』に訪れた時は、なのはの父である士郎と、兄である恭也に詰め寄られているし、母親の桃子や姉の美由紀はなんだかんだで面白がっていた事を覚えている。その記憶故に、緊張が生み出されていたのだ。そうこう言ううちに『翠屋』の看板が目の前に現れる。深呼吸を何度もする刹那をなのはは可笑しそうに見つめる。確かに士郎や恭也はなのはに対して過保護だ。しかし、なのはが本心から望むことを否定することもないと信じてもいた。

「大丈夫？」

「ああ、大丈夫。大丈夫になった。じゃ、行こうか、なのは、ヴィヴィオ？」

「はーい！！」

先程までと違い、緊張の抜けた柔らかい笑みを浮かべた刹那は、ヴィヴィオの手をしっかりと握る。元気よく返事を返したヴィヴィオ、そして、そんな2人を見て微笑むなのはと共に、その扉に手をかけた。

＊　＊　＊　＊　＊

「いいのかなぁ・・・あ、入った。えっと、こちらフェイト。３人とも、翠屋に入ったよ」

「お、ようやくやな？じゃ、サーチャーを置いたら離れていいで？そっちの方が安心やし、フェイトちゃんが刹那君に見つかれば、私が危ないしな」

「見つからなくても、同じ気がするんだけど・・・・・・？」

フェイトを心配しているようで、実は自身の保身を確実にしようとするはやてに、フェイトは苦り切った顔で呟く。そんなフェイトの呟きが聞こえなかったのか、はやては今にも踊り出しそうな雰囲気で目を輝かせる。

「気にしない気にしない。さ、出歯亀・・・・・・もとい、観察開始や！」

「出歯亀って言ったよ!?・・・・・うぅ、ホントにごめんね、なのは、刹那。ヴィヴィオも許して・・・」

僅かに目を潤ませつつ、フェイトは隠れながら謝罪の言葉を呟く。ここで止めるという選択肢もあったのだが、はやてに押し切られていたため、それも叶わない。

（刹那、怒ると怖いの忘れてるのかなぁ、はやては。でも、怒られるのは今ここに居る私な訳で・・・・・・あ）

そう。怒られるのはフェイトなのだ。はやて達は今、六課の隊舎。フェイトだけが単独行動させられ、ここに居る。つまり、刹那達から見ればフェイトだけがストーカーまがいの行為をしていたと思うだろう。早い話が、フェイトはスケープゴートにされたのだ。

（これは、怒ってもいいんだよね・・・・・？ううん、怒らなきゃだめだよ、私。はやての頭を冷さないと。つい流されちゃったけど、駄目なものは駄目だよね）

フェイトは俯き、昏い笑みを浮かべる。目のハイライトが消え、何やら黒いオーラが出ている所を見ると、彼女の怒りの大きさが窺える。現に、フェイトの周りには猫の子一匹いない。静けさが辺りを支配する中、フェイトは1人、はやてへの報復を考え続けていた。

＊　＊　＊　＊　＊

「こんにちーーーーーーーー」

「なのは！聞いたぞ！？娘とはどういう事だ！？まさか、駆け落ちーーーーーーーー」

刹那が扉を開けた瞬間、引き攣った声と共に奥からとび出してきたのは、なのはの兄である恭也だった。ヴィヴィオは恭也の勢いに驚いたのか、なのはの陰に隠れてしまった。当の恭也は刹那の姿を見た瞬間、ピタリ、と動きが止まる。呆気にとられた瞳が刹那を見、なのはに移り、その陰にいるヴィヴィオに向けられ、最後に再び刹那に戻る。パクパクと口を動かし、何か言おうとするが、言葉にならない。刹那は、状況こそ違えど、前もこんな風ではなかったか？などと考えながら、とりあえず挨拶することにした。

「えっと・・・・・お久しぶりです、恭也さん。2年ぶりでしょうか？」

「あ？あ、ああ・・・そうだな」

あっさりとした調子の刹那に恭也はハトが豆鉄砲を喰らったような顔でなんとか返事を返す。

「昨日、なのはから連絡があったと思いますが、大事な話があるの

で、此方に窺わせていただきました。お時間いただいてもいいでしょうか？」

「話・・・大事な、話・・・・・そうだ、なのは！？まさか、話と言うのは――――――！！」

あくまで慎重に、刺激しない様に丁寧に告げる刹那。それというのも、恭也はなのはを溺愛するシスコンだからだ。それもただのシスコンではなく、重度の、という言葉が前に付く。前の六課の時、出張で訪れた際は、話も聞かずに詰め寄られたほどだ。しかし、かつてと違い、刹那となのはの関係は大きく違っている。以前勘違いされたことそのまま、恋人である。

「あら、おかえりなさい、なのは。早かったのね？刹那さんも、お久しぶりですね。もしかして、そちらが子が話にあったヴィヴィオちゃん？」

「お久しぶりです、桃子さん。はい、えっと・・・娘の、ヴィヴィオです。ヴィヴィオ、挨拶して？」

「うん！高町ヴィヴィオです！よろしくお願いします！」

刹那に促され、ヴィヴィオは元気よく挨拶をする。それを満面の笑顔で受け止めた桃子は、刹那達を席に座らせると、奥からケーキ

を持ち出し、それぞれに振る舞う。そこでようやく、恭也が復活した。

「娘・・・？まさか、なのはに手を出したの――――――」

「恭也？いい加減にしないと、話が進まないでしょ？」

振り向いた恭也に、奥からフライパンが飛来し、顔面に直撃する。悶絶する恭也に呆れた視線を向ける紫髪の女性、恭也の妻である忍が、腰に手を当てて立っていた。

「久しぶりね、なのはちゃん。ヴィヴィオちゃんは初めましてね？忍っていうの。そこにいる恭也の奥さんよ。よろしくね」

「はい！えっと、高町ヴィヴィオです！よろしくお願いします、忍さん！」

「うん、いいお返事。なのはちゃん、今、お義父さんが来ると思うから、少し待ってて？」

「はい、ありがとうございます」

ニコニコとヴィヴィオと挨拶を交わした忍は、なのはに向かって微笑む。なのはは少しだけ緊張した様子で頷く。今回の報告は、士郎や桃子にとっては寝耳に水のことだ。しかも、刹那やヴィヴィオとの関係は2年前から始まっている。時間が経った後での報告なので、既成事実と捉えられても仕様のないところもある。それ故に、なのはの不安は本人が認識するよりも大きいものだった。そんななのはの心が読めたかのように、忍は微笑む。

「緊張しなくていいわ。そこのシスコンはともかく、お義父さんはちゃんとしてるわ。それに、なのはちゃんにそういう相手が出来た事はめでたいことだもの。だから、安心して？」

「は、はい」

安心させるような忍の笑みに、なのははぎこちなく頷く。丁度その時、士郎が入ってきた。

「すまないね、遅れてしまった。では、話を聞かせてくれるかい？」

「はい。じゃあ、ヴィヴィオ？少し外してくれるかな？」

「ごめんね、すぐに終わるから」

瞳に真剣な光を灯す士郎に自然と刹那も背筋を伸ばす。なのはと2人、ヴィヴィオに席を外すよう促す。ここから先の話で、ふざけた話は無い。刹那となのはは全てを話すつもりだった。自分達の関係も、ヴィヴィオの事も、全て。そこには、ヴィヴィオの出生の秘密も含まれている。恭也と忍もまた、席に座ると姿勢を正している。ヴィヴィオは刹那達の言外に含まれたニュアンスに気付いたのか、特に何も言わずに、なのはの姉である美由紀と共にカウンターの奥に消える。少しだけ振り向いたヴィヴィオの瞳には、頑張って、とでも言うような思いが込められていた。

「さて、いいかな？」

「はい、単刀直入に言わせてもらいますが、私は、なのはと2年前から交際しています」

「・・・・・そうかい。では、あの子は？確か、娘と言っていただろう？交際している以上、そういう事があってもおかしくはないが、それにしたってなのはが子を産んだにしては、少し無理がある年齢に見える」

余計な装飾を剥ぎ取り、実直と言うにも過ぎる程の刹那の言葉を耳にし、士郎は取り乱す風もなく頷く。士郎にとって半ば予想がついた――――――と言うより、いつかは来ることだと覚悟していた事だ。目に入れても痛くない程溺愛し、少々過激な行動をとっていたとしても、本当にその時が来たのなら、士郎に拒む道理はなかった。故に、交際については一も二もなく頷く。先程から見ていても、

刹那となのはの絆は深いことが分かっていた。ヴィヴィオとのやり取りもまた然り。兎も角、今一番の謎を聞きだす。士郎も流石に、なのはが産んだとは考えていない。しかし、確かに娘と言っていた。考えつくのならば養子だが、その経緯すら今は不明だ。士郎にとっては孫にあたる以上、その辺の事は知っておきたい。

「恐らく予想しているとは思いますが、ヴィヴィオは養子です。なのはと2人で、保護責任者を引き受けました。あの子の生まれは少々特殊です。故に、彼女には一度、とても辛い思いを味わせてしまいました。JS事件、そう呼ばれる事件が、2年前に起こりましたが・・・ヴィヴィオは、その事件の鍵でした。ある犯罪者の起こしたテロに、ヴィヴィオは利用されたんです」

「・・・・・・」

淡々と語る刹那に、士郎は注意深くその表情を探る。なのはは当時を思いだしているのか、硬い表情で俯いている。刹那の表情は精巧な人形のように動かないが、士郎が察するには余りあるほど解りやすい態度だった。後悔と、決意。何があったのか、何をしたのか。語られなくとも、分かる事はある。

「事件が解決して、ヴィヴィオを正式に引きとりました。以来特に変わったところはなく、健康そのもので友達と遊んでいるようです」

「ヴィヴィオは今、初等部の2年生だよ。ストライクアーツってい

う、格闘技にも興味があるみたいで、頑張って練習してるみたい」

ふ、と表情を緩め、僅かに笑みを浮かべる刹那となのはの間には、ヴィヴィオへの愛情が満ち溢れていた。

「・・・・・そうか。だが、子を育てるというのは大変な事だよ。どれだけ大事に思っていても、どうしようもなく苛ついてしまう事もある。それでも、君たちは愛する者と、家族として共に進む覚悟はあるかい？」

「・・・・・覚悟はあります。全部背負うと決めましたから。ヴィヴィオの事情も、なのはの事も。離すつもりはありません。強引でもなんでも、連れて行きます。どこまでも、なのはとヴィヴィオが望むところまで、いつまででも」

「私も、ただついていくつもりはないよ。2人で・・・・・ううん、3人で支えあって、家族として生きていく。少し変わった家族かもしれないけど、これが一番幸せな形だって確信してる」

「・・・・・」

不敵に笑う刹那となのはを見て、士郎は内心で嘆息する。本当に似た者同士な2人だと思う。こうと決めたら梃子でも動かない頑固なところが、真っ直ぐに進んでいく姿が、とてもよく似ている。先

程から黙って話を聞いていた桃子や恭也も、若干苦笑しつつも同じことを考えているのが丸わかりだ。

「覚悟があるのなら、これ以上いう事はないよ。ただ、覚えておきなさい。言うだけなら簡単だ。これから、行動で示してもらわなくては」

「勿論です。言った事を嘘にするつもりはありませんよ」

「私もね」

士郎の言葉が拗ねたものになってしまったのは、親としての負け惜しみだろう。刹那と言う青年には、何処か人を安心させる雰囲気がある。それに呑まれただけに違いない、と士郎は心の中で自分を納得させる。だが、そこに確かな安心感があるのもまた、事実だった。

「今日は、泊まっていきなさい？お仕事で、あまりゆっくり過ごしてないでしょう？」

「うーん、どうしようか？」

「今日は泊まっていきたいな。その・・・・・・不満がある訳じゃ

ないけど、ゆっくり話したいというか、その・・・」

迷う素振りを見せる刹那の裾を、なのはが小さく引っ張る。ひそひそと耳元で囁く声は若干の羞恥に震えており、よくよく見ると頬が少しだけ赤い。・・・・・それだけで、悟ってしまった。思えばご無沙汰だったかな？と考える。仕事があり、子供が隣にいるという事で、確かにする頻度は少ないかもしれないが、それほどでもない、気が、する。とはいえ、愛する女性がここまで言うのなら、刹那としても断るのは気が引ける。

「じゃあ・・・・・すいません、一晩泊まってもいいですか？」

「ふふっ・・・・・ごゆっくりどうぞ」

申し訳なさそうに申し出る刹那を、桃子は意味深な微笑みを湛えてみる。刹那となのはのやり取りの、裏の意味に気付いているのだろう。流石に気まずくなり、目を逸らすと今度は頬を引きつらせた士郎と恭也と目が合ってしまう。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・・」

双方無言のまま、曖昧な笑みを浮かべる。

「・・・・・・刹那君、少しいいかな？」

「・・・・・・はい」

士郎が曖昧な笑みのまま告げた一言に、拒否権はなかった。もっとも、刹那としても断るつもりはなかったのだが。外に出ていく２人を呆然と見送るなのはを、桃子は面白がるように見つめ、恭也はプルプルと震えたまま無言、忍はそれを抑えるために足を踏んでいた。

「あれ？どうしたの？」

「なのはママ、パパは？」

刹那と士郎がいなくなったことに気付いたか、奥から出てきた美由紀とヴィヴィオがキョトンとする。その場の４人は揃って苦笑するほかなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

「ぐはっ・・・・・・！」

「な、なのはさん、なんと大胆な・・・・・・・！！」

六課隊舎内。監視・・・もとい、ストーカーをしていたはやて達には、大ダメージが与えられていた。原因は言うまでもなく、先程のなのはの発言である。

「そういえば、なのはさんは偶にすごく肌がツヤツヤしてたけど・・・なるほど、ヤっ・・・」

「それ以上は駄目よリゼット。危ないから」

思い出したかのように、リゼットが話しかけた一言をティアナは寸前で止めていた。ご丁寧にエリオとキャロを抱きしめる形で耳を塞いでいる。

「フフフ・・・・・なのはちゃんの胸が大きくなったのはそれでなんやな・・・？・・・ええ度胸や、フフフ・・・」

「八神部隊長？もうその辺で・・・ダメだ、聞いてないみたいね。私はもう無理。エリオ、キャロ行きましょう？変態はほっといた方が無難よ」

「は、はい」

「わかりました・・・」

何がなんだか分からないままに引っ張られていくエリオとキャロ。反対に耳まで真っ赤になったティアナを、リゼットは微笑んで見送った。

「初心ね・・・」

呟いた言葉は、喧騒の中に消えていった。

＊　＊　＊　＊　＊

「さて、この辺でいいか。すまないね、付いて来させて」

「いえ、構いません。それで、なにか？」

外に出ていた刹那と士郎は、店の裏、誰にも見つからない所で向かい合った。無論、呼び出して暴行、などという前時代的な事はしない。2人だけで、誰にも邪魔されずに話したかったからだ。

「大したことではないけどね。君たちが真剣だって事は先程からも理解しているよ。私が訊きたいのは、刹那君、君は、なのはをどういった人間と見ているかだね。念には念を、とでも言えばいいかい？ま、これも親心だと理解してくれ」

「はぁ・・・・・・」

苦笑する士郎に、刹那は曖昧に返す。女性の親とはそんなものなのだろうか？などと考えるが、そもそも親のいない刹那には普通の親の概念すら乏しい。自身が父親であることはすっかり頭から抜け落ちていた。兎も角、士郎は刹那がなのはをどうとらえているか訊きたいらしい。顎に手をあて、考え込む刹那を士郎はじっと見つめている。やがて、刹那はふっと笑みを溢す。別に、考え込む必要などなかった。出会った時から今まで、そのままの、自分からみたなのはを伝えればいい。笑みを湛えたままで、しかし視線は鋭く、刹那は士郎を見据え、口を開いた。

追憶・外～刹那の高町家訪問？～（後書き）

いかがでしたか？少しあっさりしすぎたと自分では猛省中であります。

最近はきちんと書けないので心が折れそうですが、頑張ります。

まともに書けるようになるにはあと一か月ほどかかりそうです。

そんな私ですが、一次の方も合わせて、これからもよろしくお願いします！

追憶・外～刹那の高町家訪問？～（前書き）

お久しぶりです。

今回で番外は終わりです。次回からは再び本編、いるかいないのかは分かりませんが楽しみにしてくださっている方々にはホントお待たせしてごめんなさいとしか言えないです・・・

さて、今回の番外で空気だったカノン君も久しぶりに出せましたし、満足です（ぇ）

それでは、どうぞ！

追憶・外～刹那の高町家訪問？～

「そうですね・・・・・・・」

「・・・・・・・」

ゆっくりと、刹那は口を開く。自身の考えを整理しながら、言葉を探す。

「なのはは、強いですよ。意思が強くて、周りに勇気を与える事が出来る人です。なのはが前を見続けるから、道を示して進んでくれるから、周りはそれについてくる。権力や力なんてものに無縁でいられて、かといって責任を誰かに押し付ける事はしない」

「・・・・・・」

無表情で語る刹那を、士郎は黙ったまま見つめる。ここまで刹那の言った事は、ある意味誰でも言えるような、本質に限りなく近い、だが決して奥に届くことのない表面的な物だ。士郎はそれ以上を聞きたがっているし、刹那もこんな表面的な事で終わらせるつもりはない。

「だけど、強いからこそ、脆く、弱い。特に、他人から向けられる

悪意には。・・・まぁ、なのはだけに言えたことではないですが。
そして、もう一つ。なのははひどく臆病だ」

「どういうことだい？」

尋ねる士郎の声は鋭い。侮辱している訳ではないと分かっていても、鋭くならざるを得ない。

「2年前、なのはは一度だけ、たった一度だけ、泣きました。ヴィヴィオが・・・攫われてしまった時に。その時、なのはは離れた場所にいて、守ってあげられなかった。俺はヴィヴィオの側にいたけれど、力不足で、守り切る事が出来なかった。あの時、側にいてあげられてたら。あの時、すぐに駆けつけていれば。そんな、どうしようもないｉｆからくる自責で、なのはは押しつぶされそうだったんです」

「・・・・・」

淡々と語る刹那の瞳はしかし、抑えきれない苦々しさと、強い後悔が刻まれている。無言で先を促す士郎に、刹那は自嘲するように笑う。

「なのはは、俺を責めても良かった・・・いや、責めるべきでした。だって、俺はヴィヴィオの側にいて、それでも守ってあげられなか

ったんだから。責任を押し付けても良かったんです。それでも、なのははそんな事は出来なくて、誰からも距離を取って、一人で震えて・・・」

「そんなことが・・・・・・」

「それだけじゃない。助けに行きたくても、助けにいけない。家族としてではなく、仕事という範囲でしか、行動できなかった。ヴィヴィオは泣いてる、それが解ってるのに、母親として、当たり前の行動が出来ない・・・・そう言って、泣いてました。何日も寝れないで、目を腫らせて、神経を張り詰めて。寒さに震えるみたいに身体を抱えて、折れそうになるのを堪えていた」

思い出すのは、あの日。夜の屋上で、震えていた肩を抱きしめた日の事。恋人として付き合いだして、娘が出来て、家族の温かみができ始めた時の悲劇。

「なのはは、それまでヴィヴィオの事を、親として受け入れる事に複雑だったんです。きちんとした所で、ちゃんとした幸せを掴んでほしい・・でも、いつの間にか、ヴィヴィオの存在は大きくなっていた。その重さが、あの時のなのはを追い詰めていた」

「・・・・・・」

「士郎さん。なのはは、不器用です。なのはは、誰かを元気づけたり、愛してあげる事は容易くできるんです。だけど、自分に向けられた好意に対しては、酷く鈍感だ・・・それも、臆病と言えるほどに。自分から愛情を求める事に臆病だから、好意を好意として純粋に受けとめられない。その理由も・・・粗方、知っています。本人から聞きましたから」

その先を刹那は口にしなかった。それだけでも、士郎は理解できる。なのはが幼い頃、士郎は大けがを負い、入院したことがあった。桃子や美由紀、恭也はそれに付きっ切りで、誰もなのはを顧みてやる事が出来なかったのだ。その内、なのはは自分の主張をしなくなった。嫌われない様に、構ってもらえるように・・・『いい子』である事を自分に課したのだ。

「きっと、なのはにとっては、誰かからの好意というのは、自身が誰かの役に立っている、必要とされていると証明するためのものだった。違いますか？」

「・・・・・いや、あっているよ。確かに、なのはをそうしてしまった原因は私達にある」

苦虫を噛み潰すように肯定する士郎に、刹那は何も反応しない。冷淡なのでも、無言で責めている訳でもなく、既に知っている事だからだ。それに対し、刹那が何らかのリアクションをすることは無い。

「なのはの脆さはそこなんです。自身が愛情を向けた物が失われた時、なのはは呆気なく崩れてしまう。他の誰でもない、なのは自身からそうなってしまう。・・・・・だからこそ、支えたかった。最初から気づいていたわけではないけれど、気付いてしまったから放っておくことなんかできない。それが、俺の人生で最初で最後の愛した女性だから、尚更です。今、どれだけ支えてあげられているか分からないけど、それでも――――――」

「・・・・・そうか」

それでも、自分の全てを賭けて支えたい――――――言い切った刹那を士郎は満足げに見る。その一言だけで、十分だった。微妙に論点がずれ、惚気のような、決意表明のようなものになってしまっていたが、黙殺する。それだけ、刹那の想いは伝わってきていた。

「刹那君、なのはを頼むよ。君は、なのはを真っ直ぐに見つめていてほしい。なのはにはそれが、一番良いことだからね」

「はい、任せてください」

笑いあう刹那と士郎。やがて店に戻るために踵を返す士郎に刹那はついていく。その足音を聞きながら、士郎は心の中で思った。

（不器用で臆病なのは、君も同じだろう、刹那君？だからこそ、なのはは君に惹かれたのかもしれないが・・・これはなのはも苦労しているんじゃないか？）

その推測は大体当たっているのだが、士郎が知る由もなく。士郎は思いついた考えに笑いを堪えながら、もう一方はそんな士郎に訝しげな視線を向けつつも穏やかに笑っていた。

＊　＊　＊　＊　＊

一方、なのはや桃子達もまた、刹那の話で盛り上がっていたのだ

った。

「で、なのは？彼はどんな人なんだ？正直、俺達は殆ど彼と交流したことがないからな。きちんと聞いておきたい」

「刹那君？うーん・・・・・・」

身を乗り出すような恭也に忍や美由紀はまたか、というような呆れた顔をする。確かに交流が無かったのは事実だが、血走った目で見られては別の意図があるようにしか見えない。なのははそんな恭也に首を傾げつつも、刹那の事を考え、幸せそうに微笑む。

「強い人、かな？運動能力とか、魔法とか、そう言う意味もそうだけど、何より心が強い人。刹那君は、例えるなら静かな森なんだよ。誰の事も受け入れて、優しく包み込んでくれる」

「あらあら、べた褒めね？」

「そ、そうかな？」

「パパは綺麗な人です！いつも恰好良くて、どんな時でも優しい人です」

ニコニコと笑う桃子になのはは照れ笑いをし、フォローするようにヴィヴィオが満面の笑顔を浮かべながら力説する。

「でも、怒ると怖いかな？滅多に無いけど、誰も逆らえないくらい威圧感があるし、容赦もしないから。尤も、後腐れはないし、私達に向けられたことは無いけどね」

「へぇ、意外。という事は、怒らせちゃいけない人Ｎｏ．１みたいな感じ？」

「そうだよ。なんだか皆からは、隠れ残虐モードって言われてるらしくて、落ち込んでた時もあったの」

なのははヴィヴィオと顔を見合わせ、苦笑する。落ち込むのも仕方のない話ではあるのだが、原因のほぼ十割が他人が刹那を怒らせただけで、刹那からは一切何もしていないのである。何もしなければ無害なところは蜂のようなものだが、手を出して逆鱗にふれてしまえばスズメバチ以上に凶暴となる。そう言った面を考えれば、刹那にも否がないとは言えず、苦笑するしかなかった。

「そういえば、２年前に来たときはスケートをやってたって言ってたわね？」

「あ、はい。今でもやってて、名物扱いですよ。向こうでは珍しいものですし、単純に魅せられちゃった人もいて、好評なんです」

忍の確認になのははは頷く。

「見てみたいけど、忙しいなら期待はしない方がいいかしら？」

「えっとね、実は端末に保存してあるんだ。刹那君、自分の演技は全部録画してるから。私も持ってるから、見れるけど？」

「わっ本当に？見よう見よう！」

なのはが携帯端末を取り出すと、美由紀がはしゃぎ出す。

「うん・・・・・・ヴィヴィオ、どれがいい？」

「うーん・・・・・・じゃあ、これ！」

ヴィヴィオが選んだのは、列になって表示される映像ファイルの上から六番目のものだった。

「フリースケーティング・・・・・・曲目、別れの曲？」

「うん・・・・・ちょうど、お爺さんの命日だったんだって。刹那君、ご両親がいないから、せめてお爺さんだけはって・・・・・・17歳の時かな？この時はＧＰファイナルの出場を決めたときだって言ってた」

「そう・・・・・・」

静かな旋律が流れだすと同時に、刹那も動き出す。ゆったりとした演技ながら、人を惹きつけて止まない美しさ。魔的なまでに洗練されたそれに、画面の観客たちも、映像を見ているなのは達も言葉を失くす。哀しさに満ちたそれはまるで妖精郷で独り踊るような圧倒的な孤独を感じさせた。

「あ・・・・・・」

氷を靴のブレードが削っていく音が響く。僅かに飛び散った欠片が舞い落ちると同時に、刹那の身体は宙に浮く。ゆったりとした動きとは違い、その瞬間だけは獲物に向かって飛びかかる獅子の如く獰猛な動きを見せる。三回転半、その着地と共に再び刹那は宙を舞う。今度は二回転半。着地と共にステップに移行し、喪服を思わせる黒い衣装が氷上にラインを引いていく。僅かに画面の刹那が笑みを浮かべる。男性が浮かべるには妖艶に過ぎるその笑みは、演技の最後を彩っていた。

「凄いね・・・・・・」

「ええ、驚いたわ。自身に満ち溢れて、1回もミスをしないなんて。それに、哀しそうな演技なのにとても綺麗。魅了されるって、こういう事を言うのね」

呆然とする桃子達に、なのはとヴィヴィオは顔を見合わせて笑いあう。

「えへへ、刹那君は本当に凄いね、ヴィヴィオ?」

「うん!」

無邪気に笑いあう二人に、桃子が顔を向ける。

「刹那さんとはあまり交流は無いけれど、穏やかで気配りができる、素晴らしい人だと思うわ。なのはが選んだ人だし、ヴィヴィオちゃんも良く懐いてる。皆からも頼りにされているようだし、私からは文句はないわ。結婚するのなら、きちんと彼を支えてあげなさい」

結婚の話を持ち出した瞬間、恭也が身体を震わせるが、忍が一瞬

で取り押さえていた。なのははその様子を一瞥すると、真剣な表情で桃子に向き合う。

「うん、分かってる。刹那君の事は、私も支えてあげたいって思ってるから・・・・・ねえ、お母さん。刹那君って、他人から見たらすごく頼りになる人だけど、刹那君自身は誰にも頼れない人なの」

「どういう事？」

「刹那君はご両親を知らなくて、唯一の肉親だったお爺さんも早くに亡くして、ずっと独りで生きてきたの。ずっと寂しさを心の奥に隠して、誰にも悟られないで耐えてた。それって、周りに頼れる人がいない・・・つまり、誰も信頼できなかったって事なんじゃないかな。でもこの間、ようやく話してくれたの。溜め込んでたもの、全部話してくれた。もちろん、今までも愛してるっていう自負はあったけど・・・刹那君の話を聞いて、もっと好きになって、もっと愛したいって思えたの。だから、刹那君が今まで私を支えてくれた分、ううん、それ以上の力で刹那君を支えたい」

訥々と語るなのはの手をヴィヴィオがきつく握り締めている。なのはも同じように握り返し、桃子たちを真っ直ぐに見つめていた。桃子はなのはとヴィヴィオを順番に見ると、花が咲くように微笑む。これがなのはの覚悟なのだ。その瞳、その表情はこれまでに見てきたなのはのどの顔よりも真剣だった。

「・・・・・惚気られちゃったわね。・・・・・・頑張りなさい、なのは。ヴィヴィオちゃんとも、刹那さんとも、どちらも蔑ろにしてはいけないわ。尤も、今のなのはなら大丈夫でしょうけどね」

あくまで軽く、桃子はなのはの覚悟を受け止める。決して軽んじている訳ではなく、その覚悟を誰よりも重く受けているからこその態度。なのはがいつか、その覚悟に押しつぶされぬように、その負担を取り除くために。責任感の強いなのはだからこそ、こういった事を最後まで心配してしまうのもまた桃子の親心だった。

「今日の夕ご飯はご馳走にしてみましょうか。ヴィヴィオちゃん、リクエストある？」

「うーんと・・・・・・」

パン、と手を叩き、桃子は話を切り上げると、夕食の献立を考え始めた。ヴィヴィオと楽しそうに相談している。忍や美由紀が話に入っていくのを眺めながら、なのははそっと息を吐いた。

＊　＊　＊　＊　＊

「そんな話をしてたんだ」

「そっか・・・・・・なんだか、どっちも考えてる事は一緒だったんだね」

夕食後、ベッドに身体を寄せ合いながら話す刹那となのはは、お互いのしていた話を確認して笑いあっていた。どちらも考えていた事は同じ、それがどこか心地よい。

「何にしても・・・・・・良かったよ。正直、もうちょっと抵抗されるかと思ってたんだ。物理的にも、精神的にも」

「にゃはは・・・・・・物理的って、流石にお父さんもお兄ちゃん

もそんな事はしないよ・・・・・多分」

完全に言い切る事が出来なかったなのはを、刹那は苦笑することで余計なツッコミを控える。士郎と恭也が娘であるなのはを溺愛しているのは既に共通認識だからだ。

「貴様にお義父さんと呼ばれる筋合いはないって言われてみたかったのに。それとも時代の差なのかな？ジェネレーションギャップって、こういう事なのかも」

「あの・・・・・刹那君？一応、お父さん達の方が年上なんだけど・・・・・・」

そんなありきたりなセリフは現代の安っぽいドラマでも希少価値だ。遠慮がちにツッコんだなのはの言葉を最後に、何とも言えない沈黙が広がる。ヴィヴィオは桃子達と寝ているため、部屋には２人きりである。時計が針を刻む音がやけに大きく聞こえていた。

「・・・・・まずいな・・・・・」

「え？どうし――――――――んっ・・・」

ぽつりと呟いた刹那の方を振り向いたなのはは、その唇を塞がれ

たことに驚き、目を見開く。

「んむ・・・ちゅる・・・ちゅ・・・んっ・・・」

「ちゅ・・・んんっ・・・んむ・・・ちゅる・・・ぷはっ」

舌も入れる濃厚なキス。息継ぎをするように離されたお互いの口から透明な糸が伸びる。なのはの赤く上気した顔に見惚れながら、刹那はゆっくりとなのはを押し倒した。

「刹那君・・・」

「なのは・・・抑え、効かない・・・欲しい」

甘く蕩けた声で刹那を呼ぶなのはに、刹那は彼にしては珍しい余裕のない声でその先を求める。

「いいよ・・・私も、刹那君が欲しい・・・だから・・・今日は、離さないで」

なのはは躊躇うことなく頷いていた。行為自体は何度もしている事ではある。しかし、今日、今回は特別だ。共に歩むための、誓い

の儀式。なのはの言葉を最後に、２人はお互いを求め合い、嬌声は朝まで止むことは無かった。

＊　＊　＊　＊　＊

「じゃあ、そろそろ戻るね」

「ええ、行ってらっしゃい」

翠屋の前で、なのはと刹那は桃子達に挨拶をする。

「ヴィヴィオちゃんも、またね」

「うん！またね、美由紀お姉ちゃん！」

朗らかに挨拶を交わすヴィヴィオと美由紀に、刹那の口元も緩む。

「桃子さん、士郎さん、お世話になりました」

「ふむ、堅苦しいな。別にお義父さんやお義母さんで構わないぞ？私達はもう家族なのだから」

「そうね、その方が嬉しいわ」

丁寧に頭を下げる刹那に士郎と桃子は苦笑する。刹那は士郎の言葉に目を見開くと一瞬目を伏せたが、次の瞬間には常の穏やかな笑みを湛えていた。

「・・・・・ありがとうございます、義父（とう）さん、義母（かあ）さん」

ゆっくりと遠慮がちに紡がれた自身を呼ぶ名に、士郎と桃子は満

足げに頷く。刹那の声が僅かに震えていた事を指摘するような無粋な真似をする者はいなかった。刹那の手をなのはの手が包む。絶対に離さないと意思を込めて握ったその手は、力強く、しかしガラスを扱う様な繊細さで握られた。刹那のもう片方の手はヴィヴィオが握る。満面の笑みを浮かべ、ご満悦の様子であった。

「何時でも帰ってきなさい。此処は、君達の家だ」

「行ってらっしゃい。風邪ひかない様にね？」

出発は、あくまでもさりげなく、ありふれた日常のように。微笑みながら告げられた言葉に返ってきたのは、輝くような笑顔だった。

「「「行ってきます！！」」」

幼い子供の様な無邪気な声が、朝日に照らされた街に響いた。

＊　＊　＊　＊　＊

「はぁ・・・もう、疲れるばっかりだよ・・・」

サーチャーを回収したフェイトは一人、アンニュイな溜息を吐く。なんとなく、サーチャーに記録された映像は見る気がしなかった。なんとなくだが、人としての尊厳が試されている気がする。再び大きく溜息を吐くフェイトに、後ろから声を掛ける人物がいた。

「フェイト」

「っ!?・・・カ、カノン・・・!?どうして、此処に・・・？」

驚きを隠せずにオロオロするフェイトにカノンはバツが悪そうに目を逸らすと、小さく口を開く。

「いや・・・迎えに来た。色々、不憫だな、お前。それから、この件はメールであいつ等に言ったからな？」

「え・・・・・・？」

色々と失礼な言葉を吐くカノンにフェイトは反論しようと口を開くが、カノンの口から洩れた思いがけない一言にサッと顔が青褪める。

「あいつ等、今頃どんな目に遭っているか・・・・・・肉の欠片でも残ってればいい方か？」

「わ、わわ・・・ど、どうしよう・・・」

どちらに転んでも絶望。最初の『あいつ等』とは勿論、刹那となのはである。次のそれは出歯亀達の事であるが、結果的にフェイトもそれに含まれてしまっている。片や『管理局の白い悪魔』――――これは犯罪者からの蔑称であるが――と呼ばれ、もう片方は『隠れ残虐』である。怒りに駆られた彼らが何をするのか、嫌でも分かってしまう。『おはなししよう？』と笑顔で言われるだけならまだいいのだ。トラウマが刻みつけられるのは確定だが、まだマシである。真に恐ろしいのは、拷問に等しい処置が待っている事だ。刹那が一度キレれば、無事で済む人間などいない。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい・・・・・・」

「・・・・・おい」

目のハイライトが完全に消え、ぼそぼそとうわ言のように呟き続けるフェイトにカノンは冷や汗を垂らす。流石に不気味、もとい可哀想に思ったので、カノンは隠していた事をバラすことにした。フェイトはある意味被害者側の立場でもあるので、罪に問われるのは酷というものだろう。

「あ～・・・その、なんだ・・・フェイト、お前とティアナ・ランスター、それからチビ2人は無事だ。お前はある意味被害者側であることと、後の3人は何もしていない事から無罪放免らしい」

そう言った瞬間、フェイトの肩がピクリと動く。表情を失くしていた顔に生気が戻っていく。

「ほ、ホントに・・・？」

「・・・これ以上、どん底に落とせるほど、オレは外道じゃない」

恐る恐る確認するフェイトに、カノンは憮然とした表情を作る。

その反応に確信したのか、フェイトは安堵の溜息を盛大に吐いていた。

「良かった・・・」

「残りには地獄を魅せる・・・とか言っていたが、自業自得なのだろうな」

「魅せるって・・・」

あくまでも地獄のような惨劇を作る訳ではなく、自ら地獄への道を歩むよう魅了する、という事らしい。あなおそろしや、である。

「ま、オレとしてはお前が何もされなくて良かったが・・・」

「えっ・・・？」

小声で呟いたカノンにフェイトは聞き返すが、カノンはしかめ面をしただけで何も言おうとはしなかった。なんとなく顔が紅くなるのを自覚しながら、フェイトはカノンを覗き込む。カノンは慌てたように目を逸らすと、ぶっきら棒に手を差し出す。

「とにかく、さっさと戻るぞ。これ以上の面倒に付き合ってられるか」

「ふふっ・・・うん！」

そっぽを向くカノンが可愛く思え、胸の高鳴りを隠しながら満面の笑みで頷いたフェイトはカノンの手を取る。次の瞬間、転送ポートの光が2人を包んだ。

帰ってきた2人が見たのは、精神の崩壊寸前で陶然とした怪しい笑みを浮かべている出歯亀共の姿と、すっきりしたような刹那となのは、不思議そうにしているヴィヴィオと、そして身体を寄せ合って怯えているティアナ、エリオ、キャロの3人、極めつけに何故かハードボイルドを気取ったポーズで「私は魔女・・・正義も悪も私の前では同等よ・・・」などと優美な笑みを浮かべるリゼットだった。カオスを極めた状況に、フェイトとカノンは苦笑するしかなく、それを見ていた刹那となのはは邪気のない笑みを浮かべているだけだった。

追憶・外～刹那の高町家訪問？～（後書き）

いかがでしたか？

出歯亀さん達に何があったかは、皆さんのご想像にお任せします☆

個人的にはハードボイルド気取ってたリゼットさんが好みですがｗ

刹那となのはの甘い（？）とこも書けましたし、満足満足☆

それでは、また次回からもよろしくお願いします！

感想等お待ちしています！

それでは！

追憶２４～違和～（前書き）

１週間ぶりでしょうか？お久しぶりです。

更新ペースが落ちまくっている今日この頃ですが、もうすぐ私の事情も片付きますので、もう少しでマシになるはずです。まぁ、大分ややこしくなってるんで難しいかもわかりませんが・・・（汗

それでは、どうぞ！

追憶２４～違和～

砂漠の中に佇む水晶の孤城、その最奥の玉座にソレは存在していた。刀身が奇妙に捻じ曲がった剣を突き立て、瞑想するように玉座に座るソレは、全身を黒い鎧で覆い、その正体を量る事は出来ない。ただ一つ、胸に開く歯車状の穴がその異様さを際立たせる。その穴には幾つか翡翠色の水晶が埋め込まれていた。

「――――――」

フルフェイスの兜から洩れる呼吸音だけが、ソレが生きている事を示している。ピクリと指が動き、兜に隠された顔が前を向いた。コツコツと靴を鳴らす音が次第に大きくなり、すぐに目の前の大きな扉が開く。現れたのは、見ようによっては爽やかにも見える、しかしその爽やかさ故に作り物だと分かる笑みを浮かべた男、クラウンだった。部屋の中心で片膝をつき、恭しく頭を垂れる。

「我が主アイオンよ。本日はお願いに参りました」

普段の彼からは想像が出来ないほど怜悧な声色でクラウンは用件だけを告げる。まともな挨拶が一つもないのは、目の前の主、アイオンが余計な装飾を嫌うからだ。彼（或いは彼女かもしれないが）は物質的にも物を置くような人物ではなく、言葉の装飾には反応しない人物だった。

「我らが求める追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）、その捜索ですが、邪魔が入ってきております。かの時空管理局の奇跡の部隊、かつてジェイル・スカリエッティの起こしたＪＳ事件を解決に導いた機動六課。その殲滅の許可を頂きたく」

アイオンが言葉を発していないにも関わらず、クラウンは淡々と求める。しかし、罰せられることは無い。それはクラウンが気に入られている訳でも何でもなく、単にアイオンにはどのような言葉も響かないだけ。言葉の持つ要求や願望、発せられた単語の群れの示す情報に答えても、それ以上の価値は切り捨てる。意味を見出さないのではなく、根本から意味を抹消しているのだ。

「それから、報告が一つ。ハラールが機動六課にいるとある男に異常な関心を示しております。何でも、７年前に確かに殺したはずの男だとか。彼奴が人間を喰い損ねるなど、これまでの事を鑑みてもあり得ぬ事であります。確実に追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）が関わっているでしょう」

「――――――」

ここで初めてアイオンが反応した。ギチギチと鎧の関節を鳴らし、顎を上げる。

「個体名カノン・アークナイト・・・いえ、カノン・フリージアと言うべきですか。何しろ彼は、忌まわしきジェレミア・フリージア

の――――――」

「シッテイル。ドコデナニヲシテイタノカモ、ソノミニナニガオキタノカモ」

紡がれた声は鎧に阻まれてくぐもってはいたが、男性と女性の声を合わせたような不自然な声だった。

「これは失礼しました。話を戻しますが、彼が今、追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を持っている可能性は非常に高い・・・・・・殺しても？」

ふわりと柔らかく、しかし冷酷に嗤いながらクラウンはその一言を問う。殺し、奪う。クラウンの脳裏には既に、黒衣の青年が物言わぬ肉塊となっている様がありありと映し出されていた。

「――――――」

無言でアイオンは頷く。ハラールがどれ程執着しているかも、クラウンが何を求めているかも・・・そして、カノンという青年とジェレミアにどんな関係があるかも、全てがどうでもよかった。

「ありがとうございます・・・では、私はこれにて。ハラールを連れて行きます旨、ご了承ください」

「――――――」

既にアイオンはクラウンの存在を無視し、再び玉座で俯いている。クラウンは何も言わず、扉の向こうに去った。静寂が部屋を包む中、アイオンは独りだった。アイオンは遠い昔に思いを馳せる。あの日、2人の小さな魔法使いにこの水晶宮殿に閉じ込められ、望みの綱であった物は砕け、飛び散った。幾星霜、その身を憤怒に燃やしたか。どれだけの時間、狂気を増幅させたか。嘗て絶望を糧に誓った願いは既に妄執と成り果てた。だが、成し遂げねばならない。誰よりも人間を信じていたからこそ抱いた塵殺（おうさつ）の夢。

「――――――」

冷たい静寂の中で、アイオンは夢想に溺れていった。

＊　＊　＊　＊　＊

「うーん・・・・・・」

八神はやては部隊長室のデスクに肘をつき、手に顎を乗せて呻くような声を上げる。その顔は険しく、怒っているように見えたが、ともすると悩んでいるようにも見て取れた。

「なかなか上手くいかへんなぁ・・・・・・」

ぽつり、とはやては呟く。彼女が悩んでいる事、それは六課の追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車捜索の事だ。彼女が考えていた以上に、捜索は難航している。以前の六課ではレリックというロストロギアを捜索対象としていたが、それすらも早い段階で確保できていた。しかし、今回は全くと言っていいほど功績が上がっていない。リゼットの世界やカノンの話で追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車の欠片が数ある次元世界に飛び散っているのは理解できている。しかし、発見率が悪すぎる。

「フラグメントのいる所に追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）はある・・・でも、今まで発見できてない・・・という事は・・・」

悪い推測ならいくらでもできる。特に挙げられるのは、追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を狙うのは六課だけではないという事だ。古代遺失物（ロストロギア）と銘打たれるだけあって、それがもたらす効果、影響は途方もないものだ。それを知っていれば、狙う犯罪者は多いだろう。そして恐らく、その中でも最大の犯罪者達が一つのグループを作っている。

「堕ちた聖典（カラブト・バイブル）も探している筈なんやけど。ファンタズマゴリアでは接触はできたけど手がかりもない・・・」

はやては手元のモニターに5つの写真を映す。男が4人、女が1人。現在判明しているメンバーはこれだけだ。そのうちの2人、ハラールとレオンとは既にカノンが交戦している。だが、肝心の追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車まで届かない。そして、悪い事は重なる。まず、レオンがカノンの幼馴染であるという事。報告では、カノンは既に敵として割り切っているらしいが、心中を滅多に表に出さないカノンが本当にそう思っているのかは謎。更に、カノンの幼馴染というだけで、此方には躊躇いが生じる。しかし、向こうは容赦などないだろう。此方が不利になる事は想像に難くない。そして、

「ハラール・クロウクルワッハ・・・《邪龍》と呼ばれる男・・・」

カノンが7年前に交戦し、恋人の命と引き換えに逃げ延びたと言

われる男。そこまで考えて、はやては違和感に気付いた。何かがおかしい。手元の資料を引き寄せる。

「《邪龍》ハラール・クロウクルワッハ。邪龍信仰のある出生地の人間を残さず食い殺し、尚各地で人を喰らい続ける喰人鬼。７年前の活動を最後に消息不明、新暦７７年現在、活動を再開との報あり。デバイスを使わず、素手、或いは固有のレアスキル、邪龍の呪い（ウィケッドドラコ・カース）を用いて戦闘を行う。能力不明。しかし、黒色の巨大な龍が設置したサーチャーに記録されている。現在、彼と交戦した者で生存者無し・・・・・生存者無し？」

ピタリとはやての言葉が止まる。原因は最後の一言、『生存者無し』だ。７年前という事は、カノンの故郷の事だろう。そこでカノンはハラールと交戦、敗れたと言っていた。しかし、敗れるという事は喰われる事と同義。しかし、カノンは生きている。記録と記憶に、明らかな矛盾が生じている。

「どういう事や・・・？」

呆然と呟くはやては、カノンの告白の時を思い返す。あの時、カノンは努めて淡々と語ってはいたが、嘘をついているようには見えなかった。嘘を言う人間だとも思わない。はやて自身にカノンとの直截的な交流は殆どないものの、周囲の人間からの評価は好意的だ。それだけで判断するのも危険な話だが、少なくとも信用に足る人物であることは把握している。

「でも・・・記録には生存者はいない・・・カノン君は・・・本当に生きた人間なん・・・？」

先の幽霊騒動を思い出す。六課の前線メンバーが目にしたシルヴィアと言う少女。カノンの話にもシルヴィアという少女は登場したのを覚えている。恐らく、その少女が幽霊騒動の大元なのだろう。

「でも、幽霊なんている筈がない。確かに魔法は存在するし、次元世界なんて地球にいた頃は想像もしないものもある・・・けど、結局は現実の、科学の産物や」

この世界の魔法はファンタジーのような呪文を唱えれば奇跡が起こるような類のものではない。魔法陣は空気中に散らばる魔力を纏め、干渉する事で砲撃や盾といった効果を生み出すプログラム。僅かな詠唱は効果を高め、より精密にする為のものでしかない。

「疑うんは気が引けるけど・・・でも、はっきりはさせなあかんな・・・」

疑うのは気が引ける、しかし僅かな疑念があれば疑うのは部隊長の役目。泥を被る唯一の役職だ。

「カノン君は・・・まぁ、無理やろな。実際、あれだけの話を嘘と

断じられるだけの証拠は私らには無いんやし。やっぱりここは・・・・・フェイトちゃんか」

フェイトはカノンと一番接触時間が長い。任務だけでなく、偶の休みのプライベートでも一緒にいるところはよく見かける。フェイトならば、何か思い当たる節があるかもしれないと、はやては考えていた。はやてはモニターを操作し、フェイトに連絡を取る。

『・・・フェイトです。はやて、どうしたの？』

「・・・・・フェイトちゃん、ごめんな急に。ちょっと話したいことがあるんよ。部隊長室までええか？」

急な呼び出しにキョトンとするフェイトにはやては胸の罪悪感を隠しつつ、努めて何でもない事であるかのように言う。

『うん、いいよ・・・すぐ行くから、ちょっとだけ待ってて』

「うん、でもそんなに急がなくてもええで。じゃ、待ってるな？」

はやての硬い口調に気付いているのかいないのか、フェイトは微笑を崩すことなく頷く。通信を終えた後、はやては重い溜息を吐いていた。思わず急がなくてもいいと言ってしまったが、本当はすぐ

にでも確かめたい話だ。それなのにそう言ったのは、はやての中で先延ばしにしたい、触れたくないとする思いからだ。じっと息を潜めるようにはやては扉を見つめる。足音が近づく音が聞こえ、はやては生唾を呑みこんだ。

「失礼します。フェイト・テスタロッサ・ハラオウンです」

「どうぞ」

形式だけの礼儀を交わすと扉が開き、フェイトが姿を見せる。口を開こうとしてはやての様子に気づいたのか、眉を顰めた。

「はやて、どうしたの？心配事？」

「うん、まぁ・・・そんなところかな・・・？」

他人の変化に敏感なフェイトだからこそ、すぐに分かってしまう。掛けられた心配の声に曖昧に返事を返し、はやてはフェイトを観察するように眺める。そんな視線に気付いたか、フェイトはそわそわと落ち着かなそうに身体を揺らす。

「はやて？その、私、どこかおかしい？」

「え?・・・ああ、あはは、そんな事無いで。ちょっとボーっとしてただけや。ごめんな、こっちから話がある言うたのに」

「それはいいけど・・・」

どこか誤魔化すような口調になってしまったはやてを訝しげにフェイトが見返す。何処か探るようなフェイトの視線に、はやては苦笑する。相も変わらず、この人一番優しい親友は他人の悩み事に鋭い、と。

「はやて、やっぱり変だよ。どうしたの?はやての話の事?」

「うん、まぁ・・・そうなんやけど。実は、カノン君の事なんよ」

「・・・・・えっ?」

はやての口から予想外の名前が出た事で、フェイトはしばし硬直してしまう。一瞬あらぬ想像をしてしまうが、はやての纏う雰囲気の重さと硬い口調で思い直す。

「カノンがどうかしたの?」

「うん、実は・・・この間、カノン君が過去を話してくれたやろ？」

「え？あ、うん・・・それが？」

言いにくそうに話すはやてに首を傾げつつ、フェイトは先を促す。
カノンの過去に何かおかしい事があったのだろうかと考えてしまう。

「これ見てくれんか？・・・ハラール・クロウクルワッハの、この辺り」

はやてが指差したモニターをフェイトは覗き込む。

「えっと・・・7年前の活動を最後に消息不明・・・彼と交戦した者で生存者無し・・・・・えっ？はやて、これ・・・」

「気づいたか？記録上、生存者はなしになってる。でも、ハラールと交戦したって言うカノン君は生きてる。明らかに矛盾があるんや。7年前って事は、カノン君の話の事やろうから、そこに関しては間違いがないと思う。でも、これぱっかりはな・・・フェイトちゃん、何か知らへんか？」

「・・・・・・」

記された言葉にフェイトの頭は真っ白になっていた。はやての言葉も最後まで聞き取れていない。暫しの自失の後、思い当たる事を探し始めたフェイトの脳裏に、幽霊騒動の際に交わしたシルヴィアとの会話が甦る。

「あ・・・・・・」

「何かあるんか？」

声を上げたフェイトにはやてが喰いつく。しかしフェイトは反応せずに自分の中に潜っていく。思えば、カノンの話には穴がある。シルヴィアはカノンの中に追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）をッ隠したと言っていた。しかし、カノンの話ではそんな場面など一切出てこない。カノンがシルヴィアを護ろうとして、逆に守られたような話しぶりだった。それに致命傷ではなく、避けた上での余波ダメージだ。シルヴィアの話とカノンの話の矛盾。そして、カノンの話と記録との矛盾。

（一体、どうなってるの・・・？シルヴィアとカノン、どっちの話が本当なの？それとも、どっちも嘘なの？教えてよ、カノン・・・・・・）

フェイトは混乱する頭を必死に思考に回して考えを纏めようとするが、現れる疑念に振り回されていた。無論、フェイトにもはやて

達に言えない事はある。シルヴィアの会話は正にそれだ。しかし、その会話すら今は曖昧となり始めている。

（ねぇ、シルヴィア、カノン・・・私に嘘をついてるの？どうして・・・・・？）

カノンには秘密にしておいてほしい――その一言を思い出すことは、今のフェイトの混乱した頭では非常に難しい事だった。そして難しいからこそフェイトはある考えに至れなかった。――――――どちらの話にも、真実と同程度の嘘が書き加えられているという事を。

追憶２４～違和～（後書き）

いかがでしたか？記憶と記録、どんなに誤魔化そうとしてもいつかは綻びが生じるものですよね。

ほらあれです。記憶にありませんといいつつも書類にはしっかり証拠が・・・・・・

一次創作との平行運営は少しペース配分が難しいですが、頑張っていきたいと思いますので、これからもよろしくお願いします。

感想お待ちしています！

それでは！

追憶25～矛盾・崩壊の兆し？（前書き）

お待たせしました。

つい先日大学のサークル活動ひと段落つきまして、来年の春までは何もありません。なので、執筆ペースは上がるであろうことを報告いたします。

ここで少しお詫びです。小説内を見直したところ、いくつかの矛盾点を発見いたしました。幸い物語に支障を来すほどのものではなかった為急遽直しましたが、皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。

それでは、どうぞ！

追憶25～矛盾・崩壊の兆し？

「フェイトちゃん・・・？」

顔を強張らせ、黙り込んでしまったフェイトにはやてが訝しげな視線と共に問いかける。

「・・・・・・」

それでもフェイトは答えられない。自分の中でいろいろな感情が入り混じり、言葉にすれば何を言い出すか自分でも分からなかったからだ。

「フェイトちゃん？どうかしたんか？」

「え・・・あっ・・・」

いつまでも黙っているフェイトに流石に心配になったのだろう、はやてが気遣わしげな声を掛けた事でようやくフェイトは我に返る。だが、混乱に痺れた頭では言葉をうまく紡げない。

「はやて・・・私・・・私は・・・」

「フェイトちゃん、何か知ってるんか？」

声を詰まらせるフェイトにはやてははやる心を抑えて静かに問う。フェイトの状態は普段の落ち着いたものではなく、気が動転しているのが一目瞭然だった。此処で急いで聞き出そうとしても逆効果になってしまう。

「フェイトちゃん、ちょっと落ち着き。深呼吸して、な？」

「う、うん・・・」

はやての声に頷き、フェイトは深呼吸しようとするが気が急いているのか返って浅い呼吸を繰り返すだけになってしまっている。

「ゆっくりでいいから、まずは落ち着こう、な？」

「う、ん・・・」

（どうしよう・・・何も分からないよ・・・だって、カノンは生きてるのに、本当は死んでるってなってて、カノンの中には追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）が封印されてて、でも、でもそれは誰にも言っちゃいけなくて・・・

・）

上手く呼吸できずにフェイトは喘ぐ。纏まらない考えと息苦しさで、何時しかフェイトの意識は闇に包まれ始めていた。

「フェイトちゃんっ！？」

はやての焦った声を最後に、フェイトはその意識を手放した。

＊　＊　＊　＊　＊

「う、うぅん・・・・・・」

「フェイトちゃん、気が付いたかしら?」

フェイトが重い瞼を開けると、白い天井が映っていた。目を瞬かせるフェイトに女性の声が掛かる。

「シャマルさん・・・?」

「気分はどう?はやてちゃんが運んできた時は驚いたわ」

医務室の主であるシャマルが顔を曇らせながらフェイトを気遣う。

(私・・・・・・倒れたんだ)

「疲労が溜まっていた訳でも、なにか病気があった訳でもないみたいだけど・・・・・・なにかあったの?」

「・・・・・・」

シャマルの気遣わしげな声にもフェイトは言葉を返すことが出来ない。一度意識をシャットダウンすることで脳が防いでいた混乱がぶり返してきそうだった。黙ったまま見上げてくるフェイトにシャマルは一つ溜息を吐くとモニターを叩き、暫く操作を続けるとフェイトに向き直る。

「とにかく、今日は仕事は無しにしましょう。何も無かったから良かったけど、様子は見た方がいいわ」

「はい・・・・・・」

弱弱しく返事をしたフェイトはそのまま目を閉じる。意識が闇に包まれるその一瞬、チリン、と鈴の音が耳に入る。

（あ・・・）

意識を再び留める暇もなく、フェイトは眠りに落ちていった。

「カノンさん・・・フェイトさんは大丈夫でしょうか・・・」

「さてな・・・だが、これまでは何ともなかったんだろう?」

やや青白い顔で眠るフェイトに、不安そうに顔を曇らせるエリオにカノンは素っ気ないながらも柔らかい口調でエリオを宥める。フェイトが倒れたと聞き、カノンはすぐにエリオとキャロを伴って医務室に来ていた。2人を連れてきたのは動揺を抑えるためと、目覚めた時に安心できる顔があればいいと思ったからだ。実際はフェイトはカノン達が到着する直前に目覚め、再び眠ったため些か遅刻であった事は否めないが、彼等からすればこれ以上ない程迅速だったのだ。何せ、カノンは顔を真っ青にして動揺するエリオとキャロを脇に抱えて走ってきたのだから。

「でも・・・」

「フェイトさんは、今までずっと任務続きでしたし・・・」

「・・・・・・」

エリオとキャロが顔を曇らせるのを見て、カノンは嘆息する。しかし2人のいう事も尤もで、カノンと出会ってからのフェイトは殆どの任務に関わっていた。カノンが追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の手懸りであることは周知の事実であるし、拾ってきた（実際、そう言われても仕方のない状況だった）フェイトがその保護役に志願していたのだから仕方のない事と言えばそれまでである。だが、それ以外にもフェイトは執務官としての任務も通常通りにこなしており、隠れた疲労があったのかもしれない――とカノンは思わずにはいられなかった。

「なんにせよ、見抜いてやれなかったのはオレ達のミスだろうな。言わない方も非があるが、フェイトの性格では言う方が珍しい。まぁ、それが長所なのだろうが、子供に心配かけるなと言いたいところだな」

「「・・・・・・」」

実際は違うのだが、今の彼らに知る術はない。なので、目下の問題と言えばカノンがフェイトの事を割と親しげに評価した事だった。エリオとキャロは六課の再結集以来のカノンの接点と言えば最初の任務と、そして日々の訓練だけである。しかしながらカノンは社交的とは程遠い性格であり（かつては真逆だったが）初対面では目の前でフェイトに襲い掛かるという暴挙がインパクトとして残っていただけあって、エリオとキャロには近寄りがたい存在であった。そして追い打ちのように明かされたカノンの過去は重い内容。そもそもが他人に対し気を遣う事の多い１１歳の少年少女に更なる遠慮を抱かせてしまうのも無理はなかった。

「「・・・・・・」」

黙り込んだまま顔を見合わせる2人にカノンは面倒そうに口を開く。

「なんだ?言いたいことがあるなら言え」

これである。年下に向けるにはきつめの口調もまた、エリオとキャロを遠慮させる原因となっている事にカノンは気付かない。尤も、カノンはそもそもレオンやシルヴィアといった一部の同年代としか接した事がなく、7年前の一件からは人里に出る事は殆どなかったため、コミュニケーション能力が絶望的なまでに低いのは仕方のないと言えば仕方のない事だった。とはいえ、此処で何も言わないのもおかしな話だ。そんな訳で、エリオとキャロはフェイトを起こさないように恐る恐る予てからの懸案事項を口に出してみるのだった。

「あの・・・カノンさん」

「なんだ？」

「フェイトさんの事、どう思ってます？」

その問いはカノンを固まらせるには十分だった。大抵この質問は男が女に対し恋愛感情を持っているかどうかの問いとして使われる場合が多いが、今回のそれもご多分に漏れずその類であることは容易に想像できた。が、しかしカノンは元カノがいた立場である。死別と言う最悪の展開を迎え、尚且つようやく振り切った――あくまでそれはカノンの主観であって、他から見ればまだまだ振り切れたとは言い切れていない――彼にそういった話を出すのは些か性急かつ無遠慮な質問でもあった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

たっぷり時間を置いて呆けていたカノンがようやく口に出したのは空気が抜けるような間抜けな一音だった。仏頂面の彼としては最大限に珍しい間抜けた顔を惜しげもなく晒し2人を見る。エリオはその性格通り至極真面目な表情で、キャロの方も思春期に入る少女特有の恋に憧れた故の質問というだけではない何かを秘めた眼でカノンを見つめている。

「正気か？」

「「はい」」

失礼な事を堂々と聞くカノンにエリオとキャロは「カノンさんこそ正気なんですか？」とでも言いたげな表情でカノンを見る。しかしその真っ直ぐな視線は変わらずにカノンを見据えており、答えなければならないという気にさせられた。

「妙な質問をする奴らだな・・・恋とか愛とか、その手の類の感情はない。あくまで、そうだな・・・不本意だが、保護者或いは仲間の部類だろう。ただの人物評価なら、お人好しの体現者だな。毅然とした態度でも、どこかで必ず甘さが入る。まぁ、それがこいつの美点で評価されてる部分なんだろう？『閃光の女神』、実にらしい二つ名だと思うね、オレは」

「「・・・・・・」」

カノンの返答にエリオとキャロは複雑な顔をする。答えている時のカノンは何が面白くないのかどこか不貞腐れたような、拗ねたような表情だった。余り答えたく無さそうな雰囲気から鑑みると、答えをはぐらかしたのかもしれないとエリオとキャロはカノンを再び見るがカノンは既に元の無表情に戻っており、その心を窺い知ることはできなかった。と、そこで微妙な雰囲気が漂う中を僅かな呻き声が引き裂く。

「ん・・・んぅ・・・」

呻き声を発したのは勿論フェイトである。悪い夢でも見たか単に寝苦しいのか、顔を僅かに顰めるそれは妙な艶めかしさがある。ふっと息を吐いてカノンはフェイトを一瞥すると立ち上がる。

「目が覚めるか？お前ら、此処は任せるが、いいな？」

「え、カノンさん？」

もう用はない、とでも言いたげに踵を返すカノンにエリオが声を掛けるがカノンは振り返ることなく医務室を出ていく。扉が出てい

く瞬間に僅かに振り返り、カノンは僅かに微笑んだ。

「心配するな。フェイトは強い・・・これでくたばるような女じゃないさ」

一旦言葉を切り、今度は苦笑する。

「さっきはお人好しと言ったが・・・これでも、今日までフェイトには散々助けられている身でね。フェイトが持ってるのは単なる優しさだけじゃない。それは、フェイト自身に何かあったからか・・・まぁ、深く詮索するつもりもない。オレにとってはフェイトは恩人だ。これでいいな？オレはシャーリーに用があるから此処にいる訳にいかない。後は頼んだぞ」

やや早口で告げたカノンは足早に去っていく。最後に残された言葉を吟味し、エリオとキャロがカノンに対して思った事は奇しくも同じだった。

「エリオ君・・・」

「うん、キャロ・・・カノンさんって」

顔を見合わせ、笑う。

「「素直じゃない」」

同時に出された言葉に笑いが込み上げる。

「「あははははっ」」

「ん・・・エリオ・・・？キャロ・・・？」

耳元で聞こえる微かな笑い声にフェイトは瞼を開ける。起こしてしまった事にエリオとキャロは慌てるが、気にしなくていいとフェイトは微笑んだ。

「フェイトさん、大丈夫ですか・・・？」

「フェイトさん、無理だけは・・・」

心配そうに顔を覗き込んでくる2人にフェイトは苦笑する。別に無理をしていた訳でも働き過ぎていた訳でもないのだ。

「フェイトさん？」

「あ、ううん、何でもないよ、大丈夫」

不思議そうなキャロにフェイトは微笑む。その顔は依然として青いままだったが、先程までのように死にそうなほどではない。

「ねぇ、エリオ、キャロ・・・カノンの事、どう思ってるのかな」

「「え？」」

突然の、それも予想もしない質問にエリオとキャロは顔を見合わせる。なぜこんな質問をするのか分からないようだ。フェイト自身も何故自分がこんな事を聞こうとしているか理解できていなかったが、それでもじっと答えを待つ。

（カノンはカノンだよ・・・それは分かってる。でも、もし本当にはやての言うように死んでるとしたら・・・そしたら、貴方は誰なの？）

心の中でフェイトは此処にはいない青年に問いかける。フェイトは不安だった。これまで知っている『カノン』という青年の人物像。これまで触れ合ってきた時間や交わした言葉という足場が脆く崩れ去ろうとしているような、そんな不吉な予感がフェイトを支配し始

めていた。

（いやだ・・・嫌だよ。カノンは生きてる。ここに居てくれるんだから）

それでも疑念は消えていなかった。先程まで眠っていても、夢の中では目の前にいるカノンが急に枯れるように死体になっていく様を何度も何度も見ていたのだ。だから、安心したかった。カノンが此処からいなくなる事は無い、死んでいる事などある筈がないのだ、と。

「えっと・・・実はカノンさん、さっきまでここに居たんです」

「っ！？」

フェイトの肩が跳ねる。それに気付かずにエリオは続けた。

「でも、シャーリーさんの所に行くってすぐに出ていってしまいましたけど・・・あ、すいません。カノンさんをどう思っているか、ですよね？」

「う、うん」

ぎこちなくフェイトは頷く。此処にカノンがいたという事に一瞬心臓が跳ねていた。今のフェイトの段階では一番会いたくない人物だったが、側に居てくれたのだと思うと何故か嬉しさがこみあげてきてしまう。複雑な内心を隠すフェイトにエリオは続ける。

「そうですね・・・やっぱり、最初は近寄り辛い人でした。それに、最初に会った時はフェイトさんに・・・」

「うん、そうだったね・・・」

フェイトは苦笑する。いきなり剣先が目の前に突きつけられていたのには驚いたが、今となっては笑い話だ。

「でも、それが変わったのはカノンさんの過去を聞いてからです。あれ以来ずっとカノンさんを見ていたんですけど・・・・・・一言で言ってしまえば、カノンさんは騎士なんだと思います」

「騎士？」

予想もしない答えにフェイトはオウム返しに聞き返す。カノンが騎士とは到底考えられない。

「はい。訓練や模擬戦をしていると良く分かるんですけど、カノンさんは誰かが攻撃を受けそうになると真っ先に動くんです。でも連携を崩すような事は無くて、攻撃を防いだと思ったら次は攻撃・・・だから、騎士です」

「・・・・・・」

そういえば、とフェイトは思い出す。カノンは確かに攻撃が当たりそうになればとんでもない速さで反応する。それも、自分ではなく仲間の誰かが対象の時のみ。まるで誰かが傷つくのを厭うかのように、守れない事を忌避するように必死な表情を浮かべて攻撃を阻止する。そして、獣のような瞳で相手を睨むのだ。これ以上、誰も傷つかせないとでも言うように。

（やっぱり・・・カノンにはトラウマなんだよね・・・）

当然だ。トラウマにならない方が可笑しい。少なくともカノンの話では、シルヴィアはカノンの目の前で殺された。その光景を見てしまったのなら、他の些細な事にもそれを当て嵌めてしまうのも十分にあり得る。

（でも・・・カノンは・・・）

死んでいるかもしれない。そこまで考えてフェイトは頭を振って

その考えを追い出す。確証のない話だが信憑性もある話。それに踊らされているのは分かっているがそこだけを考えても仕方がない。

「フェイトさん?」

「何でもないよ・・・キャロはどう?」

「私はですね・・・」

不思議そうなエリオに微笑みで誤魔化し、フェイトはキャロに話の矛先を向ける。キャロは唇に手を当て、むむむ・・・と可愛らしい唸り声を上げる。

「優しくて、強い人だと思います」

「そう・・・どうしてそう思うの?」

キャロの答えにフェイトは納得の意を示しつつもその理由を問う。フェイトから見たカノンの印象とすれば、まさにキャロの言ったままにこの一言で表せてしまう。もしかしたら、その理由も同じかもしれないとひそかにフェイトは胸を躍らせた。

「えっと・・・私実はカノンさんがお祈りしている所を何度か見てるんです」

「え、そうなの？」

「はい。それでですね・・・カノンさん、お祈りの場所はその時その時で違うんですけど、向いている方角はいつも同じ方角なんです。今まではなんでか分らなかったんですけど・・・」

キャロは一旦言葉を止め、表情を曇らせる。

「でも、カノンさんの過去を聞いて納得しちゃいました。カノンさんがお祈りしているのは殺されてしまった恋人さん、シルヴィアさんの為で、いつも同じ方角なのはその方角にカノンさんとシルヴィアさんが過ごした世界があるからなんですよね」

「うん・・・」

フェイトは驚いていた。キャロが此処までの考察をした事にも勿論だが、その考察を確信を持って言えるほどカノンの事を見ていた事にだ。

「カノンさんはきっと、そのお祈りだけは毎日欠かさずにやってた

んじゃないかなって思います。真剣な顔、してましたから。いつまでも恋人さんの為に祈り続けられるから、優しい人です」

「・・・・・・」

カノンは優しい。それはフェイトにも分かっていた事だ。いや、分かっていると思っていた事と言うのが正確だろう。フェイトはキャロの話でカノンの印象を再確認していた。キャロは続ける。

「でも、そうしない事だって出来た筈です。部隊長から、今回の六課の目的は最初に聞かされています。追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）・・・」

「うん、そうだね。過去を思い通りに変えられるロストロギア。それが六課の目的」

「はい。カノンさんはそれを求める事も手に入れる事も出来たと思います。だって、あんなに大切に想ってたんですから。手に入ればシルヴィアさんは蘇らせることが出来ますよね？」

「・・・・・・」

そう、カノンがその気になれば追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を求める事は出来た筈なのだ。しかしカノンはそれをしなかった。どれ程の絶望を味わお

うと、敵となった幼馴染に罵られようと変えなかった想い。

『過去は変えられない。変えちゃいけない。変えていいのは、現在とそれに連なる未来だけ』

幽霊騒動の際にシルヴィアが発したその言葉。それは、カノンが恋人を喪って尚変えようとしない真理。死別しても、目の前に恰好の希望が据え膳のように鎮座しても尚2人の考えは何処までも同じだった。

「・・・だから、強いです。私だったら、嫌な事とか、無かったことにしたいって思っちゃいますから」

「・・・・・・」

フェイトにも、そういうものはある。執務官としての任務中に助けられなかった人達。どうしようもない理不尽。無かったことにしたいという欲求は少なからず生まれる。だがそれでもカノンはそれを実行しようとはしなかった。

「そっか・・・そうだよね」

「「はい」」

フェイトは微笑む。キャロの話で一通りの整理はつき始めていた。

（カノンはカノン・・・私が知ってるのは優しくて、子供っぽい所があって・・・そして、何処までも強い人。それで・・・いいんだよね）

恐怖は拭えない。カノン・アークナイトという人間の生死。いつか消え去ってしまうかもしれないと言う恐怖は絶対に拭えないだろう。それでも、フェイトは信じることにした。

（記録上、生存者無し・・・でも、カノンは生きてる。なら、私はその事実だけを信じたい・・・！）

ありがとう、と呟いてフェイトはエリオとキャロを抱き寄せる。フェイトの突然の行動に2人は目を白黒させるも拒むことはしない。フェイトの問いがカノンについての悩み事だと、答えているうちに理解したからだ。自分達の答えは、目の前の大切な人に勇気をあげられたのだと2人は目を合わせて笑う。

（信じます、貴方を。私の目の前に居てくれる貴方を。カノン・・・）

その想いに答えるように。

どこかでチリンと、

鈴が鳴った。

追憶25～矛盾・崩壊の兆し？（後書き）

いかがでしたか？今回は始めは暗く、徐々に明るくな話です。

信じる決意をしたフェイトさん。でも、真実はいつも一つとは限らないのが現実です。

その絶望にフェイトは、そしてカノンは立ち向かえるのでしょうか・・・

それでは、次回もお楽しみください。

追憶２６　矛盾・崩壊の兆し？（前書き）

お待たせしました！　最近執筆スピードが落ちている事は申し訳ないと思っています。もっと早くできればいいんでしょうが、『～Ｔｈｅ　ｍｅｌｏｄｉｏｕｓ　ｂｌａｚｅ～』を書いてた時みたいに二日に一回とかは難しいんですよね・・・ただでさえ面倒な設定がありますので、崩壊しないようにするにはこのペースが一番良かったりするのです。

それに、『Ｒｅｓｏｎａｎｃｅ？Ｗ？』の執筆もありますしね・・・あちらはあちらで解決すべき問題が山積みだったり・・・ああ、愚痴になってしまいましたね、すいません。

癒しが欲しい・・・誰か、うちの刹那やカノン達の絵を描いてくれたりしないかな・・・？　と他力本願になっている私は放っておくとして、本編をどうぞ！

追憶２６　矛盾・崩壊の兆し？

「シャーリー、いるか？」

「あ、カノン君珍しいね。整備？」

デバイスルームに入ったカノンを眼鏡をかけた女性が人懐っこい笑みで迎える。シャリオ・フィニーノ。フェイトの補佐官であり、六課の前線に立つメンバーのデバイスの整備を一身に担う女性である。カノンは最初は彼女をファミリーネームで呼んでいたのだが、いつの間にか押し切られ、渾名で呼ぶようになっていた。カノンの右手首にある腕輪、アスフォデルスに視線を遣ったシャーリーにカノンは首を横に振る。

「いや、少し話があってな・・・・・・」

無愛想に無表情を保つカノンの眉間に僅かに皺が刻まれ、普段より一層歯切れの悪い調子で視線を逸らすカノンにシャーリーは首を傾げる。

「話？ホントに珍しいね。カノン君はフェイトさんとは仲がいいけど、その他の人にはまだ慣れてない感じだし、心配だったんだけど」

そう言ってやや悪戯めいた笑みを浮かべるシャーリーにカノンは眉間の皺を深くする。カノンは普段無表情な分常に不機嫌そうに見えるのだが、そこに眉間の皺が加わると怒っているようにしか見えない。実際、怒るとまではいかないまでもカノンの機嫌は絶賛降下中だった。

「余計なお世話だ。オレはそういう話をしに来たんじゃない」

「分かってるよ。ちょっとからかってみたかっただけ～。で、本題は？」

全く悪びれないシャーリーにカノンは溜息を1つ吐くと懐を探る。訝しむシャーリーにカノンは目当てのものを見つけたのか表情を僅かに動かし、手を引っこ抜く。その手の中にはやや武骨なデザインのドッグタグが握られていた。その正体を瞬時に見抜いたシャーリーが息を呑む。

「これ・・・・・デバイス？もしかしてカノン君、自分で造った？」

驚きに目を見開いて見上げてくるシャーリーにカノンは誇るでもなく頷く。

「ああ。と言っても見ての通り、簡単にだが。それに、元となった

データもあったからな。お前に頼みたいのはコレの調整だ。頼めるか？」

「ん～、それは構わないよ。じゃあ、そこに置いて。基礎構造が出来てるなら、割と早くに出来上がるから。カノン君、元のデータについて聞いていい？後、この子の展開時の形状も教えてくれるかな？」

整備用の装置を操作しながらシャーリーは矢継ぎ早に質問を重ねる。単純に興味からという事もあるのだろうが、整備士としての役割をシャーリーはしっかりと押さえていた。そこに頼もしさを感じつつ、カノンは頷く。とはいえ操作中のシャーリーには見えていなかったので、声に出して返事をする。

「ああ、構わない。形状は・・・・・そうだな、何と言えばいいか、そう、ワイヤーグローブと言ったら分かるか？」

「ん～・・・ごめん、説明お願い」

形状の名前に心当たりがなかったのか、シャーリーが申し訳なさそうに説明を要求する。それに気を悪くすることも無く、カノンは続けた。

「ああ。まあ、グローブの名の通り手袋だな。だが、鋼線・・・つ

まり、ワイヤーを射出、操作できるのが特徴だ。使い方によっては切り裂くこともできる」

「物騒だね・・・・・非殺傷は勿論つけておくよ？で、使えるの？」

「使える。これは、アスフォデルスを使う以前、7年前まで俺が使っていたデバイスを元にしているからな。ブランクがあるとはいえ、腕を鈍らせるようなヘマはしない」

さらりと告げられたデータの在り処にシャーリーは頬を引き攣らせる。カノンの過去は彼女も聞いている。流石にプライベートの問題があるので全員に伝わってはいないが、六課の首脳陣やシャーリーのような特に前線メンバーと関わりの多い人物にはすべて話してある。その話を聞いた時は全員が揃って眠れなくなったことはシャーリーの記憶にも新しい。そんな事であるから、シャーリーがカノンの様子を窺うようになってしまうのは無理のない事だった。

「えっ・・・と。それ、いいの？だってカノン君――」

「別に構わない。何時までも引きずる訳にはいかないからな」

シルヴィアの事を言っているのは分かるが、7年も引きずってきた男のいう事ではない。そう言いたいのを何とか押し殺し、笑みを

取り繕う。シャーリーから見れば（もちろん、彼女以外も思っている事ではあるのだが）カノンは振り切るという事を口にする割にはまだ何処か影がある。必要以上に誰かに関わらない事を見ても、その事は六課の共通認識となっていた。

「・・・・・まあ、良いんだけど。んっとと、終わったみたいだね。一応、アスフォデルスの起動とリンクして起動できるようにしたからね？大事に使うんだよ？」

「助かる。使用については言われなくても・・・試したいんだが、いいか？」

都合一時間程で作業は終わっていた。元々の基礎構造やデータがしっかり入力されていた事からの作業時間超短縮である。出来栄えに満足した様子を見せたカノンは試験使用の許可を取ろうとする。シャーリーはそれに苦笑すると一番に相談すべき人の名を挙げた。

「それはなのはさんか、刹那さんに言って？それから、新しいデバイスを造った経緯とか、戦闘データの収集とかしっかり言わなきゃ駄目だよ」

「・・・・・お前はフェイトか？良くそれだけの心配事を持ってくるな」

次々に注意を促してくるシャーリーにカノンは辟易した様子を見せる。だが、その口から洩れた名前にシャーリーはにんまりと口元を歪める。

「フェイトさんか～。なるほど、カノン君はこういう事をフェイトさんといつもしてるんだ？」

何やら悪ノリした様子のシャーリーにカノンは嘆息すると背を向ける。試験使用をする以上、この場にはもう用はないと背中で語りながらカノンは僅かに振り向いた。

「何を想像したかは大体分かるが・・・・・フェイトの迷惑も考えろよ？」

淡々と告げ、カノンは部屋を後にする。残されたシャーリーは微妙な顔をして扉を見つめるしかなかった。思わず、と言った風に声が漏れる。

「フェイトさんも大変だね～」

＊　＊　＊　＊　＊

「で、俺達の所に来た、と」

「ああ・・・で、許可は貰えるのか」

苦笑する刹那にカノンは相変わらずの無表情で用件だけを突きつける。刹那はなのはと目を合わせ、やや考え込んだ末に頷いた。

「うーん、それは構わないよ。新しいデバイスを使うって言うのが少し不安だけど、使いこなせるなら特に問題は無いしね。一応俺となのはが監督につくけど、それでもいいかい？」

「ああ、構わない」

鷹揚な調子で許可を与えた刹那は立ち上がるとなのはに手を差し出す。なのはが嬉しそうにその手を握り立ち上がるのをカノンは物言いたげに見つめるが何も言わずに背を向ける。何を言ってもこの2人には通じない事はもう学習済みだった。カノンが口を開くと同時に、なのはを立ち上がらせた刹那が微笑むと同じように口を開いた。

「行くぞ」

「じゃあ、行こうか」

重なった声にカノンは眉を顰めた。

＊　＊　＊　＊　＊

「じゃあ、始めてくれるかな？」

モニターを操作し、仮想の森林を造りだしたなのはがカノンに微笑む。カノンは頷くとドッグタグを見詰め、次に待機状態のアスフォデルスに目を向ける。

「・・・・・アスフォデルス、セットアップ」

＜＜Ｂａｒｒｉｅｒ　Ｊａｃｋｅｔ　Ｓｅｔ　ｕｐ　ａｎｄ　Ｌｉｎｋ　ｓｙｓｔｅｍ　ｓｔａｒｔ．．．Ｓｕｒｖｉｖｅ，ｓｅｔｕｐ＞＞

機械的な音声と共にカノンの姿が黒い光に包まれる。カノンの魔力光が黒な為だが、一見しただけでは闇に包まれる様にも見える。やがて光が晴れたその後には、上下黒一色のシャツとズボン、そしてこれまた黒いボロボロになったコートに身を包んだカノンがいた。

全身に蛇が絡みつくような鎖を巻きつけ、両手足首に枷を付けたその姿は異様ですらある。だが、今までのそれとは違い、左手に宝石のような物が付いたグローブを装着している事が唯一の違いだった。左手で拳を握ったり開いたりしながらカノンは何処か感慨深げに呟く。

「サヴァイブ・・・生き残る・・・か。あの時とは違うモノだが・・・頼むぞ」

「カノン、それは？」

カノンの新装備に刹那が不思議そうに尋ねる。カノンは無表情の中にも何処か自慢げな雰囲気を漂わせ、森林を見遣る。

「見てれば分かるさ。なのは、始めてくれ」

「うん・・・それじゃ、開始！」

なのはも不思議そうにしながらもモニターを操作する。すると、人型の異形――フラグメントの姿が十数体現れる。嘗ての機動六課ではガジェットと言う機械兵器を仮想敵としていたが六課再創設の目的に合わせ、フラグメントを仮想敵に設定している。集団での戦闘が基本であること、そしてこれまでの戦闘データを踏まえた結果、訓練の際は数十体もの仮想敵を作るが、今回はカノン１人の演

習なので数を抑えてあるのだ。

「ふっ・・・！」

短い呼吸と共にカノンがとび出す。ステージが森林のため、木を足場にして縦横無尽に駆け巡る。散らばって小さな集団を作っているフラグメントの一群に瞬く間に接近すると、腕慣らしとばかりにアスフォデルスを一閃する。純粋な力だけの一閃はフラグメントの硬い皮膚にぶつかって弾かれるように動きが止まるが、カノンは構わずに横薙ぎ、斬り下ろしと双刃を閃かせる。荒々しいが目にも止まらぬ連撃はフラグメントを傷つけ、ついにその胴を真っ二つに切り離す。

「はぁっ！」

フラグメントを切り伏せたカノンは囲まれ始めている事を視線を向ける事で確認すると、無造作に手を振り払うように振るう。すると、左手のグローブ――サヴァイブから数本、傍目には分からない程細い魔力の糸が射出される。カノンの魔力光を反映しているため、その色は黒である。射出された糸をカノンは指先に絡め、ピアノを弾くように指を動かす。

「んっ・・・！」

「――――――！」

僅かな気合と共に操作された糸の群れはフラグメント達の間を潜り、瞬く間に数体を切り裂く。その様子を確認することも無くカノンは指先を操作すると、周囲の小さな集団が一気に縛り上げられる。魔力の糸が蜘蛛の糸のようにフラグメントを空中に繋ぎ止め、カノンが指を操作すると同時に締め上げがきつくなり、その胴体を、首を捩じ切った。

「っ・・・・・・！？」

ボトボトと音を立てて落ちるフラグメントの肉塊を見、それを為した自らの武器を見た事で一瞬、カノンの頭にノイズが奔る。まるで何かを思い出そうとしているような、しかし思い出すことを拒むような矛盾した不可思議な感覚。急に訪れた異変にカノンは訝しみながらも森を駆ける。

（なんだ・・・？）

違和感に首を傾げつつも攻撃の手は緩めない。左手の指は忙しなく動き、魔力の糸を操っていく。同時にカノンはアスフォデルスの刀身に魔力変換で起きる黒い雷を纏わせた。雷撃が？字の形に収束していく。大きく踏み込み、逆手に持ったアスフォデルスを横薙ぎに振るう。

「クロス・インパルス――――！」

裂帛の気合と共に放たれる雷の斬撃は糸に囚われた哀れな獲物を切り裂き、糸を伝って雷の衝撃を伝えていく。クロス・インパルスに当たらなかったフラグメントも、為す術もなく焼き切れていった。

「ふっ・・・」

小さく息を吐き、乱れた呼吸を整えるカノンの顔はしかし、圧倒的な戦績を残したにも拘らず晴れる事は無い。

「っ・・・！」

カノンの脳裏に再びノイズが奔る。小さく呻いたカノンの脳裏に、7年前の襲撃の現場となった森が映る。それは、カノンが今立っている仮想の森と重なって見えていた。

「くっ・・・！？」

再び、ノイズ。だが今回はそれだけでなく鋭い痛みを伴っていた。ノイズがひどくなる。目の前が真っ白になる程の眩暈と共に、カノンの脳裏に流れ込んできたのは――――――同じような森の中で、

喰い千切られた腹の痛みすら認識できず、胸に突き刺さった腕を呆然と見下ろしている、『記憶』だった。

＊　＊　＊　＊　＊

「・・・・・・どう思う？」

隣に立つなのはを横目で捉え、問いかける刹那の顔は普段の穏やかな笑みを浮かべた柔和なそれと違い、どこか険しいものだった。

「カノン君のデバイス・・・・・・サヴァイブの事？」

答えるなのはの顔も刹那程とは言わないまでも、どこか影のある顔となっている。なのはは恐らく違う答えが返ってくるだろう事を予想しながら問い返す。案の定、刹那は首を振るが、なのはの予想した答えとはまた違った答えを返してきた。

「いや、それだけじゃないんだけど・・・・・・カノンが急に新しいデバイスを造って、使おうと思う理由。もちろん、犯罪者を相手取る事がある以上、戦力の増加は歓迎する事であって、厭うものじゃない」

「それは、そうだよ。戦略の幅も広がるし、場合によっては決め手になる事だってある・・・だけど、急に使い始めた理由がカノン君にあるって事？」

「どうだろう・・・実の事を言うと、確信がある訳じゃないんだ。ただ、俺達はカノンがデバイスを造っていた事を知らなかったし、２つのデバイスを同時に、それも全く違う動作をしながら使える技能があったことを把握しきれていなかった。それがちょっと引っかかって・・・何か、カノンの事を正確に測りきれてない、実はカノンとは別のモノを見ているんじゃないかって、そう思ってしまって・・・」

刹那は目を伏せながら暗い声で言う。なのはは刹那の言葉の意味を考えるため、顎に手を当てる。僅かばかりの沈黙の後、考えを纏

めるようにゆっくりと口を開く。

「・・・・・カノン君のグローブ、サヴァイブって名前らしいけど・・・魔力で作る糸を操るためのグローブだよね。それって多分、カノン君が昔使ってたって言うデバイスを造ったんじゃないかな？」

「それは、まあ、そうなんだろうね。でも、それを今使う理由が分からない。カノンにはもう、アスフォデルスって言うデバイスがある」

「うん・・・それなんだけどね、ほら、この間リゼットの故郷にフェイトちゃんとカノン君が行ってきたでしょ？」

納得のいっていない刹那に、なのははカノンが参加した任務の事を思い出させる。

「その時に・・・これ、この人」

「堕ちた聖典（カラプト・バイブル）のメンバー・・・？確か、レオン・クロフォードって名前だったね。カノンが任務で交戦したって言う・・・レオン？まさか・・・」

刹那が思い出したのはカノンの過去の話。そこには幼馴染のレオ

ンという少年が登場していた。驚愕を隠さずになのはを見た刹那になのはは険しい顔で頷く。

「うん・・・同郷の、幼馴染同士で戦ったんだね。カノン君は7年間を旅をする事で過ごしたけど、彼の場合、犯罪者のグループに加わる事で時間を過ごした・・・彼が関わった事件は、4年前から過激さを増していてね、管理世界の小さな集落を無差別に襲って、生存者もほとんどいない・・・2人が戦った時にどんな遣り取りがあったのかは分からないけど、でも、決別する切っ掛けがあったのかもしれない。カノン君がデバイスを昔使っていた物と同じにしたのは、そう言う理由なのかなって」

＜＜レオン・クロフォードの目的・・・カノン様と違い、村を滅ぼされた復讐でしょうか・・・？＞＞

なのはの考察に刹那のデバイスであるツィガーヌが疑問を呈する。しかし、それに異を唱えたのは刹那だった。

「いや、どうだろう。カノンだって、最初は復讐を目的にしてたと言っていたから。まぁ、カノンの場合シルヴィアさん個人の仇討ちって言う違いはあるけどね。7年の間心を擦り減らして、無気力になってしまったけど・・・でも、レオンは復讐なんて考えているのかな」

＜＜どういう事ですか?彼もまた故郷の友人や親を殺されているの

ですよ？＞＞

「うん、だからだよ。うまく乗り越えられたとは考えられない。もしそうなら犯罪者にはならなかった筈だ。そして、こっちが本題。堕ちた聖典（カラブト・バイブル）にはカノンの故郷を滅ぼした張本人、ハラール・クロウクルワッハがいる」

刹那の言葉になのはが小さく息を呑む。驚きと共に刹那に顔を向けるなのはに刹那は頷いた。ツィガーヌとなのはが呆然と見つけ出した答えを口にする。

＜＜まさか、仇敵と共に行動していると・・・？＞＞

「目的は復讐じゃなくて、もっと別の事・・・？」

刹那は小さく頷いた。

「推測の域は出ないけどね。仇敵が側に居て、復讐を堪えられるとは思えない。それをしていないという事は、さっきも言ったけど乗り越えている事、そして、それがどうでもよくなるような事がある時。そして、彼の場合後者だ。彼に限らず、堕ちた聖典（カラブト・バイブル）が求めるのは――」

「追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）・・・過去を改竄できるロストロギア。それを使って、集落が滅ぼされた事を無かったことにしようとしてるって事？」

「可能性は高い。尤も、それが本当にできるかが問題だけど、もしそうだったとするなら――」

刹那はその先を口にはしなかった。重い沈黙が辺りの空気を支配する。災厄が降りかかるような不吉な予感を感じながら、刹那となのはは訓練場に佇むカノンを見つめていた。

追憶２６　矛盾・崩壊の兆し？（後書き）

いかがでしたか？今回はシリアスだけです。あと数回したら大きな動きがある筈なので、お楽しみに。

前書きについては気にしないでください。ちょっと年末が近づいてナイーブになってるだけなので。大掃除が面倒で・・・はぁ・・・

まぁそれでも、絵を描いてあげてもいいんだぜこの駄作者！と言う方がいれば是非お願いします。私には絵才が無いものですから（オイ

そんな訳で、これからも『Ｔｈｅ　ｎｏｓｔａｌｇｉｃ　ｍｅｌｏｄｙ』と『Ｒｅｓｏｎａｎｃｅ？Ｗ？』をよろしくお願いします！

それでは！

追憶27～矛盾・崩壊の兆し？～（前書き）

あけましておめでとうございます……というには遅すぎますね。
大変遅くなりました。最新話、更新でございます。

新年最初にしてはあまりタイトルが縁起のいいものではないですが……生憎と、この話を皮切りに一気に話が進むでしょう。

それでは、どうぞ！

追憶27～矛盾・崩壊の兆し？～

『なのは、もういい・・・・・・止めてくれ』

仮想の森林を駆けていたカノンからの突然の念話になのはは目を見開くと隣に立つ刹那と目を合わせ、頷くのを確認するとモニターを操作する。仮想の森が消えると同時に、カノンは蒼い顔で膝を着き、異常を察したなのはと刹那はカノンの元に駆け寄った。

「どうしたの！？」

「・・・・・・っ」

慌てた様子のなのはにカノンは大きく息を吐くことで答える。それだけでは何があったのか分からないため、刹那がカノンの首と手首に手を当て、脈を量る。

「・・・・・速いね。戦ったからって言うのもあるだろうけど、それだけじゃこの状態は説明できない。カノン、ゆっくりでいいから息を整えて、気になった事を教えて」

「気になった事？」

何があったのか、と訊かない刹那になのはは首を傾げる。カノンのこれは外的要因、つまり怪我などから来るものではない事を確信しているように思える。

「カノンは多少の怪我なら気にしないでしょ？」

「・・・・・・まあ、そういう所はあるね」

「・・・好き勝手言うんじゃない・・・」

何気無しに失礼な事を何食わぬ顔でのたまう刹那になのはは苦笑と不満げな顔の混じった微妙な表情で応える。全く否定してもらえず、逆に好き勝手に言われたカノンは蒼い顔でありながらも不満を口にする。だが、刹那は底意地の悪そうな顔でカノンを責めた。

「ふーん？それじゃあ、訓練中に一々生傷作ってシャマル先生にお世話になってるいい年こいた真っ黒な人は誰だろうね？フォーメーション無視して動き回って、フェイトやエリオが散々フォローして態勢立て直してるのにも気づかない薄情な人は？キャロも疲れないようにブーストかけてくれてた気がするな～？」

「・・・・・・」

反論する間もなく言葉を失ったカノン。苦い顔で黙り込む彼にツィガーヌが同情を多分に含んだ声で忠告する。

＜＜カノン様、これ以上お心を消費される前に諦めになった方が宜しいかと・・・・・・。それから刹那、話がすり替わっていますよ？本題にさっさと入りなさい＞＞

「そうだね」

「はぁ・・・・・・」

デバイス（ツィガーヌ）からの叱責に刹那はあっさりと表情を真面目なものに戻す。余りの変わり身の早さにカノンは不調も忘れて嘆息してしまった。兎にも角にも自分が話さなければ延々とこの馬鹿馬鹿しい掛け合いが続くのだろうと判断し、カノンは口を開いた。

「戦闘中・・・オレは何か思い出していた気がするんだ。だが、それが本当にオレの物（きおく）なのかどうか・・・」

「どういう事？詳しく聞かせてくれないかな」

話し始めるも、少し話しただけで言葉を濁したカノンになのははは

柔らかい口調で問う。刹那は無言でカノンを見つめ続けており、全てを見透かされてしまうような感覚にカノンは目線を下に伏せた。

「・・・・・一瞬だけ、本当に一瞬だけ、この森があの時の森に重なって見えた・・・」

「・・・・・そうか。それで？」

刹那の返答は何の感情も見せない淡々としたもので、あまり事態を重く見ているようには感じられない。だが、やはりその瞳だけが何かを見極めようと鋭い光を放っていた。しかし、カノンの瞳からは既に光が失われかけており、腹を抉られ、胸を貫かれた『記憶』が再び過った為にカノンは苦痛の呻きをあげた。頭が焼けるように熱くなり、ズキズキと酷く痛む頭を押さえカノンは声を絞り出した。

「とび込んできた映像・・・オレは・・・貫かれていた。腹を抉られて、心臓を腕で直接・・・」

「っ・・・！？」

その光景を想像してしまったなのはが息を呑み、震える声で否定した。

「お、おかしいよそんなの・・・。だって、そんな事になったならカノン君、今頃・・・」

「・・・・・生きてはいない、ね」

最後まで言えずに黙り込んでしまったなのはの後を刹那が引き継ぐ。流石の彼もその表情は穏やかではなく、困惑を隠しきれていなかった。カノンは吐き気を堪えるように俯き、口元を抑える。その顔は苦痛で土気色にまでなっており、精神が圧迫され過ぎている事を示していた。

「だが、オレ自身がその光景に違和感を覚えないんだ・・・オレは五体満足だって言うのに、あの記憶が虚像だと思えないなど、どうかしてる・・・・・」

気の所為、妄想・・・そう断ずるには現実味に満ち溢れすぎるものを見た所為で、カノンはすっかり消耗してしまっていた。自分の記憶を信用できないというのは恐ろしいものである。只それだけで自分のアイデンティティーが揺らいでしまうのだから。自分が本当に消えてしまいそうな寒気に襲われ、カノンは震える腕を押さえる。歯を食い縛り、軋むような声が漏れた。

「どうなってる・・・・・オレは、一体・・・・・・・？」

その呟きは近くにいたなのはと刹那には届かず、薄れるように消えていった。

＊　＊　＊　＊　＊

チリン、と鈴の音が鳴る音にフェイトは再び目を開け、身体を起こす。見回すと既にエリオとキャロの姿は無く、「お大事に」や「無理しないで下さい」と書かれたカードが枕元に置かれていた。キャロが書いたのであろうデフォルメされたフェイトやエリオとキャロ、そして何故かそっぽを向いて拗ねた表情のカノンが描かれている。絵の可愛らしさに笑みを溢したフェイトは再び聞こえた鈴の

音に顔を上げ、音源を探って瞠目した。

「シルヴィアさん・・・！？」

『フェイトさん・・・！』

驚愕を隠せないフェイトに対し、淡い光を纏ったシルヴィアは今にも消えてしまいそうな程儚く、切羽詰ったような瞳と声でフェイトの名を呼んだ。

「ど、どうして・・・！？」

『ごめんなさい、ごめんなさい・・・！』

シルヴィアが再び姿を現したことに混乱するフェイトに、シルヴィアはその銀紫の髪を振り乱しただひたすら謝罪を口にする。いまいち状況が呑みこめないフェイトに、シルヴィアは驚くべき事を口にした。

『カノンが・・・カノンの追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車が発動しかけてる・・・！このままじゃ、カノンの記憶が・・・！こんな事なら、最初から本当の事を話していれば・・・！私は・・・！』

「どういう事!?発動って・・・だって、それは封印されてるんじゃ・・・!それに、カノンってカノンがどうなるの!?」

不吉な予感がフェイトを襲う。信じると決め、心の奥に押しやった不安が再び鎌首を上げ、噛みついてくるのをフェイトは感じ取っていた。

『近くで追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）が使われてる・・・!それも一個じゃない、二つ・・・三つ!強制的に他の欠片と共振させて、見つけようとしてる・・・カノンの中の欠片が反応してるの!』

「使われてる・・・!?どういう事!?まだ何も・・・!」

使われている、その事にフェイトは更に混乱する。追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）はロストロギアだ。そして、機動六課はそのロストロギアに対処するための部隊。使用されているのなら、見逃すはずがない。それも近くでと言うなら尚更だ。しかし、フェイトの疑念を晴らすように突如警報が鳴る。ハッとして立ち上がろうとしたフェイトの前にシルヴィアが立った。

「シルヴィアさん!?」

『時間がないのは分かってます!だけどお願い、話さなきゃいけな

い事があるの！』

思わず睨み付けてしまったフェイトにシルヴィアは懇願するかのようにフェイトの前から動かない。その必死な様相に、フェイトも早く動きたいのを堪えて話を聞く体勢を整える。それに安心したように、シルヴィアはフェイトが促すまでもなく早口で語り始めた。

『本当は・・・私、本当はあれを封印出来なかった！私は、私の身勝手でカノンに辛い思いをさせてるんです！』

「！？」

封印できていない。その身を切るようなシルヴィアの叫びにフェイトは何度目か分からない驚愕を示し、同時にまだ遠くにあった筈の不安がフェイトの首に手をかけた事を自覚した。

（ダメ・・・これ以上は聞いちゃ駄目・・・！やめて・・・聞きたくない・・・）

だがしかし、フェイトの心はその先を拒絶しているのにも関わらず身体はその耳を塞ぐ事はしなかった。大切な物が崩れてしまう予感にフェイトはただ震える事しか出来ない。

『あの時・・・あの男の攻撃を受けたのは、死んでしまったのはカノンの方だった！私、耐えられなくて・・・私の身勝手で、追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車を使ったんです！』

「・・・・・・！」

とすん、と呆気なくフェイトは頽れた。信じようと決めた矢先に齎された真実はあまりにも残酷で、フェイトの心を打ちのめしていた。

「そん、な・・・そんなのって・・・・」

弱弱しく口から洩れる呟きにシルヴィアはハッと動きを止め、苦痛に曇った瞳でフェイトを見る。その口から洩れる声は先程よりは幾分か落ち着いてはいるものの声の震えは大きく、罪悪感であふれた惨めなものだった。

『カノンが皆さんに話した事・・・殆どは真実です。だけどそこだけ・・・ハラールとの戦いだけは真実じゃない・・・書き換えられた、私が書き換えてしまった真実なんです』

真実と言う言葉はひどく曖昧だ。真実はいつも一つ、という名台詞があるが、それは一面から見たものでしかない偏ったものだ。表があれば裏があるように、万華鏡のように幾つもあるのが物事の本

当の姿。人はその一部分を削り取って磨くことで真実とし、世に晒す。しかし、それ以外の要素は不要として誰の目にも止まらずに摩耗、風化して消えていってしまう。歴史の真実というものは、削り取った一部分のみを集めた継ぎ接ぎの絵画なのだ。しかし、それもまただんだんと姿を変えていく。不変と思われていたものが新しい発見によって書き換えられるように、真実もまたその姿を常に変化させている。

『封印の直前に私は見てしまったんです。カノンがハラールの腕の一薙ぎで腹を抉られ、胸を貫かれてしまった光景を・・・私はただ見ているだけしか出来なかった。そして、私の理性はそこで壊れてしまったんです。禁忌だと言われている追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の行使・・・私が願ったのは、カノンが攻撃を受ける少し前まで時間を戻す事・・・』

「・・・・・・」

シルヴィアの告白をフェイトは黙って聞く事しか出来ない。鳴り続ける警報も対岸の火事のように思え、全てがどうでもいいことのように思えてしまう。しかし、フェイトの耳はカノンの事柄だけはしっかりと捉えていた。

『私はカノンに追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を埋め込んで発動を願った・・・結果は成功。私はカノンを庇う事が出来ました・・・その時、埋め込んだことで何か連鎖的に叶えてしまったのかハラールは姿を消し、私は・・・』

死んだ。その光景がシルヴィアの脳裏で再生される。

～回想～

「シルヴィア、シルヴィア・・・！」

「カ、ノン・・・？」

顔を真っ青にし、身体を引き裂かれたシルヴィアに縋るカノン。
シルヴィアは弱弱しく微笑みながら涙を流すカノンを見詰めた。

「ごめんね・・・追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）、失くしちゃった・・・奪われてはいないから、安心して・・・？」

「何言ってるんだよ・・・！そんな事どうでもいい・・・！シルヴィア、駄目だ！このままなんて・・・！」

流れて止まらない血液に注意を払うことも無く的外れな事を言うシルヴィアにカノンは震える腕でシルヴィアの細い身体を抱く。伝

わる体温にシルヴィアは心地よさそうに目を細め、感覚を失くした身体を動かす。腕をあげ、カノンの頬に手を当てる。雪と涙で湿ったそこはとても冷たく、シルヴィアはそっとその頬を撫でた。

「無理だよ・・・もう分かるの。カノン・・・私ね・・・？」

「嫌だ・・・！やめろよシルヴィア・・・！約束したじゃないか、前に！大人になったら此処を出ようって・・・たくさんの場所を旅しようって！お願いだよシルヴィア・・・！いっちゃだめだ・・・僕の・・・僕の側に居てよ、シルヴィア・・・！どこにも行かないでくれよ・・・！」

声が枯れるのにも構わずカノンは叫ぶ。その弱弱しい叫びを止めたくてシルヴィアはきゅっとカノンの頬をつねった。段々と身体が重く、冷たくなっていくのを自覚しつつ、せめて最期の想いを伝えようとシルヴィアは口を開く。見開かれた瑠璃色の瞳にカノンは引き寄せられるように叫ぶのを止めた。

「カノン・・・私、カノンと逢えて良かったよ・・・？カノンがいてくれたから、私の人生はキラキラ輝くようになった。毎日が楽しくて、輝いて・・・カノンがそこにいるだけでドキドキが止まらなくて、温かくて・・・いっぱい遊んで、いっぱい話して・・・たくさんたくさん、キスしたよね。数えきれないくらい好きだって言ってくれて、同じくらい好きだって言った。カノンの表情、動き、言葉・・・全部思い出せるよ。ずっとカノンは笑ってて・・・レオンや私をからかうの。最初は怒るけど、やっぱり最後はみんな笑顔に

なれる。私、そんなカノンが好きなの」

「シル、ヴィア・・・！」

カノンの目は真っ赤に充血し、涙は溢れて止まらない。囁くような声と苦痛に耐えるように歪められた顔を見てシルヴィアは「めっ」と言うように僅かに怒ったような顔をすると困ったように笑う。

「だから、ね・・・？笑って・・・？これが酷いお願いだっていうの、分かってるの。でも、最期の最期は、やっぱり貴方の笑顔が見たい。私の人生は幸せだったって・・・そう確信したい。愛する人に抱かれてるのに、悲しい思いはしたくないの。我が儘だよね。カノンは苦しいのに・・・ごめんね。ごめんね・・・？」

そう言ってシルヴィアは泣き笑いの表情を浮かべる。その表情にカノンは一層その顔を浮かべ、怒ったように眉間に皺を寄せた。

「そんな事言うな・・・そんな事言うなよ・・・！ずるいだろ、そんなの・・・そんな事言われたら、僕は笑うしかない・・・シルヴィアがいなくなるのに・・・医者も呼べないのに、治せないのに・・・黙って見てるしかないのに、笑わなきゃいけないんだもんな・・・！そんなのってないよ・・・！やりきれないよ・・・！」

「・・・・・・」

慟哭するカノンをシルヴィアは黙って見つめていた。大粒の涙が顔に落ち、その部分だけが熱を持ってシルヴィアを刺激する。カノンは歯を食い縛り、空いた腕で涙を拭うと引き攣ったような笑みをその顔に張り付けた。目は真っ赤に晴れ、涙の所為で顔はぐちゃぐちゃの酷い有り様だが、確かにカノンは笑顔をシルヴィアに見せていた。そこに込められた想いを全て受け取り、シルヴィアも笑い返す。

「あはは・・・変な顔。でも・・・うん。カノンはやっぱり笑ってる方がいいわ。ぽかぽかしてあったかい。私の知ってる・・・私が大好きなカノンの笑顔」

「・・・・・・」

シルヴィアは笑顔のまま、カノンを真っ直ぐに見つめる。

「カノン・・・キスして」

「・・・・・・」

カノンは何も言わずにそのお願いを叶える。唇を啄むような優しいキス。冷たくなっていく感覚の中で、2人だけが熱かった。潤ん

だ瞳でシルヴィアはカノンを見上げる。

「もっと・・・もっとして」

再び、キス。今度は舌まで入れて背伸びをしたディープキス。永遠とも取れる長い時間、2人はそのままでいた。やがて離れた2人の口からは銀色の糸が伸びる。シルヴィアは嬉しそうに微笑んだ。

「えっちだね」

「・・・うん」

「でも、幸せ」

「・・・・・・うん」

「最後のお話・・・聞いてくれる?」

「・・・・・・・・・うんっ・・・」

小さく本当に小さく、シルヴィアは息を吐く。白い吐息がカノン

を撫でた。

「カノン・・・ありがとう。私を連れ出してくれてありがとう。遊んでくれてありがとう。一緒にいてくれて、ありがとう。好きだって言ってくれて・・・ありがとう」

その言葉で、カノンの顔が再び崩れかけた。しかしカノンは唇を震わせながらも笑顔を作る事は止めず、その瞳だけがカノンの感情を強く訴えかけていた。

「愛してくれて・・・・・・・ありがとう」

最後に囁くようにそう告げ、シルヴィアはゆっくりと瞼を閉じた。微笑を湛えたまま、静かに、眠るように。最期を齎したものが凶刃であるにも関わらず、その服は血で真っ赤に染められているにも関わらず、その姿は女神を思わせるような美しいものだった。ついに、カノンが嗚咽を漏らす。服が汚れるのも構わず、強く冷たくなったシルヴィアの身体を抱きしめた。

「シルヴィア・・・シルヴィア・・・！シルヴィアアアアアアァァァァァ！」

慟哭だけが吹雪の舞う森に響いた。

～回想・終～

『・・・フェイトさん』

「・・・・・・・」

フェイトは答えない。答えられないのだ。その瞳は光を喪い、身体は小刻みに震えていた。しかし、シルヴィアの次の言葉でその肩が跳ねる。

『お願い・・・カノンを助けて・・・！』

「・・・・・・！」

ゆるゆると顔を上げ、フェイトはシルヴィアを睨み付ける。この期に及んで何を言うのか・・・そう言いたげなフェイトの鋭い視線にシルヴィアは臆することなく頭を下げた。

『私が書き換えてしまったから、カノンは生きてる・・・それが『真実』になってしまってる。それはもう変えられない・・・これ以

上は禁忌は冒せない。だから、カノンをこれ以上危険な目に遭わせたくないから・・・でも私にはもう限界が近いから・・・！だから、だからお願い・・・！』

「・・・・・私だってもうどうしたらいいか分からないよ・・・もう、何をしていいか分からない・・・」

「・・・・・・」

弱弱しいフェイトの呟きにシルヴィアは黙ったまま視線を動かず、頭を下げ続ける。フェイトは大きく溜息を吐いた。

「でも・・・追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）は見過ごせない。それが六課の意義で・・・やるべき事だから。それでカノンを護れるなら・・・」

『・・・・・はい。勝手な事だって、分かってます。でも私には、こうしてあなた達を巻き込む事しか出来ない・・・本当にごめんなさい』

「・・・・・」

そうしているうちにシルヴィアが纏う光が淡く点滅し、彼女が苦しげに表情を歪ませる。その身体が薄れ、消えていくのをフェイト

もまた沈痛な表情で見送った。直後、呼びに来たのであろうギンガが入ってきた。

「フェイトさん、クラナガンでロストロギアの反応が・・・！フェイトさん！？」

フェイトの様子を見てギンガが慌てる。だが、それを何処か遠くのように思いながらフェイトは頷いていた。

「・・・・・・うん、行くよ」

「は、はい・・・」

ふらりとギンガの横を通り過ぎるフェイトの後をギンガも追う。フェイトの異常な様子にギンガは悪い予感がこみ上げるのを抑える事は出来なかった。

（何か、私達にとって大変な事が来る・・・最悪な事にならなければいいけど・・・）

だが、ギンガはその懸念が実現するであろう事をギンガ自身が自覚してしまっていた。

追憶27～矛盾・崩壊の兆し？～（後書き）

いかがでしたか？　……はい、わかってます。シリアスですいませんでした。

カノンの身体に隠された真実は残酷な物ですが……でも、カノンは『生きている』んですよ、ちゃんと。

カノンもまた、自身の真実と真っ向から向かい合う事になります。その時彼はどのような対応をするのか……流石に、もう取り乱すようなことはないかもしれませんね、彼の場合。

次回もお楽しみに！感想等お待ちしています！

追憶２８～襲撃～（前書き）

今回はエネミーサイドの動きが中心かもしれません。

例のあの人のぶっ飛んだ発言に皆様がどんな反応をするのか……

私は自分で書いてて嫌悪を抑えられなかったっす。

さて、ちょっとお知らせです。実は……爺先生から刹那のデバイス、ツィガーヌのイラストを頂いちゃいました！サイトのＵＲＬを載せておきます。ＵＲＬは活動報告にも載せておきます！

ｈｔｔｐ：／／３７３２．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３８６２６／

です！

それでは、どうぞ！

追憶２８～襲撃～

「随分といきなりね・・・！」

「しかもクラナガンだよ！？急がなきゃ、街の皆が・・・！」

「ああもう、落ち着きなさい！アンタ仮にも救助隊でしょうが！」

廊下を走り、ヘリポートを走りながらティアナはスバルを叱る。
急な警報に動揺していたスバルはそれでも不安げな瞳をティアナに向け、表情通りの不安を口にする。

「で、でも・・・もし反応が追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）で、使っちゃった人がいるなら・・・それに、狙ってる犯罪者だっているんだよ！？」

「うっさいわね！そんなの分かってる！スバル、アンタは街の皆を救助する事だけ考えなさい！ロストロギアと犯罪者の事は私達で何とかするわよ！」

苛立って叫ぶようにとんでもない事を口走ってしまったティアナにスバルは慌てて反論する。

「そ、そんな・・・！ティア達をほっとくなんて・・・」

「アンタね、私はもう執務官よ？あの頃とは違うわよ。もちろん油断なんてしないし出来る相手でもない。それ以前に、私達は優先順位を間違えちゃいけないのよ」

ティアナ達にとって今やるべき事は、反応のあったロストロギアの回収と封印、そして被害の拡大を抑える事。仲間の命など、この際は二の次三の次だとティアナは告げる。納得できない表情のスバルに、ティアナは大きく溜息を吐いた。

「勘違いすんじゃないわよ？私は死んでもいいなんて思わない。生きて任務を成功させるからこそ、そういう覚悟が必要だって言ってんの。無傷で済むなんて甘い事言ってんじゃないわよ？」

「・・・・・うん」

ティアナは振り返らずにティアナはヘリポートへ続く扉を開けるやや遅れて続いたスバルはティアナの背中を見て一抹の寂しさを覚えていた。

（ティア、変わったなぁ・・・）

執務官として日々事件に立ち向かっているからこそ身に刻まれる現実の厳しさ。それを知って尚ティアナは前を向き続けている。それについていけない自分がひどく情けなく思えて仕方なかった。と、そこでティアナが睨むように自分を見ているのをスバルは捉え、困惑する。

「ティア？」

「・・・・・まぁ、アレよ。本当に危なくなったなら、アンタが助けてくれるんでしょ？期待しててあげるから、さっさと集中しなさい」

頬を僅かに染めながらそっぽを向く相棒の姿にスバルは破顔し、大きく頷いた。

＊　＊　＊　＊　＊

「カノン、大丈夫かよ?お前今にも倒れそうじゃん。休んだ方がいいんじゃねぇのか?」

「いや・・・いい。嫌な予感がするんだ・・・行かなければ、オレは何かを失う気がする」

土気色を通り越し、最早幽鬼と見紛う程消耗しきったカノンをアレンが案じるが、カノンは首を振るだけで退けた。

(この感覚・・・なんだ・・・?ざわつくような、これは・・・)

ドクン、と心臓が大きく跳ねるのを自覚し、カノンは胸元を押さえる。またも頭に『記憶』が蘇り、頭痛と眩暈が襲う。

(・・・・・・恐怖?)

そして、カノンは自覚してしまった。追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を追う。それは当然の事で、諸々を無視したとしてもレオンの手には渡さないと決めている。だが、そんな事すら彼方へ押しやる程の悪寒がカノンを襲っている。このまま行けば、自分にとって良くない何かが起こる――カノンはそう確信していた。だが、ここで大人しく待っている訳にもいかない。辛い様子を見かねた刹那が真剣にカノンへ警告する。

「辛いなら出動は止めた方がいい。無理して倒れられても此方は庇えないし、それ以前にそんな状態の君を出すわけにもいかない」

「駄目だ・・・オレは行かなければ・・・」

頭では刹那の警告が正しい事は分かっているが、カノンの口から洩れたのは逆の事だった。刹那が視線を厳しくし、なのはやヴィータといった隊長陣も険しい顔でカノンを見る。と、そこにフェイトがようやくヘリポートに姿を見せた。

「おせーぞ、フェイト！」

「うん・・・ごめんね」

文句を垂れるヴィータにフェイトは一切逆らわずに弱り切った苦笑を返す。流石にフェイトの様子がおかしいと気付き、皆の表情が

さらに曇る。

「フェイトちゃん!?大丈夫なの!?」

「なのは、大丈夫だよ・・・ちょっと気分が悪いだけ」

心配するなのはに笑いかけながらフェイトはカノンを一瞥する。まるでフェイトの状態が移ったかのようにカノンの様子は酷い様相を見せており、シルヴィアの話が本当である事をフェイトに悟らせるには十分だった。尤もフェイトはカノンが何をしていて、何を見たかは知らない。ただカノンの表情だけでそれを読み取ったのである。

「急ごう、なのは・・・皆も。早く行かないと、大変なことになるから・・・」

「「「・・・・・・・」」」

普段の柔らかな雰囲気から程遠い重苦しいものを纏ったフェイトの迫力に皆は呑まれ、それ以上の言葉を発することなくヘリに乗り込んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

第一世界、ミッドチルダの首都クラナガン――その繁華街は恐慌状態状態に陥っていた。突然出現した数十を超えるフラグメントの群れ、そしてその中心に立って異形らを操っていると思われる三人の人影。たったそれだけで人々は逃げ惑い、犠牲を着実に増やしていっていた。

「ククククク・・・恐怖、恐怖、恐怖！あぁ――なんと素晴らしい！実に素晴らしい！哀れな子羊の悲鳴がこんなにも・・・！」

美青年と呼べる顔を喜悦と恍惚の表情で歪め、片手で顔を覆いな

がら哄笑する男――クラウン。その狂気の振る舞いを横目で捉えながら黒髪の奥で朱眼を苛立ちと憤怒に滾らせる青年、レオンはその激情を隠すことなく手に持った両刃の大剣を人々の一群に向けて振るう。刃から放たれた三日月状の衝撃波は呆気なくそれらの胴体を切り裂き、醜い肉塊へと変える。レオンは舌打ちすると苛立ちを未だ哄笑し続けるクラウンに向けた。

「いつまで笑っている・・・！まだ見つからないのか!?此処に追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）があるんだろう!?」

「やれやれ・・・人がせっかく楽しんでいるというのに無粋な。ですが良いでしょう。このクラナガンに住む人物が使用したようです。それは間違いない。そしてこの中にその人物がいる事も――ね」

クラウンはレオンをまるで聞き分けのない子供の様に扱い、周囲を舐めるように見回して口元を歪める。目を細めると上空に浮かぶ最後の人影・・・ハラールに声を掛けた。

「ハラール、食事を開始して構いませんよ?私は追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を探します。ああ、それから貴方も少しは鼻が利くのですから、持っている餌を食べないで下さいよ?」

「うるせェ、家畜風情が俺に命令するな。俺は俺の望みのままに――こいつ等を食い尽くすだけだアァァァァ！」

ハラールはクラインを一顧だにすることなくその両の掌に火球を出現させる。１つ、２つとその数を増やし、次第に大きくなる火球の存在に人々は絶望でその顔を歪ませ、中には既に壊れてしまったのか薄笑いを浮かべてへたり込む者までいた。ハラールは計１０個の火球を放とうとし――その直前でようやく地上の武装局員が到着し、問答無用で魔力弾を飛ばす。

「アァ？」

「止まれ！貴様らをテロ容疑で拘束する！今すぐに攻撃行動を中止し、武器を捨てろ！」

部隊の隊長であろう大柄の男がデバイスを構え、警告する。ハラールの眼光にも怯んだ様子を見せずに再度警告を放とうとするが、その口が開く直前に火球が一発、後ろに控えていた武装局員の１人を灰にする。

「なっ・・・」

絶句して動きを止めた局員たちをハラールはつまらなそうに見据え、残った火球をさらに膨らませる。局員達はそれぞれデバイスを構えるが、それが無駄な抵抗に終わる事が薄々理解し始めているのか顔は真っ青だった。しかし、死が確定されたものだったとしても彼らは退くことなど許されない。何故なら彼らは地上に住む人々を

守る盾であり砦だからだ。嘗てその権力と手腕で地上を守っていたレジアス・ゲイズ中将が新暦７５年のＪＳ事件時に不審死を遂げた後、抑止力を失った地上は犯罪率が増加し、犬猿の仲であった『海』――すなわち本局とのある程度の妥協によって弱体化を最小限に留めていた。故に、今地上を攻撃されるという事は弱体化を犯罪者共に曝け出す事と同義であり、法と平和の理念や地上に属する局員の矜持をへし折られる事になるからだ。

「家畜が何を一端に汚ェ口きいてやがんだ？いいか、よく聞けよ・・・？」

しかし、ハラールにとってはそんな事はそこらの砂一粒よりも価値のない事だった。彼にとって、『人間』の社会事情や個人の矜持などは意味を為さない。人間は食事の際、牛や豚、鶏の肉を前にそれらの生前に意味を見出すようなことはしない。何故ならそれは当たり前の事だから。家畜が殺され、人の糧となるのは当たり前。『家畜』は『主人』に絶対服従の存在であり、その生に意義を持つことを許さない――つまり、ハラールにとって人間とはそういう存在だった。

「てめェ等には」

マグマをそのまま掴んでいるかのように禍々しく赤光を放つ火球がハラールの周りに先程と比べるのも馬鹿馬鹿しくなる程大量に浮かぶ。

「価値なんざねェんだよォォォォァ！」

憤激と共に放たれた無数の火球は局員達が翳した防御魔法をいとも容易く溶かしきり、その存在すらも塵と還していく。そして、それだけに飽き足らず周囲のビルや逃げ遅れた人々をも巻き込み、その場を地獄絵図へと変えていった。

「クハハハハハ！下らん命だったなァ！てめェら全員、ゴミ虫のように死に晒せェェアァァァ！」

「・・・・・やれやれ、愉しむのもいいですが捜索の邪魔にならないようにしていただきたい・・・と言っても無駄ですか」

「ちっ・・・」

哄笑するハラールをクラウンは困ったような笑みを湛えて見つめ、レオンは血走った目で周囲を探っている。そんな彼らの耳に、一人の男性の声が届いた。

「な・・・なんだ・・・どういう事だ、これは・・・ッ」

「あ？」

混乱で震える男性を六つの瞳が見据える。男性の手の中には翡翠色の水晶が握られており、視線がそれに注がれているのを把握すると泡を飛ばしながら威嚇し始めた。

「な、なんだ貴様ら！これはやらんぞ！？いいか！？これはな、私がオークションでようやく買い取った物なんだ！私はこれで私の過去を変える！奴が昇進出来て私が出来ないなどおかしな話だったんだ・・・奴が裏金を使ったに違いない・・・やり直してアイツを陥れてやる・・・誰にも邪魔させん・・・くひ、くけきひ、ひひひひひっ」

結局3人の視線に耐えられなかったのだろう、耳障りな笑い声をあげて座り込む。その口からは涎がだらしなく垂れており、目も飛び出すなど殆ど廃人と言ってもいい具合のものだった。しかし手に持った水晶だけは決して手放さず、その執着の強さが見て取れた。

「壊れてしまいましたか」

「楽しそうにしやがって・・・悪趣味だ」

心底から恍惚の表情を浮かべるクラウンにレオンは嫌悪の表情を向ける。クラウンは底知れない笑みを湛えてレオンに目を向け、毒を吐いた。

「貴方には分からないでしょうね。分かって欲しくもないですよ？これは私にのみ許された祝福・・・人が堕ちる瞬間を見れるなど、そうそうない事ですから・・・神からの賜り物といっても差支えないでしょう？」

「心底どうでもいい・・・それより」

「モタモタしてんじゃねェよ。コイツにだけ構ってられるか」

レオンが大剣を振り上げ、ハラールが腕を掲げる。同時に飛び出した2人はお互いの存在に気付くと舌打ちし、先にレオンがハラールに剣を振り下ろした。

「邪魔するな！」

「ハッ、こっちのセリフだ。豚が馴れ馴れしくしてんじゃねェよ！」

ハラールは避けることも無く攻撃を受けたにも関わらず傷一つつかず、逆にその腕をレオンに振り下ろす。上空に逃れて避けたが、レオンのいた場所は見るも無残に砕けていた。

「ひぃっ・・・！」

その人間離れした一撃に一瞬正気を取り戻したのか、男性が頬を引きつらせ、座り込んだまま無様に後ずさる。ハラールはもう一度近寄ろうとしたが、今度はクラウンがそれを止めた。

「ハラール、此処はレオンに譲っておきましょう。どのみち後2つはあるようですし、主に捧げる手柄としても1人1つ、丁度いいではありませんか」

「テメェと一緒にするな。俺にとってあのふざけた鎧も敵だ。俺は俺が滅びるまで全てを喰らい尽くすのを止めねェ。それにはテメェらも入ってるんだぜ？」

にこやかなクラウンにハラールは殺意の籠った剣呑な視線を向け、舌打ちして何処へと歩き出す。上空のレオンも「貴様が言うな」などと呟いており、クラウンが仲間（そう言えるのかは分からないが）からも嫌われている事を如実に示していた。それでも作り物じみた笑みを絶やす事無く、クラウンは男性を冷酷に見つめながらレオンを促す。ハラールには気をとめる事はしない。新たな餌を求めているのは分かっているからだ。

「奪うならさっさとしてください。あの人殺し共が来ても困りますしね」

「それこそお前が言うな。言われなくても奪うさ」

自分達が犯罪者であることを棚上げにして嘯くクラウンにレオンは嘆息すると男性の目の前に降り立つ。大剣を一閃し、その腕を刈り取った。

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁ！」

翡翠色の水晶が腕から離れ、宙に浮かぶ。レオンはそれを熱の籠った瞳で見詰める。

「追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）・・・こいつがあれば、俺はシルヴィアを――」

「まぁ、一筋縄ではいかないでしょうがね。その人物1人ならともかく、貴方の故郷を全て取り戻せるわけではありませんよ？」

口元を歪めるレオンにクラウンは珍しくその笑みを引っ込め、真剣に『忠告』する。だがレオンはそんな事は承知の上だとでも言うように頷くとその瞳をクラウンに向ける。

「構わん。俺が取り戻すのはあいつらとの日常だけ・・・他の奴らなど知らん」

「ええ、そうでしょうね。だからこそ主は自身の持ち物である追憶（ノスタル）の歯車（ジック・ギア）の欠片を貸し与える事をお許しなられたのですから。・・・・・しかし？彼？はどうする気です？」

「奴も同じだ。シルヴィアさえ帰ってくればどうとでもなる！」

「・・・・・・」

完全に凝り固まったレオンの言葉にクラウンは内心で嘆息していた。人の心とはそう単純なものではない。過去を操り記憶を弄ったところで、何かの拍子に気付いてしまう事は分かり切っている。追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車と言えども、人の脳や身体の神秘には対応できない。古代遺失物（ロストロギア）とは文字通り古代の文明が残した技術の結晶。即ち人の手による技術だ。だが、如何に高度な技術を有していても『ヒト』の神秘を解明する事は出来ないのだ。レオンはそれが分かっていない。そして、？彼？の特異性を理解していない。ハラールから逃れられる人間などいない。しかし？彼？はやってのけているのだ。それが追憶（ノスタルジック・ギア）の歯車の力で行ったものであるとしても、である。そして、それが？彼？の手の中にあるのなら、それだけ警戒しなければならない。

「まぁ、何とかしましょう」

クラウンは1人呟くと虚空に目を向ける。そんなクラウンの様子に気付かずにレオンは地面に転がった追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）に手を伸ばす。だが、桜色の閃光がそれの邪魔をした。

「チッ・・・！」

「そこまでです。堕ちた聖典（カラプト・バイブル）所属犯罪者、クラウン・アワリティア、レオン・クロフォード」

「貴方達には殺人、テロ容疑が掛かっています。武器を捨てて投降して下さい。抵抗した場合、抹殺許可が下りていますのでそれ相応の対応を」

機動六課スターズ分隊隊長、高町なのは。メロディーズ分隊隊長、散空刹那がそれぞれレイジングハートとツィガーヌを構え、レオンとクラウンの行動を牽制していた。

「おやおや・・・」

「クソがッ・・・」

おどける様な仕草をしたクラウンと違い、レオンは悪態を吐くと追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）に手を伸ばす。

「うおおぉぉおっ！」

「チィッ・・・また・・・・・ッ！」

だが、青い道がレオンの前を横切り、その道を高速で走る人影が突撃と共に拳を突出し、レオンは対処のために大きく後退せざるを得なく、思い通りに進まない状況に何度目かの舌打ちを放った。

「ティア！」

「分かってる！」

現れた人影はスバルと、そして彼女に背負われたティアナだった。ティアナがクロスミラージュを突きつけて牽制、その隙にスバルは追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を持ってきていたケースに入れて離脱、その先にはヘリが待機しており、クラウン達が追う動作を見せればなのは達が牽制する為にそれも敵わず、すぐにヘリも離脱していった。

「貴様ら・・・！」

歯ぎしりしてティアナを睨むレオンの肩をクラウンが掴んだ。

「落ち着いてください。いずれ取り戻せるでしょう。それより・・・」

一旦口を閉ざしたクラウンの顔が次第に歪んだ笑みへと変わっていき、その手にレイピアのような剣が握られる。抵抗の意思ありとして身構えたなのは達に、クラウンは信じがたい一言を放った。

「この人殺し共を血祭りにあげて差し上げましょう！」

そう高らかに告げると、クラウンの姿は一瞬で消え去った。

追憶２８～襲撃～（後書き）

いかがでしたか？　クラウンの最後の言葉の意味は後程。それまでは悶々しちゃってくださいｗ（性格悪

次回もお楽しみに！

追憶２９～破壊の足音～（前書き）

１月１０日の活動報告にアンケートを載せました。後書きにも載せますので、ご意見を聞かせていただければ嬉しいです。

それでは、どうぞ！

追憶29～破壊の足音～

時は少しだけ遡る。襲撃された首都クラナガンに向かう二台のヘリの中で、六課の前線メンバーはミーティングを行っていた。ヴァイスの運転するヘリにはスターズ分隊と刹那でクラウンとレオンと対峙し追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の確保、それ以外はハラールの侵攻を止める役割としてロングアーチ所属のアルト・クラエッタの運転するヘリに搭乗しており、急なロストロギア反応と犯罪者の襲来によって首都は恐慌状態に陥り地上本部の武装隊の対応も後手に回ってしまった事で彼女達の表情は険しく、状況が芳しいものではない事を示していた。

『確認された襲撃者はどれも堕ちた聖典（カラプト・バイブル）のメンバーや。数は3。クラウン・アワリティアにレオン・クロフォード』

「・・・・・・」

はやてからの通信による情報にティアナがまず顔を顰めていた。厳しい視線をはやてに向ける。

「八神部隊長、このクラウン・アワリティアの経歴・・・これは本当ですか？」

『・・・・・・本当や』

嫌悪感も露わにはやてが頷いた訳は、クラウンの経歴。モニターに記されたそれは、元時空管理局戦技教導隊所属、と書かれていた。教導隊の所属である刹那となのははこれに一層眉間の皺を深め、怒りの籠った溜息を吐く。

「・・・・・私達はこの人の事を知っている訳じゃないけど、ある程度の事なら話せる。この人は見ての通り教導隊に12、3年前まで所属してた人みたい。実力もあって、活躍もしてて十分エースと呼ばれるだけの資格を持ってた・・・だけど」

なのはが一旦言葉を切り、深い溜息をもう一度ついた後に刹那が続けた。

「教導隊での指導の仕方、それが問題だった。教導隊の方針として挙げられるのは、細かい事で叱ったりするくらいなら、直接ぶっ飛ばして身体に染み込ませる、って言うのがあるんだ」

「「あ、あはは・・・」」

刹那の言葉にアレンとティアナが苦笑を溢す。ティアナはなのはに、アレンは刹那にそれぞれ文字通りぶっ飛ばされており、その事を思い出したのだろう。刹那となのはも一瞬だけ表情を緩めるが、すぐに元の険しいものへ戻る。

「彼の場合、それが行き過ぎていた・・・・・・いや、もともとの性格もあったのかもしれないね。彼は担当した部隊の教導に於いて、隊員達の殆どが再起不能を危ぶまれるほどの重体に陥らせた。それが何度も続いた末、彼は派遣された部隊の武装局員を殺して逃亡。それからは一般人を殺しまわっていたらしい。そのやり方は極めて残虐で、拷問や強姦で精神を崩壊された後に殺された人やバラバラ殺人も可愛いぐらいに細切れにされた遺体が数多く残されていたらしい・・・・・・」

「酷い・・・！」

「それが人のやる事ですか！？」

スバルが怒りも露わに歯ぎしりし、キャロが涙を堪えながら叫ぶ。声には出さなかったようだが、エリオやギンガ、リゼットも不快感や憤激を隠さないでいる。生まれや人生の過程で複雑な事情のある彼女らにすれば、クラウンの所業は許せるものではない。刹那やなのはにおいては完全に無表情を保っているもののその考えを否定はせず、かえって静かに怒りを燃やしている状態でもあった。

「教導隊では、彼の話題はタブーだ。俺も彼について一度聞いただけで、それ以上は誰も話そうとしない。戦技教導隊の汚点と言われているから、他の部署にもあまり話は伝わっていない。彼の経歴についてはは彼に関わった人と、彼を追う執務官の人達だけが知ってる

ぐらいだよ」

刹那が語り終えると重い沈黙がヘリの内部を支配する。空気を切り替えるようにはやては咳払いするとモニターを切り替え、レオンの画像を出した。今度はカノン以外の全員の表情が複雑なものに変わる。

「カノンさん、この人はカノンさんの幼馴染・・・でいいのよね？」

「ああ」

最初に遠慮がちに切り出したのはやはりティアナだった。執務官である彼女が主導となる事で、これから対峙する前線メンバーの気を引き締めていた。フェイトも執務官ではあるのだが、彼女は心ここに非ずと言った風に虚空を見つめ続け、その重苦しい雰囲気に誰も声を掛けられないでいた。

「奴のスタイルは昔と変わらない、大剣での戦闘だ。一撃が重いし範囲も広いからヒットアンドアウェイで対応しろ。後は奴を攪乱させる行動をしろ・・・そうすれば激情家の奴だ、すぐに我を失って態勢を崩す」

「・・・・・いいのよね？」

「ああ」

淡々としたカノンにティアナが最終確認、と言った風に尋ね、カノンは何の躊躇いもなく頷いた。その瞳は道を違えた幼馴染に対して何の感情も浮かんでいない。カノンの瞳は、最期の1人――ハラールだけに向いていた。

「ハラール・クロウクルワッハ・・・彼との戦闘は避けられないでしょうから、私達がすべきは・・・」

ギンガが苦しげに呟くのに対し、はやてもまた苦々しい顔を抑えられないまま口を開く。

『奴に関しては、下手な小細工は完全に悪手になる。何度も討伐隊は送られてるのに、一度も生還者がいないのはそういう事や。だからリゼットは出し惜しみ無しの高威力広域殲滅の魔法を連発、キャロは皆のサポートや回復に努めてや。それ以外は攻める事。それから、間違ってもハラールの攻撃を受け止めようとしたらあかんで。回避だけに重点置いて、隙を見て攻撃当てるだけでええ。長期戦になるのは確実やけど、皆が生き残るにはこれしか無い』

「「「「「はい！」」」」」

「・・・・・・！」

ハラールを相手取る為に指名されたメンバーであるエリオとキャロにアレンとリゼット、そして、ヴィータ、シグナム、ギンガの副隊長陣は決意を込めて頷く。皆で戦い、生き残る。その信念が瞳の中で燃えていた。だが、フェイトとカノンは肩を震わせただけで何も言えず、その表情を暗くするだけ。はやてやなのは達もそれに気づいてはいたが何もいう事は出来ず、ただその身を案じるだけであった。

「目標補足！降下準備に入ってください！」

「頼んますぜ！」

ヘリのパイロット席に座るヴァイスとアルトが叫ぶ。その声に皆各々準備を始める。フェイトもようやく動き出すが、その手はカノンの服の裾を握っていた。

「・・・・・・フェイト？」

「・・・・・・」

カノンが気遣わしげに名を呼ぶとフェイトの肩が震える。だが、

一切目を合わせようとしない事にカノンだけでなく他のメンバーも成り行きを見るしか出来ない。

「・・・・・大丈夫、だよね？」

「は？」

ぽつり、と呟くように漏れたフェイトの言葉にカノンはやや裏返った声で返す。それだけその問いが突拍子もない物であっただけの事だが、フェイトにはそう捉える事が出来ず更に不安を増長させるだけのものとなってしまった。フェイトの目から涙が流れ、堰を切ったように言葉が溢れだす。

「大丈夫だよね？急にいなくなったりしないよね。どこにも、黙って消えちゃうような事無いよね？」

「・・・・・・」

フェイトの言葉にカノンは応える事が出来なかった。訓練中に見た『記憶』が、安い気休めを言う事を躊躇わせる。それを見抜いてしまったかのようにフェイトは涙声でカノンに迫った。

「お願い、カノン・・・！大丈夫って言って・・・！生きてるって・

・・死んじゃったりしないって言ってよ・・・お願い・・・」

「・・・フェイト・・・」

「「「「・・・・・・・？」」」」

「・・・・・・」

カノンが呆然と呟き、それ以外のメンバーは何の事か分からない為に首を傾げていた。だが、その中ではやてだけがフェイトとカノンの態度に最悪の予想が当たっている確率がほぼ１００パーセントに近い事を感じ取った。即ち、データに残されていた生存者無しという記述の真相。カノン・アークナイトと言う人間は、既にこの世から――――

（・・・・・あれ？）

一瞬だけ、はやては違和感の覚え首を傾げる。カノン・アークナイトが死んでいたとして。では、カノンの目の前で死んだというシルヴィアが封印したはずの追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）はどこに行ったのだろう。封印処理を施したとしても、その物体が消えてなくなる訳ではない。かつてのレリックと呼ばれたロストロギアのように、形を保ったまま封印、ケースなどに入れて保管するのが常である。問題はそれだけではない。データを見た時のフェイトの反応からつい思い込んで

しまったが、よくよく考えればおかしな話なのだ。

（カノン君の話と局にあるデータの齟齬がある理由。カノン君の故郷にあった追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）とそれを護るシルヴィアさんの役目。ハラール・クロウクルワッハの犯罪歴・・・・・・）

もし、もしだ。カノンが話した故郷の話が真実ではなかったとしたら。いや、そうでなくても一部改竄されたものだったとするならどうだろう――はやては1人思考の海に潜る。

（まぁ・・・確率としては高いかな？実際カノン君は生きてる訳やし、この場合はデータより現実を信じた方がまだ納得できる）

はやては誰にも気付かれぬようにカノンをちらりと見る。彼は無言を保っており、それにフェイトが絆るような格好になっていて、場合が場合ならからかいのネタにはなるが、今はそんな事をしている場合ではない。敵を目の前にして、このような不安定な状況になるのは良い事ではない。

（だとすると・・・やっぱり追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）になるんかな。どういう状況だったかは分からんけど、カノンが追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）をシルヴィアさんに使わないなんて、話を聞いただけの私でもあり得ないって事は分かる。だから、最初に死んだんはきっとシルヴィアさんじゃなくてカノン君本人や）

はやての考えはこうだ。カノン達の故郷が襲撃を受けたのは本当の事。戦闘になったのも本当。だが、最後の結末だけが違う。シルヴィアが封印処理をしていたのなら、いきなりカノンの目の前に現れるなどという事は不可能だ。だから考えられるとしたら間に合わなかったシルヴィアが攻撃を受けて命を落としたカノンを追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）を使って蘇らせた――という事だ。そして、カノンの話の最大の違和感。自身の愛する人が目の前で命を落とし、それを無かった事に出来る道具があったとして、本当にそれを使わないと思えるだろうか？答えはＮＯ。人は、目の前の誘惑に絆されやすい。そして、精神に揺らぎが生じているなら尚更。当時のカノンが、その機会を捨てられる程の強い精神力を持っていたとは、はやてにはどうしても思えなかった。そうでなければ、そもそも無気力にはならないのだから。もちろんこれが正解であるとははやて自身も思っていない。むしろ、バカげた妄想の類だと思っている位なのだ。

（・・・・・そう、普通なら考えられへん事なんやけどなー）

しかし、そんな妄想の類が、今のカノンとフェイトを通信モニターで見ているとあたかも真実のように思えてしまう。そして、その考えが間違っていないようにも感じてしまうその非常識な状況にはやては人知れず溜息を吐いてしまった。しかし、何時までもこうしている訳にはいかない。今も市民は危機に晒され、恐怖に怯えているのだから。はやては大きく手を叩いた。

『皆、良く聞き。此処から先は、いつ死んでもおかしくない戦場や。あくまでも私らのやるべき事は追憶の歯車（ノスタルジック・ギア）の確保。けど、目の前に

は犯罪者がいて、市民が危険に冒されてる。せやから、皆、まずは市民の安全を重視する事。この意味、もう言わんでも分かるな？』

「「「「「はい！」」」」」

『ええ返事や。・・・・・それから、皆。絶対に生きて帰る事。どんなに絶望的でも、それだけは守って』

はやては自分がどれだけ無茶を言っているのか理解している。だが、そう言わずにはいられないのだ。ハラール・クロウクルワッハは史上最悪と言っていい程の凶悪犯。何十人、何百人と彼を追った魔導師達は帰らぬ人となった。それを相手にたった9人。それ以外にもやや格下とはいえ凶悪犯にには変わりない2人を刹那やなのはにスバル、ティアナの四人だけ。生き残れる可能性は限りなく低い。それでも――一縷の望みに賭けたかった。

「「「「「はい！」」」」」

勢いよく頷いた前線のメンバー達にはやては頷き返すと、カノンとそれに縋るフェイトの方を向いた。自然、皆もそちらに視線が向く。

『・・・・・カノン君、フェイトちゃんを悲しませたらあかんで。どんな理由があっても、や。それからフェイトちゃん、今カノン君

は生きてるやろ。ここでカノン君を信じないでどないするん？』

「「・・・・・・っ！？」」

意味深なはやての発言に2人は息を呑む。カノンは自分が記憶で揺らいでる事を見抜かれたと思ったから。そして、フェイトは自分が隠している事がばれていると思ったから。しかし、2人の動揺には反応せずにはやては続ける。

『別に変な意味で言ってる訳やあらへん。今、カノン君やフェイトちゃんは生きてる。この戦いが終わっても、ずっと生きてなきゃ駄目や。ええか？この戦いが終わっても、全てが終わる訳やない。だからこそ、腹括って向かってや。これは命令。拒否権は無しや』

はやての『命令』にカノンとフェイトは動きを止める。長い沈黙の後、カノンが発した言葉にフェイトは瞠目した。

「・・・・・分かってるさ。生き延びてやる・・・死んでも生き返って生き延びてやる」

「カノン・・・？」

噛みしめる様なカノンにフェイトはようやく彼の目を見詰める。

蒼い瞳は未だ影で揺らいではいるものの、確かな光を放ち始めていた。たったそれだけで、フェイトは何故か安心した。根本的な解決にはならないにも関わらず、身体の重みが消える様な気がしていた。と、そこにカノンから念話が来る。

《悪い、フェイト。・・・今は、何も言えない》

《・・・・・・うん》

《何に悩んでるのかは知らない・・・だが、その悩みは、多分オレが抱えているものと同じ気がする。だから、もう少しだけ待ってくれ。――決着は、付けるから》

《・・・うん、待ってる》

念話が切れ、フェイトが前に視線を戻すとカノンもまた前を向き、瞑想するように目を閉じると何かを呟きだした。

「・・・・・天の国に眠る貴女に、アスフォデルの花束を。祈りを此処に。その清き体に安息がもたらされん事を・・・・・・」

「・・・・・・」

その祈りの言葉が誰に向けられているのか、それを知らぬ者はいない。ただ黙って祈りの主を見詰めるだけである。

「・・・・・見ててくれ、シルヴィア。憎い相手でも、これは復讐じゃない。オレがオレである為に、君との想い出をちゃんと背負えるように――僕は、奴の首を獲る」

カノンが目を開ける。静かに、カノンは出撃を促した。

「――行こう」

「うん・・・！」

最初に返事をしたのはフェイト。その瞳にはもう翳りは見えず、凛々しい『心優しき金の閃光』としての彼女がいた。

『準備はええな？　機動六課、出撃！』

「はい！」

空中に色とりどりの線が奔った。

＊　＊　＊　＊　＊

Ｓｔ．ヒルデ魔法学院――ヴィヴィオの通うこの学校もまた、首都襲撃の混乱の余波に晒され、生徒達も錯乱する者や泣き出す者が数多くいた。

「ヴィヴィオ・・・どうしよう・・・」

「コロナ・・・」

不安げにヴィヴィオに話しかけきた亜麻色の髪の少女はコロナ・ティミル。ヴィヴィオとは親友と言える間柄であり、彼女の人形を操る独自の魔法を見せてもらって以来ヴィヴィオは自分とは違う才能を持つ彼女を尊敬していたりした。口にこそ出さないが、コロナとは確かな絆で結ばれていると自負しており、コロナもそう思ってくれている事をよく知っていた。その彼女が不安に瞳を揺らすのを見て、ヴィヴィオはほんの少しだけ笑みを浮かべた。

「大丈夫。コロナのパパとママもちゃんと避難してるはずだよ」

「う、うん・・・でも・・・あ」

ヴィヴィオの言葉に未だ不安そうなコロナは自身の携帯端末が鳴った事に気付くと画面を確認し、僅かに笑みを浮かべる。ヴィヴィオが覗き込むと、コロナの両親の名が記されていた。娘の無事を案じる文章があり、また彼らも非難している事が記されていた。

「パパ・・・ママ・・・・！」

「良かったね、コロナ！」

「うん！・・・あ・・・ヴィヴィオは?ヴィヴィオのパパとママは

大丈夫なの？」

コロナの笑顔はヴィヴィオの家族を案じて再び曇る。心配してくれることに感謝の意を抱きつつも、ヴィヴィオは微妙な顔をするしかない。

「あ～・・・えっと、うちのパパとママ達は局員さんだし、機動六課って所にいるから、多分今は出撃してるんじゃないかな・・・」

「え、えええっ！？」

その答えにコロナは目を見開き、周りにいた生徒達も何事かとその視線を向ける。コロナは慌ててヴィヴィオに詰め寄った。

「だ、大丈夫なの！？」

「う～ん・・・それは分からないけど、大丈夫。なのはママもフェイトママも強いし、刹那パパも同じくらい強いから。それに、他にもスバルさんやティアナさん達もいるしね」

「で、でも・・・」

コロナもその名は知っている。高町なのはにフェイト・テスタロッサ・ハラオウン。管理局のエースであり数々の名声を残す彼女達は憧れの対象であり、コロナもそれに漏れる事は無い。そして、散空刹那はＪＳ事件に於いて民間協力者として活躍、その名声をその後の実績で更に上げた事で、入局して２年程の彼を既にエースと同列に見る者もいる。雑誌にも何度か取り上げられた彼がヴィヴィオの父だと知ったのは彼女と交流が深まった頃だ。そして、機動六課と言えばＪＳ事件を解決した奇跡の部隊として名が知られており、局のエースやストライカーを集めた部隊は伝説の域にまで登り詰めていた。コロナもそれを知っているものの、やはり突然の事態には不安を隠せず、動揺してしまうのも無理はなかった。

「奇跡の部隊だからとか、そんな理由じゃなくて・・・機動六課の皆は、いつも温かくて一生懸命で、パパとママは私に強さを教えてくれた人達だから・・・だから、大丈夫だって思えるんだよ」

「・・・・・ヴィヴィオがそう言うなら、本当だよね・・・ううん、ヴィヴィオがそう言うから、きっと大丈夫になるんだ」

「あはは、大袈裟だよ～。ヴィヴィオはただ、自分の意見を言っているだけです！」

コロナが笑顔を浮かべると同時、ヴィヴィオは張り詰めた気を緩めるようにおどける。奇しくもそれは２人の不安や動揺を根こそぎ奪い、周りが未だ混乱の最中にあって、冷静さを失わない要因となっていた。２人の目が煙の上がるクラナガンの方向を見据える。へ

リが飛び、様々な色の閃光が地上に向かって飛ぶのを確認し、数分経ってから一方で桜色の閃光や琥珀色の光、金や黒など様々な光が流れ星のように飛び交うのを確かに捉えていた。

追憶29～破壊の足音～（後書き）

いかがでしたか？　次回から本格的にバトルに入ります。お楽しみに！

さて、アンケートですが、追憶・欠片～キャラクター設定？～にある「???」の名前を募集します。一応考えているのは7～9才程の子供、性別は男…という風にしたいと思っています。女の子でもいいんですが、それだとミレーヌの紅一点という設定が活かせないので……ただ、あくまで彼等に保護されただけの女の子、なら設定としてはアリなのでしょうけど。それは皆様の希望があれば、という事で。

そして、もう一つのアンケートは堕ちた聖典のメンバー＋シルヴィア・カエレスティスのCVを募集です。アイオンに限り、男性と女性の両方を募集しますのでご注意ください。

期日は2月に入るまでとさせていただきます。

それでは、また次回！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0922w/

魔法少女リリカルなのはStrikerS〜The nostalgic melody〜

2012年1月11日09時50分発行